多可郡多可町

曽我井・堂ノ元遺跡
曽我井・野入遺跡
曽我井・沢田遺跡

－社会資本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－

2012（平成24）年３月

兵庫県教育委員会

多可郡多可町

曽我井・堂ノ元遺跡
曽我井・野入遺跡
曽我井・沢田遺跡

－社会資本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－

2012（平成24）年3月

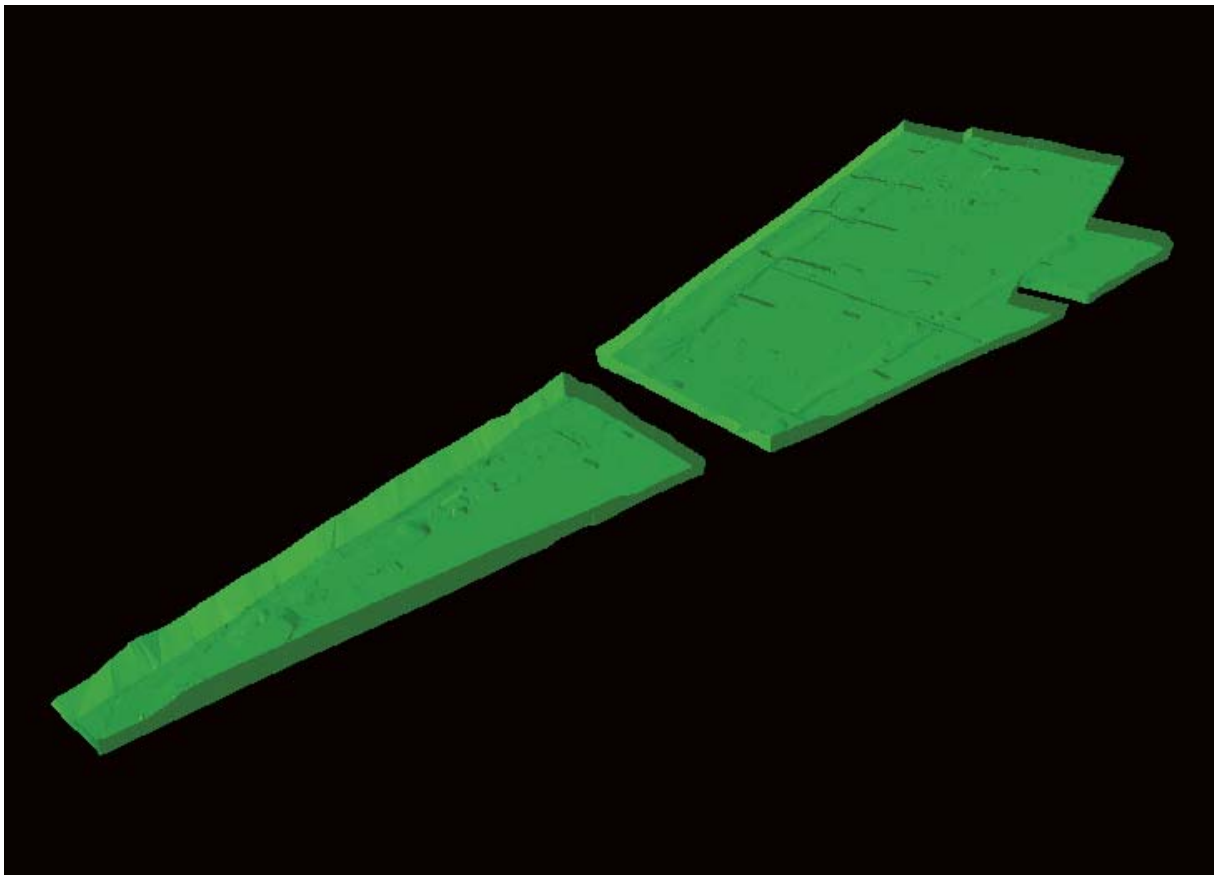
兵庫県教育委員会

曽我井地区遠景（北から）

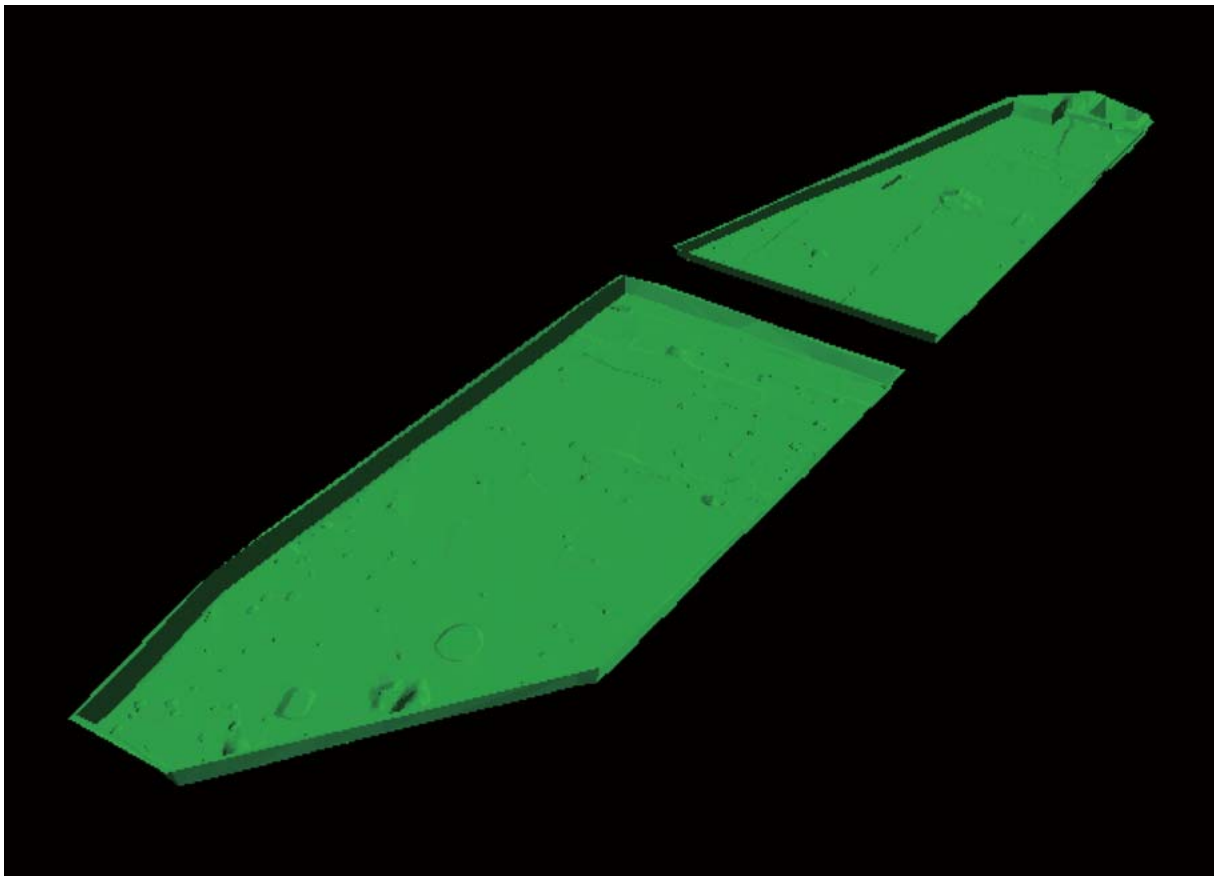
曽我井地区遠景（東から）

A・B地区全景

C・D地区全景（南から）



A・B地区グラフィック（南西から）



C・D地区グラフィック（北東から）

B地区　SK10（北から）

B地区　SK10（南から）

出土陶磁器（外面）

出土陶磁器（内面）

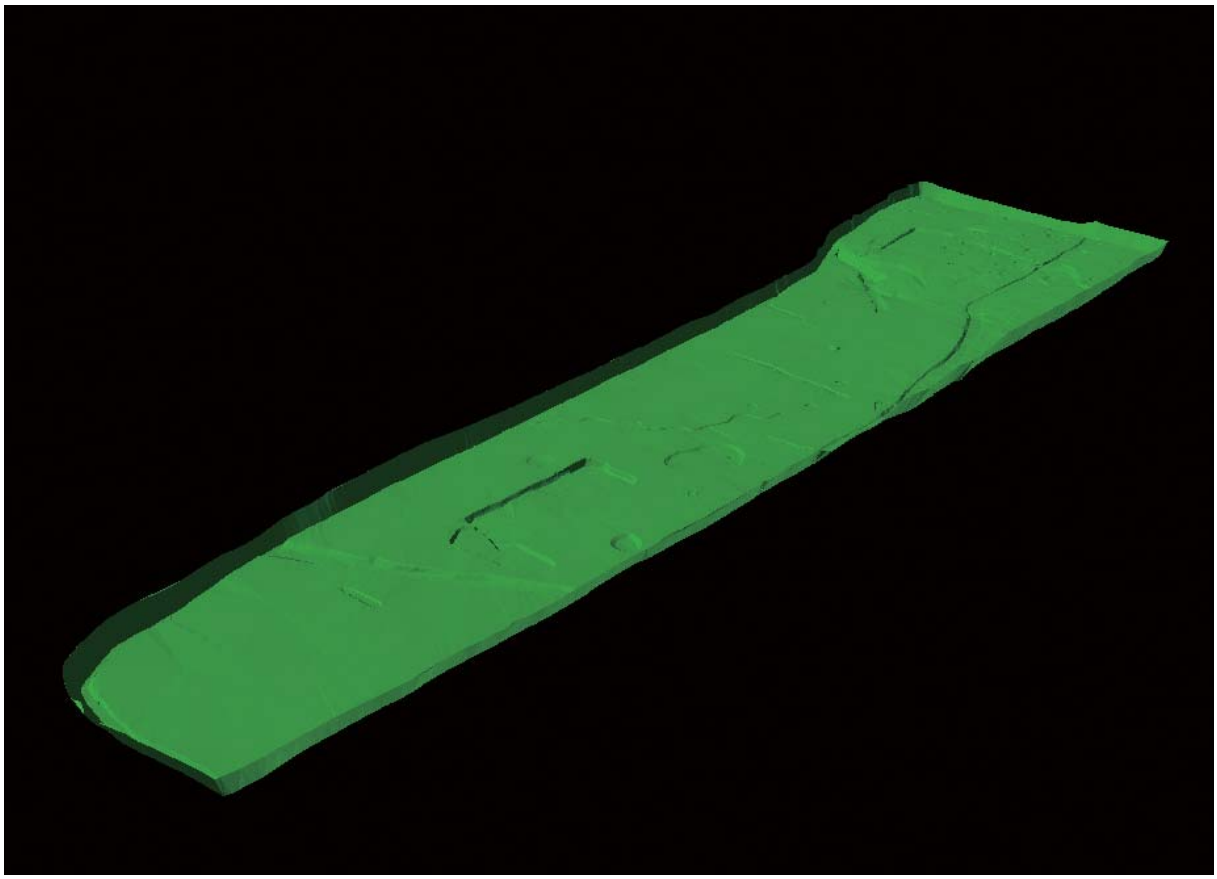
A・B地区全景

調査区遠景（西から）

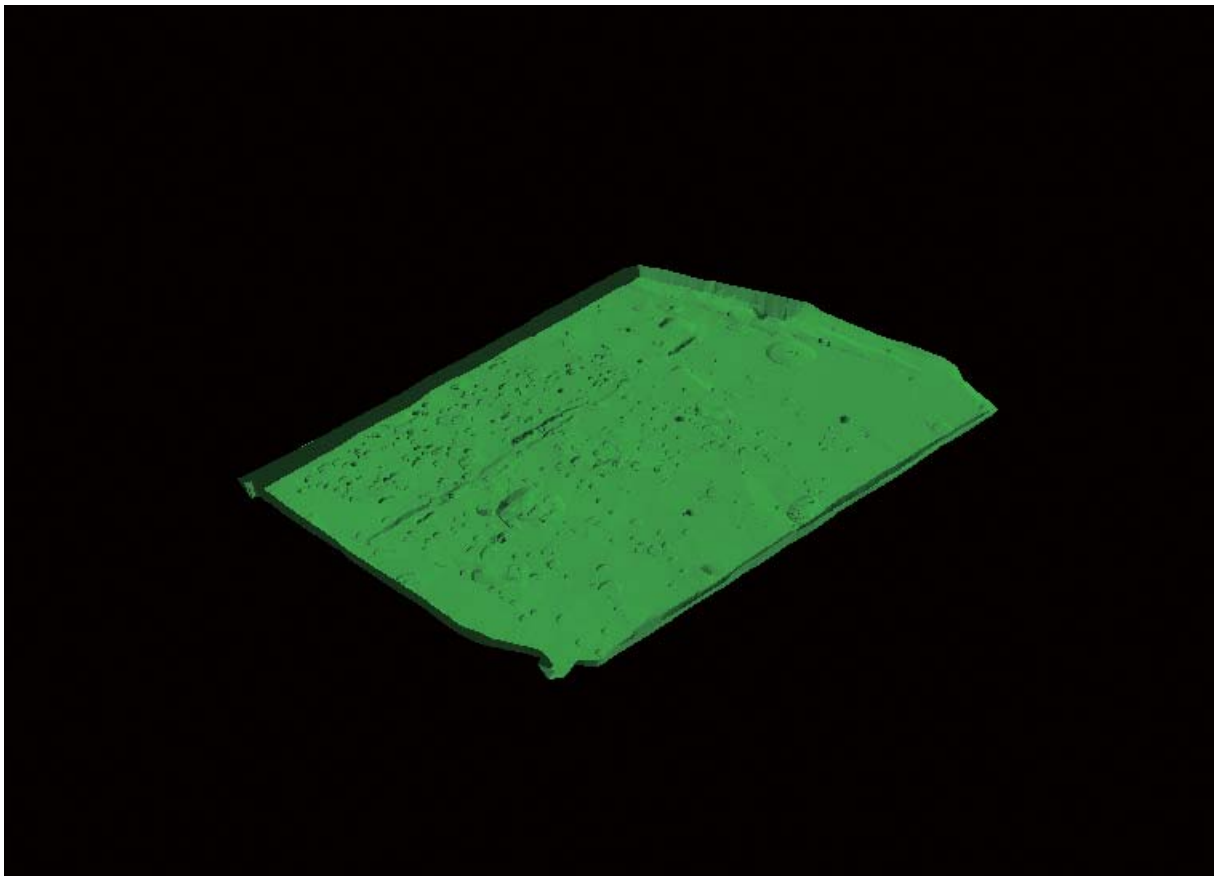
調査区近景（東から）

A地区全景（東から）

B地区全景（南から）



A地区グラフィック（西から）



B地区グラフィック（北西から）

B地区　P142　土器出土状況（北東から）

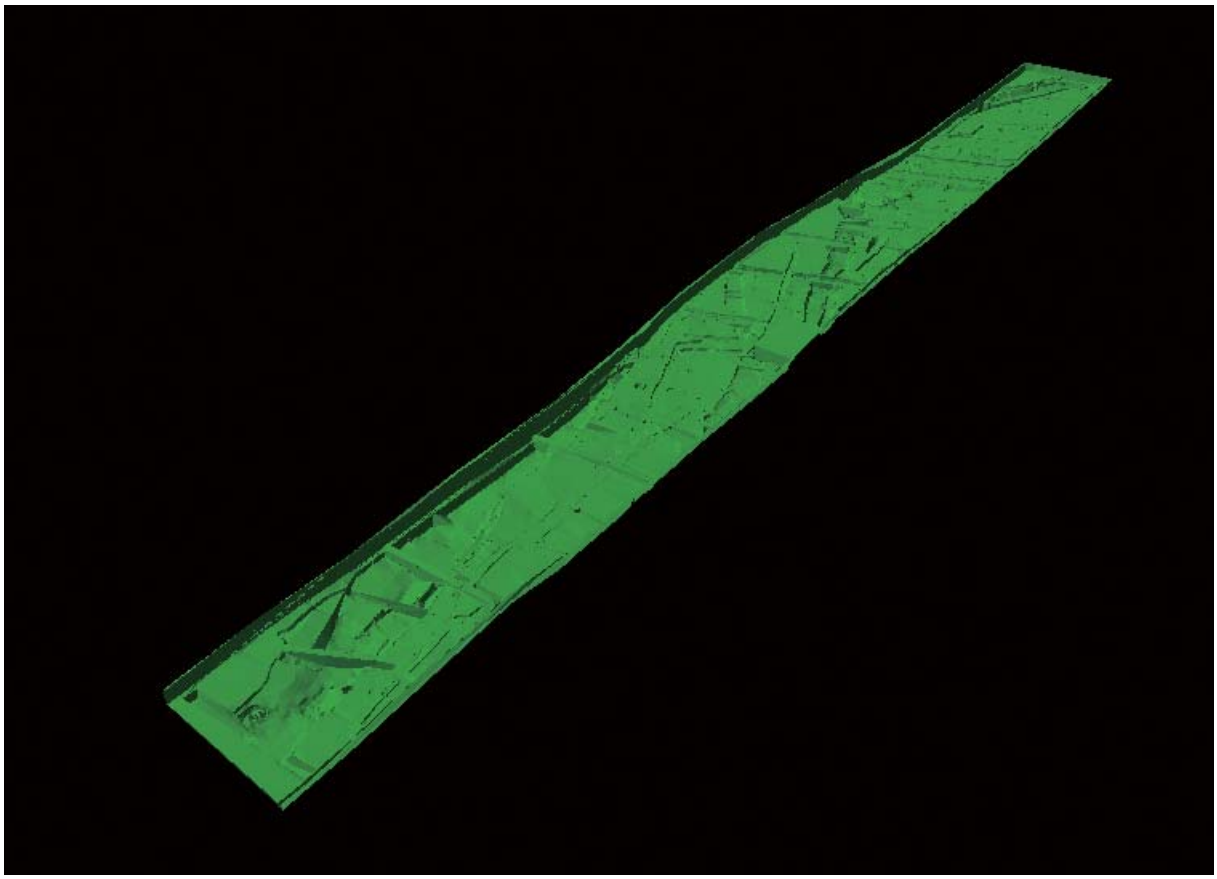
A地区　SK1002　下層　土器出土状況（北西から）

A地区　SK1002　上層　土器出土状況（北西から）

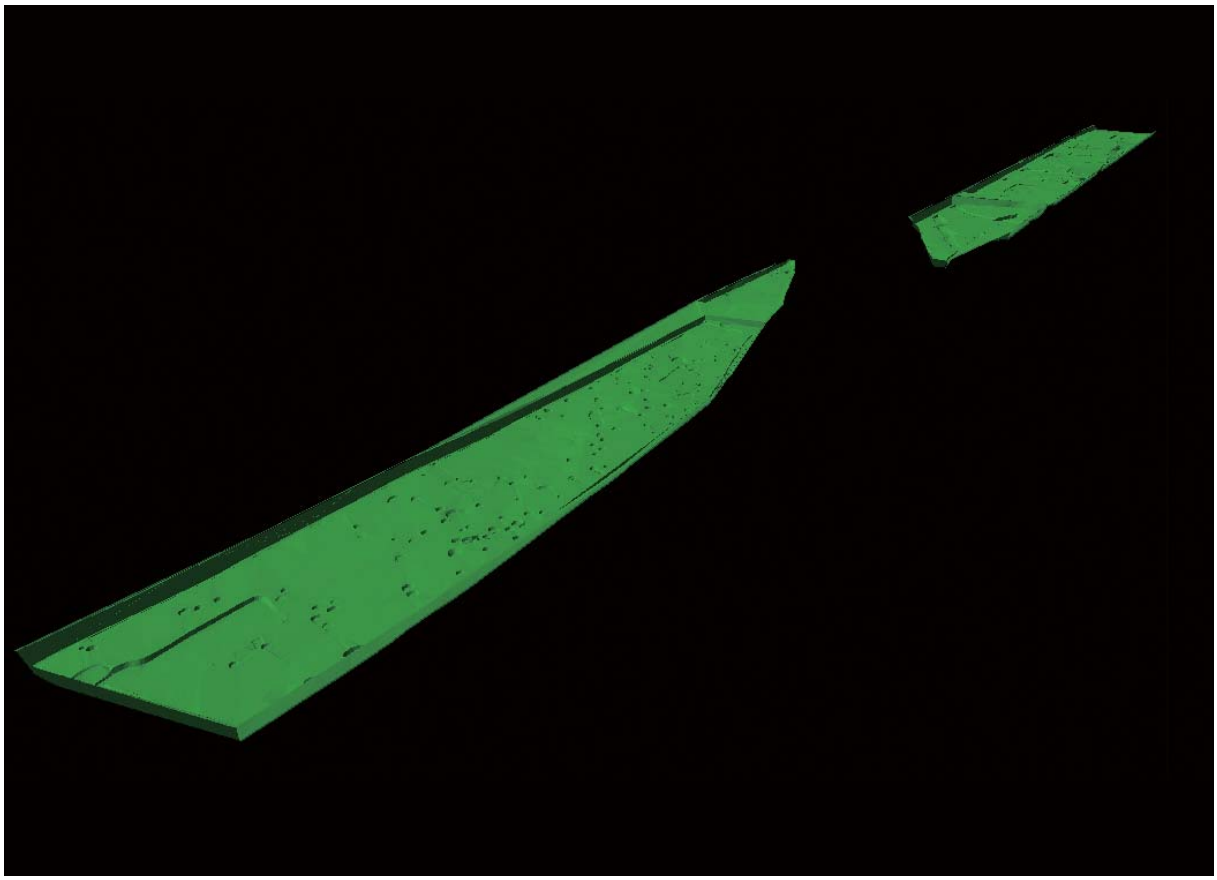
A地区　SK1002　最下層　土器出土状況（北西から）

1区全景（西から）

2・3区全景（西から）



1区グラフィック（西から）



2・3区グラフィック（南西から）

曽我井・沢田遺跡出土土器

曽我井・沢田遺跡出土人形・木簡

例　　言

1　本書は、兵庫県多可郡多可町中区曽我井地内に所在する、曽我井・堂ノ元遺跡・曽我井・野入遺跡・曽我井・沢田遺跡の発掘調査報告書である。

2　本発掘調査は、(国)427号曽我井バイパス建設工事に伴うものである。平成17年度に実施した曽我井・堂ノ元遺跡が兵庫県北播磨県民局県土整備部社土木事務所　中町土木事務所、平成18年度に実施した曽我井・堂ノ元遺跡、曽我井・野入遺跡が同県民局県土整備部社土木事務所　多可土木事務所、平成19年に実施した曽我井・沢田遺跡が同県民局社土木事務所　多可土木事務所（現北播磨県民局加東土木事務所　多可事業所）より依頼を受け、平成17年から19年度にかけて本発掘調査を実施した。

3　遺構の実測は、全体を１/50のスケールによる航空写真測量を行い、一部の遺構･土層堆積等の実測については調査員および調査補助員が行った。遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県立考古博物館非常勤嘱託員が行った。

4　本書で使用した遺構写真は調査員が担当し、遺物については㈱タニグチ・フォトに委託した。

5　本文中の挿図・図版・写真図版番号は通し番号としたが、遺物番号はそれぞれの遺跡ごとに付した。

6　本書で使用した標高は東京湾平均水準(T.P.)を基とし、方位は国土座標Ⅴ系の座標北を指す。
真北は座標北より21′、磁北は座標北より７°11′それぞれ西に振る。

7　本書で使用した地図は、国土地理院の管理する１/25,000の地形図をもとに作製した『兵庫県遺跡地図』および旧多可郡中町が作成した１/2,500の『中町全図』（昭和52年作製)をもとに作製した。

8　本書の執筆は、Ⅰ～Ⅳ章村上泰樹、Ⅴ章小川弦太、Ⅵ章西口圭介、Ⅷ章第１節村上、同第２節小川、同第３節西口が担当した。第Ⅶ章第１節の地形分析については、青木哲也氏(立命館大学非常勤講師)に依頼した。同第２節の放射性炭素(AMS測定)は㈱加速器分析研究所に、同第３節の樹種同定は㈱古環境研究所にそれぞれ依頼した。

9　本書の編集は当館非常勤嘱託員柏原美音の協力を得て、村上が行った。

10　調査で得た記録図面・写真および出土した遺物は、兵庫県立考古博物館(兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号)および魚住分館(兵庫県明石市魚住町清水字立合池の下630－1)で保管している。

11　発掘調査および報告書の作成にあたり、遺跡周辺の地形についてご教示を賜った青木哲也氏をはじめ、多可町教育委員会那珂ふれあい館(宮原文隆・安平勝利)からご指導を賜った。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の経緯(村上泰樹)

第１節　調査に至る経緯……1

第２節　確認調査……1

第３節　本発掘調査……2

第４節　出土品整理……4

第Ⅱ章　位置と環境(村上)

第１節　地理的環境……5

第２節　歴史的環境……9

第Ⅲ章　確認調査の概要(村上)

第１節　確認調査の経過……11

第２節　確認調査の方法……11

第３節　確認調査の成果……11

第Ⅳ章　曽我井・堂ノ元遺跡の調査(村上泰樹)

第１節　概　要……17

第２節　層　序……17

第３節　遺　構……18

第４節　遺　物……24

第Ⅴ章　曽我井・野入遺跡の調査(小川弦太)

第１節　調査の概要……31

第２節　Ａ地区の調査……31

1　概　要……31

2　層　序……31

3　遺　構……31

4　遺　物……33

第３節　Ｂ地区の調査……36

1　概　要……36

2　層　序……36

3　遺　構……36

4　遺　物……39

第Ⅵ章　曽我井・沢田遺跡の調査
第１節　本発掘調査の概要……45
第２節　１・２区の調査(西口圭介)……45
１　層　序……45
２　遺　構……46
第３節　３区の調査……55
１　層　序……55
２　遺　構……55
第４節　遺　物(深江英憲・村上・岡本一秀・西口)……57

第Ⅶ章　分　析
第１節　曽我井・沢田遺跡の地形環境(青木哲哉)……77
第２節　曽我井・沢田遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)(㈱加速器分析研究所)……85
第３節　曽我井・沢田遺跡における樹種同定(㈱古環境研究所)……88

第Ⅷ章　まとめ
第１節　曽我井・堂ノ元遺跡について(村上)……103
第２節　曽我井・野入遺跡について(小川)……104
第３節　曽我井・沢田遺跡について(西口)……105

巻頭写真図版目次

図版１　上）曽我井地区遠景（北から）
　　下）曽我井地区遠景（東から）
図版２　上）曽我井・堂ノ元遺跡A・B地区全景
　　下）　同　C・D地区全景（南から）
図版３　上）　同　A・B地区グラフィック（南西から）
　　下）　同　C・D地区グラフィック（北東から）
図版４　上）　同　B地区SK10検出状況（北から）
　　下）　同　B地区SK10（南から）
図版５　上）・下）　同　出土陶磁器
図版６　曽我井・野入遺跡A・B地区全景
図版７　上）曽我井・野入遺跡調査区遠景（西から）
　　下）　同　調査区近景（東から）
図版８　上）　同　A地区全景（東から）
　　下）　同　B地区全景（南から）
図版９　上）　同　A地区グラフィック（西から）
　　下）　同　B地区グラフィック（北西から）
図版10　上）　同　B地区P142土器出土状況（北東から）
　　下）　同　A地区SK1002下層土器出土状況（北西から）
図版11　上）　同　A地区SK1002上層土器出土状況（北西から）
　　下）　同　A地区SK1002最下層土器出土状況（北西から）
図版12　上）曽我井・沢田遺跡１区全景（西から）
　　下）　同　２・３区全景（西から）
図版13　上）　同　１区グラフィック（西から）
　　下）　同　２・３区グラフィック（南西から）
図版14　上）　同　出土土器
　　下）　同　出土人形・木簡

挿 図 目 次

第１図　遺跡周辺の地形……6
第２図　遺跡周辺の微地形……7
第３図　遺跡周辺の土層堆積状況……8
第４図　確認調査トレンチ・坪配置図……12
第５図　確認調査出土土器……14
第６図　確認調査出土金属製品……15
第７図　B地区　P05……18
第８図　１区～３区周辺の地形分類図……81
第９図　１区～３区付近における微地形の分布…82
第10図　１区における遺構検出面からのトレンチ断面…83
第11図　１区～３区における遺構検出面以浅の堆積物…84
第12図　暦年較正年代グラフ（参考）……87

挿 図 写 真 目 次

写真１　確認調査作業風景……1
写真２　本発掘調査作業風景……2
写真３　空中写真測量風景……2
写真４　木製品保存処理風景……4
写真５　基本土層（B地区西壁）……17
写真６　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅰ……92
写真７　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅱ……93
写真８　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅲ……94
写真９　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅳ……95
写真10　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅴ……96
写真11　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅵ……97
写真12　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅶ……98
写真13　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅷ……99
写真14　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅸ……100
写真15　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅹ……101

表 目 次

表１　発掘調査一覧……３
表２　確認調査成果一覧……13
表３　確認調査出土土器観察表……16
表４　確認調査出土金属製品観察表……16
表５　曽我井・堂ノ元遺跡出土土器観察表（１）…27
表６　曽我井・堂ノ元遺跡出土土器観察表（２）…28
表７　曽我井・堂ノ元遺跡出土土製品観察表……28
表８　曽我井・堂ノ元遺跡出土石製品観察表……28
表９　曽我井・堂ノ元遺跡出土金属製品観察表…28
表10　曽我井・堂ノ元遺跡出土木製品観察表……29
表11　曽我井・野入遺跡A地区出土土器観察表…42
表12　曽我井・野入遺跡A地区出土金属製品観察表…43
表13　曽我井・野入遺跡B地区出土土器観察表……43
表14　曽我井・野入遺跡B地区出土金属製品観察表…44
表15　曽我井・野入遺跡B地区出土石製品観察表…44
表16　曽我井・沢田遺跡出土土器観察表……71
表17　曽我井・沢田遺跡出土石製品観察表……75
表18　曽我井・沢田遺跡出土金属製品観察表……75
表19　曽我井・沢田遺跡出土木製品観察表……75
表20　測定結果一覧表（１）……86
表21　測定結果一覧表（２）……87
表22　曽我井・沢田遺跡における樹種同定結果…91
表23　建物一覧……105

図 版 目 次

図版１　周辺の遺跡
図版２　曽我井・堂ノ元遺跡全体図
図版３　A・B地区遺構配置図
図版４　C・D地区遺構配置図
図版５　掘立柱建物（SB01・02）
図版６　土坑（SK01～05）
図版７　土坑（SK06～10）
図版８　土坑（SK11～15）
図版９　溝（SD01～03・06）
図版10　SD01～03・06土層図
図版11　SD04・05・07
図版12　遺構出土土器（１）
図版13　遺構出土土器（２）
図版14　包含層出土土器
図版15　土製品・石製品・金属製品・木製品
図版16　曽我井・野入遺跡A地区遺構配置図・溝土層断面図
図版17　A地区南壁・東壁土層断面図
図版18　A地区土坑（SK1001・1002）
図版19　B地区遺構配置図
図版20　B地区掘立柱建物（SB01～03）
図版21　B地区土坑（SK01～05）
図版22　B地区土坑（SK06～08）
図版23　B地区溝（SD01・02・05・07・11・12）
図版24　A地区出土土器（１）
図版25　A地区出土土器（２）
図版26　B地区出土土器（１）
図版27　B地区出土土器（２）・石器
図版28　A・B地区出土金属製品（１）
図版29　A・B地区出土金属製品（２）
図版30　曽我井・沢田遺跡全体図
図版31　１・２区遺構配置図（１）
図版32　１・２区遺構配置図（２）
図版33　１・２区遺構配置図（３）
図版34　１・２区土層名
図版35　掘立柱建物（SB1001）
図版36　掘立柱建物（SB1002・1006）
図版37　掘立柱建物（SB3001・1005・1007）
図版38　土坑（SX1001・1002・1003）
図版39　溝（SD1001）
図版40　SD1001～1011土層断面図
図版41　SD1015～1026・2001・2005・2009土層断面図

図版42　流路(SR1001)
図版43　３区遺構配置図
図版44　３区南壁土層断面図
図版45　掘立柱建物(SB3003)・土坑(SK3001)
図版46　１・２区遺構出土土器(１)
図版47　１・２区遺構出土土器(２)
図版48　１・２区遺構出土土器(３)
図版49　１・２区遺構出土土器(４)
図版50　１・２区遺構出土土器(５)
図版51　１・２区遺構出土土器(６)
図版52　１・２区遺構出土土器(７)
図版53　１・２区遺構出土土器(８)
図版54　１・２区遺構出土土器(９)
図版55　１・２区遺構出土土器(10)
図版56　１・２区包含層出土土器(１)
図版57　１・２区包含層出土土器(２)・３区遺構出土土器
図版58　１～３区出土石製品
図版59　１・２区出土金属製品
図版60　木製品(１)
図版61　木製品(２)
図版62　木製品(３)
図版63　木製品(４)
図版64　木製品(５)
図版65　木製品(６)
図版66　木製品(７)
図版67　木製品(８)

写 真 図 版 目 次

写真図版１　航空写真
写真図版２　曽我井・堂ノ元遺跡遺構１
写真図版３　曽我井・堂ノ元遺跡遺構２
写真図版４　曽我井・堂ノ元遺跡遺構３
写真図版５　曽我井・堂ノ元遺跡遺構４
写真図版６　曽我井・堂ノ元遺跡遺構５
写真図版７　曽我井・堂ノ元遺跡遺構６
写真図版８　曽我井・堂ノ元遺跡遺構７
写真図版９　曽我井・堂ノ元遺跡遺構８
写真図版10　曽我井・堂ノ元遺跡遺構９
写真図版11　曽我井・堂ノ元遺跡遺構10
写真図版12　曽我井・堂ノ元遺跡遺構11
写真図版13　曽我井・堂ノ元遺跡遺構12
写真図版14　曽我井・堂ノ元遺跡遺構13
写真図版15　確認調査出土遺物
写真図版16　曽我井・堂ノ元遺跡遺物１
写真図版17　曽我井・堂ノ元遺跡遺物２
写真図版18　曽我井・堂ノ元遺跡遺物３
写真図版19　曽我井・堂ノ元遺跡遺物４
写真図版20　曽我井・堂ノ元遺跡遺物５
写真図版21　曽我井・堂ノ元遺跡遺物６
写真図版22　曽我井・堂ノ元遺跡遺物７
写真図版23　曽我井・堂ノ元遺跡遺物８
写真図版24　曽我井・野入遺跡遺構１
写真図版25　曽我井・野入遺跡遺構２
写真図版26　曽我井・野入遺跡遺構３
写真図版27　曽我井・野入遺跡遺構４
写真図版28　曽我井・野入遺跡遺構５
写真図版29　曽我井・野入遺跡遺構６
写真図版30　曽我井・野入遺跡遺構７
写真図版31　曽我井・野入遺跡遺構８
写真図版32　曽我井・野入遺跡遺構９
写真図版33　曽我井・野入遺跡遺構10
写真図版34　曽我井・野入遺跡遺物１
写真図版35　曽我井・野入遺跡遺物２
写真図版36　曽我井・野入遺跡遺物３
写真図版37　曽我井・野入遺跡遺物４
写真図版38　曽我井・野入遺跡遺物５
写真図版39　曽我井・野入遺跡遺物６
写真図版40　曽我井・野入遺跡遺物７
写真図版41　曽我井・野入遺跡遺物８
写真図版42　曽我井・沢田遺跡遺構１

写真図版43　曽我井・沢田遺跡遺構 2
写真図版44　曽我井・沢田遺跡遺構 3
写真図版45　曽我井・沢田遺跡遺構 4
写真図版46　曽我井・沢田遺跡遺構 5
写真図版47　曽我井・沢田遺跡遺構 6
写真図版48　曽我井・沢田遺跡遺構 7
写真図版49　曽我井・沢田遺跡遺構 8
写真図版50　曽我井・沢田遺跡遺構 9
写真図版51　曽我井・沢田遺跡遺構10
写真図版52　曽我井・沢田遺跡遺構11
写真図版53　曽我井・沢田遺跡遺構12
写真図版54　曽我井・沢田遺跡遺構13
写真図版55　曽我井・沢田遺跡遺構14
写真図版56　曽我井・沢田遺跡遺構15
写真図版57　曽我井・沢田遺跡遺構16
写真図版58　曽我井・沢田遺跡遺構17
写真図版59　曽我井・沢田遺跡遺構18
写真図版60　曽我井・沢田遺跡遺構19
写真図版61　曽我井・沢田遺跡遺構20
写真図版62　曽我井・沢田遺跡遺構21
写真図版63　曽我井・沢田遺跡遺構22
写真図版64　曽我井・沢田遺跡遺構23
写真図版65　曽我井・沢田遺跡遺構24
写真図版66　曽我井・沢田遺跡遺構25
写真図版67　曽我井・沢田遺跡遺物 1
写真図版68　曽我井・沢田遺跡遺物 2
写真図版69　曽我井・沢田遺跡遺物 3
写真図版70　曽我井・沢田遺跡遺物 4
写真図版71　曽我井・沢田遺跡遺物 5
写真図版72　曽我井・沢田遺跡遺物 6
写真図版73　曽我井・沢田遺跡遺物 7
写真図版74　曽我井・沢田遺跡遺物 8
写真図版75　曽我井・沢田遺跡遺物 9
写真図版76　曽我井・沢田遺跡遺物10
写真図版77　曽我井・沢田遺跡遺物11
写真図版78　曽我井・沢田遺跡遺物12
写真図版79　曽我井・沢田遺跡遺物13
写真図版80　曽我井・沢田遺跡遺物14
写真図版81　曽我井・沢田遺跡遺物15
写真図版82　曽我井・沢田遺跡遺物16
写真図版83　曽我井・沢田遺跡遺物17
写真図版84　曽我井・沢田遺跡遺物18
写真図版85　曽我井・沢田遺跡遺物19
写真図版86　曽我井・沢田遺跡遺物20
写真図版87　曽我井・沢田遺跡遺物21
写真図版88　曽我井・沢田遺跡遺物22
写真図版89　曽我井・沢田遺跡遺物23
写真図版90　曽我井・沢田遺跡遺物24
写真図版91　曽我井・沢田遺跡遺物25
写真図版92　曽我井・沢田遺跡遺物26
写真図版93　曽我井・沢田遺跡遺物27
写真図版94　曽我井・沢田遺跡遺物28
写真図版95　曽我井・沢田遺跡遺物29
写真図版96　曽我井・沢田遺跡遺物30
写真図版97　曽我井・沢田遺跡遺物31
写真図版98　曽我井・沢田遺跡遺物32
写真図版99　曽我井・沢田遺跡遺物33
写真図版100　曽我井・沢田遺跡遺物34
写真図版101　曽我井・沢田遺跡遺物35
写真図版102　曽我井・沢田遺跡遺物36
写真図版103　曽我井・沢田遺跡遺物37
写真図版104　曽我井・沢田遺跡遺物38
写真図版105　曽我井・沢田遺跡遺物39
写真図版106　曽我井・沢田遺跡遺物40
写真図版107　曽我井・沢田遺跡遺物41
写真図版108　曽我井・沢田遺跡遺物42
写真図版109　曽我井・沢田遺跡遺物43
写真図版110　曽我井・沢田遺跡遺物44
写真図版111　曽我井・沢田遺跡遺物45

第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

曽我井・堂ノ元遺跡、曽我井・野入遺跡、曽我井・沢田遺跡は、兵庫県多可郡多可町中区曽我井に所在する遺跡である。曽我井地区は、多可町内の東端に位置し西脇市と境界を接している。

この曽我井地区には、明石市を起点として県北部但馬地域の朝来市に至る瀬戸内海側から但馬北部を結ぶ幹線道路のひとつである国道427号線がはしっている。

遺跡の所在する曽我井地区に、兵庫県北播磨県民局県土整備部社土木事務所(中町土木事務所)により、既存国道の道路拡幅、一部区間の新設工事を伴う(国)427号曽我井バイパス建設が計画された。

計画地内には曽我井・堂ノ元遺跡、曽我井・野入遺跡、曽我井・沢田遺跡をはじめ曽我井・瓜生遺跡等縄文時代、弥生時代をはじめ中世の集落遺跡の存在が確認されていた。このため事業主体である兵庫県北播磨県民局県土整備部社土木事務所中町土木事務所と協議し、兵庫県北播磨県民局長からの依頼に基づき、平成17年度に計画地内の確認調査を実施した。

第２節　確認調査

平成17年の確認調査は、２回に分けて実施した。１回目は周知の埋蔵文化財包蔵地である曽我井・堂ノ元遺跡内で実施した。調査の結果、中世の土抗・柱穴等の遺構を確認した。２回目は、曽我井・堂ノ元遺跡の本発掘調査と並行して、計画路線内全域についてトレンチ調査による確認調査を実施した。

写真１　確認調査作業風景

調査の結果、計画路線の南側、埋蔵文化財包蔵地である曽我井・野入遺跡内の２箇所(A・B地区)と西側の曽我井・沢田遺跡の範囲内で、古代から中世の遺構を確認した。

また、第１回目の確認調査の成果を踏まえ平成17年度に実施した曽我井・堂ノ元遺跡の本発掘調査(A・B地区)の結果、遺跡の範囲が広がることが判明し、その範囲確認のため、平成18年度に遺跡が広がると予想された本発掘調査箇所の東側について、確認調査を実施した。調査の結果、遺跡の範囲が東側に及ぶことが判明し、平成18年度に本発掘調査(C・D地区)を実施した。

第３節　本発掘調査

上記の確認調査の結果、遺跡の存在が確認されたため、担当部局とその取扱について協議し、曽我井・堂ノ元遺跡、曽我井・野入遺跡、曽我井・沢田遺跡内の３箇所について本発掘調査を実施することになった。調査は兵庫県北播磨県民局長より依頼を受け、平成17年度から19年度の３箇年で行った。この間、事業担当部局の改編により、平成17年度は社土木事務所（中町土木事務所）、平成18年度からは社土木事務所（多可土木事務所）に担当部局が変更になっている。

写真２　本発掘調査作業風景

１　曽我井・堂ノ元遺跡

曽我井・堂ノ元遺跡の調査は、平成17年度・18年度の２回に分けて実施した。平成17年度に確認調査の結果を受け、Ａ地区・Ｂ地区の２箇所の調査区を設定し本発掘調査を実施した。調査の結果、古代末から中世の集落跡を確認したが、遺跡の範囲が東側に広がる可能性があり、この部分の確認調査を実施した。確認調査の結果、遺跡がさらに東側に広がることが判明したため、平成18年度にＣ地区・Ｄ地区の２箇所の調査区を設定し本発掘調査を実施した。

耕作土はバックホーで除去し、包含層は人力で除去した。遺構は必要に応じて写真撮影および実測図を作成し、遺跡全体の写真、遺構実測図は、ヘリコプターによる空中写真撮影と航空測量を実施し作成した。平成17年度の調査では調査終了時に地区住民を対象とした遺跡説明会を開催した。

写真３　空中写真測量風景

平成17年度調査体制

調査担当職員：西口和彦（調査専門員）・村上泰樹（主査）・上田健太郎（技術職員）

調 査 補 助 員：西本寿子・桜井雅子

調査委託業者：共栄建設株式会社

空中写真測量委託業者：アジア航測株式会社

平成18年度調査体制

調査担当職員：鐵　英記（主査）・小川弦太（技術職員）

調 査 補 助 員：西本寿子

調査委託業者：桑村建設株式会社

空中写真測量委託業者：㈱GIS関西神戸営業所

2　曽我井・野入遺跡

曽我井・野入遺跡の本発掘調査は、２箇所の調査区（A・B地区）を設定し平成18年度に実施した。

耕作土はバックホーを使って機械掘削を行い、遺物包含層は人力により掘り下げ、遺構の検出に努めた。調査の進展に伴って、適宜実測図の作成及び写真撮影を行い、ヘリコプターによる空中写真撮影と航空測量を実施した。調査終了後は安全のため埋戻しを行った。

調査担当職員：鐵　英記（主査）・小川弦太（技術職員）

調 査 補 助 員：西本寿子

調査委託業者：㈱総合グリーン

空中写真測量委託業者：三和航空株式会社

3　曽我井・沢田遺跡

曽我井・沢田遺跡の調査は、平成19年度に実施した。調査に際し、調査区を１～３区に分割し、１区から調査を開始した。なお、２区・３区ともに架設物の状況により、調査区を東西に分割し、東側をa区、西側をb区とし、各々を例えば２a区のように呼称している。

調査は耕作土をバックホーによる機械掘削で除去し、以下遺構面まで人力掘削を行い、遺構精査を実施した。調査は１区より開始し、１区の調査が終了した時点で、２・３区の調査を開始し、１区を残土仮置場とした。航空写真測量は１区で１回、２・３区で１回、計２回実施した。

また、立命館大学講師青木哲哉氏に、現地で地理学的見地からの助言を頂いた。平成20年３月５日には地区住民を対象とした遺跡説明会を開催した。

調査担当職員：西口圭介（主査）・上田健太郎（技術職員）

調 査 補 助 員：西本寿子・桜井雅子・中久保辰夫

調査委託業者：吉田建設株式会社

空中写真測量委託業者：八州関西支社姫路営業所

<table>
<tr><th>遺　跡　名</th><th>調査種類</th><th>調査期間</th><th>調査面積</th><th>調査担当者</th><th>所　　属</th><th>開発事業名</th></tr>
<tr><td>曽我井・堂ノ元遺跡</td><td>確認調査</td><td>平成17年５月30日～
31日（実働２日）</td><td>29㎡</td><td>鐵　英記</td><td rowspan="7">兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所
調査第３班</td><td>（国）427号　交通円滑化事業</td></tr>
<tr><td>曽我井・堂ノ元遺跡</td><td>本発掘調査</td><td rowspan="4">平成17年10月15日～
12月26日（実働47日）</td><td>1,376㎡</td><td rowspan="4">西口　和彦
村上　泰樹
上田健太郎</td><td rowspan="4">（国）427号　交通円滑化事業</td></tr>
<tr><td>曽我井・瓜生遺跡</td><td rowspan="3">確認調査</td><td rowspan="3">369㎡</td></tr>
<tr><td>曽我井・沢田遺跡</td></tr>
<tr><td>曽我井・野入遺跡</td></tr>
<tr><td>曽我井・堂ノ元遺跡</td><td>確認調査</td><td>平成18年４月12日～
13日（実働２日）</td><td>55.5㎡</td><td>西口　和彦
鐵　　英記</td><td>地域連携推進事業（道路改築）
（国）427号曽我井バイパス</td></tr>
<tr><td>曽我井・堂ノ元遺跡</td><td>本発掘調査</td><td>平成18年６月27日～
８月25日（実働24日）</td><td>974㎡</td><td>鐵　　英記
小川　弦太</td><td>地域連携推進事業（道路改築）
（国）427号曽我井バイパス</td></tr>
<tr><td>曽我井・野入遺跡</td><td>本発掘調査</td><td>平成18年８月28日～
10月19日（実働27日）</td><td>859㎡</td><td>鐵　　英記
小川　弦太</td><td>地域連携推進事業（道路改築）
（国）427号曽我井バイパス</td></tr>
<tr><td>曽我井・沢田遺跡</td><td>本発掘調査</td><td>平成19年11月13日～
平成20年３月19日</td><td>1,881㎡</td><td>西口　圭介
上田健太郎</td><td>県立考古博物館
埋蔵文化財調査部
調査第２班</td><td>地域連携推進事業</td></tr>
</table>

表１　発掘調査一覧

第４節　出土品整理

調査によって出土した遺物は、土器65箱（コンテナ換算）、石器33点、金属器52点、木器150点である。

出土品整理作業については兵庫県北播磨県民局加東土木事務所多可事業所と協議し、社会資本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査出土品整理事業として北播磨県民局長より依頼を受け、当館において平成21年から23年度の３箇年で実施した。

平成21年度は、土器の水洗い、ネーミング、接合・補強、金属器保存処理の作業を実施した。平成22年度は、実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理、図面補正をはじめ木製品の樹種同定と放射性炭素（C_{14}）年代測定（ＡＭＳ）の分析鑑定を行った。平成23年度はトレース、レイアウト作業を経て報告書を作成した。

また合わせて、木製品の保存処理を行った。

写真４　木製品保存処理風景

出土品整理体制

平成21年度整理体制

担　当　職　員：村上泰樹（課長）・西口圭介（担当課長補佐）・小川弦太（主任）

保存処理担当：岡本一秀（主査）

非常勤嘱託員：家光和子・小林陽子・吉田優子・島村順子・三好綾子・宮野正子・荻野麻衣・吉村あけみ・谷脇里奈・長濱重美・前田恵梨子・藤井光代・大前篤子

平成22年度整理体制

担　当　職　員：村上泰樹（課長）・西口圭介（担当課長補佐）・小川弦太（主査）

非常勤嘱託員：柏原美音・榎真菜美

分析委託業者

樹　種　同　定：㈱古環境研究所

放射性炭素（C_{14}）年代測定（AMS）：㈱加速器分析研究所

平成23年度整理体制

担　当　職　員：村上泰樹（課長）・西口圭介（担当課長補佐）・小川弦太（主査）

非常勤嘱託員：柏原美音・佐々木誓子・古谷章子・八木和子・岡田美穂・河上智晴・有田遥香・坂東知奈・今村直子・前田恵梨子・村上令子

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

曽我井・沢田遺跡、曽我井・堂ノ元遺跡、曽我井・野入遺跡は、兵庫県多可郡多可町中区曽我井地内に所在する。多可町は兵庫県の中央部に位置し、北側は丹波地域の丹波市、但馬地域の朝来市と境界を接している。西側と南側は神崎郡神崎町・市川町、加西市と境界を接し、東側は西脇市等の播磨地域の市町と隣接している。旧播磨国北辺部に位置し、旧但馬国・丹波国と国境を接する。多可町は面積185.15㎢、人口23,119人（平成21年10月１日現在）の町で、平成17年11月に旧中町・旧加美町・旧八千代町の３町が合併し誕生した。現在では、旧中町域を中区、旧加美町域を加美区、旧八千代町域を八千代区と改正されている。遺跡のある中区曽我井地区は、合併前は旧中町域に属する。

多可町域を概観すると、妙見山（標高692.6m）を最高に標高100m～400m級の山地に周囲を囲まれた谷盆地を形成している。中央を加古川に至る杉原川が南流し、その周囲には氾濫原、河岸段丘、扇状地などの地形が発達している。遺跡は多可町の中央部の杉原川右岸域に発達した河岸段丘・扇状地上に立地する。

１　遺跡周辺の地形

多可町北部の加美区から南下した杉原川は、中区中村町付近で進路を東に変え、中区内を西から東へ流れる。そして羽安町付近で再び南下する。遺跡は東西方向に流れる杉原川右岸域に位置する。この付近の微地形を見ると杉原川の右岸域には、氾濫原、河岸段丘面が発達している。南東部の谷部には、杉原川に向かって等高線が扇状に張り出し、先端付近には小谷が形成されている。周知の遺跡である曽我井・野入遺跡はこの扇状地に立地している。今回本発掘調査を行った曽我井・野入遺跡Ａ・Ｂ地区はこの扇状地高位の扇頂部付近に該当する。曽我井・堂ノ元遺跡、曽我井・沢田遺跡は杉原川の浸食により形成された河岸段丘上に立地する。段丘上には西から東にかけて、舌状に等高線が張り出した高まり（自然堤防？）が延び、高まりの南側には東西方向に発達した谷部（後背湿地？）の痕跡が認められる。高まり部分の東端部付近には縄文時代前期（北白川下層Ⅱa式・Ⅱb式）の土器・石器を伴う遺構が確認されており、この高まりの成立時期は、縄文時代前期まで遡る。

曽我井・堂ノ元遺跡、曽我井・沢田遺跡の両遺跡はこの高まり上に立地している。

２　遺跡周辺の土層

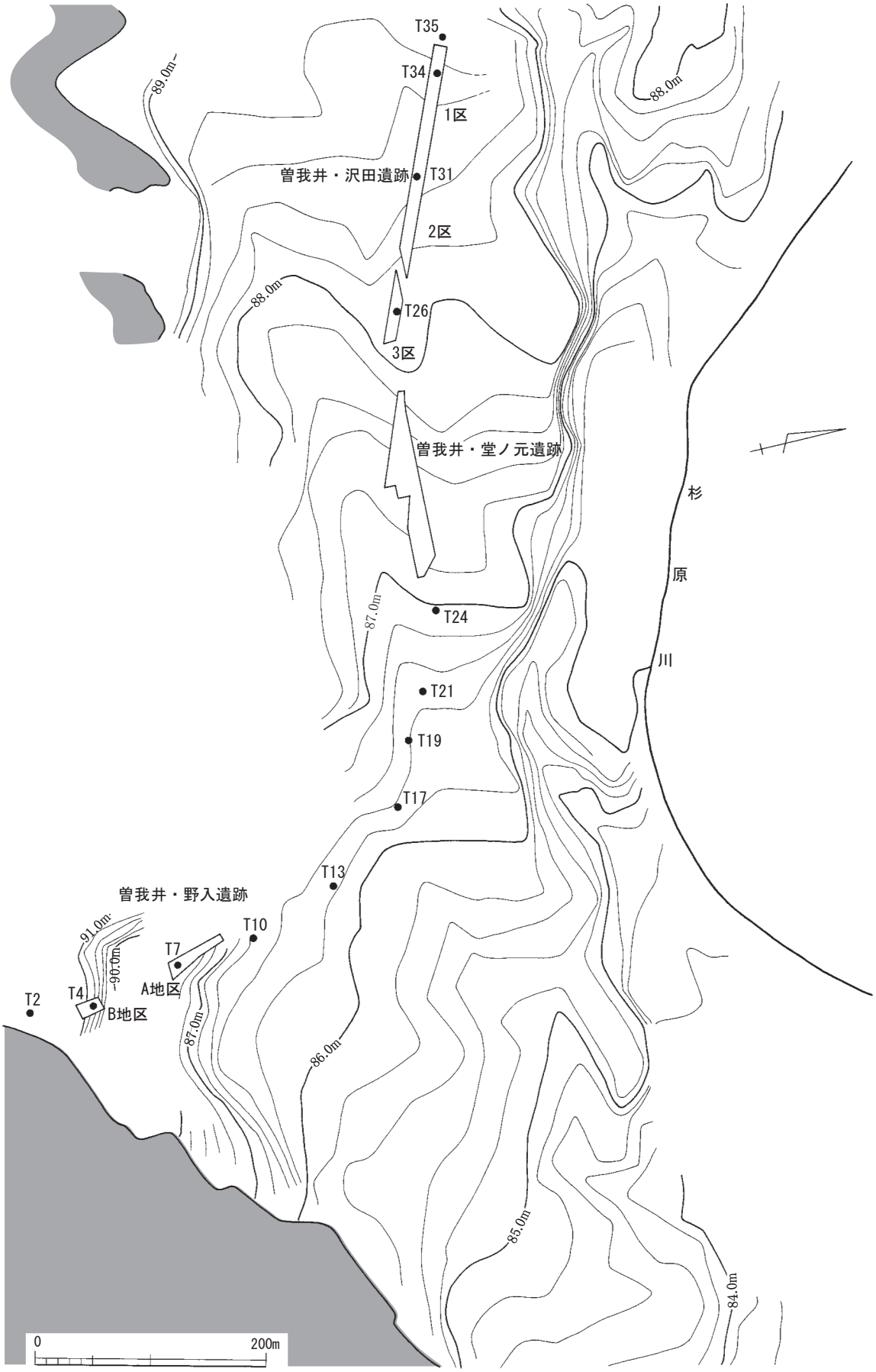
工事計画地内に設定した確認調査の結果をもとに、遺跡周辺の土層堆積状況について述べる。

基本的には　Ⅰ　耕作土、Ⅱ　水田土壌層、　Ⅲ　包含層、　Ⅳ　基盤層の堆積が認められる。

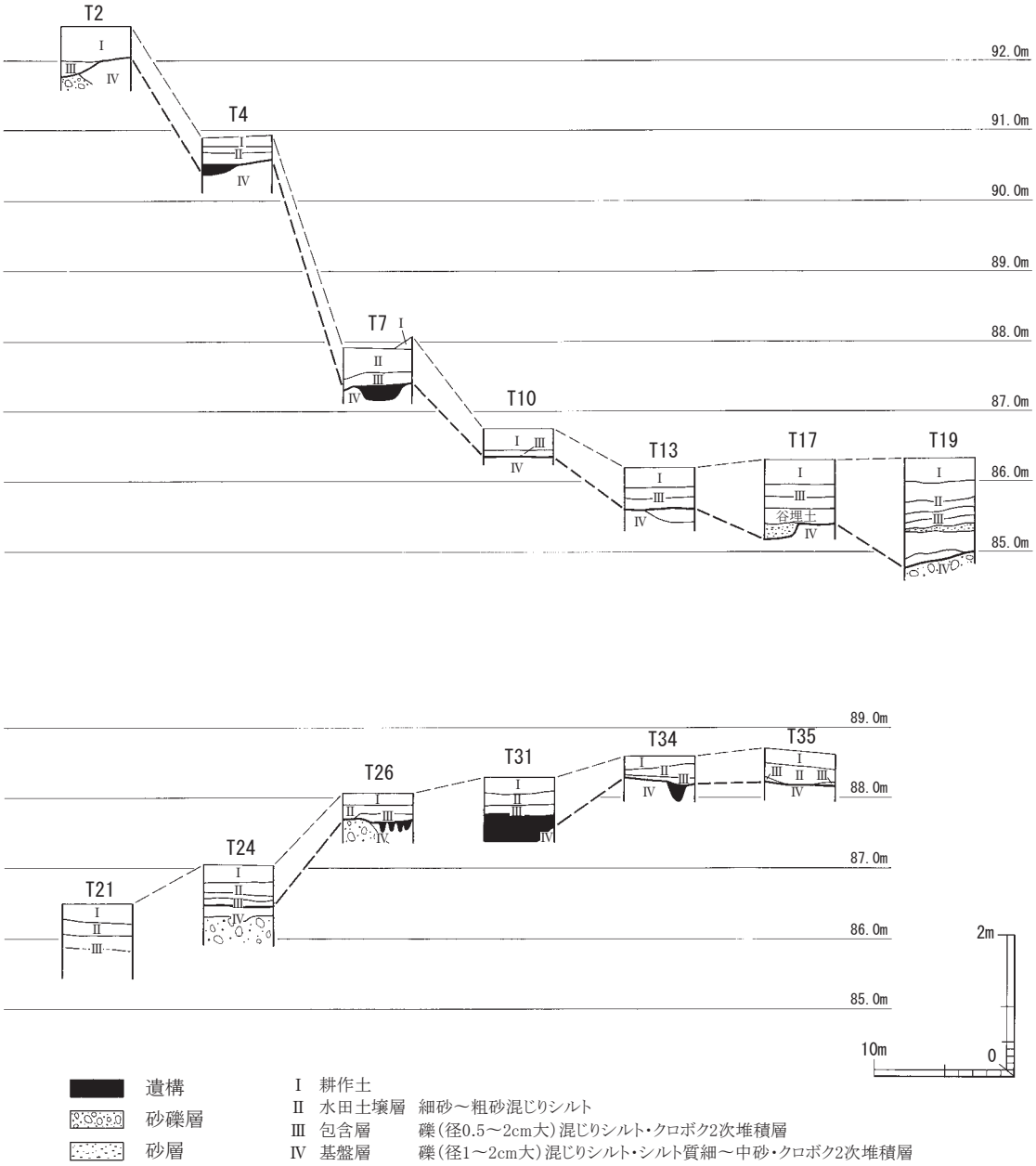
扇頂部付近のＴ２の基盤層は、灰色の礫混じりシルトで、一部包含層が認められる。同じ扇頂部付近の曽我井・野入遺跡Ｂ地区に設定したＴ４では、包含層は認められなかったが、基盤層の礫混じりシルト面から遺構を検出した。またＡ地区に設定したＴ７では、クロボク層主体の包含層が確認できた。基盤層は礫を含まないものの、シルト質で安定している。しかしT17・19・21付近は旧河道の堆積状況が認められ、このトレンチ群の北側で東西方向に展開する高まりと扇状地を分ける。微地形復元図ではこの旧河道の痕跡は認めにくく、この付近では旧河道の埋没が著しかったと理解できる。

金倉
小新屋
小野尻
小野川
丹波市
石金山
508.7
329.1
359.8
田野口
牧野
思出川
鍛冶屋
279
高岸
天田
多可町
岸上
浅香山
315
351.4
奥中
間子
350
石原
中村町
安田川
森本
西安田
中安田
西澤
安坂
東安田
杉原川
曽我井・沢田遺跡
糀屋
羽安町
375
坂本
曽我井・堂ノ元遺跡
曽我井・野入遺跡
大伏
加古川
252
209
曽我井
野中町
仕出原川
大木町
148.6
大門
246
西脇市
仕出原
西田町
市原町
415
富田町
郷瀬町
260.6
山地
河川
遺跡
0
2km

第１図　遺跡周辺の地形



第２図　遺跡周辺の微地形



第３図　遺跡周辺の土層堆積状況

曽我井・堂ノ元遺跡、曽我井・沢田遺跡内に設置したT26～35土層堆積は、シルト質細砂～中砂層で基盤層が構成され、比較的安定した状況を示す。

注） ここで言う基盤層とは遺構が検出された層のことを指し、具体的には包含層(Ⅲ層)を除去した段階の土層である。

参考文献

市村　勝　1991 「中町の地史・地層」『中町史本編』 中町史編集委員会・中町役場

宮原文隆　2000 『曽我井・野入遺跡Ⅰ・多哥寺遺跡Ⅲ』中町文化財報告24　多可郡中町教育委員会

宮原文隆　2006 『曽我井・野入遺跡Ⅱ』多可町文化財報告１　多可郡多可町教育委員会

第２節　歴史的環境

曽我井・野入遺跡、曽我井・堂ノ元遺跡、曽我井・沢田遺跡の調査の結果、奈良時代、平安時代、中世の集落遺跡であることが判明した。

ここでは、この時期の遺跡を中心に周辺の遺跡について記述する。

曽我井・野入遺跡等は多可郡多可町中区曽我井地区に所在する。奈良時代の当地区の状況を記した資料に、平城京跡出土の木簡がある。二条大路より出土した天平９年(737年)の木簡に「播磨囹多可郡那珂郷□」とあり山直小弓や針間直□の名前が見える。同じく平城京出土の木簡で「播磨国多可郡中郷三宅里」と記されたものも見つかっており、那珂郷内に三宅里が存在していたことを裏付けている。また、「播磨国多可郡中郷封戸白米□□□五斗」と記された木簡もあり郷内に貴族の封戸が設定されていたと思われる。曽我井地区に関しては正倉院文書（智識優婆塞等貢進文）に天平17年(745年)「宗我部小敷十九播磨国多可郡那珂郷戸主宗我部老人戸口」とある。『中町史』によれば戸主の宗我部老人は曽我井を遺称地とする那珂郷の豪族であった可能性が指摘されている。平安時代については、承平年間(931～938年)に成立した『和名類聚抄』に記載がある。これによると多可郡には賀美・那珂・資母・荒田・黒田・蔓田の６郷があったことが記されている。同書の国郡部の記載内容は９世紀頃のものと推定されており、那珂以外の地名についても平安時代前期まで遡れる可能性をもつ。

次に『中町の遺跡Ⅱ』を参考にして同時期の遺跡を概観する。

８世紀前半頃の遺跡は土器の出土事例を含めると、７世紀中葉から後半に創建されたと考えられている古代寺院址多哥寺遺跡(４)をはじめ思い出遺跡(５)、牧野・大日遺跡(６)、牧野・町西遺跡(７)、田野口・北遺跡(８)、安坂・城の堀遺跡(９)、西安田長野遺跡Ａ(10)、奥中・桜木遺跡(15)の集落遺跡が知られている。

この時期の遺跡は、中区の北部平野に偏って分布する傾向が見られるという。８世紀後半代になると遺跡の分布は、北部平野だけでなく曽我井地区のある中央平野部にも及び、今回調査した曽我井・沢田遺跡では、溝等の遺構が確認されている。この時期の遺跡は、上記した北部平野に展開した８世紀前半の遺跡群も継続して存続する。これ以外に鍛冶屋・下川遺跡(13)、奥中・前田遺跡(14)、森本・上島原遺跡(16)、安坂・前田遺跡(17)、糀屋･土井の後遺跡(18)、坂本・土井畑遺跡(19)、坂本・丁田遺跡(20)の集落遺跡が、新たに北部平野から中央平野部に展開する。

安坂・城の堀遺跡では奈良時代の溝内より円面硯や墨書土器に混じり斎串・人形等の祭祀具が出土しており、公的施設に付随する祓所の存在が想定されている。事実周辺には奈良時代の中枢施設と考えられる思い出遺跡や郡名寺院址の多哥寺遺跡が存在している。こうした遺跡の存在は、奈良時代の中心が北部平野にあったと理解することを補強している。

平安時代の遺跡は、思い出遺跡、鍛冶屋・下川遺跡等の北部平野地域と、糀屋・土井の後遺跡、西安田長野遺跡Ａ等の中央平野部で確認されている。曽我井地区周辺では、曽我井・沢田遺跡(３)、曽我井・堂ノ元遺跡(１)をはじめ坂本・土井畑遺跡で、同時期の溝や建物跡が検出されている。生産遺跡では西安田西窯(30)、西安田東窯(31)があり、いずれも平安時代中期の須恵器椀を中心に生産している。

古代末から中世の多可郡内には、大山荘、大幡荘、椙原荘、松井荘、安田荘、黒田荘、比延荘、富田荘、這田荘があったとされる。そのなかでも有力な荘園としては、安田荘があげられる。安田荘は、安田郷・曽我部郷・中村郷・野間郷・高田郷からなり、遺跡のある曽我井地区は糀屋・安坂・森本・坂本

地区とともに曽我部郷を構成している。安田荘の成立は明らかではないが、『中町史』によれば、当初は鳥羽院領として現れ、少なくとも文治２年(1186年)には若狭局を領家としている。建久３年(1192年)には、後白河院の妃丹後局高階栄子が領家に任命されている。鎌倉時代後期には九条家に伝領されたと記されている。また、承久の乱(1221年)の功により在地土豪であった後藤氏が安田荘のうち、安田郷・曽我部郷・中村郷の３郷の公文職に補任されている。

古代末から中世前期の遺跡は、北部平野地域では、前述の思い出遺跡で建物跡とともに烏帽子が副葬された中世墓が検出されている。牧野・町西遺跡では鋳造土坑や煙管状窯が確認されている。安坂・城の堀遺跡では、中世前期後半から中世後期の周囲を堀で囲んだ屋敷地が検出されている。堀内には建物以外に井戸が見つかっており、呪符木簡が出土している。中部平野部では、坂本・土井畑遺跡で三方庇付の建物が見つかっており、隣接する曽我井地区を含めた中核施設の様相を呈している。糀屋・里の垣内遺跡(32)においても建物群が検出されている。

これらの集落遺跡以外に奈良時代から平安時代あるいは中世まで続く山林寺院が確認されている。西安田長野遺跡(11)、円満寺遺跡(12)、坂本・観音谷遺跡(21)、糀屋・奥の谷遺跡(22)、奥中・観音寺遺跡群(23～25)、高岸・西山遺跡(26)、門前・上山遺跡(27)、妙法寺遺跡(28)、善光寺遺跡(29)である。これらの山林寺院跡の活動の中心は中世段階であるが、その成立については、例えば西安田長野遺跡では７世紀末の土器が、坂本・観音谷遺跡では９世紀代の土器が出土していることからも古代に遡る可能性が高いと考えられている。

今回報告する曽我井・野入遺跡、同沢田遺跡、同堂ノ元遺跡は、奈良時代から鎌倉時代を中心とする遺跡である。曽我井・野入遺跡については南北朝期を中心とした遺跡である。

参考文献

㈶角川文化振興財団編　1999　『古代地名大辞典』本編　(株)角川書店

中町史編集委員会編　1991　『中町史』本編　中町役場

小川真理子・宮原文隆　2004　「奈良～平安時代の概観」『中町の遺跡Ⅱ』中町教育委員会

宮原文隆他　2007　『安坂・城の堀遺跡Ⅳ　茂利・大将軍遺跡』多可町教育委員会

㈲平凡社地方資料センター　1999　『兵庫県の地名』日本歴史地名体系第29巻Ⅱ　(株)平凡社

第Ⅲ章　確認調査の概要

第１節　確認調査の経過

(国)427号曽我井バイパス計画地内には、周知の遺跡である曽我井・野入遺跡、曽我井・堂ノ元遺跡、曽我井・瓜生遺跡、曽我井・沢田遺跡等の縄文時代から中世の集落遺跡の存在が知られていた。このため工事に先立ち平成17年度から18年度にかけて確認調査を実施した。確認調査は、第Ⅰ章で記したように平成17年度から18年度にかけて３回実施した。

平成17年度の確認調査は、曽我井・堂ノ元地区および曽我井・瓜生地区、同沢田地区の２回、平成18年度は堂ノ元地区の１回である。

詳細な経緯については、第Ⅰ章を参照いただきたい。

第２節　確認調査の方法

確認調査は、曽我井地区のバイパス計画地内に結果的に45箇所のトレンチを設定し実施した。各トレンチの調査には、バックホーによる機械掘削と人力掘削を併用して遺構の確認をおこなった。機械掘削で表土以下の土を除去しながら包含層および遺構を確認し、包含層の除去と最終掘削面の精査は、人力でおこなった。掘削終了後、必要に応じ写真撮影および土層図などの記録をとり、遺構が確認できた場合は、平面図を作成した。

第３節　確認調査の成果

調査の結果、表２のとおり堂ノ元地区・野入地区・沢田地区で遺跡が確認された。

１　曽我井・堂ノ元地区の成果

堂ノ元地区の計画地内は、周知の遺跡である曽我井・堂ノ元遺跡の範囲内に該当する。平成17年度に８箇所の坪(１～８G)を設定し確認調査を実施したところ、４G～６Gの坪で古代末から中世段階の柱穴や溝などの遺構を確認した。その後、この範囲について本発掘調査(曽我井・堂ノ元遺跡A・B地区)を実施したところ、調査区の東側(１G～３G)に遺構の範囲が伸びることが判明した。正確な遺跡の範囲を確定するため、17年度から18年度にかけて、トレンチ(A～C・１～３トレンチ)による追加確認調査を実施したところ、これらのトレンチで古代末の柱穴・溝などの遺構が確認され、遺跡の範囲が広がることがわかった。このため、平成18年度にこの部分の本発掘調査(C・D地区)を実施した。

２　曽我井・野入地区の成果

平成17年度に堂ノ元地区を除く、(国)427号曽我井バイパス計画地内全域に実施した確認調査の結果、４・７・９トレンチで、中世段階の柱穴・溝が確認された。このため、調査区を曽我井・野入遺跡B地区(４トレンチ)・A地区(７・９トレンチ)に分け、本発掘調査の対象とした。

第４図　確認調査トレンチ・坪配置図

調査年度	本発掘調査区	ﾄﾚﾝﾁ名	規模(m)	遺　　構	出土遺物	出土位置	備　　考
17年度		1G					扇状地末端
		2G					
		3G					
	曽我井・堂ノ元遺跡（A・B地区）	4G			須恵器・土師器・瓦		
		5G					
		6G		柱穴・溝		砂混じり粘質シルト層	
		7G					沼状の地形
		8G					
		1	2×5				
		2	2×5				
		3	2×5		須恵器・丹波焼	Ⅱ層	古代末・近世
	曽我井・野入遺跡（B地区）	4	2×5	柱穴・溝・落込み	須恵器・丹波焼	Ⅱ層	中世
		5			欠　番		
		6	2×5		土師器・須恵器	Ⅱ層	
	曽我井・野入遺跡（A地区）	7	2×5	柱穴・溝	土師器・須恵器	Ⅲ層	平安～中世
		8	2×5	流路	須恵器	埋土内	
	曽我井・野入遺跡（A地区）	9	2×5	柱穴	土師器	Ⅲ層	
		10	2×5				
		11	2×5		丹波焼		
		12					
		13	2×5		土師器・須恵器	平安	
		14			欠　番		
		15	2×5	土抗？	青磁・土師器・須恵器	Ⅲ層	中世
		16	2×5		弥生・土師器・須恵器・瀬戸焼	Ⅲ層	
		17	2×5	自然流路	土師器・須恵器	Ⅲ層	中世
		18	2×5	自然流路	弥生・土師器	流路内	
		19	2×5	自然流路	土師器・須恵器	流路内	
		20			欠　番		
		21	2×5	谷部	弥生・須恵器	谷埋没土内	
		22	2×5		須恵器		
		23	2×5		土師器・須恵器	Ⅲ層	
		24	2×5		須恵器	Ⅲ層	平安
	曽我井・沢田遺跡（1～3区）	25	2×5	柱穴・埋桶	土師器・須恵器	Ⅲ層	
		26	2×5	柱穴	須恵器	Ⅲ層	古墳・平安
		27	1×5				
		28	2×5	落込み	土師器・須恵器	Ⅲ層・落込み内	
		29	2×5		須恵器	Ⅲ層	中世
		30	2×5	柱穴	土師器・須恵器	Ⅲ層	平安～中世
		31	2×5	溝	弥生？・土師器・須恵器	Ⅲ層	弥生？・中世
		32	2×5	柱穴群	弥生・土師器・須恵器・白磁	Ⅲ層	中世
		33	2×5	溝・柱穴	弥生？・須恵器	Ⅲ層	平安～中世
		34	2×5	溝	土師器・須恵器	Ⅲ層	中世
		35	2×5		土師器	Ⅲ層	
	曽我井・堂ノ元遺跡（C・D地区）	A	2×20	柱穴群			
		B	2×7	溝	須恵器	溝内	古代末
		C	2×10	柱穴			
18年度		1	1.5×14.5	柱穴・土抗	土師器	Ⅲ層	古代末
		2	1.5×10	柱穴			
		3	1.5×9	溝・柱穴・土抗			

表2　確認調査成果一覧

3　曽我井・沢田地区の成果

曽我井・野入遺跡と同様に、平成17年度に実施した地区の確認調査で遺構の存在が明らかになった。曽我井地区西端の沢田地区に設定した25～35トレンチで、古墳時代から中世段階の柱穴・溝等の遺構が検出された。このため、この路線区間について本発掘調査の対象とした。

4　確認調査出土遺物

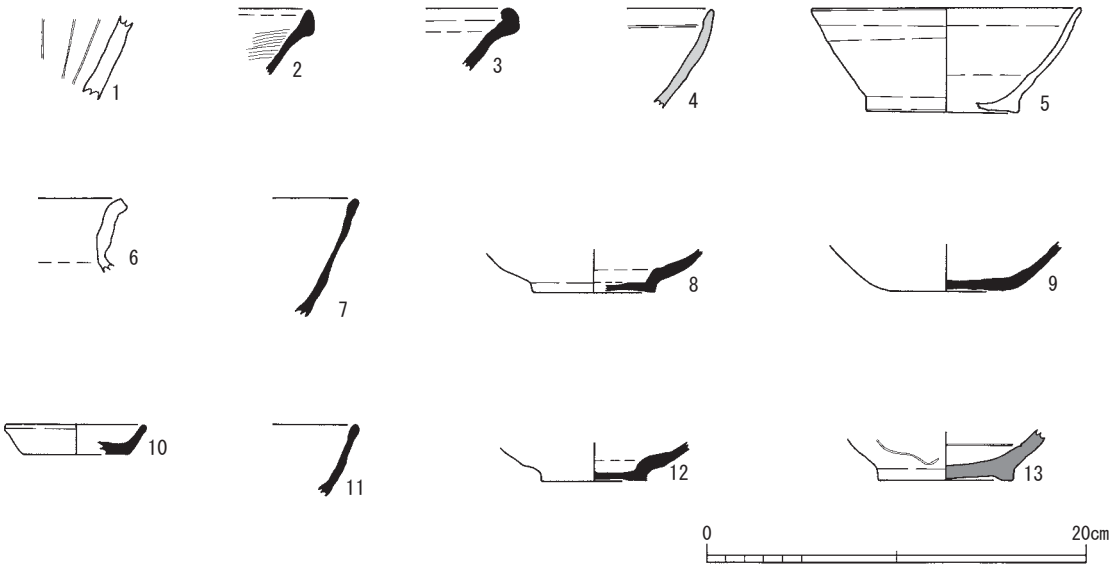
確認調査の結果、各トレンチで遺物が出土した。ここでは主な遺物について概観する。

１は丹波焼擂鉢片である。内面には１回１条描きの擂目が施される。曽我井・野入遺跡調査区内に設定したＴ４で検出した土坑内より出土した。２は１と同じ曽我井・野入遺跡調査区内に設定したＴ７の包含層より出土した須恵器捏鉢である。内面には横位のハケ目が顕著に見られる。形状は東播系須恵器の範疇として捉えられるが、内面のハケ目調整は東播系須恵器には見られない特徴をもつ。口縁部の形状から東播系須恵器の最終段階と理解し、14世紀前半～15世紀前半のものであろう。

３は２と同様、東播系須恵器捏鉢である。T15包含層より出土した。口縁部が内傾し玉縁化している。２と同様、14世紀前半～15世紀前半のものと考えられる。

４は瀬戸焼系の平碗である。T16の包含層より出土した。平碗が出現する古瀬戸中期段階(14世紀)以降のものである。

５は轆轤土師器の椀である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。T18より出土している。須恵器模倣の土師器椀で10世紀代の所産と考えられる。６～９は曽我井・沢田遺跡内に設定したT31の包含層より出土している。６は堝の口縁部片である。端部が外方に拡張する特徴をもち、13世紀後半の特徴をもつ。７～９は須恵器椀である。８・９は底部に回転糸切り痕を残す。東播系須恵器の編年に照合すれ

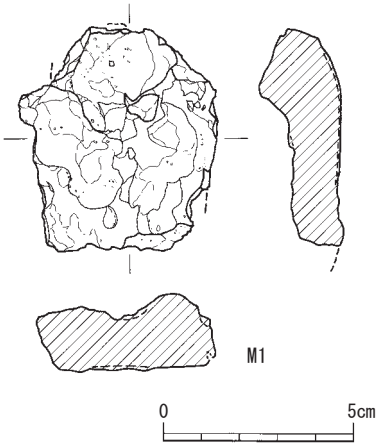


1:T4, 2:T7, 3:T15, 4:T16, 5:T18, 6～9:T31, 10～13:T32出土

第５図　確認調査出土土器

ば、８は10世紀後半、９が12世紀末～13世紀初頭の特徴をもつ。10・11・13はT31と同様、曽我井・沢田遺跡内に設定したT32包含層より出土した須恵器小皿・椀と中国製磁器の白磁碗である。いずれも平安時代末以降の所産と考えられる。14の白磁碗は外面にヘラ描き文様を残す。12世紀前半代のおさまると理解している。12もやはり同様、曽我井・沢田遺跡内に設定したT34包含層内より出土した須恵器椀である。平高台をもち、底面には回転糸切り痕を残す。

金属製品は鍛冶段階で生じる椀形鉄滓が１点（Ｍ１）出土している。曽我井・野入遺跡の範囲内に設定したＴ９包含層より出土した。表面には部分的に錆が認められるなど、残留鉄分の多い滓である。内面には炉床粘土が付着する。



第６図　確認調査出土金属製品

以上の確認調査結果を踏まえ、曽我井バイパス計画地内に曽我井・堂ノ元遺跡、曽我井・野入遺跡、曽我井・沢田遺跡の３箇所の調査区を設定し、平成17～19年の３ヵ年をかけ本発掘調査を実施した。

参考文献

池田征弘　2004 「須恵器（中近世の遺物）」『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第270冊　兵庫県教育委員会

長谷川眞　2004 「土製煮炊具（中近世の遺物）」『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第270冊　兵庫県教育委員会

森田　稔　1995 「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

山本信夫　1995 「中世前期の貿易陶磁器（貿易陶磁器）」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

森内秀造他　2011 『神出窯跡Ⅲ－神出鴨谷１号窯～３号窯・神出梟谷１号窯－』兵庫県文化財調査報告第407冊　兵庫県教育委員会

報告番号	挿図番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)		
									口径	器高	底径
1	5	15	国産陶器	擂鉢	T 4	SX01		丹波	−	(4.2)	−
2	5	15	須恵器	捏鉢	T 7		Ⅲ層	内面横刷毛目	−	(3.3)	−
3	5	15	須恵器	捏鉢	T15		Ⅲ層		−	(3.0)	−
4	5	15	国産陶器	碗	T16		砂礫	瀬戸平碗	−	(4.9)	−
5	5	15	土師器	椀	T18			底部回転ヘラ切り	(14.2)	5.6	(8.0)
6	5	15	土師器	堝	T31		Ⅳ層	外面煤付着	−	(4.0)	−
7	5	15	須恵器	椀	T31		Ⅳ層		−	(6.2)	−
8	5	15	須恵器	椀	T31		Ⅳ層	底部回転糸切り	−	(2.2)	(6.4)
9	5	15	須恵器	椀	T31		Ⅳ層	底部回転糸切り	−	(2.6)	(6.0)
10	5	15	須恵器	小皿	T32			底部回転糸切り	(7.6)	1.6	(5.6)
11	5	15	須恵器	椀	T32		Ⅲ層		−	(3.9)	−
12	5	15	須恵器	椀	T34		Ⅳ層	底部回転糸切り	−	(2.0)	(5.6)
13	5	15	輸入陶磁器	碗	T32		Ⅲ層	白磁　外面ヘラ描き	−	(2.6)	(7.0)

表 3　確認調査出土土器観察表

報告番号	挿図番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)			
									長さ	幅	厚さ	重量(g)
M 1	6	15	鉄製品	椀形鉄滓	T 9	包含層	Ⅲ層	部分的に錆	5.95	5.23	2.25	75.5

表 4　確認調査出土金属製品観察表

第Ⅳ章　曽我井・堂ノ元遺跡の調査

第１節　概　要

本発掘調査は、調査の都合上からA～D地区の４地区に分けておこなった。調査の結果、調査区全域で平安時代から中世段階の掘立柱建物と柱穴群、溝、土坑などの遺構が出土した。

掘立柱建物として識別できた建物跡は、調査区東半のC地区、D地区でそれぞれ１棟検出された。１間×２間と２間×３間規模の側柱建物で、いずれも南北方向を棟軸としほぼ平行に並んでいる。これ以外に、B～C地区にかけて柱穴群が検出されたが、建物として識別できなかった。柱穴群の中にはB地区P03・05のように柱痕を残すものも確認されており、とくにP05は１m以上の柱材が残っていた。

溝はA・B地区で７条検出された。うちA・B地区にまたがって検出された溝SD01・06は、屋敷地の南側を限る溝の可能性がある。このSD01に連結して、南北方向にはしるSD02・03と、SD01と並行して走るSD04等が検出された。

土坑は、A～D地区のほぼ全域で検出された。A・B地区では、被熱して赤化した石を含む集石土坑(SK09・SK10)や風倒木跡(SK04)、粘土採掘土坑(SK05)をはじめ性格が不明の15基の土坑が検出された。C・D地区では５基の土坑が検出された。

時期的には平安時代後期から鎌倉時代の遺構群である。

第２節　層　序

調査区の基本層序は以下のとおりである。

盛　土：30cm～１m

Ⅰ　層(旧耕作土)：青灰色・灰色　礫混じりシルト・シルト質極細砂　５cm～30cm

Ⅱ　層(水田土壌層)：灰褐色・黄灰色　細～中砂混じりシルト　30cm～40cm

Ⅲ　層(包含層)：暗褐色・黒褐色・暗色　シルト質極細砂(クロボク混入)　10cm～30cm

Ⅳ　層(遺構面)：黒色(クロボク)・にぶい赤褐色　シルト質細砂・礫混じりシルト

写真５　基本土層（Ｂ地区西壁）

盛土は調査区全域で確認され、A地区が１m前後と厚く、C・D地区が60cm前後で平均化している。B地区は30cm前後と調査区のなかでは薄く盛土されている。

Ⅰ層は、盛土前の水田層で、Ⅱ層はそれ以前の水田土壌層である。A・B地区で２面から３面の水田土壌が確認できる。C・D地区では１面ないしは２面確認できた。

Ⅲ層は遺物包含層である。B地区では土壌化したクロボク土と地山ブロック土・小

石が混入する状況も見られた。層厚はA地区西端がもっとも厚く堆積し、30cmの堆積が見られるが、B～D地区では10cmから20cmと均一である。

遺構面は標高86.8m前後で、ほぼ水平である。A・C・D地区の遺構面はシルト細砂～中砂で構成されるが、東側のC・D地区では、これに径5mm～1cm大の小石が混ざる。B地区南半の遺構面はクロボク層面、あるいはクロボク層と地山土の混入した斬移層が遺構面となる。

第3節　遺　構

1　掘立柱建物群・柱穴群

調査区東半のC・D地区で2棟(SB01・SB02)検出した。これ以外に建物の痕跡を示す柱穴群が検出されたが、建物として識別できたのはこの2棟のみである。

SB01(図版5　写真図版5)

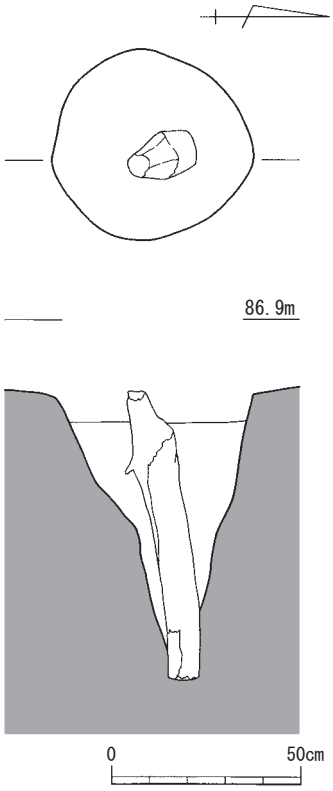
検出状況　C地区西端で、包含層Ⅲ層を除去した段階で検出した。建物の北西側3mのところには、溝SD01が、東側5mのところには土坑SK11が近接する。

形状・規模　南北方向に桁行きをもつ、1間×2間の小型の側柱建物である。身舎の規模は、東西方向2.35m、南北方向3.65mを測る。梁行き間の中心を結んだ棟軸方位はN6°Eである。

柱　穴

建物は6穴の柱穴(P219～224)で構成され、柱間は梁行きが2.35m、桁行きが1.7～1.9mと北半部の柱間が長い。柱穴の形状は径20cm前後の円形を呈し、検出面からの深さは30～35cmである。識別できた柱痕は径15cm前後と小さい。

出土遺物　P220内より須恵器椀(14)が出土した。



第7図　B地区　P05

SB02(図版5　写真図版6)

検出状況　D地区西端に位置し、包含層Ⅲ層を除去した段階で検出した。SB01とは約33mの距離を置き、棟軸方位をほぼ同じにして並ぶ。

形状・規模　南北方向に桁行きをもつ、2間×3間の側柱建物である。身舎の規模は、東西方向4.6m、南北方向6.5mを測る。棟軸方位はN1°Eとほぼ北を指す。

柱　穴

建物は10穴(P77～79・84・85・88～92)の柱穴で構成され、柱間は梁行きが2.15～2.4mである。桁行きは、2.15～2.4mと幅があり、中央部の柱間が2.1mと短く、北側は2.4mと長い。柱穴の形状は50cm×55cm前後の隅丸方形が基本であるが、楕円形を呈するものもある。検出面からの深さは10～25cmと浅い。識別できた柱痕は径15～20cmである。

柱穴群（図版５　写真図版６）

建物として識別できなかった柱穴は、A地区～D地区で検出された。A地区ではSD01の南側に沿う形で２穴（P01・02）確認できた。いずれも径30cm前後の円形の掘方で、径15cmの柱痕が確認できた。

B地区は東端で７穴（P05～11）検出した。このうち北側のP05～08の一群はコ字形の並びが認められ、建物が存在していた可能性が高い。P07・08はSD01を掘削した段階で検出したが、重複関係は明らかにできていない。掘方は径30～50cmの円形を呈し、深さは30～75cmでP05が最も深い。P05内には径15cm前後、長さ79cmの柱材（丸太）が残っていたほか、P08内でも柱材が検出された。

P04内から墨痕を残す須恵器蓋（54）が出土した。南側のP10･11はSD04を切って構築されており、径40cm前後の円形の掘方をもつ柱穴で、底面には30cm四方の扁平な根石が置かれている。

C地区の柱穴群は、南東隅に集中しており、径30cm前後の円形の掘方を呈し、検出面からの深さは15cm～30cmである。

D地区の柱穴群は西側のSB02の東側付近と東半部に分布する。B・C地区と異なり分布密度が高い。柱穴の規模は、C地区と類似しており、径30cm前後の円形の掘方を呈し、検出面からの深さは15cm～30cmである。

出土遺物　B地区のP04から須恵器の墨書土器蓋（54）が出土している。

２　土　坑

土坑は17基検出された。A地区では風倒木跡と考えられるSK04、埋土に大きい地山ブロックを含む粘土採掘坑の可能性をもつSK05などの土坑が検出されている。B地区では２基の集石土坑SK09・10がある。なかでもSK10内からは被熱し赤化した石が出土している。

SK01（図版６　写真図版７）

検出状況　A地区の東端に位置し、Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。北側にはSD01が近接し、東側にはSK04が隣接する。３基の土坑が重複しており、新しい順よりA～Cの枝番号を付した。土坑の性格は不明である。

形状・規模　SK01Aは平面形が1.4×0.92mの楕円形を呈する。検出面からの深さは15cmと浅い。断面形は浅い鍋底状を呈する。

SK01Bは1.8～1.15mの東西に長い長方形を呈する。検出面からの深さは12cmと浅い。北壁の立ち上がりは急で、皿状の断面形を呈すると思われる。

SK01Cは北半部をSK01A・Bに切られ、形状・規模は不明である。検出面からの深さは20cmである。南壁はなだらかに立ち上がる。

埋　土　SK01Aの埋土は２層に分かれ、下層には地山ブロックが混ざる。SK01B・Cは１層の堆積で、いずれも灰黄褐色シルト質の土に地山ブロックが混ざる。

SK02（図版７　写真図版７）

検出状況　A地区西端に位置し、Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。西側および東側はSK04とSK05と接する。

形状・規模　北東隅が拡張する歪な楕円形を呈する。拡張部分はテラス状になっている。1.85×1.65mの規模で、検出面からの深さは、最深部で25cmを測る。底部は平坦で、断面の形状は皿状を呈する。

埋　土　２層に分層できる。上層には２cm～10cm大の礫が含まれる。

出土遺物　上層より土師器片が出土した。

SK03（図版６　写真図版８）

検出状況　A地区中央付近に位置し、Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。

西側にはSK05が近接する。

形状・規模　1.2×0.88mの規模で、北東方向に長い楕円形を呈する。底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は鍋底状を呈する。検出面からの深さは40cmである。

埋　土　４層に分かれ、クロボク主体の土で構成される。壁際の３層はクロボクに地山ブロックが混入した層で、壁の崩落土と考えられる。

SK04（図版６）

検出状況　A地区西端付近に位置し、Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。西側にSK01が近接し、東側はSK02と接する。埋土および根の痕跡から風倒木の痕跡と考えられる

形状・規模　3.5×2.7mの規模で東側が膨らんだ歪な楕円形を呈する。木の根の痕跡と考えられる壁面は凹凸が著しく、南東側には細い根痕跡が伸びる。

埋　土　クロボク主体の土と、倒れる際に地山を巻き上げた痕跡と考えられる地山ブロック層に分けられる。

SK05（図版６　写真図版８）

検出状況　A地区中央付近に位置し、Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。西側はSK02、東側はSK03と近接する。

　壁面の鋤痕は確認できず断定はできないが、クロボク主体の埋土のなかに大型の地山土片が混じるなど、粘土採掘坑の可能性がある土坑である。

形状・規模　6.7×2.5mの規模で、東西方向に細長い楕円形を呈する。底面は平坦で、壁の立ち上がりが急である。検出面からの深さは50cm前後である。

埋　土　３層に分かれる。上層の２層はクロボク主体の埋土で、下層はクロボク土に径２～10cm大の地山ブロックが混入する。

出土遺物　１層中より須恵器椀(16)・捏鉢(15)、丹波焼壷(17)・丸瓦(18)が出土している。

SK06（図版７）

検出状況　B地区南西隅に位置し、土坑の西側は調査区外に及んでいるため東半部分を検出した。Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。土坑の東端部でSK07と重複している。

形状・規模　幅1.12m、長さ90cm以上の東西方向に長軸をもつ土坑である。検出面からの深さは50cm前後と深い。

埋　土　２層に分かれる。上層は礫混じりのシルト層で、下層は礫を含まない。

SK07（図版７）

検出状況　B地区南西隅に位置し、西端をSK06に切られている。Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。SD04と重複している。

形状・規模　長さ1.9m以上、幅が最大で1.06mの東西に長い土坑である。中央付近がくびれた分銅形であるが、上部が削平されており本来の形状は楕円形を呈すると考えられる。断面形は浅いⅢ状を呈し、検出面からの深さは18cm前後である。

埋　土　２層に分かれる。下層は土坑東半部の窪み部分を埋めるように堆積している。

SK08（図版７　写真図版９）

検出状況　B地区東端部に位置し、Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。北側にはSD01が近接する。土坑の北端部分から、８×10cm～10×15cm大の河原石が集中して出土した。

形状・規模　長軸2.9m以上、短軸1.42mの南北方向に長い土坑である。南北方向を主軸とした方位はN25°Eである。平面形は隅丸長方形で、断面形はⅢ状を呈する。検出面からの深さは26cm前後である。

埋　土　４層に分かれる。土層は壁際より埋没し、その後中央の窪み部分にレンズ状に堆積する状況が見てとれる。

出土遺物　埋土内および底面より土師器の細片が出土したが、図化できるものはなかった。

SK09（図版７　写真図版９）

検出状況　B地区西端に位置し、Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。北側にはSD01、東側はSD02に囲まれている。土坑内に石を充填した集石土坑である。

形状・規模　径1.15mの円形の土坑である。断面形は鍋底状を呈し、検出面からの深さは38cmである。

埋　土　土坑内には10×10cmから35×30cm大の角礫ないしは亜角礫の河原石が投げ込まれたような状況で出土した。石には被熱した痕跡はない。

SK10（図版７　写真図版９・10）

検出状況　B地区西半部の南側に位置する。上部をSD04により破壊された状況で検出された。

形状・規模　１×0.85mの東西方向に長い楕円形の土坑である。検出面からの深さ（SD04の底面）21cmと浅く、断面形は鍋底状を呈する。被熱し赤化した石をもつ集石土坑である。

埋　土　底部から中位にかけては、部分的に赤化した５×３cm～22×12cm大の亜角礫の河原石で土坑を満たしているが、規則性は認められない。しかし土坑上部の北側と東側周縁部には、33×10cm前後の角棒状の石が規則的に配置された状況が認められる。

SK11（図版８）

検出状況　C地区中央に位置し、Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。西側にはSB01があり、東側には、SK12が近接して並ぶ。

形状・規模　2.6×0.95mの南北方向に長い土坑で、歪な楕円形を呈する。検出面からの深さは36cmで、底面は丸底である。

埋　土　クロボク主体の土である。

SK12（図版８）

検出状況　C地区中央に位置し、Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。西側にはSB01があり、西側には、SK11が近接して並ぶ。

形状・規模　2.4×1.5mの南北方向に長い土坑で、歪な楕円形を呈する。検出面からの深さは20cmで、底面は平坦であるが多少凹凸がある。

埋　土　２層に分かれる。下層はSK11と同じ土であるが、上層には砂層が認められる。

SK13（図版８）

検出状況　D地区の西端に位置し、Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。西側にはSK14・15がある。土坑の北半部は調査区外に及んでいるため、全容は明らかではない。

形状・規模　長さ1.8m以上、幅1.16mの南北方向に長い土坑である。検出面からの深さは50cmと深く、東壁の立ち上がりは西壁に比べ急で、ほぼ垂直に立ち上がる。底面の形状は舟底状を呈する。

埋　土　２層に分かれる。上層はクロボク主体の土で構成される。

SK14（図版８　写真図版10）

検出状況　D地区の西端に位置し、Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。南側にはSK14が近接して並ぶ。

形状・規模　2.6×1.3mの規模で、東西方向に長い三角形様の平面形を呈する土坑である。検出面からの深さは55cmと深く、丸底状の断面形を呈する。

埋　土　３層に分かれる。上層はクロボク主体の層であるが、下層は壁面崩落土である。

SK15（図版８　写真図版10）

検出状況　D地区の西端に位置し、Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。北側にはSK14が近接して並ぶ。

形状・規模　1.7×0.9mの規模で、東西方向に長い三角形様の平面形を呈する土坑である。検出面からの深さは55cmと深く、丸底状の断面形を呈する。

埋　土　SK14の第２層と類似した土層が堆積している。

３　溝

溝は、A・B・C地区で検出した。SD01は、A～C地区に跨って確認され、溝の東端で北側に方向を変え、「L」字形を呈している。B地区ではSD01に連結して延びる溝が２条（SD02・03）検出された。B地区では、この溝群以外にSD01と15m前後の間隔で同方向に延びるSD04がある。

SD01・SD06（図版９・10　写真図版11～13）

検出状況　A～C地区の北壁際で東西方向に延びる状況で検出された。A地区では溝の南肩部分のみ検出できた。B地区東側ではSD06と重複し、SD06に切られており、溝の東端はC地区の北西隅で北側に曲がる状況が確認された。Ⅲ層包含層を除去した段階で検出された。B地区では、SD02・03と繋がっている。B地区の北側肩部から溝底にかけて、平均３～15cm大の亜角礫の河原石が出土した。これ以外に25×40cm大の石も量的には少ないが出土している。

B地区西側の北側肩部付近の密集度の高い石群は、人為的に置かれた状況を示し、護岸的な機能を持つ可能性がある。それ以外の溝底で検出された石は護岸石が流出した痕跡と理解している。

SD06溝底部からも同規模の河原石が出土しているが、密集度は小さい。

両溝とも、C地区北西隅で、北側に進路を変える。

形状・規模　SD01の主軸方位はB地区ではE９°Sを示し、多少南に振れる。溝幅はB地区中央付近で４m、東側で２mと東に行くに従い幅を減じる。総延長99mである。溝の西端と東端の比高差は約40cmで、東端部が低い。検出面からの深さは、A地区で24cm、B地区で35～60cmを測る。

SD06は、幅が1.8m前後で、検出面からの深さは30～35cmで、東に行くに従い浅くなる。

埋　土　溝内の堆積土層状況は、両溝ともに水の流出による堆積を示す。SD01・06の底部は基本的には砂を主体にした層で、上層はシルトに細砂～中砂を含む層に分かれる。

出土遺物　SD01からは土師器皿（19～24）・椀（25～35）・杯（36～39）、須恵器椀（40～47）・杯（48）、平瓦（49）、土製紡錘車（95）、付木等（W１～W10）が出土している。

SD06内からは、須恵器椀（50・51・67）・壷（52）・が出土している。

SD02（図版９・10）

検出状況　B地区西端部に位置し、南北方向に延びる溝である。Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。南端部で東西方向に延びるSD04を切っている。溝の東側15mのところには同方向に延びるSD03がある。北端はSD01と繋がり、南端部は調査区外に延びる。溝の主軸方位はN４°Eとほぼ北を向く。

形状・規模　幅90cm、検出面からの深さは30～10cmと北側に行くに従い深くなる。溝の南端部とSD01寄りの北端部との比高差はなく、ほぼ水平である。

埋　土　１層のみの堆積である。クロボク層と地山土がブロック状に混入した層である。

出土遺物　須恵器椀(53)が出土した。

SD03（図版９・10）

検出状況　B地区の東寄りに位置し、南北方向に延びる溝である。Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。SD02と15mの間隔で同方向に並ぶ。溝の北端部はSD01と繋がる。南端部で東西方向に延びるSD04を切り、そのまま調査区外に延びる。

溝の主軸方位はN13°EでSD02より東に振る。

形状・規模　幅52cm、検出面からの深さは20cm前後である。溝底の北端部と南端部との比高差はなく、ほぼ水平である。断面形はU字形を呈し、両壁の立ち上がりは急である。

埋　土　２層に分かれる。

SD04（図版11　写真図版14）

検出状況　B地区南側を東西方向に延びる溝である。Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。

溝の主軸方位はN73°Wである。SD02・03、P10・11、SK10と重複し、両溝および柱穴群に切られているほか、SK10を切って掘削されている。

形状・規模　幅１～1.8mで東端が広くなる。検出面からの深さは12～25cmで西側に行くに従い深くなる。溝の長さは40mを越える。

溝底は西半部が平底、東半部が丸底になる。溝の東端と西端とでは、比高差がなくほぼ水平である。

埋　土　３層に分かれる。溝西半部の最下層は地山ブロックとクロボク土混じりの堆積を示すが、東端では粗砂が主体の層に変化しており、水性の堆積に変化する。

出土遺物　最下層より須恵器杯蓋(55)と杯身(56)が出土した。

SD05（図版11　写真図版14）

検出状況　B地区東端に位置し、北西方向に延びる溝である。Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。南西側にはSD07が近接し、北側にはSD01がある。

溝の北西端は撹乱により破壊されている。

形状・規模　幅60cm、検出面からの深さ10cm前後の浅い溝である。

埋　土　中砂混じりのシルト層が堆積する。

SD07（図版11　写真図版14）

検出状況　B地区東端に位置し、多少蛇行しながら北西方向に延びる溝である。Ⅲ層包含層を除去した段階で検出した。南東側にはSD07が近接し、北側にはSD01がある。

形状・規模　幅65cm、検出面からの深さ15cm前後で、溝底には径50cm前後で深さ10cm前後の楕円形の浅い窪みをもつ。

埋　土　中～粗砂混じりのシルト層が堆積する。

第４節　遺　物

本発掘調査の結果、掘立柱建物に伴う柱穴や土坑・溝等の遺構から、平安時代から鎌倉時代の土器、土製紡錘車、柱材が出土した。

これ以外に包含層（Ⅲ層）からは、土師器・須恵器・中国製磁器等の土器と土錘等の土製品、太型蛤刃石斧、硯等の石製品、鉄製釘等の金属製品が出土している。

以下出土遺物について概観する。

１　遺構出土の遺物

SB01出土遺物　建物を構成するP220内から須恵器椀（14）が出土した。底部を欠き全容は明らかではないが、底部回転糸切りの平高台の椀と思われる。丁寧な作りと口縁部が外反する等の特徴から、平安時代中期、10世紀前半頃の椀と考えられる。

SK05出土遺物　Ａ地区のSK05最上層より須恵器捏鉢（15）・椀（16）、丹波焼壷（17）、丸瓦（18）が出土した。15は東播系須恵器捏鉢で、口縁部の特徴から12世紀末から13世紀初頭と考えられ、16の椀についても同時期と考えられる。17の丹波焼は口縁部のみの破片で断定することはできないが、長谷川分類（長谷川眞2006）の毬形タイプⅡＡ１類に口縁部のつくりが近似する。時期的には12世紀後葉に比定されている。これらの遺物は最上層より出土しており、土坑の埋没時期についても同様の時期を考えたい。

SD01出土遺物　土師器皿（19～24）・椀（25～35）・杯（36～39）、須恵器椀（40～47）・杯（48）、平瓦（49）や土製紡錘車（95）、付木等（Ｗ１～10）が出土している。

土師器皿は手づくね成形の19と轆轤成形の20～24がある。

轆轤土師器皿の一群は、口縁部が大きく外反し、外面体部には細かな轆轤目を残す特徴をもつが、底部の切り離しが回転糸切りの21と回転ヘラ切りの20・22～24に分かれる。

土師器椀25～35は平高台をもつ須恵器椀Ｃの模倣と理解できる一群である。底部の切り離しは回転糸切りで、外面には轆轤目を顕著に残すが、33・35のように、ヘラ削り様の鋭い轆轤目を残すものもある。高台脇には丁寧な調整を施す。おおむね10世紀前半を中心とする一群と理解している。

土師器杯36～39の一群は、脚部をもつ所謂「足高高台杯」である。いずれもハの字形に開く、高い高台部をもつ。足高高台杯を須恵器模倣の観点で捕らえると、播磨地域ではなく摂津地域の11世紀第一四半期に比定されている三田市木戸窯の製品のなかに求めることも可能である（岡崎正雄1992）。土師器の足高高台杯は、県内では当地区以外に加古川市大野遺跡、たつの市小犬丸遺跡・神崎郡市川町サルガク遺跡・沢構遺跡など播磨地域での出土が確認されている。県外では鳥取県・島根県（八峠　興1998）等での出土が確認されている。足高高台杯の年代については、11世紀代と考えられている。また、轆轤土師器皿の一群（20～24）についても、近似する皿が出土しており、時期的には足高高台杯と同時期に比定されている。また県内の加古川市大野遺跡では11世紀後半に出現している。

須恵器椀は平高台で回転糸切りの椀Ｃ（40～44）と無高台で回転糸切りの椀（45～47）がある。京都府亀岡市篠窯址や県内三田市相野窯跡群の編年に照合すれば、前者の一群は、10世紀前半を中心とした時期に比定できる。後者の一群は、12世紀末～13世紀初頭の特徴をもつ。

47の椀の体部外面には「上」が墨書されている。これ以外に回転糸切りの須恵器杯Ａ（48）と平瓦（49）が出土している。

SD06出土遺物　SD01と重複関係にあり、SD06が新しい。須恵器椀(50・51・67)と壷(52)が出土している。椀は平高台の椀(50・67)と無高台の51がある。50は底部切り離し後、高台脇が未調整で11世紀前後の特徴をもつ。67はわずかに平高台部を残す椀で11世紀末～12世紀と考えられる。

51は12世紀末～13世紀初頭ごろと考えられる。また52の壷は、内外面および断面部も含めて墨痕が残り、11世紀大の所産と考えられる。

SD02出土遺物　平高台をもつ須恵器椀C(53)が出土した。

P04出土遺物　柱穴内より須恵器蓋(54)が出土した。内面には墨痕が認められる。

SD04出土遺物　杯蓋(55)と杯身(56)が出土している。55が７世紀末～８世紀初、56は６世紀末～７世紀初頃の所産と考えられる。

2　包含層出土の遺物

調査区全域で包含層(Ⅲ層)が確認でき、包含層中より土師器皿(57～59)・堝(60～62)・羽釜(63～65)、須恵器皿(66)・椀(67～69)・捏鉢(70～75)、瀬戸・美濃焼平碗(76)、中国製磁器(77～86)等の土器や土錘(92～94)、不明土製品(95)、羽口(96)等の土製品、硯(Ｓ２)や弥生時代の石斧(Ｓ１)等の石製品、釘・椀形鉄滓(Ｍ２～Ｍ６)等の金属製品が出土している。

土師器

皿(57～59)はいずれも手づくねの皿である。外面体部指押さえ、口縁部はヨコナデを施す。平底の59と丸底の57・58がある。

堝(60～65)は口縁部が立ち上がる堝(60～62)と退化した鍔をもつ羽釜(63～65)がある。いずれも外面にタタキ目を施す播磨型の堝である。

時期的には前者が13世紀後半、後者は14世紀後半～15世紀前半代におさまると考えられる。

須恵器

皿(66)は底部回転糸切りの小皿である。

椀(68・69)は底部に回転糸切りの痕跡を残す椀である。68は外面に条線を施し、69は同じく外面に墨書の痕跡が認められる。12世紀末～13世紀代の特徴をもつ。

捏鉢(70～75)は東播系須恵器の捏鉢である。70～72・75は12世紀後半～13世紀代の特徴をもち、73・74は14世紀代の中におさまると考えられる。

瀬戸・美濃焼(76)

平碗と考えられる口縁部片である。

中国製磁器(77～91)

77の白磁碗は、高台部の作りはⅡ類の特徴をもち、見込み部に段をもたないⅡ－１類の範疇で捉えることも可能であるが、見込み部に花文を施す点が異なる。78は見込み部が蛇ノ目釉ハギの白磁碗である。Ⅷ類に相当し、12世紀中頃～後半に比定される。

79・80は青白磁で、79が合子蓋、80は皿である。12世紀中頃～後半の所産と考えられる。

81は内面に花文を施した白磁皿でⅦ－１・b類に相当し11世紀後半～12世紀前半に比定される。

82～85は青磁碗である。82は外面に花文が線彫りされ、胎土が暗褐色を呈し全体的に暗い仕上がりになっている。83は全体的に厚く施釉され大きい貫入が見られる龍泉窯系の碗である。高台端部は無釉で赤化している。濃緑色の発色をした上手の製品である。84は外面に鎬蓮弁文が施された碗で、Ⅰ－５・

b類に相当し、13世紀初頭～前半に比定される。85は高台内無釉で、見込みに「金玉満堂」の字文が施された龍泉窯系の碗で、面子として転用されている。

86は染付碗である。内面に花文、高台内に簡略化した字文が施される。17世紀を前後する時期と考えられる。

上記以外にも細片のため図化できなかったが、87・88の白磁碗、89の同安窯系青磁碗、90・91の蓮弁文をもつ龍泉窯系の碗が出土している。

土製品

土錘(92～94)は長さ3.9～5.5cmの土錘である。92は表面の剥離が著しい。

不明品(95)は紡錘車の可能性も考えられるが、確定できない。底部には回転糸切り痕を残す。

羽口(96)は外面のガラス化が著しい点から先端部と考えられる破片である。

石製品

石斧(S１)はB地区の包含層中より出土した、弥生時代中期の太型蛤刃石斧である。

硯(S２)は墨堂に「サ□シコ」と線書きされている。墨堂と硯背には墨が付着している。

金属製品

楔状のもの(M２)、鑿(M３)、釘(M４・５)、椀形鉄滓(M６)が出土している。

木製品

W１は、建物の柱材である。表面は樹皮を剥ぎ取った丸材で、下端は水平に加工されている。直径は径17cmである。

W２・W４～６・W８は端部に焼痕の跡を残す付木である。

W３・W７・W９・W10は、板状の破片である。斎串・人形あるいは木簡の断片である可能性をもつ資料として取り上げたものである。

参考文献

長谷川眞　2006 「壷類にみる中世丹波焼」『兵庫陶芸美術館研究紀要』第２号　兵庫陶芸美術館

岡崎正雄　1992 「相野窯跡の須恵器について」『相野古窯跡群』兵庫県文化財調査報告　第115冊　兵庫県教育委員会

兵庫県教育委員会　1987 『小犬丸遺跡』兵庫県文化財調査報告書　第47冊　兵庫県教育委員会

兵庫県教育委員会　2008 『サルガク遺跡・沢構』兵庫県文化財調査報告　第343冊　兵庫県教育委員会

山田清朝　2010 「遺物」『大野遺跡』兵庫県文化財調査報告　第380冊　兵庫県教育委員会

八峠　興　1998 「山陰における中世土器の変遷について－供膳具・煮炊具を中心として」『中世土器の基礎研究』ＸⅢ　日本中世土器研究会

八峠　興　2000 「山陰における土器・陶磁器について」『中世土器の基礎研究』ＸＶ　日本中世土器研究会

森内秀造他　2011 『神出窯跡群Ⅲ－神出鴨谷１号窯～３号窯・神出梟谷１号窯－』兵庫県文化財調査報告　第407冊　兵庫県教育委員会

森田　稔　1995 「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会

長谷川眞　2004 「土製煮炊具(中近世の遺物・土器陶磁器)」『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第270冊　兵庫県教育委員会

森田　勉・横田賢次郎　1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館

山本信夫　1995 「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会

出土遺物観察表

※口径・底径値（　）：復元値　　器高値（　）：残存高

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)		
									口径	器高	底径
14	12	20	須恵器	椀	C地区	SB01	P220内		(14.4)	(4.4)	−
15	12	16	須恵器	捏鉢	A地区	SK05	1層		−	(2.5)	−
16	12	16	須恵器	椀	A地区	SK05	1層	底部回転糸切り	−	(3.8)	(6.4)
17	12	16	国産陶器	壺	A地区	SK05	1層	丹波	(15.1)	(5.0)	−
18	12	16	瓦	丸瓦	A地区	SK05	1層	筒部下半部	−	−	−
19	12	16	土師器	皿	A地区	SD01	2層	外面指押さえ	(14.4)	3.6	−
20	12	16	土師器	皿	B-1地区	SD01	1層	完形　底部回転ヘラ切り	10.6	1.3	4.0
21	12	16	土師器	皿	B-1地区	SD01	2・3層	底部回転糸切り	(11.3)	2.3	(5.5)
22	12	16	土師器	皿	B-1地区	SD01	1層	底部回転ヘラ切り	(11.8)	2.3	(4.6)
23	12	16	土師器	皿	B-1地区	SD01	2・3層	底部回転ヘラ切り	(10.4)	2.4	(5.4)
24	12	16	土師器	皿	B-3地区	SD01	2層	完形　底部回転ヘラ切り　口縁部規則的な割れ	(11.6)	3.0	(6.8)
25	12	17	土師器	椀	B-1地区	SD01	1層	摩滅　底部回転糸切り？	−	(3.3)	(5.4)
26	12	17	土師器	椀	B-3地区	SD01	1層	内面有機質付着	−	(3.4)	(5.2)
27	12	17	土師器	椀	B-1地区	SD01	1層	底部回転糸切り	−	(2.6)	(6.1)
28	12	17	土師器	椀	B-2地区	SD01	3層		(12.8)	(3.1)	−
29	12	−	土師器	椀	B-4地区	SD01	3層		(12.2)	(4.1)	−
30	12	17	土師器	椀	B-2地区	SD01	3層	底部回転糸切り	(11.8)	4.4	(5.3)
31	12	17	土師器	椀	B-1地区	SD01	1層	底部回転糸切り	(13.4)	5.0	(5.6)
32	12	17	土師器	椀	A地区	SD01	3層	底部回転糸切り	(12.3)	4.4	6.6
33	12	17	土師器	椀	B-1地区	SD01	2層	底部回転糸切り	(12.8)	4.7	(4.8)
34	12	17	土師器	椀	B-1地区	SD01	2層	底部回転糸切り	(12.0)	4.9	(5.4)
35	12	17	土師器	椀	B-1地区	SD01	1層	底部回転糸切り　体部回転ヘラ削り？	11.7	4.5	4.4
36	13	−	土師器	杯	B-1地区	SD01	最下層	足高高台杯	−	(2.7)	(5.7)
37	13	−	土師器	杯	B-1地区	SD01	最下層	足高高台杯	−	(3.2)	7.2
38	13	18	土師器	杯	B-2地区	SD01	1層	足高高台杯	13.8	6.4	6.8
39	13	18	土師器	杯	A地区	SD01	2層	足高高台杯	15.6	6.5	8.0
40	13	19	須恵器	椀	B-2地区	SD01	上層	底部回転糸切り	−	(2.2)	(5.0)
41	13	19	須恵器	椀	A地区	SD01	1層	底部回転ヘラ切り	−	(1.9)	(5.0)
42	13	19	須恵器	椀	B-1地区	SD01	1層	底部回転糸切り	−	(2.9)	5.0
43	13	19	須恵器	椀	A地区	SD01	2層	外面墨書(文字不明)	(12.8)	(4.0)	−
44	13	18	須恵器	椀	B-1地区	SD01	2層	底部回転糸切り	(11.8)	4.2	(5.2)
45	13	19	須恵器	椀	C地区	SD01		底部回転糸切り	−	(1.4)	4.2
46	13	18	須恵器	椀	A地区	SD01	2・3層	底部回転糸切り	(16.5)	4.2	(3.4)
47	13	18	須恵器	椀	A地区	SD01	1層	完形　外面「上」墨書	16.4	4.4	5.7
48	13	18	須恵器	杯	B-3地区	SD01	1層	底部回転糸切り	(14.1)	2.8	(8.4)
49	13	19	瓦	平瓦	B-1地区	SD01	1層		−	−	−
50	13	19	須恵器	椀	B-4地区	SD06	1層	底部回転糸切り	−	(2.5)	(6.0)
51	13	19	須恵器	椀	B-3地区	SD06	1層	底部回転糸切り　内面有機質付着	−	(2.3)	(4.8)
52	13	18	須恵器	壺	B-4地区	SD06	下層	断面を含む内外に墨痕	8.6	(5.6)	−
53	13	19	土師器	椀	B-1地区	SD02	覆土中	底部回転糸切り	−	(3.3)	(5.2)
54	13	19	須恵器	蓋	B-1地区	P04		内面墨痕	−	(1.8)	−
55	13	18	須恵器	蓋	B-2地区	SD04	最下層		(16.4)	(3.5)	−
56	13	19	須恵器	杯身	B-3地区	SD04	最下層	摩滅	(12.8)	(3.3)	−
57	14	20	土師器	皿	A地区	包含層	Ⅲ層	外面指押さえ	(6.4)	1.2	−
58	14	20	土師器	皿	A地区	包含層	Ⅲ層	外面指押さえ	(8.2)	1.2	−
59	14	20	土師器	皿	A地区	包含層	Ⅲ層	外面指押さえ	(8.0)	1.0	−
60	14	20	土師器	堝	A地区	包含層	Ⅲ層	外面叩き　内面当木痕跡	−	7.2	−
61	14	20	土師器	堝	A地区	包含層	Ⅲ層	外面叩き　内面刷毛目	−	(4.7)	−
62	14	20	土師器	堝	A地区	包含層	Ⅲ層	外面叩き	(25.0)	(6.2)	−
63	14	20	土師器	堝	A地区	包含層	Ⅲ層	外面叩き　内面刷毛目	−	(4.1)	−
64	14	20	土師器	堝	A地区	包含層	Ⅲ層	外面叩き　内面刷毛目	−	(4.6)	−
65	14	20	土師器	堝	A地区	包含層	Ⅲ層	外面叩き	−	(3.8)	−
66	14	20	須恵器	小皿	A地区	包含層	Ⅲ層	底部回転糸切り	(7.4)	1.1	(5.6)
67	14	20	須恵器	椀	C地区	SD06	埋土	底部回転糸切り	−	(1.2)	4.6
68	14	20	須恵器	椀	B-3地区	包含層	Ⅲ層	底部回転糸切り	(15.4)	4.1	(5.6)
69	14	20	須恵器	椀	B地区	包含層	Ⅲ層	底部回転糸切り　体部墨痕	(15.2)	5.1	(5.6)
70	14	21	須恵器	捏鉢	A地区	包含層	Ⅲ層	内面斜位ナデ	−	(4.5)	−
71	14	21	須恵器	捏鉢	A地区	包含層	Ⅲ層	内面斜位ナデ	−	(4.0)	−
72	14	21	須恵器	捏鉢	A地区	包含層	Ⅲ層	内面削り様の強いナデ	−	(4.0)	−
73	14	21	須恵器	捏鉢	A地区	包含層	Ⅲ層	内面斜位ナデ	(23.8)	(4.5)	−
74	14	21	須恵器	捏鉢	A地区	包含層	Ⅲ層	内面斜位ナデ	−	(5.5)	−

表５　曽我井・堂ノ元遺跡出土土器観察表（１）

※口径・底径値（　）：復元値　　器高値（　）：残存高

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)		
									口径	器高	底径
75	14	21	須恵器	捏鉢	B-4地区	包含層	Ⅲ層		(25.6)	(9.5)	－
76	14	巻頭5	国産陶器	碗	B-1地区	包含層	Ⅲ層	瀬戸灰釉	－	(4.8)	－
77	14	巻頭5	中国製磁器	碗	D地区	包含層	Ⅲ層	白磁　内面花文	－	(1.6)	(5.0)
78	14	巻頭5	中国製磁器	碗	B-1地区	包含層	Ⅲ層	白磁　内面蛇ノ目釉剥ぎ	－	(2.5)	(6.2)
79	14	巻頭5 20	中国製磁器	合子蓋	D地区	包含層	Ⅲ層	青白磁　外面陽刻　内面口縁部無釉	(6.8)	2.1	－
80	14	巻頭5	中国製磁器	Ⅲ	A地区	包含層	Ⅲ層	青白磁(景徳鎮窯系)内面櫛刷毛目文 外底部回転ヘラ削り	－	(1.3)	(4.0)
81	14	巻頭5	中国製磁器	Ⅲ	B-3地区	包含層	Ⅲ層	白磁　外面底部露胎　内面花文	(5.1)	2.3	(3.8)
82	14	巻頭5	中国製磁器	碗	A地区	包含層	Ⅲ層	青磁　内面花文　胎土暗褐色	－	(3.0)	－
83	14	巻頭5	中国製磁器	碗	B-3地区	包含層	Ⅲ層	青磁　内外面厚く施釉(大きな貫入) 高台端部赤化	－	(2.8)	(4.2)
84	14	巻頭5	中国製磁器	碗	A地区	包含層	Ⅲ層	青磁(龍泉窯)外面連弁文　高台内無釉	－	(3.1)	(4.0)
85	14	巻頭5	中国製磁器	碗	A地区	包含層	Ⅲ層	青磁(龍泉窯)　面子　見込み部花文 内「金玉満堂」高台内無釉	－	(1.7)	5.6
86	14	巻頭5	中国製磁器	碗	D地区	包含層	Ⅲ層	青花　内面回線・花文　高台内不明文	－	(2.9)	(5.0)
87	－	巻頭5	中国製磁器	碗	B-2地区	包含層	Ⅲ層	白磁	－	－	－
88	－	巻頭5	中国製磁器	碗	A地区	包含層	Ⅲ層	白磁	－	－	－
89	－	巻頭5	中国製磁器	碗	B-3地区	包含層	Ⅲ層	同安窯系青磁　櫛描文	－	－	－
90	－	巻頭5	中国製磁器	碗	B-3地区	包含層	Ⅲ層	龍泉窯系青磁　細連弁文	－	－	－
91	－	巻頭5	中国製磁器	碗	D地区	包含層	Ⅲ層	龍泉窯系青磁　連弁文?	－	－	－

表６　曽我井・堂ノ元遺跡出土土器観察表（２）

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)		
									長さ	径	孔径
92	15	21	土製品	土錘	B-3地区	包含層	Ⅲ層	表面剥落	3.9	1.0	0.25
93	15	21	土製品	土錘	B-1地区	包含層	Ⅲ層		4.6	1.1	0.2
94	15	21	土製品	土錘	A地区	包含層	Ⅲ層		5.5	1.5	0.25
報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)		
									高さ	底径	孔径
95	15	21	土製品	不明	A地区	SD01	２層	回転糸切り	(1.8)	5.2	1.8
報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)		
									長さ	口径	厚さ
96	15	21	土製品	羽口	B-3地区	包含層	Ⅲ層	胎土植物繊維　外面ガラス化	(3.7)	－	0.9

表７　曽我井・堂ノ元遺跡出土土製品観察表

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量 (mm)			
									長さ	幅	厚さ	重量(g)
S１	15	22	石製品	斧	B-2地区	包含層	Ⅲ層	太型蛤刃石斧	132.1	53.2	40.7	497.7
S２	15	22	石製品	硯	B-1地区	包含層	Ⅲ層	墨堂「サ□シコ」線書き 墨堂・硯背墨付着	(81.0)	76.0	19.0	163.1

表８　曽我井・堂ノ元遺跡出土石製品観察表

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量 (cm)			
									長さ	幅	厚さ	重量(g)
M２	15	22	鉄製品	楔？	B-3地区	包含層	Ⅲ層		3.07	1.35	0.35	4.6
M３	15	22	鉄製品	鑿？	B-2地区	包含層	Ⅲ層	刃部先端を欠く	(14.2)	0.91	0.76	18.8
M４	15	22	鉄製品	釘	A地区	包含層	Ⅲ層	先端を欠く	(3.5)	0.46	0.47	1.8
M５	15	22	鉄製品	釘	A地区	包含層	Ⅲ層	先端を欠く	(6.23)	0.73	0.65	8.8
M６	15	15	鉄製品	椀形鉄滓	B-2地区	包含層	Ⅲ層	３方向切断	(2.6)	(2.58)	1.8	16.1

表９　曽我井・堂ノ元遺跡出土金属製品観察表

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)		
									長さ	幅	厚さ
W 1	15	23	木製品	柱材	B-6地区	P05	柱穴内		(79.0)	17.3	12.5
W 2	15	23	木製品	付木	A地区	SD01	2層	焼痕あり	(9.5)	0.84	0.4
W 3	−	23	木製品	板状	A地区	SD01	2層		(30.7)	(2.7)	(2.2)
W 4	−	23	木製品	付木	A地区	SD01	2層	焼痕あり	29.0	1.8	2.2
W 5	−	23	木製品	付木	A地区	SD01	2層	焼痕あり	15.7	1.5	1.0
W 6	−	23	木製品	付木	A地区	SD01	2層	焼痕あり	12.9	2.5	1.0
W 7	−	23	木製品	板状	A地区	SD01	2層		(11.7)	(2.2)	0.8
W 8	−	23	木製品	付木	A地区	SD01	2層	焼痕あり	9.3	2.2	1.3
W 9	−	23	木製品	板状	A地区	SD01	2層		(10.7)	(1.2)	0.5
W10	−	23	木製品	板状	A地区	SD01	2層		(9.5)	(0.7)	0.5

表10　曽我井・堂ノ元遺跡出土木製品観察表

第Ⅴ章　曽我井・野入遺跡の調査

第１節　調査の概要

確認調査を平成17年度に行い、本発掘調査を平成18年度に実施した。

調査対象区は、多可町中央部を流れる杉原川右岸域に発達した扇状地上に立地している。調査区は２箇所あり、北側をＡ地区(291㎡)、南側をＢ地区(568㎡)とした。遺構はＢ地区から集中して検出された。調査区に埋没谷が存在するＡ地区ではわずかな柱穴や溝、土坑を検出するにとどまった。

第２節　Ａ地区の調査

１　概　要

Ａ地区の調査区南側１／３程度は、Ｂ地区から続く基盤層が存在し、明黄褐色を呈する基盤層上に遺構が営まれている。調査区北側２／３はクロボクを大量に含む黒色土層が存在する。確認調査の結果から、黒色土層は埋没谷の堆積土であると考えられる。この堆積土の上部は土壌化しており、弥生時代終末から中世の遺物が含まれる。検出した遺構は丘陵裾部にあたる基盤層上では柱穴、土壌化した黒色土では溝および少数の柱穴、土坑を検出した。

２　層　序

東壁、南壁ともに１層盛土・耕作土および２層耕作土の下に地山風化礫の混じる３層が存在する。３層の下に遺構面を成す土壌層がある。３層はＡ地区全体に堆積しており、Ｂ地区が位置する南側丘陵より流れ込んだものと考えられる。３層の堆積状況から、Ａ地区は北東方向へ緩やかに下がる地形をしていることが分かる。このことは東壁５層、南壁５層、15層の地山土の検出状況からも確認できる。

３　遺　構

柱穴、溝を検出している。柱穴は、丘陵裾部で集中して検出している。

(１)柱穴群

注穴を50個以上検出したが、建物を復元することはできなかった。注穴から出土した遺物はごくわずかであるが、13世紀代を中心とする遺物が出土している。

P1001(図版16)

検出状況　調査区南部で検出した。

形状・規模　直径25cm、深さ10cmの円形を呈する。

出土遺物　須恵器杯(12)が出土している。

(２)土　坑

土坑２基を検出した。

SK1001(図版16・18　写真図版26)

検出状況　調査区南端で検出した。SD1001の北側に位置する。

形状・規模　不整な楕円形を呈する。規模は長径1.2m、短径1.1m、検出した面からの深さは最大10cmを測る。断面は浅い皿状を呈する。

埋　土　マンガンを含む粗砂混じりの粘質シルトが堆積している。

出土遺物　出土遺物はない。

SK1002（図版16・18　写真図版26）

検出状況　調査区北東部分で検出した。

形状・規模　楕円形を呈する。規模は長径90cm、短径80cm、検出した面からの深さは最大26cmを測る。土坑底は丸く、断面は半円に近い形状を呈する。土坑内から多くの土器が出土しており、完形に復元できる個体もある。土坑底部から上部まで土器が散在しているため、廃棄土坑であったと考えられる。

埋　土　灰褐色極細砂が堆積している。

出土遺物　土師器杯（1・2・3・4・6・9・10）、土師器椀（5・7・11）、土師器鍋（8）が出土している。

（3）溝

溝12条を検出した。SD05～11は近代以降の溝および撹乱などであり、報告から除外している。

SD1001（図版16　写真図版25）

検出状況　調査区南端で検出した。

形状・規模　規模は長さ1.5m、幅0.2m、検出した面からの深さは最大20cmで、浅い皿状の断面形状を呈する。南部は調査区外へ延び、全体の形状は不明である。

埋　土　暗褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

SD1002（図版16　写真図版25）

検出状況　調査区南部で検出した。SD1001の北側に位置する。

形状・規模　規模は長さ5m、幅0.5m、検出した面からの深さは最大13cmで、浅い皿状の断面形状を呈する。ほぼ東西方向に直線的に走る。

埋　土　黄褐色粗砂混じり黒色シルトが堆積している。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

SD1003（図版16）

検出状況　調査区南東部で検出した。SD1004の南側に位置する。

形状・規模　規模は長さ3m、幅0.35m、検出した面からの深さは最大20cmで、浅い皿状の断面形状を呈する。北側に向かって溝の幅、深さが無くなり、SD1004の手前で途切れる。

埋　土　暗赤褐色シルト質極細砂が堆積している。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

SD1004（図版16　写真図版25）

検出状況　調査区南端で検出した。SD1003の北側に位置する。

形状・規模　規模は長さ10m、幅0.78m、検出した面からの深さは最大35cmで、浅いV字状の断面形状を呈する。北西から南東へ走り、調査区外へ延びる。検出した範囲の中央付近は幅が膨らむ。堆積土から流路であったと考えられる。

埋　土　暗褐色極細砂の下に、黒褐色極細砂～中砂が堆積し、溝底部に灰黄褐色シルト質極細砂が堆積する。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

SD1012（図版16　写真図版26）

検出状況　調査区北部で検出した。

形状・規模　規模は長さ９ｍ、幅0.5m、検出した面からの深さは最大20cmで、浅いU字状の断面形状を呈する。南西から北東方向へ直線的に走り、調査区を横断する。溝の両端はいずれも調査区外へと延びている。

埋　土　黒褐色シルト質極細砂が堆積している。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

４　遺　物

A地区の調査では、弥生時代後期後半から近世にかけての、土器、土師器、須恵器、丹波焼、施釉陶器、中国製磁器をはじめ、鉄製釘が出土している。多くが包含層からの出土であるが、土坑SK1002、柱穴P1001、溝SD1008からの遺物出土例もある。とくにSK1002では良好な一括遺物が出土している。

以下、A地区の遺物について概観する。

（１）遺構出土遺物

SK1002（図版24　写真図版34・35）

土師器の皿（１・２）・椀（３～５）・杯（７）・羽釜（８）、須恵器椀（６・９～11）が投棄された状況で出土し、土器の遺存状況も良好な一括資料である。土師器皿１・２は薄手の作りで、外面に明瞭な轆轤目を残し、底部の切り離しに回転ヘラ切りを用いている。土師器椀３～５はいずれも平高台で底部の切り離しに回転糸切りを用いた椀である。内外面に明瞭な轆轤目を残し、内面底部と体部の境に明瞭な段差をもつ。土師器杯は、いわゆる足高高台の杯である。高台内は丁寧なヨコナデ調整を行っている。土師器羽釜８は、色調が茶褐色を呈し、胎土に砕いた長石粒を含む。外面胴部には縦方向のハケ目が施され、鍔下の胴部の境に沿って明瞭な指押さえ痕が残る。

須恵器椀６・９～11は底部の切り離しに回転糸切りを用いた平高台の椀である。口縁端部は短く外反し、外面に密な轆轤目を残す。

SK1002の時期については、須恵器椀が指標となる。須恵器の平高台椀を生産する京都府亀岡市篠窯跡群の事例（椀B）、および県内三田市相野窯跡群の事例を参考にすると、10世紀前半を中心とした時期に比定できる。

P1001（図版24　写真図版35）

須恵器椀（12）が出土している。底部の切り離しは回転糸切りと考えられるが、明確な痕跡を見出せない。最終的にはヘラを刺し込み切り離している。14世紀前半と考えられる。

SD1008（図版14　写真図版35）

杯A（13）が出土している。８世紀代におさまるものと考えられる。

（２）包含層出土遺物

弥生土器、庄内土器、土師器、須恵器、丹波焼、中国製磁器等、弥生後期～近世の土器が出土している。

弥生土器他（図版24　写真図版35）

有孔鉢（14）と壷（15）が出土している。14は鉢底部は平底で、中央より離れた場所に５×３㎜の楕円形

の孔を穿つ。内外面ともにハケ目調整である。庄内期のものである。15は壷の底部破片である。外面タタキ目、内面ハケ目を施す。弥生時代後期後半のものである。

土師器（図版24・25　写真図版35・37）

皿（16・17）、羽釜（18・19）、堝（20）がある。

皿は手づくね成形で、外面体部に明瞭な指押さえ痕を残す。16は外面全面に指押さえ調整を施す平底の皿である。17は、口縁端部に面取りを施した平底の皿である。外面口縁部は強いヨコナデを施し、体部と口縁部を明確にしている。外面体部に指押さえの痕跡が顕著で、また内面底部との境には指押さえが明瞭に残る。17は口縁端部に面取りを施す京都系土師器皿の範疇と理解でき、12世紀前半頃と考えられる。

羽釜は、鍔広の18と退化した鍔をもつ19がある。18は端部を四角につくる羽釜で内外面にヨコナデを施す。19は口縁が内傾し、胴部外面に斜位のタタキを施す播磨型の羽釜である。20は外面にタタキ、内面底部付近にハケ目調整を施した堝で、口縁部は肥厚する。神戸市兵庫津遺跡の事例では15世紀前半に比定されている羽釜・堝と近似する。

須恵器（図版25　写真図版35～37）

壷（21）、杯G蓋（22）・身（23・24）、杯B（25）の飛鳥から奈良時代の一群と、中世の皿（26・27）、椀（28・29）、捏鉢（30）が出土している。

21は外面に波状文を施す壷の口縁部破片と考える。22は杯Gの蓋である。内面の返しは短く新しい要素をもつ。23・24は杯身として報告したが、蓋の可能性も考えられる一群である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

26・27は底部回転糸切りの皿である。口縁部が内彎する26と直線的に外傾する27がある。

これらの須恵器群のうち、21～25の須恵器の時期については、壷21・杯蓋22は７世紀後半代、23の杯身は７世紀後半～８世紀初頭、24は７世紀中頃、25は８世紀代にそれぞれ比定できる。

26は口縁部が内彎して立ち上がる皿である。27は色調が白色を呈し、口縁部が直線的に立ち上がる。

いずれも回転糸切り底の皿である。

28はわずかに突出する平高台をもつ杯である。底部の切り離しは回転糸切りと考えられるが、ナデ調整を丁寧に施しているため断定はできない。29は器高が低い杯タイプの椀で、底部は回転糸切り後ナデ調整を施している。東播系須恵器の範疇で、14世紀前半におさまると考えられる。

30は東播系須恵器捏鉢である。口縁端部が上下に拡張するタイプで14世紀後半に比定できる。

丹波焼（図版25　写真図版36）

丹波焼は擂鉢（31～33）がある。31・32はヘラによる１回１条描きの擂目をもつ。31は端部を丸くおさめ、内外面にヨコナデないしは横位ナデを施す。摩滅している。

兵庫県三田市中尾城跡の出土事例に16世紀前半～中頃比定された擂鉢のなかに近似したものがあり、31も同様の時期を考えておきたい。32は胎土、色調から31と同一固体の可能性をもつ。外面は指押さえの後、横位ナデを施す。

33は７本／１単位のクシ描きの擂目をもつ。外面は指押さえが顕著に残り、口縁部の断面が三角形を呈する特徴をもつ江戸時代の擂鉢である。近世丹波焼の編年に従うと、17世紀中葉に比定される。

施釉陶器（図版25　写真図版37）

緑釉皿（34）が出土している。19世紀代の所産と考えられる。

中国製磁器（図版25　写真図版37）

型作りの青白磁合子（35）である。11世紀後半から12世紀のものと考えられる。

金属器（図版28　写真図版41）

頭巻きの釘（Ｍ１・Ｍ２）が出土している。

参考文献

長谷川　眞　2006「壷類にみる中世丹波焼」『兵庫陶芸美術館研究紀要』第２号　兵庫陶芸美術館

岡崎正雄　1992「相野窯跡の須恵器について」『相野古窯跡群』兵庫県文化財調査報告　第115冊　兵庫県教育委員会

兵庫県教育委員会　1987『小犬丸遺跡』兵庫県文化財調査報告　第47冊　兵庫県教育委員会

兵庫県教育委員会　2008『サルガク遺跡・沢構』兵庫県文化財調査報告　第343冊　兵庫県教育委員会

山田　清朝　2010「遺物」『大野遺跡』兵庫県文化財調査報告　第380冊　兵庫県教育委員会

八峠　興　1998「山陰における中世土器の変遷について－供膳具・煮炊具を中心として」『中世土器の基礎研究』ＸⅢ　日本中世土器研究会

八峠　興　2000「山陰における土器・陶磁器について」『中世土器の基礎研究』ＸＶ　日本中世土器研究会

森内秀造他　2011『神出窯跡群Ⅲ－神出鴨谷１号窯～３号窯・神出梟谷１号窯－』兵庫県文化財調査報告　第407冊　兵庫県教育委員会

森田　稔　1995「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

長谷川　眞　2004「土製煮炊具（中近世の遺物・土器陶磁器）」『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告　第270冊　兵庫県教育委員会

森田　勉・横田賢次郎　1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館

山本信夫　1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

岡崎正雄他　1989『中尾城跡』兵庫県文化財調査報告書　第67冊　兵庫県教育委員会

大平　茂　1992『下相野窯址』兵庫県文化財調査報告　第107冊　兵庫県教育委員会

第３節　B地区の調査

１　概　要

B地区は調査区南から広がる扇頂部付近に位置する。明黄褐色を呈する基盤層は東側と北側に向かって緩やかに下がる。調査区の西半は水田造成により削平を受けている。検出した遺構は、柱穴、溝、土坑がある。特に柱穴は調査区の北東部分を中心に400基以上検出した。柱穴から復元できた掘立柱建物は３棟である。

２　層　序

東壁、南壁ともに１層現代耕作土の下に旧耕作土の２層が堆積する。その下に時期不明の整地面８層が存在する。４層、９層は土器片の混じる土壌層となり、その下に地山５層が存在する。調査区の西半分および南半分は削平により、１層直下に地山が検出された。

３　遺　構

掘立柱建物３棟、土坑８基、溝６条、柱穴400個以上を検出した。遺構は調査区北半部で集中して検出している

（１）掘立柱建物群・柱穴群

掘立柱建物は３棟復元できた。これ以外に400個以上の柱穴を検出している。掘立柱建物のうち、総柱建物は２棟（SB01、SB03）、側柱建物は１棟（SB02）である。

SB01（図版19・20）

検出状況　調査区北東部、SD02の東側で検出した。SB02と重複するが前後関係は不明である。

形状・規模　棟軸方位をN13°30′Wにとる総柱建物である。南北３間（8.2m）・東西２間以上（４m以上）の規模である。柱間は、南北2.4m～3m・東西1.8m～2.4mである。

柱　穴　円形を基本とし掘方径30cm～40cm、検出した深さは約16cm～２cmである。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

SB02（図版19・20）

検出状況　調査区北東部、SD02の東側で検出した。SB01と重複するが前後関係は不明である。検出した範囲では側柱建物であるが、調査区外へ建物が続き、総柱建物であった可能性もある。

形状・規模　軸方位をN12°30′Wにとる建物である。南北３間（5.6m）・東西１間以上（2.8m以上）の規模である。柱間は、南北1.8m～2m・東西2.6m～2.8mである。

柱　穴　円形を基本とし掘方径20cm～44cm、検出した深さは約12cm～44cmである。

出土遺物　丹波焼擂鉢（37）、土師器堝（36）が出土している。

SB03（図版19・20）

検出状況　調査区北西部、SD02の西側で検出した。

形状・規模　棟軸方位をN15°Wにとる総柱建物である。桁行３間（8.2m）・梁行２間（4.1m）の規模である。柱間は、南北2m・東西2.4mである。

柱　穴　円形を基本とし掘方径36cm～64cm、検出した深さは約38cm～60cmである。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

P142（図版19　写真図版33）

検出状況　調査区北西部、SB01に重なって検出した。

形状・規模　直径50cm、深さ18cmの円形を呈する。

出土遺物　須恵器小皿（46）、須恵器椀（47）が出土している。

P144（図版19）

検出状況　調査区北西部、SB02に重なって検出した。

形状・規模　直径25cm、深さ35cmの円形を呈する。

出土遺物　陶磁器碗底部（48）が出土している。

P149（図版19）

検出状況　調査区北西部、SB02に重なって検出した。

形状・規模　直径35cm、深さ29cmの円形を呈する。

出土遺物　青磁碗（49）が出土している。

P170（図版19）

検出状況　調査区西部、SD07の東側で検出した。

形状・規模　直径35cm、深さ39cmの円形を呈する。

出土遺物　須恵器杯蓋のつまみ（50）が出土している。

（2）土　坑

土坑は８基を検出した。

SK01（図版19・21）

検出状況　調査区北部中央で検出した。SB03と重なる。

形状・規模　不整な円形を呈する。規模は直径約1.0m、検出した面からの深さは最大で20cmを測る。断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物　土師器小皿（39）が出土している。

SK02（図版19・21　写真図版29）

検出状況　調査区東部で検出した。SB01・SB02と重なる。

形状・規模　北側の幅がやや広い隅丸の長方形を呈し、規模は長軸1.66m、短軸0.65m、検出した面からの深さは最大で５cmを測る。断面は極めて浅い皿状を呈する。

埋　土　焼土及び黄褐色ブロックを含む灰黄褐色極細砂が堆積している。

出土遺物　土師器小皿（40・41）、堝（42）が出土している。

SK04（図版19・21　写真図版29・30）

検出状況　調査区西部で検出した。SB03の西側に位置する。

形状・規模　隅丸の長方形を呈する。規模は長軸1.32m、短軸0.65m、検出した面からの深さは最大で９cmを測る。断面は浅い皿状を呈する。内部北側を中心に石が置かれている。

埋　土　明黄褐色シルトブロック混じりのにぶい黄褐色細砂が堆積している。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

SK05（図版19・20　写真図版30）

検出状況　調査区南部で検出した。SD11の北側に位置する。

形状・規模　円形を呈する。規模は直径183cm、検出した面からの深さは最大で19cmを測る。断面は浅

い皿状を呈する。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

SK06（図版19・22　写真図版30）

検出状況　調査区南部で検出した。SD12の西側に位置する。

形状・規模　隅丸の長方形を呈する。規模は長軸1.46m、短径1.1m、検出した面からの深さは最大で20cmを測る。断面は皿状を呈する。

埋　土　粘質シルトブロックの混じる粗砂～細砂が堆積している。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

SK07（図版19・22　写真図版31）

検出状況　調査区南端で検出した。SK06の西側に位置する。

形状・規模　不整な楕円形を呈する。規模は長径２m、短径0.65m、検出した面からの深さは最大で10cmを測る。断面は浅い皿状を呈する。

埋　土　シルト～細砂が堆積している。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

SK08（図版19・22　写真図版31）

検出状況　調査区南端で検出した。SD11の北側に位置する。

形状・規模　不整な楕円形を呈する。規模は長径1.06m、短径0.8m、検出した面からの深さは最大で８cmを測る。土坑南部は削平されている。断面は浅い皿状を呈する。

埋　土　地山ブロック粘質シルトを少量含む細砂～粗砂が堆積している。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

（３）溝

溝は６条検出した。

SD01（図版19・23　写真図版31）

検出状況　調査区北部中央で検出した。SB03の北側に位置する。

形状・規模　規模は2.9m、最大幅0.72m、検出した面からの深さは最大で14cm、断面は台形状を呈する。溝西部において幅が50～70cm前後、溝東部では幅20～30cm前後である。

埋　土　灰黄褐色極細砂が堆積している。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

SD02（図版19・23）

検出状況　調査区北部中央で検出した。SB01の西側に位置する。

形状・規模　規模は長さ８m、幅0.62m、検出した面からの深さは最大で10cm、断面は浅い皿状を呈する。この溝を境にして東西に柱穴が分布しているため、SB01雨落溝であったと考えられる。

埋　土　灰黄褐色細砂～極細砂が堆積している。

出土遺物　土師器小皿(45)が出土している。

SD05（図版19・23）

検出状況　調査区中央で検出した。SD02の南側、SB01の西側に位置する。

形状・規模　規模は長さ５m、幅0.4m、検出した面からの深さは最大で11cm、断面は半円状を呈する。SD02と一部平行に並ぶ。

埋　土　にぶい褐色細砂～極細砂が堆積している。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

SD07（図版19・23　写真図版32）

検出状況　調査区西部壁際で検出した。SB03の西側に位置する。

形状・規模　規模は長さ１m、幅0.4m、検出した面からの深さは最大で24㎝、断面は台形を呈する。

埋　土　にぶい黄褐色シルト質細砂の下に、灰黄褐色シルト質細砂が堆積している。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

SD11（図版19・23　写真図版32）

検出状況　調査区南部で検出した。SK08の南側に位置する。

形状・規模　規模は長さ12.7m、幅1.25m、検出した面からの深さは最大で23㎝、断面は浅い皿状を呈する。

調査区南部を東西に走り、東側では溝の一部が南側へ直角に折れ曲がり、調査区外へ至る。また、中央部では溝を切る深い掘り込みを調査区壁との間に検出している。

埋　土　黒褐色粗砂混じりシルトの下に暗褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

SD12（図版19・23　写真図版32）

検出状況　調査区南部中央で検出した。SK06の西側に位置する。

形状・規模　規模は長さ２m、幅0.35m、検出した面からの深さは最大で８㎝、断面は椀状を呈する。

埋　土　灰黄褐色・黒褐色シルト～細砂が堆積している。

出土遺物　図化できる遺物は出土していない。

4　遺　物

B地区の調査では、中世段階の土師器皿・堝・羽釜・擂鉢をはじめ、須恵器椀・捏鉢・甕、中国製青磁碗などの土器が出土している。その多くは掘立柱建物の柱穴内より出土している。これら以外に、縄文時代と思われるチャート製の石鏃と剥片や、鉄釘が包含層より出土している。変わったところでは、鍛冶関連遺物である椀形鉄滓が柱穴内より出土している。

（１）遺構出土遺物

SB02（図版26　写真図版38）

建物を構成する柱穴P133より土師器堝(36)、P151より土師器擂鉢(37)、P299内より水晶製の玉(38)がそれぞれ出土している。

土師器堝36は、外面にタタキ目、内面にハケ目が施される丹波・播磨地域通有の甕形タイプの堝である。口縁部は外反して立ち上がり、端部を四角に納めている。神戸市兵庫津遺跡の事例では、このタイプの堝は、甕形タイプⅣ類に分類され、15世紀前半～中頃に比定されている。

37は片口をもつ土師器擂鉢である。外面口縁部には二段の強いナデを施し、その間に断面三角形の小さな凸帯をもつ。外面はナデ調整で、内面にハケ目調整を施した後、１回１条描きの擂目が施される。38は水晶製の玉である。玉の下部は平坦に削られ、中央に径２㎜、深さ４㎜の孔が穿たれている。穿孔部の先端は尖っている。玉の用途は不明であるが、穿孔部は玉を固定する機能が考えられ、器物の装飾品と考えられる。

SK01（図版26　写真図版38）

手づくねの土師器皿(39)が出土している。内外面ともに摩滅が著しく調整は明らかではないが、内外面に指押さえの窪みが顕著に残る。

SK02（図版26　写真図版38）

手づくねの土師器皿(40・41)と堝(42)が出土している。40は内彎して立ち上がる口縁部をもつ丸底の皿である。外面が指押さえ調整、内面はナデ調整を施す。41は平底気味の底部から内彎して口縁部が立ち上がる。端部は垂直に摘み上げられ、端部外面に面をもつ。摩滅が著しく調整は不明である。

甕形タイプの土師器堝42はわずかに外傾する口縁部をもち、端部が玉縁状に肥厚する。外面胴部がタタキ調整、内面には、青海波の当具痕が残る。淡褐色の色調である。神戸市兵庫津遺跡の事例では14世紀後半代に出現するタイプと類似する。

SK05（図版26　写真図版38）

土師器羽釜(43)と須恵器捏鉢(44)が出土している。43は口縁端部が大きく外方に拡張し、断面が三角形を呈する羽釜である。外面胴部はタタキ目をナデ調整で消し、内面はハケ目様のナデを施す。色調は橙色で、硬質の仕上がりである。44の須恵器捏鉢は、外面口縁部が黒化する重ね焼きの痕跡を残す。外面には轆轤目を顕著に残す。口縁端部の断面形は三角形を呈し、14世紀前半代の特徴をもつ。

SD02（図版26　写真図版39）

手づくねの土師器皿(45)が出土している。摩滅が著しく調整は不明であるが、内外面に顕著な指押さえ痕を残す。色調は橙色を呈する。

P6（図版28・29　写真図版41）

鉄釘と椀形鉄滓が出土している。釘は使用により先端が曲がった鉄釘（Ｍ９）である。椀形鉄滓（M14）は右側縁部に切断痕が認められる。表面は比較的平滑で、部分的に瘤化している。

P255（図版28　写真図版41）

未使用の頭巻きの鉄製釘（Ｍ８）が柱穴内より出土している。

P142（図版26　写真図版39）

須恵器の皿(46)と椀(47)が出土している。46は底部回転糸切りで、口縁部は内彎して立ち上がる皿である。残存率は全体の１/５程度の細片である。47は口径に対して底径が小さい平底の椀で、内面の底部と体部の境にわずかな段差をもつ。

全体の１/６を欠損するのみで、遺存状況は良好である。東播系須恵器編年に従えば、12世紀前半の特徴をもつ。

P144（図版26　写真図版39）

青磁碗(48)は龍泉窯系の高台部の破片である。釉は高台端部まで及ぶが、高台内は無釉である。

P149（図版26　写真図版38）

49は外面に鎬蓮弁文を施す龍泉窯系の青磁碗である。13世紀初頭～前半の特徴をもつ。

P170（図版26　写真図版39）

50は須恵器杯蓋のつまみである。

P203（図版27　写真図版39）

51は土師器の羽釜である。退化した鍔をもち、外面にタタキ目、内面にハケ目調整が施されている。神戸市兵庫津遺跡では15世紀中頃を中心とした時期に出現している。

P250（図版27　写真図版39）

52は須恵器捏鉢の口縁部破片である。外面口縁部は黒化し、重ね焼きの痕跡を残す。東播系須恵器の編年に従えば、12世紀末から13世紀初頭の特徴をもつ。

P267（図版27　写真図版39）

53は土師器小皿である。全体に磨耗しており調整が不明瞭ではあるが、外面体部に指押さえ、口縁部はヨコナデ調整の痕跡を残す。

P290（図版27　写真図版39）

54は土師器小皿である。丸底の底部からは内彎して立ち上がり、口縁部は摘み上げている。全体に薄く作られている。

P420（図版27　写真図版39）

55は底部回転糸切りの須恵器椀である。東播系須恵器の編年に従えば、12世紀末から13世紀初頭に比定される。

（２）包含層出土の遺物

遺構精査面および包含層中より、須恵器椀・甕をはじめチャート製の剥片・鏃等の石器、鉄釘・刀子・椀形鉄滓等の金属製品が出土している。

須恵器（図版27　写真図版39）

56・57は須恵器椀である。いずれも底部の切り離しが回転糸切りで、胎土も精良である。内面の底部と体部の境にわずかな段差が認められる。東播系須恵器の編年に従えば、12世紀後半に比定される。

58は甕である。外面のタタキは頸部まで及び、口縁端部は上下方向にわずかに拡張する。東播系須恵器の範疇と理解でき、12世紀前半の時期と理解できる。

石製品（図版27　写真図版40）

Ｓ１・２はチャート製の石器である。Ｓ１は剥片、Ｓ２は鏃である。時期的には縄文時代を視野にいれておきたい。

金属器（図版28・29　写真図版40・41）

鉄製鏃（Ｍ３）、鉄製刀子（Ｍ４・Ｍ５）、鉄釘（Ｍ６・Ｍ７・M10～M13）が出土している。このうち刀子Ｍ４・Ｍ５は同一個体の可能性が考えられるものである。

参考文献

山田　清朝　2010 「遺物」『大野遺跡』兵庫県文化財調査報告　第380冊　兵庫県教育委員会

森田　稔　1995 「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

長谷川　眞　2004 「土製煮炊具（中近世の遺物・土器陶磁器）」『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告　第270冊　兵庫県教育委員会

森田　勉・横田賢次郎　1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館

池田征弘　1998 「遺物に関するまとめ」『神出窯跡群』兵庫県文化財調査報告　第171冊　兵庫県教育委員会

西田辰博　1991 『西谷遺跡発掘調査概要報告』西紀、丹南町文化財調査報告　第９集　西紀、丹南町教育委員会

出土遺物観察表

A地区

※口径・底径値（　）：復元値　器高値（　）：残存高

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)		
									口径	器高	底径
1	24	34	土師器	皿	A	SK1002	埋土	底部回転ヘラ切り	(10.85)	2.5	6.85
2	24	34	土師器	皿	A	SK1002	埋土	底部回転ヘラ切り	(11.2)	2.85	5.6
3	24	34	土師器	碗	A	SK1002	埋土	底部回転糸切り	(12.6)	4.7	(6.4)
4	24	34	土師器	椀	A	SK1002	埋土	底部回転糸切り	11.2	4.15	5.65
5	24	34	土師器	椀	A	SK1002	埋土	底部回転糸切り	−	(4.05)	6.3
6	24	34	須恵器	椀	A	SK1002	埋土	底部回転糸切り	−	2.1	(5.0)
7	24	34	土師器	杯	A	SK1002	埋土	貼り付け高台 足高高台杯	−	3.05	7.45
8	24	34	土師器	羽釜	A	SK1002	埋土	口縁部ヨコナデ 外面ハケ目 鍔下部指押さえ 外面下半部煤付着 胎土に長石粒含有	(25.3)	10.2	−
9	24	35	須恵器	椀	A	SK1002	埋土	底部回転糸切り 外面蜜な轆轤目	13.35	5.45	6.0
10	24	34	須恵器	椀	A	SK1002	埋土	底部回転糸切り 外面蜜な轆轤目	(13.8)	(4.15)	−
11	24	35	須恵器	椀	A	SK1002	埋土	底部回転糸切り 外面蜜な轆轤目	(12.6)	4.55	(5.8)
12	24	35	須恵器	椀	A	P1001	埋土	底部ヘラ起こし	(15.6)	3.4	(6.9)
13	24	35	須恵器	杯	A	SD1008	埋土	杯A 底部切り離し不明	(11.4)	3.2	(7.85)
14	24	35	弥生	有孔鉢(底部)	A		包含層	内外面ハケ目	−	(5.4)	2.65
15	24	35	弥生	壷(底部)	A		包含層	外面タタキ目 内面ハケ目	−	(4.2)	(6.3)
16	24	35	土師器	皿	A		包含層	手づくね成形 外面全面に指押さえ	9.9	2.25	6.5
17	24	35	土師器	皿	A		包含層	手づくね成形 外面口縁部ヨコナデ、 体部指押さえ	14.0	3.18	9.9
18	24	37	土師器	羽釜	A		包含層(クロボク)		−	5.8	−
19	24	37	土師器	羽釜	A		包含層	外面タタキ目	(24.0)	(4.9)	−
20	25	35	土師器	堝	A		包含層	外面タタキ目 内面ハケ目	(37.6)	9.25	(22.5)
21	25	35	須恵器	壷	A		包含層	外面波状文	−	3.75	−
22	25	37	須恵器	杯蓋	A		包含層	杯G	(12.7)	(2.15)	−
23	25	37	須恵器	杯身？	A		包含層	杯G 底部回転ヘラ削り	(10.7)	3.5	(5.45)
24	25	36	須恵器	杯身？	A		包含層	杯G 底部回転ヘラ削り	(9.6)	3.0	7.05
25	25	37	須恵器	杯	A		包含層	杯B	−	(1.4)	(7.6)
26	25	36	須恵器	小皿	A		包含層(クロボク)	底部回転糸切り	8.55	1.6	5.5
27	25	36	須恵器	小皿	A		包含層(クロボク)	底部回転糸切り 色調白色	7.7	1.5	5.1
28	25	37	須恵器	杯	A		包含層	底部ナデ (切り離し不明) 色調白色	(12.75)	3.1	(6.2)
29	25	37	須恵器	椀	A		包含層	底部回転糸切り後ナデ	(13.7)	3.2	5.0
30	25	37	須恵器	捏鉢	A		包含層	口縁部黒化(重焼き)	(33.0)	(5.2)	−
31	25	36	丹波焼	擂鉢	A		包含層(クロボク)	擂目1回１条描き	(33.7)	(4.65)	−
32	25	36	丹波焼	擂鉢	A		包含層	擂目1回２条描き	−	(6.6)	(11.8)
33	25	36	丹波焼	擂鉢	A		包含層	擂目櫛描き (7本/１単位) 内面陶片目跡	(36.75)	15.1	(14.1)
34	25	37	施釉陶器	皿	A		包含層	緑釉　江戸末期か	−	(2.0)	(8.15)
35	25	37	中国製磁器	合子	A		包含層(クロボク)	青白磁　景徳鎮窯製	(4.65)	1.95	(4.35)

表11　曽我井・野入遺跡A地区出土土器観察表

報告番号	図版番号	写真図版番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)			
									長さ	幅	厚み	重量
M 1	28	41	鉄器	釘	A	人力掘削	包含層		(7.37)	0.4	0.4	4.0
M 2	28	41	鉄器	釘	A	人力掘削	包含層		(3.55)	頭0.6 断0.53	0.4	1.7

表12　曽我井・野入遺跡A地区出土金属製品観察表

B地区

※口径・底径値（　）：復元値　器高値（　）：残存高

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)			
									口径	器高	底径	重量(g)
36	26	38	土師器	堝	B	SB02：P133	埋土	外面口縁部ヨコナデ→タタキ目　内面ハケ目	(23.6)	(12.5)	−	
37	26	38	土師器	片口擂鉢	B	SB02：P151	埋土	外面口縁部強い２段のヨコナデ　体部ナデ 内面口縁部ヨコナデ→ハケ目→擂目（１回１条描き）	(30.6)	(8.8)	−	
38	26	38	石製品	玉	B	SB02：P299	埋土	水晶	長11.2㎜	幅 (縦)13.0㎜ (横)13.0㎜	厚−	2.8
39	26	38	土師器	小皿	B	SK01	埋土	摩滅著しい 内外面に指押さえの窪みが顕著　橙色系	8.7	1.15	−	
40	26	38	土師器	小皿	B	SK02	埋土	外面指押さえ 内面ナデ　淡褐色系	7.86	1.76	体部との境不明瞭	
41	26	38	土師器	皿	B	SK02	埋土	淡褐色系　摩滅著しい	(12.3)	(2.75)	−	
42	26	38	土師器	堝	B	SK02	埋土	外面タタキ目 内面当具痕(青海波)	(22.05)	(5.45)	−	
43	26	38	土師器	堝	B	SK05	埋土	硬質　外面タタキ→ナデ(タタキ目を消す) 内面ハケ目　色調橙色	(18.15)	(9.8)	−	
44	26	38	須恵器	捏鉢	B	SK05	埋土	口縁部黒化(重ね焼き) 回転ナデ調整	(27.25)	(6.0)	−	
45	26	39	土師器	皿	B	SD02	埋土	橙色系　内外面に指押さえによる凹凸痕顕著 摩滅著しい	8.15	1.5	−	
46	26	39	須恵器	皿	B	P142	埋土	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	(7.6)	(1.7)	(4.1)	
47	26	39	須恵器	椀	B	P142	埋土	底部回転糸切り 内外面轆轤目顕著 平底	15.1	5.5	5.8	
48	26	39	青磁	碗(底)	B	P144	埋土	龍泉窯系 高台内無釉薬	−	(1.8)	(6.1)	
49	26	39	青磁	碗	B	P149	埋土	龍泉窯系　鎬蓮弁文	(14.55)	(3.1)	−	
50	26	39	須恵器	つまみ	B	P170	埋土		−	1.8	−	
51	27	39	土師器	羽釜	B	P203	埋土	外面タタキ目 内面内面ハケ目	(24.85)	(4.65)	−	
52	27	39	須恵器	捏鉢	B	P250	埋土	外面口縁部黒化	(24.0)	(7.4)		
53	27	39	土師器	小皿	B	P267	埋土	外面指押さえ 内面ナデ　淡褐色系	(8.15)	1.6	4.55	
54	27	39	土師器	小皿	B	P290	埋土	外面指押さえ 薄作り　橙色系	(6.8)	1.6	(3.5)	
55	27	39	須恵器	椀	B	P420	埋土	内外面回転ナデ 底部回転糸切り	(12.8)	3.6	(4.95)	
56	27	39	須恵器	椀	B		包含層	底部糸切り	(16.2)	4.55	(5.7)	
57	27	39	須恵器	椀	B		包含層	底部糸切り	15.35	5.1	6.55	
58	27	39	須恵器	甕	B		包含層	外面頚部タタキ目	(24.2)	(4.65)	−	

表13　曽我井・野入遺跡B地区出土土器観察表

報告番号	図版番号	写真図版番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)			
									長さ	幅	厚み	重量
M 3	28	40	鉄器	鏃	B	人力掘削			11.9	1.05	0.88	18.8
M 4	28	40	鉄器	刀子の刃部	B	人力掘削		M5と同一個体か？	(4.95)	1.33	0.25	2.9
M 5	28	40	鉄器	刀子の刃部	B	人力掘削		M4と同一個体か？	(3.48)	1.53	0.28	3.1
M 6	28	41	鉄器	釘	B	人力掘削			7.35	頭0.82 断0.57 0.32	0.58 0.32	5.2
M 7	28	41	鉄器	釘	B		包含層		(8.38)	頭1.04 断0.5	0.49	5.5
M 8	28	41	鉄器	釘	B	P0255			(5.21)	頭0.56 断0.45	0.44	2.4
M 9	28	41	鉄器	釘	B	P0006			(5.98)	頭0.8 断0.41	0.46	4.1
M10	28	41	鉄器	釘	B地区		面精査		(3.8)	0.53	0.49	3.1
M11	29	－	鉄器	釘		人力掘削			(2.4)	頭0.55 断0.37	0.31	0.8
M12	29	41	鉄器	釘	B	人力掘削			(2.74)	頭0.95 断0.62	0.53	2.5
M13	29	41	鉄器	釘	B	人力掘削			(2.15)	0.33	0.32	0.7
M14	29	41	鉄器	椀形鉄滓	B	P0006			8.5	5.9	3.6	142.1
M15	－	41	鉄器	不明	B	人力掘削			3.6	2.64	1.76	
M16	－	41	鉄器	不明	B		包含層		5.2	4.2	2.3	

表14　曽我井・野入遺跡B地区出土金属製品観察表

報告番号	図版番号	写真図版番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(mm)			
									長さ	幅	厚み	重量(g)
S 1	27	40	薄片	不明	B	人力掘削	包含層	チャート	24.5	26.4	9.6	6.5
S 2	27	40	石器	鏃	B		包含層	チャート	27.0	17.5	3.9	1.4

表15　曽我井・野入遺跡B地区出土石製品観察表

第Ⅵ章　曽我井・沢田遺跡の調査

第１節　本発掘調査の概要

確認調査の結果を受け、本発掘調査を実施した。調査区は、掘削残土置き場の制約と現道の制約から、１区・２区・３区に分かれ、２区・３区は更に２－a区・２－b区、３－a区・３－b区に分割した。しかし、１区・２区の遺構は連続しており、ここでは１区・２区をまとめて述べる。

遺跡は、大きくは調査区の南北を東流する２本の旧河川に挟まれた微高地上に立地するが、細かく見ればいくつかの浅く比較的小規模な谷部が開析する状況にある。

検出した遺構・遺物は弥生時代前期から鎌倉時代に及ぶ。

第２節　１区・２区の調査

１区では掘立柱建物跡５棟、大小の溝22条、土坑、集石遺構、水田遺構などを確認した。

SR1001－aからは大量の須恵器椀・皿の他や墨書土器が、SR1001－bからは完形の祭祀遺物の人形や呪符木簡が、古い段階の溝底部からは須恵器杯・皿の他、完形の平瓶や多量の墨書土器の他、斎串や呪符木簡が出土している。

２－a区ではSR1001の続きを検出した。SR1001－aの底面には礫群がみられ、須恵器小皿など鎌倉時代の土器が多量に出土した。底部にまで13世紀代の土器が含まれており、11世紀に設けられたこの水路が、13世紀代に浚渫などの手が加えられていたことを示唆している。SR1001－bは１区の状況に引き続いて北側へと主軸を振り、２区ではわずか11mほどで調査区外へと出る。また南北方向の溝２条(SD2004・2005)や南西方向から北東方向に延びる溝SD2007を検出した。SD2004の底部からは13世紀代と考えられる須恵器椀が出土している。

２－b区では掘立柱建物跡１棟と東西方向に走る溝SD2001、谷部の肩付近をめぐる溝SD2002を確認した。SD2002や谷部には弥生時代前期の土器を含んでいる。

１　層　序(図版31～34　写真図版64)

南壁の土層断面図をあげた。

南壁は盛土の下に１層現耕作土があり、以下床土である２層、その下に近世の耕作土３層・３′層と続く。

下層の４層・４′層は元々洪水砂５層と同一層であったものが、耕作や土壌化によって分化したものである。

５層は洪水起因の砂礫層である。中世前期から後期にかけての遺物が入る。この層は２－a区では厚くなり、間に５″層を挟んでいる。上半は土壌化し、中世後半(15世紀)の遺物を含む５′層と13世紀代の遺物を含む下半の５層に分かれることから、複数回の洪水によって形成されたものと考えられる。

６層は水田畦畔の残欠の可能性が高い。

７層はSD1001－bを被覆し、SD1001－aの最上層によって切られる腐植質シルトである。

８層はSD1001－a、畠に伴う溝SD1002～SD1010・SD1012～SD1017など及びSR1001－aによって切られる土壌層である。また、SD1021は８層に被覆されている。

８層は、平面では11世紀代の遺物を包含している。しかし、SR1001－bの埋土は概ね８層と不可分であり、SR1001－aの溝肩は８層上面から始まる。しかし、８層の上半部は（８′層）はSR1001－aの中層に入り込んでおり、集石遺構SX1002によって切られている。また、同質の９層はSR1001－aの上面を被覆するなど、SR1001が埋没し、掘り直されるなかで時間をかけて形成された土壌層と考えられる。

９層は２区南壁に広く認められる土壌層である。SR1001を被覆しており、洪水砂５層(13世紀)によって被覆されている。SR2004を被覆し、SD2005に伴う水田土壌であった可能性が考えられる。

10層は８層の下に部分的に残存する土壌層である。８層が水田化した際の畦畔部分にあたる可能性がある。

９層の下には１・２区間の谷部を中心にクロボク土の２次堆積と考えられる39層が堆積している。39層は本調査区内では無遺物である。

39層の下層には地山(ベース)にあたる40層が広がる。

２　遺　構

掘立柱建物跡６棟・土坑３基・溝25条・水田遺構を検出している。掘立柱建物跡は調査区北半部と南半部に集中して検出している。

溝については代表的なものをあげた。

水田遺構は１区東半より検出している。殆どが痕跡にとどまる。

（１）掘立柱建物群・柱穴群

掘立柱建物跡はいずれも総柱建物であり、主軸方向は概ねＮ３°Ｅを指向し、柱間は2.5m程度である。柱穴からの出土遺物は乏しいが、11世紀(平安時代後期)から13世紀(鎌倉時代)にかけての建物と考えられる。

SB1001（図版31・35　写真図版45・46）

検出状況　１区西半において検出した。また、SD1009・SD1010・SD1012・SD1017と重複し古い。建物の北梁行は調査区外にあり、規模は不明である。

柱穴は１個もしくは２個の柱穴と切りあっており建て替えが行われている。

形状・規模　桁行方位をＮ３°Ｗにとる総柱建物跡である。桁行東西５間(12.1m)・梁行南北４間(9.5m)、床面積115㎡以上の規模である。建物の柱間は、桁行１間2.40m～2.50m・梁行１間2.40m～2.50mである。

西梁行には一部半間に１箇所ずつ柱穴が検出されており、間仕切りや壁支えの柱であったと考えられる。

柱　穴　円形を基本とし掘方径40㎝～60㎝、柱痕は径約20㎝、深さは約30㎝～40㎝、一部に根石を据えている。

出土遺物　柱穴からは須恵器椀（１）が出土している。

SB1004（図版31・36　写真図版46）

検出状況　１区西半において検出した。SB1001と隣接・並行するが柱通りはずれ、別棟の建物である。SD1013と切り合い古く、SD1011と切り合い新しい。また、SX1001と重複するが層序からは新しい。

形状・規模　桁行方位をＮ８°Ｅにとる総柱建物跡である。東西３間(7.40m)・南北１間(2.50m)以上、床面積18.5㎡以上の規模である。建物の柱間は、東西１間2.40m、南北１間2.50mを測る。

柱穴は一部切り合い、建て替えがあった可能性が考えられる。

柱　穴　円形を基本とし掘方径30㎝～40㎝、柱痕は不明で深さは約30㎝である。

出土遺物　柱穴からは須恵器椀(２)が出土している。

SB1006(図版31・36)

検出状況　１区南中央、SD1010・SD1016と重複して検出した。先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位をＮ２°Ｅにとる総柱建物跡である。東西梁行２間(5.20m)・南北桁行２間(4.70m)に、東桁行きに１間(0.60m)の庇がつく。建物の柱間は、桁行１間2.40m・梁行１間2.30m～2.40mである。

柱　穴　円形を基本とし掘方径約30㎝、柱痕は径約10㎝、深さは約20㎝である。庇の柱穴径は20㎝と小さい。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB2001(図版33・37　写真図版60)

検出状況　２－b区に位置し、SD2001と切り合い新しい。

形状・規模　桁行方位を北にとる総柱建物跡である。東西梁行２間(4.80m)・南北桁行２間(4.40m)を測る。

建物の柱間は、桁行１間2.20m・2.50m、梁行１間2.20mを測る。西桁行の柱間に柱穴が存在する。間仕切りもしくは床支えに伴うものと考えられる。また、南梁行西側の柱穴の存在は、SB1006と同様に庇が存在した可能性がある。

柱　穴　円形を基本とし掘方径約30㎝、柱痕は径約10㎝、深さは約20㎝～40㎝である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB1005(図版31・37　写真図版46)

検出状況　１区西端において検出した。SD1003と重複し、切り合いは古い。

形状・規模　方位をN10°Eにとる掘立柱建物跡である。規模は南北１間(2.40m)・東西１間(2.30m)の規模である。

柱　穴　円形を基本とし掘方径30㎝・深さ30㎝を測る。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB1007(図版31・37)

検出状況　１区西半・北壁際において検出した。SD1015と重複するが先後関係は不明である。東西柱列のみ検出しており、建物の大半は調査区外にある。あるいは柵の可能性もある。柱穴の内２個は切り合い、建て替えがあったと推測される。

形状・規模　方位をＮ５°Ｅにとる掘立柱建物跡である。規模は東西２間(4.30m)、柱間1.15mの規模である。

柱　穴　円形を基本とし掘方径20㎝～30㎝・深さ30㎝を測る。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

(２)土坑・集石土坑

土坑１基・集石土坑２基を検出した。

SX1001（図版31・38　写真図版47）

検出状況　調査区西半において検出された。SB1004と重複して存在する。

形状・規模　涙滴形を呈する。

規模は全長約2.74m・最大幅1.04m、深さ約74cmを測る。土坑底は薬研状に掘られており、矩形の断面形状である。

埋　土　土坑底には黒褐色粘質シルト～細砂が溜まり、その上を黒色粘質シルト～細砂、黄褐色粘質シルト～細砂、最終的に黒色粘質シルト～細砂が埋め尽くしている。

出土遺物　須恵器皿（６）・須恵器椀（７）が出土した。

SX1002（図版32・38　写真図版47）

検出状況　１区東半南壁際において検出された集石土坑である。調査区外に遺構は延びる。SR1001と切り合い、新しい。

形状・規模　隅丸方形土坑の一部を検出したと考えられる。

規模は東西辺1.95m以上、南北辺1.55m以上、深さ約15cmを測る。土坑底は平坦で、径20cm～30cmの河原石を敷いている。

埋　土　上面に炭が堆積している。褐色シルトが被覆する。

出土遺物　図化できる出土遺物はない。

備　考　河原石には被熱したものが含まれており、埋土から中世前期の火葬跡の可能性が考えられる。

SX1003（図版16　写真図版12）

検出状況　１区東端より検出された。SR1001－bと切り合い、古い。

形状・規模　不整な隅丸方形の一角を呈するが、大半をSR1001及び１区東端側溝によって切られ、形状は詳らかではない。

規模は東西約1.30m以上、南北約0.80m以上、深さ約20cmを測る。土坑の底部はやや傾斜し擂鉢状である。中央に径38cmの浅い窪みをもつ。

土坑内には一辺15cm～20cmの河原石が集積されているが、石囲い等の施設にはならなかった。

埋　土　暗灰色シルトが堆積している。

出土遺物　須恵器壺（８）が出土している。

（３）溝状遺構

溝状遺構は35条検出している。

うち大溝のSD1001・SD1021・SR1001は人工の水路と考えられる。SD1001・SD1021は11世紀代に開削され、数度の掘り直しを行っている。

溝内から祭祀遺物の人形が出土している。

SD1001（図版31・39・40　写真図版48～50）

１区北西隅から南東に走る溝である。調査区南壁より調査区外へ出る。SD1021がその延長にある可能性があるが、規模・形状に若干違いがあるため別溝として扱う。

本溝は、大きくSD1001－bとSD1001－a・cに分かれ、SD1001－bが最も古く、次にSD1001－cが掘削され人為的に埋められた後、SD1001－aが掘削される。

SD1001－a

検出状況　最上層では畠に伴うと考えられる溝SD1002～SD1004が流れ込んでいる。

形状・規模　幅3.0m・深さ80㎝・検出全長17mを測る。断面形状は大きく開くU字形の溝である。N40°Wに走行をもつ。

最上層では溝は盛土によって２本に分かれていたと考えられ、南側の溝は幅約90㎝・深さ25㎝、北側の溝は幅約２m・深さ30㎝～50㎝となる。

溝底には杭列が存在する。約50㎝間隔で打ち込まれている。

埋　土　埋土は黒褐色極細砂が堆積する。

出土遺物　須恵器椀、土師器甕などの細片が出土している。また、一部下層のSD1001－cの木製祭祀具が遊離して出土している。

SD1001－b

検出状況　SD1001－aと切り合い古い。SD1001－aと並行し、西端では一端途切れて検出されている。

形状・規模　幅80㎝・深さ20㎝・検出全長8.50mを測り、断面の形状がU字形の溝である。

埋　土　埋土は暗赤灰色～黒褐色シルトが堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1001－c

検出状況　SD1001－aの下層に存在する。SD1001－aによって大きく掘り広げられたため、当初の規模・形状は詳らかではない。

形状・規模　幅1.1m以上・深さ1.1m・検出全長17mを測る箱形の溝である。

埋　土　上半を地山掘削土によって埋められている。溝底には黒色砂混じりシルトが堆積している。

出土遺物　須恵器椀(14～20)、土師器椀(12)、土師器杯(13)などが出土している。

SD1011(図版31・40　写真図版58)

検出状況　１区西半において検出した東西方向(N81°E)に走る溝である。SD1009・SD1010と切り合い古い。

形状・規模　浅い皿状の断面をもち、規模は幅0.50m、深さ10㎝、延長４mを測る。

埋　土　黒褐色シルト～細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1019・SD1020(図版31・41　写真図版59)

検出状況　１区中央において検出した。南西から北東へ方向(N80°E～N10°W)に蛇行する。

溝底のレベルは一定せず、流れの方向は判然としないが、地形からは北東流するものと考えられる。溝は中間において途切れているが、同一の溝と判断した。SD1015・SD1016と切り合い古い。

形状・規模　SD1019では幅1.65m・深さ15㎝、浅い皿状の断面形状をとる。

埋　土　上層に黒褐色極細砂～細砂、下層に黒色シルトが堆積する。

出土遺物　SD1019から弥生土器底部(39)が出土している。

SD1021(図版31・41　写真図版43・59)

検出状況　１区西半の南壁から中央北壁に向けてN85°Wに走る溝である。

SD1012・SD1013・SD1014・SD1015・SD1017と切り合い先行する。その形状からSD1001の延長である可能性がある。

溝底のレベルは一定せず、流れの方向は判然としないが、地形からは概ね北東流するものと考えられる。

形状・規模　溝は掘り直され、南側の溝が古い。南側の溝は幅約70㎝以上・深さ35㎝で、V字形の断面形状を呈する。

北側の溝は幅約1.7m、深さ40㎝、断面形状はU字形である。

埋　土　南側の溝は上層に黒褐色中砂混じりシルト～極細砂、下層に黒色シルト～細砂が堆積する。

北側の溝は上層に黒褐色中砂混じりシルト～極細砂、下層に黒色中砂混じりシルト～細砂が堆積する。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1023・SD1024（図版31・41　写真図版59）

検出状況　１区中央において検出した南北方向（N５°W）に走る溝である。

SD1020と切り合い新しい。溝の北端は調査区外にあり、全貌は明らかではない。中央で途切れることからSD1023・SD1024としたが同一の溝である。

形状・規模　浅い皿状の断面をもち、規模は幅0.50m、深さ15㎝、延長4.3mを測る。

埋　土　黒褐色シルト～極細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1025（図版32・41）

検出状況　１区東半において検出した北東方向（N75°E）に走る小規模な溝である。水田遺構と切り合い新しい。また、SD1026と隣接する。

形状・規模　浅いU字状の断面をもち、規模は幅0.30m、深さ15㎝、延長11mを測る。溝はやや蛇行及び枝分かれの形状を示す。

埋　土　黄灰色シルト～極細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1026（図版32・41）

検出状況　１区東半において検出した南北方向（N13°E）に走る溝である。SD1025と隣接する。

形状・規模　浅い皿字状の断面をもち、規模は幅0.20m、深さ５㎝、延長2.2mを測る。溝はSD1025と分岐する溝である可能性が高い。

埋　土　暗黄灰色粗砂混じりシルト～極細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD2001（図版33・41　写真図版60）

検出状況　２－b区において検出した東西方向（N90°E）に走る溝である。SB2001と切り合い古い。

形状・規模　浅いV字状の断面をもち、規模は幅1.10m、深さ20㎝、延長16mを測る。

埋　土　暗赤灰色腐植質シルトが堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD2005（図版33・41　写真図版59）

検出状況　２－a区東端において検出した南北方向（N13°E）に走る溝である。SD2004とほぼ並行する。

形状・規模　浅いU字状の断面をもち、規模は幅1.55m、深さ30㎝、延長9.0mを測る。溝は北端においてSD2007と接するが、関係性は不明である。

埋　土　下層には褐灰色腐植質シルト、上層には暗赤灰色腐植質シルト・黒褐色腐植質極細砂が堆積している。

出土遺物　須恵器小皿（40）・須恵器椀（41・42）が溝底より出土している。このほか、漆椀・箸状木製品

が出土している。

SD2009（図版32・41）

検出状況　２－a区東半において検出した。東西方向（N80°W）に走り東端においてやや南へ振る溝である。SR1001－aとほぼ並行する。また、SD2008とも並行する。

形状・規模　浅いU字状の断面をもち、規模は幅0.60m、深さ10cm、延長９mを測る。

溝はSD2008を挟む幅１m分を水田畦畔として、付随する溝であったと考えられる。

埋　土　粘質の褐灰色シルト～極細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

（４）畠に伴う溝SD1002～SD1010・SD1012～SD1017

13世紀代のものと考えられる南北方向の溝14条を確認した。以下、図示したものについて述べる。

SD1002（図版31・40　写真図版57）

検出状況　１区西端において検出した南北方向（N20°E）に走る溝である。SD1001の中層に流れ込み、埋没している。

形状・規模　U字状の断面をもち、規模は幅0.70m、深さ25cm、延長５m以上を測る。溝は傾斜に合わせ、やや弧を描き、走向はSD1003・SD1004に近い。

埋　土　主に黒褐色粘質シルト混じり極細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1003（図版31・40　写真図版57）

検出状況　１区西端において検出した南北方向（N８°E）に走る溝である。SD1001の中層に流れ込み、埋没している。SD1002の東隣にある。

形状・規模　浅いU字状の断面をもち、規模は幅0.65m、深さ25cm、延長6.7mを測る。溝は傾斜に合わせ緩い円弧を描く。走向はSD1002・SD1004に近い。

埋　土　主に黒褐色粘質シルト混じり極細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1004（図版31・40　写真図版57）

検出状況　１区西端において検出した南北方向（N８°E）に走る溝である。SD1001の中層に流れ込み、埋没している。SD1003の東隣にある。

形状・規模　U字状の断面をもち、規模は幅0.70m、深さ15cm、延長7.3mを測る。溝は傾斜に合わせ緩い円弧を描く。走向はSD1002・SD1003に近い。

埋　土　主に黒褐色粘質シルト混じり極細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1005（図版31・40）

検出状況　１区西半において検出した南北方向（N８°E）に走る溝である。

形状・規模　U字状の断面をもち、規模は幅0.70m、深さ15cm、延長7.3mを測る。溝は調査区を横断しており、走向はSD1006～SD1010・SD1012～SD1017に近い。

埋　土　主に黒褐色粘質シルト混じり極細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1006（図版31・40）

検出状況　１区西半において検出した南北方向（N10°E）に走る溝である。

形状・規模　箱形の断面をもち、規模は幅1.20m、深さ30cmである。

溝は調査区を横断して走っており、走向はSD1005・SD1007～SD1010・SD1012～SD1017の各溝に近い。

埋　土　主に黒褐色粘質シルト混じり極細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1007（図版31・40　写真図版57）

検出状況　１区西半において検出した南北方向（N10°E）に走る溝である。

形状・規模　深い箱形の断面をもち、規模は幅1.20m、深さ30cmである。溝は調査区を横断しており、走向はSD1006～SD1010・SD1012～SD1017の各溝に近い。

埋　土　主に細砂混じりの黒褐色粘質シルト～極細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1009（図版31・40　写真図版57）

検出状況　１区西半において検出した南北方向（N９°E）に走る溝である。

形状・規模　U字形の断面をもち、規模は幅0.65m、深さ20cmである。溝は調査区を横断しており、走向はSD1006・SD1007・SD1010・SD1012～SD1017の各溝に近い。

埋　土　主に細砂混じりの黒褐色粘質シルト～極細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1010（図版31・40　写真図版58）

検出状況　１区西半において検出した南北方向（N10°E）に走る溝である。

形状・規模　深い箱形の断面をもち、規模は幅0.65m、深さ20cmである。溝は調査区を横断しており、走向はSD1006～SD1009・SD1012～SD1017の各溝に近い。

埋　土　主に黒褐色粘質シルト～シルト混じり細砂が堆積している。

出土遺物　土錘（29）が出土している。

SD1011（図版31・40　写真図版58）

検出状況　１区西半において検出した東西方向（N81°E）に走る溝である。SD1007とSD1009の間にある。

形状・規模　浅い皿状の断面をもち、規模は幅0.45m、深さ15cm、延長2.5mを測る。

埋　土　黒褐色粘質シルト～シルト混じり細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1012（図版31・41　写真図版58）

検出状況　１区西半において検出した南北方向（N12°E）に走る溝である。SD1021と切り合い新しい。

形状・規模　U字状の断面をもち、規模は幅0.80m、深さ18cm、延長11mを測る。溝は調査区を横断しており、走向はSD1006～SD1009・SD1012～SD1017の各溝に近い。

埋　土　灰黄褐色粘質シルト～極細砂が堆積している。

出土遺物　須恵器鉢（27）が出土している。

SD1013（図版31・41　写真図版58）

検出状況　１区西半において検出した南北方向（N11°E）に走る溝である。SD1017と並行する。SD1021

と切り合い新しい。

形状・規模　凹凸の激しい断面をもち、SD1012に比べ蛇行気味である。規模は幅0.95m、深さ15cm、延長６ｍを測る。

埋　土　褐灰色粘質シルト～極細砂が堆積している。

出土遺物　須恵器杯(31・32)、土師器鉢(30)が出土している。

SD1014(図版31・41　写真図版58)

検出状況　１区西半において検出した南北方向(N11°E)に走る溝である。SX1001・SD1021と切り合い新しい。

形状・規模　箱形の断面をもち、規模は幅1.00m、深さ25cm、延長６ｍを測る。溝は調査区を横断しており、走向はSD1006～SD1009・SD1012・SD1014の各溝に近い。

埋　土　黒褐色粘質シルト～シルト混じり細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1015(図版31・41　写真図版58)

検出状況　１区中央において検出した南北方向(N15°E)に走る溝である。SD1020・SD1021と切り合い新しい。SD1014の東側に位置する。

形状・規模　深い箱形の断面をもち、規模は幅1.00m、深さ25cmを測る。溝は調査区を横断しており、走向はSD1006～SD1014の各溝に近い。

埋　土　上層に灰黄褐色粘質シルト～細砂が、下層には黒褐色粘質シルト混じり細砂が堆積している。

出土遺物　須恵器杯(28)が出土している。

SD1016(図版31・41　写真図版58)

検出状況　１区中央において検出した南北方向(N９°E)に走る溝である。SD1020・SR1001と切り合い新しい。SD1015の東側に位置する。

形状・規模　浅い箱形の断面をもち、規模は幅0.80m、深さ18cmを測る。溝は調査区を横断しており、走向はSD1006～SD1015の各溝に近い。

埋　土　黒褐色粘質シルト混じり細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD1017(図版31・41　写真図版59)

検出状況　１区西半において検出した南北方向(N７°E)に走る溝である。SD1013と並行する。SD1021と切り合い新しい。

形状・規模　U字形の断面をもち、SD1012に比べ蛇行気味である。規模は幅0.50m、深さ15cm、延長６ｍを測る。

埋　土　黒褐色粘質シルト混じり細砂が堆積している。

出土遺物　須恵器杯(31・32)、土師器鉢(30)が出土している。

(５)流路・大溝

SR1001(図版32・42　写真図版51～56)

８世紀後半から９世紀代にかけての遺物を含む古い段階のもの(SR1001－b)と11世紀から13世紀にかけての遺物を含む新しい段階のもの(SR1001－a)に分かれ、両者はほぼ重複するものの古い段階のものは下流に進むにつれやや北に主軸を振っている。

SR1001－a

検出状況　１区中央南壁から出現し、２－a区中央北壁に抜ける流路である。東西方向(N74°W)に走る。SR1001－bよりもやや南へ頭を振る。１区東端において流路は若干クランクを見せるが、人為的なものか否かは不明である。

形状・規模　幅４ｍ・深さ65㎝・検出全長78mを測る。断面形状が大きく開いたU字形の溝である。

埋　土　埋土は大きく３層に分かれ、最上層には茶灰色混礫シルト、中層には茶灰色シルト、下層には粗砂が堆積している。

出土遺物　土師器や須恵器の皿・椀等を含む土器(45～112)が出土した。また、形代・斎串を含む木製品(W30～W46)が出土した。

SR1001－b

検出状況　１区中央南壁から出現し、２－a区中央北壁に抜ける流路である。東西方向(N77°W)に走る。SR1001－aよりもやや北へ頭を振り、ほぼ東西方向に走る。SR1001－aは１区東端において流路は若干クランクを見せるが、SR1001－bにはない。

形状・規模　SR1001－aによって大きく掘りなおされているため、規模は明確ではないが、幅３ｍ前後・深さ60㎝・検出全長65mを測り、断面形状が大きく開いた箱形の溝である。

埋　土　埋土は大きく３層に分かれ、上層には茶灰色シルト、中層には暗灰色シルト、下層には粗砂が堆積している。

出土遺物　須恵器皿・杯を含む土器(114～230)が出土した。また、形代・斎串を含む木製品(W30～W46)が出土した。

SR2001(図版33　写真図版60)

検出状況　２－b区西半において検出した。大きく湾曲して南西から北へ流れる自然流路である浅い谷地形に流れ込み、埋没し、最終的に最上部は細い溝となっている。

形状・規模　幅４ｍ・深さ50㎝を測る。断面形状は大きく開いたU字形を呈する。

埋　土　灰白色と黒褐色のベース土が堆積しており、流路は黒褐色シルトを掘り込んで流れている。最下層に粗砂が堆積し、中層は粗砂混じり腐植質シルト、上層は腐植質シルトの堆積となる。

出土遺物　須恵器椀(43)、弥生前期甕片(44)が最上層より出土している。

(６)水田遺構

SR1001の北側において水田区画が検出された。水田区画の大半は削られ、また大半が現道路下にあると考えられ規模は詳らかではない。水田区画は２種類検出されており、SD1023・SD1024・SD1019によって切られる水田区画aが１枚と東西方向に長く畦畔を検出している６枚以上の水田区画bがある。同一面において検出したため水田区画a・bの先後関係は明らかではないが、水田区画aがより深く耕されている。水田区画aは１辺７ｍ四方以上の面積をもつ。水田区画bは東西幅2.5mと幅７ｍの区画を検出しているが、南北方向についてはSR1001によって削られ、北半については調査区外のため不明である。

出土遺物はない。

第３節　３区の調査

３－b区では、多数の柱穴が確認され、掘立柱建物跡６棟を復元するに至った。総柱建物は２間×１間以上、２間×２間、３間×１間以上、４間×２間以上の４棟で、側柱建物は２間×４間以上が２棟である。このうちSB3002・3003・3005は１区・２区の掘立柱建物とほぼ同主軸方向を指向するが、他は不整方向である。建物柱穴からの出土遺物は乏しいが、側柱建物のうちSB3001の柱穴から８世紀後半頃と思われる須恵器杯蓋が出土しており、SB3004も含め奈良時代の可能性が考えられる。

また、調査区東端には製塩土器を含む土坑SK3001があり、やはり奈良時代のものと考えられる。

３－a区では柱穴の他に、調査区北西隅に幕末期頃の陶磁器を含む土坑が存在する。

１　層　序（図版44　写真図版64）

３－a区・３－b区を通した土層断面図、主に南壁・北壁をあげた。

堆積は以下の様相をみせる。

耕作土下に１層～７層が堆積する。２・３層は、黒褐色シルト～細砂が堆積している。これらは色調が淡く１・２区の近世から中世後期の堆積層に対応する。

４層は洪水起因の礫・中砂混じりの極細砂である。

５層は遺構面を形成するいわゆるクロボク土の２次堆積層（黒色粘質シルト）である。

６層は扇状地の形成によってできた周辺のベースを形成する層である。

７層についても６層と同じく扇状地の形成によってできた周辺のベースを形成する層である。

２　遺　構

柱穴は130個余り検出できたが、調査地点の湧水が激しいうえに個々の柱穴の残りが悪く、建物の復元は６棟にとどまった。柱穴群は３－b区にあまねく分布しており、さらに多数の掘立柱建物が存在した可能性は高い。

（１）掘立柱建物

SB3001（図版43　写真図版61）

検出状況　３－b区東半北壁周辺において検出した、SB3002と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位をN38°Wにとる側柱建物跡である。桁行南北３間（7.50m）以上・梁行東西２間（3.70m）以上の規模と考えられる。建物の柱間は、桁行１間2.60m・梁行１間1.80mである。

柱　穴　円形を基本とし掘方径約40㎝、柱痕は不明である。

出土遺物　須恵器皿（269）が出土した。

SB3002（図版43　写真図版61）

検出状況　３－b区中央北壁周辺において検出した。SB3003と柱穴が切り合うが先後関係は詳らかではない。新しい可能性が高い。建物の半分は調査区外にある。本建物と重複して柱列が存在するが、建物として復元はできなかった。

形状・規模　桁行方位をN38°Wにとる総柱建物跡である。桁行南北４間（6.00m）・梁行東西２間（3.20m）以上の規模と考えられる。建物の柱間は、桁行１間1.50m・梁行１間2.00mである。

柱　穴　円形を基本とし掘方径約30㎝、柱痕は明確ではない。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB3003（図版43・45　写真図版62）

検出状況　３－b区中央北壁周辺において検出した。SB3002と柱穴が切り合うが先後関係は詳らかではない。建物の半分は調査区外にある。本建物と重複して柱列が存在するが建物として復元できなかった。

形状・規模　桁行方位をN83°Eにとる総柱建物跡である。桁行東西４間(8.20m)以上・梁行南北２間(4.60m)以上の規模と考えられる。建物の柱間は、桁行１間1.80mと2.10mと2.30m、梁行１間2.10mと2.60mである。

柱　穴　円形を基本とし掘方径約20㎝～40㎝、柱痕は明確ではなく、深さは約10㎝である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB3004（図版43　写真図版61）

検出状況　３－b区西半、調査区の南壁周辺に位置する。SB3005とは重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位をN83°Eにとる側柱建物跡である。

梁行東西２間(4.00m)・桁行南北２間(5.30m)以上の規模と考えられる。建物の柱間は、桁行１間2.40m、梁行１間2.00mである。

柱　穴　円形を基本とし掘方径約40㎝、柱痕は明確ではない。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB3005

検出状況　３－b区西半、調査区の南壁周辺において検出した。SB3004とは重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位をN84°Eにとる側柱建物跡である。桁行東西３間(5.00m)・梁行南北２間(3.50m)以上の規模と考えられる。建物の柱間は、桁行１間3.20m、梁行１間1.50mである。

柱　穴　円形を基本とし掘方径約30㎝、柱痕は明確ではない。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB3006（図版43　写真図版61）

検出状況　３－b区西半、調査区の北壁周辺において検出した。

形状・規模　桁行方位をN85°Eにとる側柱建物跡である。桁行東西４間(8.20m)・梁行南北１間(2.50m)以上の規模と考えられる。建物の柱間は、桁行１間2.00mである。

柱　穴　円形を基本とし掘方径約30㎝、柱痕は明確ではない。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

（２）土　坑

土坑３基を検出した。紅皿が出土した近世の土坑を除けば、遺物が出土し明確に時期が決定できるものは３－b区のSK3001のみである。

SK3001（図版43・45　写真図版63）

検出状況　３－b区東端において検出された。土坑の一部は調査区外にある。

形状・規模　卵形を呈する可能性が高い。規模は残存長径約1.6m・短径1.5m、深さ約30㎝を測る。土坑はU形に掘られ、底面は丸い。

埋　土　黒色粘土・黒色粘質シルトが堆積する。

出土遺物　271～274を含め多量の製塩土器が出土した。

第４節　遺　物

曽我井・沢田遺跡の調査の結果、コンテナに換算して30箱の土器と21点の石器、10点の金属器をはじめ140点以上の木製品が出土している。土器は弥生時代前期から近世にかけてのものが出土しているが、その中心は奈良時代から鎌倉時代の土師器製塩土器・皿・堝、黒色土器や瓦器をはじめ、墨書土器や須恵器の皿・杯・椀・捏鉢・壷・甕、中国製磁器等である。石器は石鏃・砥石・硯等が出土し、金属器は鉄斧をはじめ椀形鉄滓等の鍛冶関係の資料が出土している。木製品は人形・呪符木簡などの祭祀に伴うものと、木皿・曲物･付木など生活用具が出土している。

その多くが、SR1001－a・bからの出土であるが、掘立柱建物SB1001等の建物、柱穴2002等のピット、土坑SK1001、溝SD1017等の遺構からも出土しており、包含層からも諸時期の遺物が出土している。

以下、１区～３区の出土遺物について、その概要を記す。

１　土　器

（１）遺構出土遺物

SB1001（図版46　写真図版67）

須恵器椀（１）が出土している。須恵器椀（１）は、底部が欠損しているが、内湾しながら立ち上がる体部である。

SB1004（図版46　写真図版67）

須恵器椀（２）が出土している。須恵器椀（２）は、底部が欠損しているが、内湾しながら立ち上がる体部である。

P2002（図版46　写真図版67）

須恵器皿（３）が出土している。須恵器皿（３）は、底部のみ残存するが、比較的大型のもので、高台を有す。

P1030（図版46　写真図版67）

土師器皿（４）が出土している。土師器皿（４）は、真直ぐ開く浅い体部である。

P2003（図版46　写真図版67）

弥生土器壷（５）が出土している。弥生土器壷（５）は、口縁部のみ残存するが、強く窄まる頸部から大きく外反しながら開く口縁部で、外面には僅かながら段の表現を残す。また、頸部外面には、並行する２条の沈線が残存する。前期後半のものと考えられる。

SK1001（図版46　写真図版67）

須恵器小皿（６）・椀（７）が出土している。須恵器小皿（６）は、真直ぐ開く浅い体部である。口縁部には重ね焼きの痕跡が残り、底部はヘラ切りである。須恵器椀（７）は、底部のみである。真っ直ぐ開体部外内面には、火襷が残る。底部は糸切りである。

集石（図版46　写真図版67）

須恵器壷（８）が出土している。須恵器壷（８）は、体部のみである。やや肩張りの卵倒形体部の肩部外面には、２条の沈線が施される。全体の器形は不明だが、長頸壷と考えられる。

SD1001－a（図版46　写真図版67）

土師器鍋（９）・須恵器杯蓋(10)・須恵器椀(11)が出土している。土師器鍋（９）は、口縁部のみである。やや開き気味に立ち上がり、口縁端部は外へ肥厚する。外面には僅かに煤が付着する。須恵器杯蓋(10)

は、平らな天井部を持つ浅手で、中央にツマミを有すものである。口縁端部は、下方に屈曲する。須恵器椀(11)は、下半部のみである。僅かに内湾しながら開く浅い体部と考えられる。底部は回転糸切りの後、一部板ナデで仕上げる。

SD1001－c(図版46　写真図版67・68)

土師器高台付椀(12)・杯(13・14)、須恵器椀(15～20)が出土している。土師器高台付椀(12)は、底部のみである。比較的足高の高台は、僅かに外反しながら開く。土師器杯(13・14)真っ直ぐに開く体部で、底部は回転糸切りである。須恵器椀(15)は、真っ直ぐに開く体部で、口縁部には重ね焼きの痕跡が残る。また、底部は回転糸切りである。須恵器椀(16)は、底部が欠損している。内湾しながら立ち上がる体部で、僅かに外反する口縁端部には面を持つ。須恵器椀(17)は、下半部のみである。やや内湾気味に立ち上がる体部で、底部はヘラ切りである。須恵器椀(18)は、底部が欠損する。僅かに内湾しながら開く体部で、口縁端部でやや外反する。須恵器椀(19・20)は、底部のみである。やや内湾しながら開く体部を持つと考えられる。底部は回転糸切りである。

SD1001(図版46　写真図版67・68)

弥生土器壷(21・22)、土師器小型壷(23)・椀(25)、須恵器椀(24)・壷(26)が出土している。弥生土器壷(21)は、上半部のみである。やや肩張りの胴部から強く窄まり、やや明瞭な綾を持つ、「く」の字状口縁部を持つ。口縁端部は内外に拡張して面を成し、２条の細かな凹線文を施す。胴部外面は、タテハケ、胴部内面は板ナデで仕上げる。中期末から後期前半のものと考えられる。弥生土器(22)は、胴部上半の破片である。外面には、やや乱れた櫛描き直線文と波状文が交互に施されている。土師器小型壷(23)は、内湾しながら立ち上がり、屈曲して短く立ち上がる口縁部を持つ。底部は糸切りである。土師器椀(25)は、やや内湾気味に開く体部で、口縁端部で僅かに外反する。底部は回転ヘラ切りの後ナデで仕上げる。須恵器椀(24)は、口縁部のみである。底部から真っ直ぐ開く体部のものと考えられる。須恵器壷(26)は、底部付近のみである。平高台の底部は、ヘラ切りの未調整である。胴部外内面は、共に回転ナデだが、外面はその後に斜め方向のナデで仕上げる。

SD1012(図版47　写真図版69)

須恵器片口鉢(27)が出土している。須恵器片口鉢(27)は、上半部のみで、口縁端部が欠損している。やや肩張りの胴部で、綾の緩い「く」の字状口縁部を持つ。

SD1015(図版47　写真図版69)

須恵器椀(28)が出土している。須恵器椀(28)は、口縁部の破片で、詳細は不明である。

SD1010(図版47　写真図版69)

土製の管状土錘(29)が出土している。土製の管状土錘(29)は、土師製で、片側の端部が欠損している。

SD1013(図版47　写真図版69)

土師器鉢(30)、須恵器椀(31・32)が出土している。土師器鉢(30)は、上半部付近のみで、詳細は不明である。頸部で僅かに窄まる事から、屈曲の緩い「く」の字状口縁部を持つと考えられる。須恵器椀(31・32)は、底部付近のみだが、内湾しながら立ち上がる体部を持つものと考えられる。底部は共に糸切りで、32に顕著である。

SD1017(図版47　写真図版68)

瓦器椀(33)、須恵器小皿(34)・椀(35～37)が出土している。瓦器椀(33)は、上半部のみである。やや内湾気味に立ち上がる体部で、口縁端部は内側に面を持つ。体部外内面は共に横方向のミガキで仕上げ

る。須恵器小皿(34)は、ほぼ真っ直ぐに開く体部である。底部はヘラ切りの後ナデで仕上げる。また、口縁部には重ね焼きの痕跡が残る。須恵器椀(35)は、底部が欠損する。やや内湾気味に立ち上がる体部で、口縁端部で僅かに外反する。また、口縁部には重ね焼きの痕跡が残る。須恵器椀(36～37)は、底部付近のみである。共に内湾しながら立ち上がる体部を持つもので、底部は糸切りである。

SD1018(図版47　写真図版68)

須恵器椀(38)が出土している。須恵器椀(38)は、底部付近の破片で、詳細は不明だが、真っ直ぐに開く体部を持つものと考えられる。底部はヘラ切りと考えられる。

SD1019(図版47　写真図版68)

弥生土器の底部(39)が出土している。弥生土器の底部(39)は、小片であり、詳細は不明だが、壷の底部と考えられる。内面にはユビオサエが残る。

SD2005(図版47　写真図版68・69)

土師器小皿(40)、須恵器椀(41・42)が出土している。土師器小皿(40)は、短く真っ直ぐに開く体部である。底部は回転糸切りである。須恵器椀(41・42)は、真っ直ぐに開く体部である。底部は回転糸切りで、体部との境をナデで仕上げる。また、口縁部には重ね焼きの痕跡が残る。

SD2001 (図版47　写真図版68)

須恵器椀(43)、弥生土器甕(44)が出土している。須恵器椀(43)は、やや内湾気味に立ち上がる体部で、底部は回転糸切りである。弥生土器甕(44)は、小片だが、甕の口縁部付近に当たる。口縁部下外面には、４条のヘラ描き沈線を施し、口縁端部には「D」字状のキザミを施す。弥生時代前期のものである。

SR1001－a　最上層　茶灰色混礫土(図版47　写真図版69)

土師器羽釜(45)、須恵器椀(46)、青磁碗(47)、白磁碗(48)が出土している。土師器羽釜(45)は、口縁部付近のみである。体部は口縁部にかけて内傾し、外面に鍔を持つ。胴部外面は横方向のタタキ、内面には当具痕が残る。須恵器椀(46)は底部付近のみである。底部外面は糸切りの後ナデで仕上げる。また、墨書も認められるが、「苗」と読めるか、明確ではない。青磁碗(47)は、龍泉窯系青磁と考えられる底部のみである。底部糸切りで、高台を有す。見込み部には片彫りの花文を施す。白磁碗(48)は、底部のみである。低いケズリ出し高台を持つ底部で、見込み部には沈線状に近い段を有す。

SR1001－a　茶灰シルト(図版48･49　写真図版70・73)

土師器皿・堝・甕、黒色土器皿、瓦器皿・椀、須恵器皿・杯A・椀・捏鉢・鉢・甕が出土している。

土師器は皿・杯・堝・甕が出土している。

皿は49～52が出土している。49は底部回転糸切りの皿で口縁部が短く外傾する。50・51は口縁部をもつ丸底の皿である。法量から50が小皿、51が中皿に分類できる。外面口縁部にヨコナデ、体部に指押さえ調整を施す。52は底部回転糸切りの皿で、大きく外傾し立ち上がる口縁部をもつ。

53～59・62は堝である。堝は口縁部が「く」の字状に屈曲し、胴部外面にタタキ、内面に当具痕ないしはナデ調整が施された北播磨・丹波地域に主たる分布をもつ53～59がある。これ以外に受け口状の口縁部をもち、内外面にハケ目を施した62の堝がある。前者の一群は加古川市大野遺跡の出土事例等を参考にすると11世紀後半代から13世紀代にかけて出現する堝の一群と考えられる。

60・61は甕である。60は外面にハケ目が施されるが、61は外面にタタキ、内面にナデ調整を施す甕である。いずれも外面に煤が付着している。85は外面縦位のナデ、内面ハケ目を施した甕である。

63・64は土錘である。いずれも端部を欠損する。

65・66は瓦器である。65は楠葉型の瓦器椀で、内外面に密なヘラミガキが施されており12世紀代の所産と考えられる。66は底部回転糸切りの皿である。全面が黒化しており瓦器皿に分類したが、器形はもとより内外面回転ナデ調整など、49の土師器皿と近似する。土師器皿の範疇になる可能性をもつ。

須恵器は皿・椀・鉢・甕・杯A・灰釉陶器が出土している。

67・68は完形の皿である。いずれも底部回転糸切りの皿で、口縁端部が内彎して立ち上がる67の小皿、口縁部が外傾する中皿の68がある。69～75は底部糸切りの椀である。平底で内面の底部と体部の境に段を持たず、体部が直線的に外傾する69～74の一群と、平高台をもち内面の底部と体部の境に段をもち、内彎して立ち上がる体部をもつ75がある。前者の一群のうち69・73・74は墨書が認められる。後者の75は外面体部に「西殿」と書かれた墨書が認められる。東播須恵器の編年を参考にすれば、前者の一群は12世紀代の特徴をもち、後者は11世紀後半を中心とした時期と考えられる。

76・77は鉢である。口縁部が短く外反し、端部を四角く作っている。76の底部の周囲はヘラ削りされており、切り離しはヘラ起こし技法を採用している。このタイプの鉢はたつの市大陣原３号窯出土品の中にみることができ、11世紀後半と考えられる。

78は外面にタタキ、内面に同心円状の当具痕を残す甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を四角くおさめている。

79は中国製の白磁碗である。大宰府編年のⅣ類に相当し、11世紀後半～12世紀前半に比定できる。

80は回転ヘラ切りの杯Aである。８世紀代の所産である。81は灰釉陶器椀である。

SR1001　粗砂層（図版50・写真図版73・74）

土師器皿・杯・甕・堝、瓦器椀、須恵器皿・椀・捏鉢が出土している。

土師器皿の82は糸切り底で、短く内彎する小皿である。49の小皿と同形である。

83はいわゆる土師器の「足高高台杯」の高台部片である。11世紀代の所産と考えておきたい。84は「く」字状に屈曲する口縁部をもつ堝である。外面胴部にタタキ目、内面はナデ調整を施している。

85・86は甕である。85は外面に縦位のナデ調整、内面にはハケ目が施されている。86は外面にタタキ目、内面ナデ調整を施した大型の甕である。

瓦器椀(87)は内外面にミガキ、見込みにジグザク文を施したものである。高台部の断面形は三角形を呈し12世紀後半の特徴をもつ。

須恵器は小皿・椀・捏鉢が出土している。

小皿は88～95が出土している。いずれも底部に回転糸切り痕を残し、完形である。小皿は平底で短く内彎して立ち上がる88～94、底径が前者の一群より大きい95に分かれる。中皿は平底で口縁部が直線的に外傾する96がある。小皿に比べ中皿は胎土が精良で、作りも丁寧である。

椀は平高台をもち内面底部と体部の境に段をもつ100・102・103・105と平底の97～99・101・106がある。東播系須恵器の編年に従えば、平高台椀の一群は11世紀後半を中心とする時期と考えられる。平底の一群は12世紀代におさまるものである。須恵器椀は全体的に小皿と同様遺存状況が良好で、須恵器小皿の一群もこの時期におさまると理解している。104・105・106の椀は墨書が認められるが文字は判読できない。

捏鉢の107は口縁端部を四角く作った、底部回転糸切り底の鉢である。11世紀後半の特徴をもつ捏鉢である。

SR1001－a　最下層（図版50・写真図版74）

土師器杯、黒色土器杯、須恵器皿・椀が出土している。

黒色土器杯の108は内黒の黒色土器A類の皿である。平底で外底を含め内外面ともに丁寧なミガキが施されている。

109は土師器杯である。いわゆる「足高高台杯」の高台部片で11世紀代の所産と考えられる。

須恵器皿の110は台付皿である。高台をもち口縁端部は外反する。９世紀代を中心とした時期と考えられる。

111は平高台の椀である。内面底部と体部の境に段をもつ11世紀後半を中心とした時期と考えられる。外面底部には墨書が認められるが、判読はできない。112は長頸壷の破片と考えられる。外面に２文字分の墨書が認められるが判読はできない。

SR1001－aから出土した土器は一部奈良時代の土器も混入するが、おおむね11世紀後半～13世紀の土器群で構成される。

SR1001－b（図版51・写真図版75・76）

製塩土器、須恵器蓋・皿・杯・壷・甕が出土している。

114は須恵器杯蓋で、115～118は杯Aである。底部に回転ヘラ切り痕を残す。117・118は墨書が認められる。117の墨書は「中」の字が１字分確認できるが、118の外面底部の墨書は不明である。119・120の杯蓋は、輪状のつまみをもつ119ともたない120がある。119は平坦気味の笠形で、口縁端部は緩やかに屈曲させて丸みを帯びる。120は天井部が平坦で回転ヘラ削りの痕跡を明瞭にとどめる。口縁端部は鋭く屈曲し、天井部との境に明瞭な稜をもつ。天井部には「町」の墨書が認められる。

121・122・131は土師器の杯である。内外面に回転ナデ調整を施す。131の外面底部には墨書が確認できる。

123～130・132は底部ヘラ切りの須恵器杯Aである。123のように底部が丸みを帯びるものもあるが、多くは平坦な底部である。132のように底径が大きく皿状を呈する杯もある。底部をヘラ切りで切り離したのち、底部周辺にナデ調整を施している。129は内面に「大町」の墨書が認められる。また126の外面底部には２文字の墨書が「宗□」と読める。「宗我」であろうか。127の外面底部には１字分の墨書が認められる。「西」の可能性が考えられる。130の外面底部にも墨書が認められるが判読はできない。高台をもつ133の皿は口縁端部が外反している。高台の端部の断面は四角形を呈する。

134～137は杯Bである。134の底部には墨書が認められるが判読はできない。

138は肩部が張り出した壷Lである。口縁端部をつまみ上げ、外面に面を作っている。

139の甕は、外面にタタキ、内面に同心円の当具痕が認められる。

出土した土器はおおむね８世紀前半を中心とした時期に比定されるが、133の皿および138の壷Lは８世紀後半～９世紀のものと考えられる。

SR1001－b　溝底（図版51～55・写真図版77～83）

土師器杯・製塩土器・甕、須恵器杯蓋・杯A・杯B・皿・壷・平瓶・横瓶・甕が出土している。

140・141は土師器杯Aである。142・143は底部ヘラ切りの杯Aである。口縁部は大きく外反し全体に器壁を薄く作っている。144は須恵器台付皿Aの模倣と考えられる土師器台付皿である。

145～147は土師器甕である。「く」の字状に屈曲する146と口縁端部をわずかに摘みあげた147がある。

148は製塩土器である。外面は指押さえ、内面は剥離が著しく調整は不明である。149は完形の土錘で

ある。

150～157は須恵器杯蓋である。笠形の天井部をもつ151・152と天井部が平坦な150・153～157がある。153は宝珠形のつまみを、157はボタン形のつまみをもつ。155の内面には墨痕が残り、157の天井部には「嶌山」の墨書が確認できる。

158～180は須恵器杯Aである。器の大きさに注目すると口径12cm前後、器高４cm前後、底径８cm前後の158～175の一群と口径10cm前後、器高３cm前後、底径９cm前後の176～178の一群、口径12～13cm前後、器高3.5cm前後、底径9.5cm前後の179・180の一群、口径10cm前後、器高３ cm前後、底径９ cm前後の176～178の一群に分かれる。出土した量から言えば大型の杯である158～175の一群が主流を占め、中型の179・180の一群と小型の176～178の一群が占める割合は低い。大型の杯158～169・171は内面もしくは外面体部と底部に墨書が認められる。158～160・162・163はいずれも内面に「中家」の墨書が認められる。161は内面に「西」、外面底部に「西丁ヵ」の墨書が認められる。164は「□□田家」の４文字分の文字が書かれているが、上２文字は判読できなかった。また、166・169は「家」の文字が断片的に読み取れる。171は「□田」、168・172は墨書の痕跡が認められた。特筆すべきは165の外面底部に書かれた「宗我西」の墨書である。「宗我」はおそらく当時の地名ないしは氏族名を表していると考えられ、当遺跡の性格を考える上で重要な発見である。中型の杯179は「□田」の墨書が認められるほか、中型の杯178にも「戸不ヵ」の文字が書かれている。

181～203は須恵器皿である。これらは杯Aの範疇として捉えることも可能であるが、ここでは皿として報告する。

181は口径13.6cm、器高２cmと浅い皿である。182～186は口径14cm前後、器高３cm前後の大きさである。器高が３cm前後と同じであるが、口径が14cm前後と少し大きい188～200がある。また口径が17cm前後と大きい202がある。量的には口径15cm前後の皿が多く、当遺跡での皿の主流と考えられる。

杯と同様、皿にも墨書が多く認められる。182・192・194は墨書の痕跡が認められるが判読はできなかった。以下判読可能なものを列挙すると185の「中」、193の「西」、191の「□種ヵ」、195の「野カ田□」、198の「木ヵ」・「林」、201の「宗我□」、202の「□」・「大田」、203の「上南ヵ」がある。これ以外に204～207の破片の中にも墨書が認められるものがあるが、206の「中家」以外は判読できなかった。

また、188のように内面の墨痕が確認でき、転用硯の可能性があるものや、200のように内面に煤らしきものが認められるものがある。

209は須恵器平高台の椀である。210・211は小型の須恵器杯Bである。210は体部が高台部からそのまま直線的に開く。211は体部が高台部からいったん外方に張り出し立ち上がる。212は輪状のつまみをもつ稜椀の蓋である。213の稜椀は全体的に器壁の厚い作りである。

214～220は口径15～18cm、器高６～８cmの大振りの杯Bである。いずれも高台部から直接体部が開く。218の内面にはヘラ記号が施され、外面底部には「上南家」の墨書がある。

221～226は須恵器壷である。221・222・224・226は高台をもつ壷Lである。223は胴部に２条の凸帯をもつ壷で、225は長頸壷である。

これ以外に228の平瓶や229の横瓶、230の丸底の甕が出土している。

溝底より出土した土器はおおよそ８世紀前半～９世紀代のものであるが、一部209の平高台椀や223の胴部に２条の凸帯を巡らせた壷などは10世紀代の可能性をもつ。

（２）１・２区包含層出土土器（図版56・57　写真図版89～92）

弥生土器の壷(231)・甕(232)、土師器小皿(233)・皿(234)・杯(235)・高台付皿(238)・碗(240)、土錘(236)、土製品(237)、瓦質火鉢(239)、須恵器椀(241)、須恵器小皿(242)・綾椀(243)・底部(244・245)・鉢(246・247)・水瓶(248)・短頸壷(249)・壷(250・251)、土師器擂鉢(252)、丹波焼擂鉢(253)、瀬戸美濃焼皿(254)、青磁皿(255)、瀬戸焼卸皿(256)、陶磁器皿(257)、青磁輪花皿(258)、青磁碗(259～262)、白磁碗(263～265)、平瓦(266～268)が出土している。

弥生土器の壷(231)は、底部のみである。外面にはミガキで仕上げた痕跡が認められ、底部付近はユビオサエが残る。弥生土器甕(232)は、底部のみである。内面はヘラケズリ、外面はタテハケの後にヘラミガキで仕上げる。土師器小皿(233)は、内湾気味に短く立ち上がる体部である。外内面は共に磨滅が激しい。土師器皿(234)は、口縁部付近で緩い綾をもって僅かに屈曲し、やや外反するものである。底部外面にはユビオサエが残る。杯(235)は、底部付近のみである。体部は、内面が抉れた底部から大きく開くものである。底部は磨滅のため糸切りかヘラ切りか判然としない。土錘(236)は、土師製の管状土錘である。片側が欠損している。土製品(237)は、欠損部分が多く詳細は不明だが、土馬の一部の可能性も考えられる。土師器高台付皿(238)は、底部付近のみである。平底から僅かな段をもって大きく開く体部と考えられる。底部はヘラ切りで、高台を貼付する。瓦質火鉢(239)は、小片で形態の詳細は不明である。大きく内湾する体部で、口縁端部は内側へ大きく張り出す。口縁部外面には、並行する２条の凸帯で画した内側に、唐草の連続文様を施す。・土師器椀(240)は、やや段を持つベタ高台から内湾せずに開く体部を持つ。底部はヘラ切りである。須恵器椀(241)は、段を持つベタ高台から内湾気味に開く体部を持つ。口縁端部は内側で面を成す。底部は回転糸切りである。また、口縁部には重ね焼きの痕跡が残る。

須恵器小皿(242)は、体部の中途で僅かな段を持ち、口縁部にかけてやや開くものである。底部は糸切りである。また、口縁部には重ね焼きの痕跡が残る。須恵器綾椀(243)は、口縁部のみである。明瞭な綾を持つ屈曲から、外反する口縁部を持つ。須恵器底部(244)は、ヘラ切りで高台を持つ。体部は、やや丸味を持って立ち上がるようで、壷の可能性も考えられる。須恵器底部(245)は、小片で詳細は不明だが、底部は糸切りである。須恵器鉢(246)は、口縁部のみである。口縁上端部、下端部で拡張して面を成す。須恵器鉢(247)は、底部のみである。底部は糸切りである。須恵器水瓶(248)は、頸部のみで詳細は不明だが、極細い頸部に２条の沈線を施している事から、同器種と判断したが、同じく銅製品の模倣である浄瓶の可能製も考えられる。須恵器短頸壷(249)は、口縁部付近のみである。大きく張る肩部から、頸部で強く窄まり、屈曲して直上に短く立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は上端部で面を成す。また、口縁部には重ね焼きの痕跡が残る。須恵器壷(250)は底部付近のみである。筒状の体部を成し、底部は糸切りである。須恵器壷(251)も、底部のみである。器形については不明であるが、底部はヘラ切りである。土師器擂鉢(252)は、口縁部の小片である。口縁部は、緩やかに屈曲して、上方に摘み上げたもので、内面に擂り目らしき痕跡が僅かに認められる。焼成が未熟な陶器の可能性も考えられる。丹波焼擂鉢(253)は、口縁部のみである。口縁端部付近で僅かに屈曲し、上方に立ち上がる。内面には、擂り目が僅かに認められる。瀬戸美濃焼皿(254)は、小片で詳細は不明だが、内湾気味に立ち上がるものである。

青磁皿(255)は、小片で詳細は不明だが、内湾気味に立ち上がる、比較的深いものである。瀬戸焼卸皿(256)、は底部片で内面に卸目を持つ、また、底部は糸切りである。陶磁器皿(257)は、小片で詳細は

不明だが、底部内面付近は釉剥ぎが認められる。青磁輪花皿(258)は、龍泉窯青磁の底部である。外内面にヘラ描きの施文が認められる。青磁碗(259)は、龍泉窯青磁碗の口縁部である。外面に鎬が退化した蓮花文を施す。青磁碗(260・261)は、底部のみである。共に小振りの高台を持つが、特に260の形態はシャープである。また、260は外内面共に施釉するが、261は、高台内部で露胎が認められる。青磁碗(262)は口縁部のみである。口縁端部付近で外反する。白磁碗(263・264)は、口縁部のみである。体部は、あまり内湾せずに開くものと考えられる。口縁端部は、小さな玉縁状を持つ。白磁椀(265)は、底部のみである。比較的足高な高台を持つ。見込み部分には沈線が認められる。平瓦(266・267)は、凹面に布目が残り、凸面は板ナデで仕上げる。平瓦(268)は、凹凸面共に板ナデで仕上げる。また、凹面には、離れ砂の痕跡が残る。

(3) 3区遺構出土土器

SB3001(図版57　写真図版93)

須恵器台付皿(269)が出土している。須恵器台付皿(269)は、低く開く体部で、口縁端部付近で外反して、上端部で面を成す。ヘラ切りの底部に高台を貼付する。

3－a区西端(図版57　写真図版93)

白磁紅皿(270)が出土している。白磁紅皿(270)は、型作りで、内面にのみ施釉している。

SK3001 (図版57　写真図版93)

製塩土器(271～274)が出土している。製塩土器(271・272)は、口縁部付近が僅かに張る、やや丸味のある鉢形を呈する。外内面には粘土接合痕が認められ、内面は斜め方向を基調とした強いナデで仕上げる。外面もナデ調整が見られるが、ユビオサエの痕跡が顕著である。製塩土器(273・274)は、口縁部付近の張りが比較的強い鉢形を呈する。外内面には粘土接合痕が認められ、内面は斜め方向を基調とした強いナデで仕上げる。外面もナデ調整が見られるが、ユビオサエの痕跡が顕著である。

参考文献

山田清朝他　2010 『大野遺跡』兵庫県埋蔵文化財調査報告　第380冊　兵庫県教育委員会

兵庫県教育委員会編　1995 『大陣原古窯跡群』兵庫県文化財調査報告　第140冊　兵庫県教育委員会

横田賢次郎・森田勉1978 「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館

森内秀造　2001 『志方窯跡群Ⅱ－投松支群－』兵庫県文化財調査報告　第217冊　兵庫県教育委員会

森内秀造・池田征弘2010 「東播窯・神出窯・三木窯・魚住窯」『古陶の譜　中世のやきもの－六古窯とその周辺』MIHO　MUSEUM他

2　石製品(図版58　写真図版94)

S1は、チャート製の石鏃である。両側縁は僅かに丸味を帯びるも、ほぼ直線を成す、凹基式の石鏃である。

S2は、硯である。裏面が剥離し、本来の厚みは不明である。外縁部分との深さの差があまりなく、浅いものであったようである。中央部分は使用痕跡の凹みが顕著に残る。

S3は、扁平な板状を呈する、粘板岩製と考えられるものである。一部に擦痕等の加工痕、また一部に自然面も残る。形状から、石庖丁の未製品の可能性が考えられる。

Ｓ４は、やや不定形であるが、砥石である。一部の剥離箇所を除いて、ほぼ全面に擦痕が認められる。

３　金属製品（図版59　写真図版29）

金属製品は、鉄斧（Ｍ１）、棒状鉄製品（Ｍ２）、椀形鉄滓（Ｍ３、Ｍ４、Ｍ７）、鉄滓（Ｍ５、Ｍ６、Ｍ８）が出土している。

Ｍ１は無肩の有袋鉄斧である。残存長さは11.2cm、刃部幅4.7cm、袋部外側幅4.5cm、袋部内側幅4.2cmを測る。袋部の底部から左右の折り返しが半分以上欠損しているが、断面は楕円形であったと考えられる。刃部は茎部との境目が最大厚で刃部に向かって薄くなっている。２区のSR1001－aから出土している。

Ｍ２は残存長17.0cm、最大幅0.6cmを測る。断面は方形で両端は尖っているが一方の先端は残存していない。漁労具のヤスである可能性も考えられる。１区のSD1006～出土している。

Ｍ３は椀形鉄滓をほぼ１／４に切断したものと思われ、２方向に切断痕が認められる。底面は比較的平滑で、上面は部分的に瘤化している。長さ3.3cm、幅4.1cm、厚さ2.2cm、重さ34.2gを測る。１区のSD1017から出土している。

Ｍ４は形が不定形でガラス質が多く多孔質で比較的軽量である。長さ4.1cm、幅3.4cm、厚さ2.1cm、重さ18.8gを測る。２－a区から出土している。

Ｍ５は形が不定形でガラス質が多く、比較的軽量である。長さ2.3cm、幅2.5cm、厚さ1.3cm、重さ6.1gを測る。１区のSD1013から出土している。

Ｍ６は形が不定形でガラス質が多く多孔質で、炉壁、石などを含む。長さ5.7cm、幅3.7cm、厚さ2.4cm、重さ42.1gを測る１区の西端から出土している。１区の西端から出土している。

Ｍ７は椀形鉄滓の一部である。１方向に切断面が認められる。長さ5.7cm、幅3.3cm、厚さ2.3cm、重さ30.9gを測る。１区のSD1017から出土している。

Ｍ８は形が不定形でガラス質が多く比較的軽量である。長さ3.1cm、幅1.7cm、厚さ1.2cm、重さ6.7gを測る。２－a区から出土している。

４　木製品（図版60～67　写真図版96～111）

１区・２区出土の木製品は77点図示した。以下、遺構ごとに述べてゆく。なお、本文中の上端・下端は特に断らない場合は、図化レイアウトの上下を指し、左右は図化した状態の木製品の左右を指す。

（１）SD1001－c

Ｗ１・Ｗ３～W14はSD1001－cより出土した。

Ｗ１は人形である。線刻にて眉・目・鼻・口を表現している。また頭頂部に穿孔がある。肩は張る。腕は欠失しているが腰部を表現して左右２本ずつの切り欠きがあったと考えられる。脚は一本脚で、全体の１／３近くを加工し尖らせている。

Ｗ３は頭部を欠いた人形である。肩は張る。腕は欠失している。腰部を表現せず左右２本ずつの切り欠きがあったと考えられる。脚は２本脚で、股部を丸く逆U字状に刳り込んでいる。脚の大部分及び足先は欠失しているが左脚は残存しており、折損の様子から地面に突き立てていた可能性が考えられる。

Ｗ４は両側面が加工され、下端が尖る一本脚の人形もしくは斎串と考えられる木製品である。上半は欠失している。下端先端についても折損している。

Ｗ５は両端を欠く薄板である。一端の側面が斜めに加工されており、木札あるいは形代の可能性がある。

Ｗ６は薄板を棒状に加工した木製品である。両端が炭化する。図化した左側面の大半及び右側面の下半は削り加工されており、下半が少し左へ反る形状から人形の胴から脚部を裂いた可能性も残る。

Ｗ７・Ｗ８・Ｗ９は付け木である。

Ｗ７の下端は水平に切られている。断面の形状は一定しない。上端は焼け焦げ炭化する。

Ｗ８は粗く割って作成している。細かな加工は加わっておらず、断面形状は一定しない。上端は焼け焦げ炭化する。

Ｗ９は細かく楔形に割られた材を付け木としている。上端は焼け焦げ炭化する。

W10は一端に刳り込みのある用途不明の部材である。両側面は加工されている。

W11は歯を削り出した連歯下駄の一部である。推定される全長は25㎝以内と小振りである。左右は不明である。

W12は棒状の不明木製品である。下端は折損する。中央部はやや膨らみ先端に向かって窄まる。断面形状は、下半は四角形、上半は多角形に削り出す。

W13・W14は木材の加工に伴う削り木端と考えられる。

（２）SD1001－a

W15～W25はSD1001－aより出土した。

Ｗ２は溝底の杭間から２つに分かれた状態で検出された。SD1001－cの最上層もしくは遊離した可能性が高い。顔面には刃物痕跡が目立ち、線刻にて眉・目・鼻・口を表現している。また頭頂部に烏帽子を表現する。肩は張る。腕は欠失しているが腰部を表現して左右１本ずつの切り欠きは確認できる。脚は一本脚で、全体の１/３以上を加工し尖らせている。先端は折損する。

W15は断面が方形の棒状の加工材である。両端を折損している。図化した上端には縦割りの切れ目を入れ、下端に面取り痕が認められる。砂入遺跡分類D類の斎串の可能性が考えられる。

W16・W17は容器である。

W16は曲物の底板もしくは蓋と考えられる。４か所に径２㎜の孔があく。補修孔の可能性がある。

W17は木皿である。底部のみで体部は残っていない。両端に再加工の痕跡が認められる。破損後、ヘラなどに再利用した可能性がある。

W18は柄もしくは棒状の木製品片である。上端は折損する。内部は空洞になっているが貫通しない。

W19・W20は矢板状に加工した板材である。

W19は下端の両側を短く加工して尖らせている。上端は欠く。

W20は下端の両側を長く加工して尖らせている。上端及び下端の先端を欠く。

W21は細長い薄板材である。上端は残るが、一部、刃物による折損がある。下端は欠く。両側面は残存する。用途は不明である。

W22・W23は丸木杭の一部と考えられる。

W22は上部、下端は欠損する。下端には３方向の削りが残り、先端を尖らせていたと考えられる。

W23は上部、下端は欠損する。下端は多数の削り加工痕が残り、先端を尖らせていたと考えられる。

W24・W25は角杭である。

W24は、側面を粗く手斧によって加工した断面四角形の杭である。上部は欠損する。下端は多数の削

り加工痕が残り、先端を尖らせている。上部は炭化しており、地表あるいは水中に露出していたと考えられる。また側面には２か所焼痕がある。

W25は粗く割って作った断面三角形の杭である。両端が尖るが加工痕は明確ではない。全体に炭化するが、火化によるものではない。

（３）SD2005

W26～W29はSD2005より出土した。

W26は黒漆椀である。内外面に黒漆を塗るが残存状態はよくない。体部は緩やかに外方へ開く。底部は突出した平底である。

W27は付け木である。面は加工されており、断面長方形の棒状木製品を再利用したと考えられる。下端は表・裏・両側面を削り尖らせている。先端の断面形状は矩形である。上端は火による炭化がみられる。状況から斎串の使用後、火を付けた可能性がある。

W28はW27同様断面長方形の棒状木製品を再利用した付け木である。上端は火による炭化がみられ、下端は欠損している。

W29は細く楔形に割られた材を付け木としている。細かな加工は加わっておらず、断面形状は一定しない。上端は焼け焦げ炭化する。

（４）SX2001

SX2001は２－b区東端の東に向かう谷状の落ち込みである。W30はSX2001を貫通した排水側溝から出土した木簡である。文字は墨が抜け落ち痕跡のみ遺存している。容器の底板と考えられる薄板材に三行５字分記される。中央の一文字は佐か、そのほかについては不明である。数行にわたる文章の一部と考えられる。

（５）SR1001－b

W31～W60はSR1001－bより出土した。

W31は天罰印（符籙）急々如律令ではじまる呪符木簡である。文言は２行にわたる。下端と右辺は折損・欠失している。また、上端は斜めに再加工されている。上端左隅が丸く削り出されているが、これは呪符作成時の加工であろう。

本木簡は取り上げ時、SR1001のa・bどちらから出土しているか判断することが困難な状況であったが、鎌倉時代の遺物堆積層よりも下層から出土していることは明確であったためSR1001－bに対応すると考えた。

W32は人形である。線刻にて目・鼻・口を表現している。また首から肩への切り欠きは撫で肩(大平a種)で、古い様相をもつ。腕は欠失しているが腰部の張りを表現して左右１本づつの切り欠きがあったと考えられる。脚は一本脚で、全体の１/４近くを加工し尖らせている。本人形は腕付近で折損しており地面に突き刺していた可能性がある。

W33は斎串である。素材のねじれをそのままに使用している。上端は圭頭に加工し、下端についても削りこみ矩形に加工している。この加工状況と形態から斎串と判断した。断面形状は四角く、通常の薄板材の使用ではない。切り欠きはない。

W34は斎串である。断面が長方形のやや厚めの板材を加工した棒状を呈する。上端はやや斜めにカットし、縦割りの切れ目を入れる。下端は両側面を加工し尖らせている。砂入遺跡分類D類の斎串の可能性が考えられる。

W35・W36は斎串の可能性がある棒状木製品である。

W35は断面形状が四角い。下端は矩形に加工し、上端にはW34に見られる縦割りは認められない。

W36は下端を斜めに加工しており、上端は焼け焦げている。断面形状は角柱に近い。砂入遺跡F類に類似する。

W37・W38は箸状の形状をもつ斎串である。ともに端部が焼け焦げ、一端が木目に沿って解れ、花開いた状態である。

W37は頭部が圭頭を呈し、下端は解れを復元したところ尖った状態であることが判明した。砂入遺跡C２類の斎串と考えられる。下半に傷がありその部分より解れることから、下半部で縛られるなど固定されていた可能性もある。

W38は損傷が激しいが、W37と同様、下端部が尖り、砂入遺跡C2類の斎串と考えられる。頭部は焼け焦げ、形状の復元にはいたらなかった。

W39～W43は箸状の形状をもつ斎串で砂入遺跡C類の一部と考えられる木製品の破片である。W39・W40・W41は断面形状が四角い棒状の破片である。両端を欠失している。

W41はやや幅が広く一端には縦割りの切れ目が入る。

W42はW41に類似する木製品である。この部分には縦割りの切れ目は認められない。

W43は下端を細く尖らせ、上端については欠損するが、一側面を平坦に削り出している。砂入遺跡C2類に類似する斎串と考えられる。

W44は陽物と考えられる。上端部は丁寧に加工を施し、形状を描出している。

全体に丁寧に面取りを行い下端へ向け細く削りだしている。下端は若干欠失するがほぼ全体が残っていると考えられる。

W45は丸の先端を２方向から加工してくびれを表現しており、W44と同様に陽物と考えられる。下端側は欠損している。

W46・W47は用途不明の棒状木製品である。

W46は上端が角頭、下端が尖る。上半がやや太くなる。

W47は丸木の棒状木製品である。一端は折損し、一端は切断されている。

W48・W49は木皿である。ともに高台はない。

W48は内外面ともに細かな刃物痕が無数につく。

W49は内面に若干の刃物痕がつく。

W50は曲げ物の側板の破片である。

W51は用途不明の部材である。全体を剣形に造り出し、下端には角枘を削り出している。角枘先端には切り込み痕がある。

W52は付け木に使用された不明木製品である。下端は中子状に加工しており、先端に向かって細くなる。刀形の可能性がある。先端部は焼け焦げている。

W53は細く楔形に割られた板材を付け木としている。先端は尖っているが、細かな加工は加わっておらず、断面形状は一定しない。上端は焼け焦げ炭化する。

W54はやや粗く加工された板材である。下端は斜めに切り出している。上半は焼け焦げており旧状は詳らかではない。砂入遺跡D類の可能性が高い。

W55は断面が長方形の棒状材を付け木に使用している。中位に緩やかな窪みがあり、下端に向かって

幅広になる部材である。下端には刻み目が存在するが用途・意図は不明である。上端は焼け焦げている。

W56は断面が長方形の長い棒状材を付け木に使用している。下端は端部が加工され、上端は焼け焦げている。

W57は付け木である。粗く割って作成している。細かな加工は加わっておらず、断面形状は一定しない。上端はよく燃え炭化する。

W58は一端が切断された板材である。全体に火を受け炭化している。

W59は柾目の薄板材である。上下端を欠損しており、右側面のみ旧状を留める。

W60は丸木の杭材である。上端は欠損し、下端は８面にわたって削り、尖らせている。材の所々に刃物痕が残る。

（６）SR1001－a

W61～W77はSD1001－aより出土した。

W61は棒状の材を使用した人形と考えられる。棒材を半裁し、中位より下を尖らせる。平面は削りをかけ、上半表面は特に丁寧に削り、線刻にて眉・目・口を表現している。裏面は大きく２度削り、後頭部にあたる部分を斜めに表現している。腕はない。

W62～W68は祭祀具の可能性のある用途不明品である。

W62は先端を尖らせる不明木製品である。上端を欠損している。大きく縦割れが入るが人為的か否かは不明である。下半は丁寧に削り面取りを行っている。

W63は先端が尖る断面が四角形の棒状木製品である。上端を欠損している。下端は削られ尖っている。表裏面を平滑に加工するが、両側面の加工は粗い。斎串もしくは付け木に加工された板材と考えられる。火化の痕跡はない。

W64は薄板材を細く加工した木製品である。下端はやや湾曲し、先端は細くなる。上端は折損している。縦割りの切れ目は認められないが、砂入遺跡C1類の斎串の可能性が高い。

W65は断面長方形の棒状木製品の一部である。上下端を折損している。上端は刃物をあて折り取られている。W27同様、斎串の可能性がある。

W66は粗く割って細長く材を造りだした木製品である。下端が尖り、中位がくびれ、上端はほんの少し圭頭に削られているため、斎串の可能性があるが明確ではない。

W67はやや粗く加工された断面長方形の材である。上下端は薄く削り出されておりW54と類似した斎串の可能性があるが明確ではない。

W68は丁寧に面取りが施された棒状の小型木製品である。上端から下端にかけて緩やかに細くなる。頭頂部と下端部は丸く削りだされ、側面の一面は幅広く平坦に削り出されている。形状から陽物の可能性もあるが明確ではない。

W69～W74は容器である。

W69は木皿である。口縁部は短く、底部は平底で高台はない。内外面に多数の刃物痕がつく。また、内面に１点焼痕がある。

W70は曲物の底板もしくは蓋板である。内面に側板を止める桜皮の綴じ孔と円形の毛引き線がある。綴じ孔の位置は４か所である。

W71は曲物の底板である。側面に２か所釘孔が認められる。内外面に多数の刃物痕がつく。

W72は曲物の底板もしくは蓋板の破片である。内面に多数の刃物痕がつく。釘孔・綴じ孔は認められ

ない。

W73は曲物の底板もしくは蓋板の破片である。内面に多数の刃物痕がつく。釘孔・綴じ孔は認められない。W72と同一個体の可能性があるが、接合はしない。

W74は折敷の底板と考えられる板材である。右隅が丸く面取りされる。上辺・左側面・下辺は欠損している。

W75・W76は杭材である。

W75は、側面を粗く手斧によって加工した断面四角形の角杭である。上端は欠損する。下端は多数の削り加工痕が残り、先端を尖らせている。上部は炭化しており、地表あるいは水中に露出していたと考えられ、端部に向かって痩せている。

W76は、側面を加工しない断面半円の杭である。下端は多数の削り加工痕が残り、先端を尖らせている。上部は炭化しており、地表あるいは水中に露出していたと考えられ、端部に向かって痩せ、端部は尖る。

表16　曽我井・沢田遺跡出土土器観察表

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法量(cm)		
									口径	器高	底径
1	46	67	須恵器	椀	1区	SB1001	1-1		(11.8)	(3.0)	−
2	46	67	須恵器	椀	1区	SB1004	P0001-3		(12.85)	(4.5)	−
3	46	67	須恵器	皿B	2区	P2002			−	(2.6)	(19.2)
4	46	67	土師器	皿	1区	P1030			(14.6)	(2.5)	−
5	46	67	弥生土器	壺	2区	P2003			15.9	(4.9)	−
6	46	67	須恵器	小皿	1区	SK1001		底部回転ヘラ切り	(8.65)	(1.75)	(6.15)
7	46	67	須恵器	椀	1区	SK1001		底部回転糸切り	−	(2.3)	(6.8)
8	46	67	須恵器	壺(長頸壺)?	1区 東端	SR1001-b	南肩　集石部	底部2条の沈線	−	(11.3)	−
9	46	68	土師器	鍋	1区	SD1001-a(C区)	下層最下		(31.3)	(4.7)	−
10	46	67	須恵器	杯B蓋	1区	SD1001-a	C区 第2層 濁灰シルト	一部板ナデ	(15.4)	(1.8)	−
11	46	68	須恵器	椀	1区	SD1001-a(B区)		底部回転糸切り	−	(3.1)	5.6
12	46	68	土師器	杯	1区	SD1001-c(A区)	最上部	足高高台杯	−	(3.6)	(7.9)
13	46	68	土師器	杯	1区	SD1001-c	粗砂上面	底部糸切り	15.9	4.0	8.4
14	46	67	土師器	杯	1区	SD1001-c(B区)	砂層(11-12層)	底部回転糸切り	14.5	4.2	7.7
15	46	67	須恵器	椀	1区	SD1001-c(B区)	砂層(11-12層)	外面指押さえ 底部回転糸切り	15.7	5.0	5.8
16	46	67	須恵器	椀	1区	SD1001-c(A区)	砂層(11-12層)		(14.5)	(4.9)	−
17	46	67	須恵器	椀	1区 西端	SD1001-c		底部回転ヘラ切り	−	(3.7)	4.2
18	46	67	須恵器	椀	1区	SD1001-c(C区)	盛土層		(14.9)	(4.2)	−
19	46	68	須恵器	椀	1区	SD1001-c(A区)	砂層(11-12層)	底部回転糸切り	−	(3.0)	5.8
20	46	68	須恵器	椀	1区	SD1001-c(C区)	盛土層	底部回転糸切り	−	(2.3)	6.2
21	46	67	弥生土器	甕	1区	SD1001(E区)	上層(粗砂)		14.7	(7.8)	−
22	46	68	弥生土器	壺	1区	SD1001(G区)			−	(6.5)	−
23	46	67	土師器	小型壺	1区	SD1001(F区)		底部回転糸切り	6.6	4.6	5.3
24	46	67	須恵器	椀	1区	SD1001上層			(16.3)	(2.8)	−
25	46	67	土師器		1区 №9・10	SD1001断ち割	断面清掃	底部回転ヘラ切り後ナデ	(16.4)	5.7	9.0
26	46	68	須恵器	壺	1区	SD1001(上層)	茶灰色混礫土	底部回転ヘラ切り	−	(7.1)	(11.0)
27	47	69	須恵器	鉢(片口)	1区	SD1012			−	(8.2)	−
28	47	69	須恵器	椀?	1区	SD1015			不明	(2.6)	−
29	47	69	土製品	管状土錘	1区	SD1010	1層		長3.6+	幅1.3	重1.4
30	47	69	土師器	鉢	1区	SD1013			−	(7.6)	−
31	47	69	須恵器	椀	1区	SD1013		底部回転糸切り	−	(3.5)	5.6
32	47	69	須恵器	椀	1区	SD1013		底部回転糸切り	−	(2.6)	5.2
33	47	68	瓦器	椀	1区	SD1017		内外面横方向のミガキ	(12.1)	(3.2)	−
34	47	68	須恵器	小皿	1区	SD1017		底部回転ヘラ切り	9.7	2.1	6.2
35	47	68	須恵器	椀	1区	SD1017			(11.2)	(3.4)	−
36	47	68	須恵器	椀	1区	SD1017		底部回転糸切り	−	(2.3)	5.0
37	47	68	須恵器	椀	1区	SD1017		底部回転糸切り後ナデ	−	(4.0)	6.0
38	47	68	須恵器	椀	1区	SD1018			−	(1.9)	5.4
39	47	68	弥生土器	底部?	1区	SD1019			−	(2.2)	(10.0)
40	47	69	土師器	小皿	2区	SD2005	粗砂　底	底部回転糸切り	(8.0)	1.47	(5.7)
41	47	68	須恵器	椀	2区-a	SD2005	溝底　粗砂	底部回転糸切り後ナデ	16.0	4.37	6.0
42	47	68	須恵器	椀	2区	SD2005		外面指押さえ 底部回転糸切り	(16.4)	(4.87)	6.36
43	47	68	須恵器	椀	2区-a	SR2001		底部回転糸切り	15.8	5.5	4.3
44	47	68	弥生土器	甕	2区	SR2001	最上層(a層)黒褐シルト		−	(4.5)	−
45	47	69	土師器	羽釜	1区 №9-10	SR1001-a	第1層　茶灰色混礫土	体部外面横方向平行タタキ 内面同心円充て具痕	(42.8)	(6.6)	−
46	47	69	須恵器	椀	1区 №9-10	流路上面まで		底部外面墨書あり「苗」か	−	(3.1)	6.3
47	47	69	青磁	碗	1区 №9-10	SR1001-a	第1層　茶灰色混礫土	底部回転糸切り 見込み部花文	−	(1.95)	(6.1)
48	47	69	磁器	白磁碗	1区 №8～9	流路上面まで		外面無釉	−	(2.15)	(6.85)
49	48	70	土師器	小皿	2区(サブトレ1以東)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	底部回転糸切り	8.1	1.17	5.5
50	48	70	土師器	小皿	2区(サブトレ1以東)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	手づくね成形 内外面口縁部ヨコナデ	8.04	1.8	7.2
51	48	70	土師器	皿	2区(サブトレ1以東)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	手づくね成形 外面口縁部ヨコナデ 外面体部指押さえ	(13.5)	(2.6)	12.2
52	48	70	土師器	杯	2区(サブトレ1以東)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	底部回転糸切り 内外面回転ナデ 底部と体部との境指押さえ	(15.7)	3.47	9.0
53	48	70	土師器	堝	2区(サブトレ2.5～3間)	SR1001	砂より上(砂は含まない)	外面タタキ 内面ナデ	(24.9)	(6.6)	−
54	48	70	土師器	堝	2区(サブトレ2～3間)	SR1001	底部(砂の途切れる中央)	外面タタキ 内面当具痕(同心円)	22.9	(5.2)	−
55	48	70	土師器	堝	2区(サブトレ1以東)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	外面タタキ 内面当具痕(同心円) 外面煤付着	?	(8.3)	−
56	48	70	土師器	堝	1区	SR1001-a	溝層　粗砂より上	外面タタキ 内面粗いナデ 外面煤付着	(23.2)	(10.3)	−
57	48	70	土師器	堝	2区(トレンチ2以西)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	外面タタキ 内面当具痕(同心円) 外面煤付着	(25.0)	(7.4)	−
58	48	70	土師器	堝	2区(サブトレ1以東)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	外面タタキ 内面当具痕(同心円) 外面煤付着	24.3	(17.2)	−
59	48	70	土師器	堝	2区(サブトレ1以東)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	外面タタキ? 内面ナデ 外面煤付着	(20.8)	(5.8)	−
60	48	70	土師器	甕	1区№10	東側溝	流路中　粗砂より上	外面ハケ目 内面ナデ 外面煤付着	(15.8)	(6.4)	−
61	48	70	土師器	甕	2区(サブトレ2以西)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	外面ハケ目 内面ナデ 外面煤付着	(40.7)	(14.5)	−
62	48	70	土師器	堝	1区	SR1001 西半ステップ部分	茶灰シルト	内外面ハケ目	(44.0)	(7.9)	−
63	48	70	土製品	土錘	1区	SR1001-a	溝層 粗砂より上	磨滅	長4.45	幅1.23	厚1.12
64	48	70	土製品	土錘	2区(サブトレ1以東)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)		長3.6+	幅1.08+	厚1.07+
65	48	70	瓦器	椀	2区(西端)	SR1001	砂よりも上(砂は含まない)	内外面ミガキ	(14.2)	(4.2)	−
66	49	72	瓦器	小皿	2区(サブトレ1以東)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	底部回転糸切り 全面黒化 ミガキなし	(8.9)	1.5	4.72

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)		
									口径	器高	底径
67	49	71	須恵器	小皿	2区(サブトレ1以東)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	底部回転糸切り 完形	8.2	2.2	4.3
68	49	71	須恵器	中皿	2区(西端)	SR1001	砂よりも上(砂は含まない)	底部回転糸切り 完形	10.6	1.9	6.3
69	49	71	須恵器	椀	2区(サブトレ1以東)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	墨書あり 底部回転糸切り	(15.5)	4.5	(5.6)
70	49	71	須恵器	椀	1区№9～10	SR1001-a	第2層 茶灰シルト	底部回転糸切り	16.0	4.7	6.0
71	49	71	須恵器	椀	2区(サブトレ1以東)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	底部回転糸切り	16.4	4.4	5.0
72	49	71	須恵器	椀	1区№9～10	SR1001-a	第2層 茶灰シルト	底部回転糸切り	(16.7)	4.8	5.3
73	49	72	須恵器	椀	2区(サブトレ1以東)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	墨書か? 底部回転糸切り	－	(1.8)	5.5
74	49	72	須恵器	椀	1区№9～10	SR1001-a	第2層 茶灰シルト	墨書あり 底部回転糸切り	－	(1.8)	6.0
75	49	71	須恵器	椀	1区	SR1001西半ステップ部分	茶灰シルト	墨書「西殿」 底部回転糸切り	(16.5)	6.7	5.75
76	49	71	須恵器	鉢	2区(西端)	SR1001	砂よりも上(砂は含まない)	底部ヘラ起こし	(22.2)	(9.85)	(13.9)
77	49	72	須恵器	鉢	1区№9～10	SR1001-a	第2層 茶灰シルト		(29.4)	(7.4)	－
78	49	71	須恵器	甕	2区(サブトレ1以東)	SR1001	砂層より上(砂層は含まない)	外面タタキ 内面当具痕(同心円)	(34.2)	(39.4)	－
79	49	72	白磁	碗	1区№9周辺	SR1001-a	第2層 茶灰シルト		(14.6)	(4.6)	－
80	49	72	須恵器	杯A	1区	SR1001西半ステップ部分	茶灰シルト	底部回転ヘラ切り	(11.75)	(3.0)	(9.1)
81	49	72	灰釉陶器	椀	2区(サブトレ1-2間中央)	SR1001	砂層上面		?	(3.8)	－
82	50	73	土師器	灯明皿	2区(サブトレ2.5～3間)	SR1001	砂のみ	底部回転糸切り	7.8	1.27	6.0
83	50	74	土師器	杯	2区　サブトレ1	SR1001	砂層(砂層のみ)	高高台杯	－	(2.8)	(9.8)
84	50	73	土師器	堝	2区(サブトレ2以西)	SR1001か	砂層のみ	外面タタキ 内面粗いナデ 外面煤付着	(25.6)	(8.7)	－
85	50	73	土師器	甕	1区　№9～10	SR1001-a	第3層 粗砂	外面ナデ(縦方向) 内面ナデ 外面煤付着	(17.4)	(6.8)	－
86	50	73	土師器	甕	2区(サブトレ1-2の間?)	SR1001	砂層のみ	外面タタキ 内面ナデ 煤付着	(30.6)	(9.4)	－
87	50	74	瓦器	椀	2区(サブトレ1-2の間?)	SR1001	砂層のみ	見込みジグザグ文	－	(2.8)	(5.2)
88	50	73	須恵器	小皿	2区-a 西端	SR1001-a		底部回転糸切り	7.5	1.3	4.2
89	50	73	須恵器	小皿	2区	SR1001		底部回転糸切り	7.6	1.2	4.7
90	50	73	須恵器	小皿	2区	SR1001		底部回転糸切り	7.7	1.6	4.2
91	50	73	須恵器	小皿	2区	SR1001		底部回転糸切り	7.2	2.0	4.1
92	50	73	須恵器	小皿	2区	SR1001		底部回転糸切り	7.4	1.8	4.1
93	50	73	須恵器	小皿	2区	SR1001		底部回転糸切り	7.6	1.7	4.6
94	50	73	須恵器	小皿	2区	SR1001		底部回転糸切り	8.7	2.1	5.6
95	50	73	須恵器	小皿	2区(サブトレ2.5～3間)	SR1001	砂のみ	底部回転糸切り	7.6	2.1	5.2
96	50	73	須恵器	小皿	2区	SR1001		底部回転糸切り	10.6	2.2	5.7
97	50	73	須恵器	椀	2区(サブトレ2≈2.5間)	SR1001	砂層のみ	底部回転糸切り	15.8	4.2	5.6
98	50	73	須恵器	椀	2区	SR1001		底部回転糸切り	16.8	4.6	5.76
99	50	74	須恵器	椀	1区 №9～10	SR1001-a	第3層 粗砂	底部回転糸切り	15.1	4.5	5.2
100	50	74	須恵器	椀	2区	SR1001		底部回転糸切り	15.5	4.9	5.0
101	50	74	須恵器	椀	1区 №9～10	SR1001-a	第3層 粗砂	底部回転糸切り	(15.5)	5.4	5.4
102	50	74	須恵器	椀	1区 №9	断ち割	流路中	底部回転糸切り	14.95	5.5	5.8
103	50	74	須恵器	椀	1区	SR1001-aステップ部分	中層 粗砂	底部回転糸切り	－	2.6	6.0
104	50	74	須恵器	椀	1区 №9－10	SR1001-a	溝底・第3層 粗面	底部回転糸切り	(15.8)	3.55	－
105	50	74	須恵器	椀	2区(サブトレ1-2の間?)	SR1001	砂層のみ	墨書あり 底部回転糸切り	16.66	6.35	5.5
106	50	74	須恵器	椀	2区	SR1001	砂層のみ	底部回転糸切り	－	(2.8)	5.96
107	50	74	須恵器	捏鉢	2区	SR1001			(33.1)	10.5	(12.1)
108	50	74	黒色土器	杯	1区 東半	SR1001-a	下層 灰シルト		(12.4)	(3.0)	(8.8)
109	50	74	土師器	杯	1区 東半	SR1001-aステップ部分	下層 灰シルト	足高高台杯	－	(2.3)	(7.7)
110	50	74	須恵器	皿	1区東半	SR1001-a	下層 灰シルト		(13.75)	(2.25)	(8.0)
111	50	74	須恵器	椀	2区(№11付近)	SR1001a, b	砂層よりも下	墨書あり	－	(3.5)	(5.4)
112	50	74	須恵器	壺(長頸壺)	1区 東半	SR1001-a	下層 灰シルト	墨書あり	－	(5.9)	－
113	51	76	製塩土器	鉢	1区 東端	SR1001-b	溝肩 茶灰シルト	内面布目	?	(4.6)	－
114	51	76	須恵器	杯蓋	1区	SR1001	上層-外側		(13.2)	(2.4)	
115	51	75	須恵器	杯A	1区 東端	SR1001-b	溝肩 茶灰シルト		13.45	3.6	10.05
116	51	76	須恵器	杯A	1区 東端	SR1001-a含む	溝肩		14.1	2.8	11.7
117	51	76	須恵器	杯A	1区 東端	SR1001-b	溝肩 茶灰シルト	墨書「中」	(12.1)	(2.9)	－
118	51	76	須恵器	杯A	1区 東端	SR1001-b	溝肩 茶灰シルト	墨書あり	－	(2.0)	7.9
119	51	75	須恵器	杯蓋	1区	SR1001	下層(奈良)-内側	天井部回転ヘラ削り	(18.9)	(3.8)	
120	51	75	須恵器	杯蓋	1区 №9～10	SR1001-b	上半 暗灰シルト	天井部回転ヘラ削り 墨書「町」	13.0	2.0	
121	51	76	土師器	杯	1区 №9～10	SR1001-b	上半 暗灰シルト	内画面回転ナデ 底部未調整	(12.6)	2.6	7.0
122	51	76	土師器	杯	1区	SR1001-bステップ部分	溝底 暗灰シルト	内外面回転ナデ	(13.3)	(2.9)	－
123	51	76	須恵器	杯A	1区	SR1001	下層(奈良)-内側	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	(12.2)	3.9	(8.2)
124	51	75	須恵器	杯A	1区 №9～10	SR1001-b	断ち割	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	(12.3)	4.0	(9.1)
125	51	75	須恵器	杯A	1区 №9～8	SR1001-b	上半 暗灰シルト	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	(11.6)	3.55	(8.1)
126	51	75	須恵器	杯A	1区	SR1001	下層(奈良)-内側	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「宗口」	(12.1)	4.1	(9.0)
127	51	75	須恵器	杯A	1区	SR1001	下層(奈良)-内側	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「西」?	13.1	3.5	9.6
128	51	76	須恵器	杯A	1区	SR1001-a	土手①	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	(12.8)	3.5	9.1
129	51	76	須恵器	杯A	1区	SR1001	下層(奈良)-内側	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「大町」	－	(2.0)	(8.3)
130	51	76	須恵器	杯A	1区	SR1001	下層(奈良)-内側	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書あり	－	(1.4)	－
131	51	76	土師器	杯A?	1区 №8-7	SR1001-b(奈良)	暗灰シルト(奈良)	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書あり	－	(2.9)	(9.6)
132	51	76	須恵器	杯A	1区	SR1001-b(奈良)	板材の下	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	(14.0)	(2.65)	11.95

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)		
									口径	器高	底径
133	51	76	須恵器	皿	1区	SR1001-b(奈良)	土手②	内外面回転ナデ	(13.2)	(2.68)	(8.0)
134	51	76	須恵器	杯B	1区 №8～9	SR1001-b 断ち割		内外面回転ナデ 墨書あり	(15.7)	5.4	(11.9)
135	51	76	須恵器	杯B	1区	SR1001	下層(奈良)-内側	内外面回転ナデ	(14.5)	5.5	(9.4)
136	51	76	須恵器	杯B	1区	SR1001	下層(奈良)-内側	内外面回転ナデ	(15.6)	(5.5)	－
137	51	76	須恵器	杯B	1区	SR1001	下層(奈良)-内側	内外面回転ナデ	－	(3.6)	(9.1)
138	51	76	須恵器	壺L	1区	SR1001	下層(奈良)-内側		9.2	(24.0)	10.6
139	51	76	須恵器	甕	1区	SR1001	下層(奈良)-内側	外面タタキ 内面当具痕(同心円)	(27.25)	(7.45)	－
140	52	77	土師器	杯A	2区-a	SR1001-b	下半		12.76	3.1	10.16
141	52	77	土師器	杯A	2区-a	SR1001-b			(12.9)	3.2	10.5
142	52	77	土師器	皿	2区-a	SR1001-b		底部ヘラ切り	(12.6)	3.6	8.2
143	52	77	土師器	杯	1区 №9周辺	SR1001-b	下層 粗砂	底部ヘラ切り	13.0	3.4	7.0
144	52	77	土師器	台付皿	2区-a	SR1001-b		高台部貼り付け	(2.14)	3.6	6.0
145	52	78	土師器	甕	1区 東端	SR1001-b	粗砂(溝底)		－	(3.6)	－
146	52	78	土師器	甕	2区-a	SR1001-b		外面ハケ目 内面ハケ目 外面煤付着	(17.1)	(8.4)	－
147	52	78	土師器	甕	2区-a	SR1001-b		外面ハケ目 内面ナデ 外面煤付着	(17.9)	(8.6)	－
148	52	77	製塩土器	鉢	1区 東端	SR1001-b	粗砂(溝底)	外面指押さえ	(15.6)	(8.6)	－
149	52	78	土製品	土錘	1区 №9～10	SR1001	溝底付近	完形	長5.08	幅1.45	厚1.4
150	52	77	須恵器	杯蓋	1区 №9～10	SR1001	溝底付近		(13.8)	(1.75)	
151	52	78	須恵器	杯蓋	1区	SR1001-b	溝底		(13.8)	(3.3)	
152	52	78	須恵器	杯蓋	2区-a	SR1001-b			(15.5)	(2.6)	
153	52	77	須恵器	杯B蓋	2区-a	SR1001-b			11.3	2.8	
154	52	78	須恵器	杯蓋	1区	SR1001-a 西半	溝底砂層 ステップ		(12.25)	(2.0)	－
155	52	78	須恵器	杯蓋(転用硯)	1区 №9	SR1001-b	溝底	内面墨痕	(12.6)	1.5	
156	52	78	須恵器	杯蓋	1区 №10	東側溝	流路下半		－	(1.9)	
157	52	77	須恵器	杯蓋	2区-a	SR1001-b		墨書「嶌山」	(18.3)	2.85	
158	52	79	須恵器	杯A	1区	SR1001-b	溝底	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「中家」	12.1	3.6	8.2
159	52	79	須恵器	杯A	1区 №9	SR1001-b	溝底	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「中家」	12.0	3.7	(8.3)
160	52	79	須恵器	杯A	1区 東端	SR1001-b	溝底まで	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「中家」	12.6	4.9	9.0
161	52	79	須恵器	杯A	1区 東端	SR1001-b	溝底まで	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書内面「西」 外底「西丁ヵ」	12.6	4.0	8.5
162	52	80	須恵器	杯A	2区-a	SR1001-b底		底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「中家」	12.4	4.3	9.0
163	52	80	須恵器	杯A	2区-a	SR1001-b		底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「中家」	(12.4)	4.1	8.2
164	52	80	須恵器	杯A	2区-a	SR1001-b		底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「□□田家」	12.26	3.7	9.1
165	53	80	須恵器	杯A	2区 №11付近	SR1001-a、b	砂層より下	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「家」	12.5	3.95	9.44
166	53	81	須恵器	杯A	1区 №9	SR1001-b	溝底	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「宗我西」	(12.4)	3.9	(8.5)
167	53	80	須恵器	杯A	1区 東端	SR1001-b	溝底	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	12.2	4.0	8.0
168	53	88	須恵器	杯A	1区 №9-10	SR1001-b	溝底付近まで	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書あり	(12.5)	3.6	(8.8)
169	53	81	須恵器	杯A	1区 東端	SR1001-b	溝底まで	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「家」	(13.1)	3.9	(9.2)
170	53	80	須恵器	杯A	2区-a	SR1001-b		底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	11.8	3.6	8.9
171	53	81	須恵器	杯A	1区 №9-10	SR1001-a	溝底 第3層 粗面	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「□田」	(12.5)	3.7	8.2
172	53	81	須恵器	杯A	2区-a	SR1001-b		底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書あり	(12.4)	(3.65)	(8.8)
173	53	81	須恵器	杯A	2区	SR1001-b		底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 引掻き傷あり	(13.0)	4.1	8.42
174	53	81	須恵器	杯A	1区 №9～10	SR1001	溝底付近	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	12.4	3.95	8.65
175	53	81	須恵器	杯A	1区 №9～10	SR1001	溝底付近	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	(14.4)	(4.1)	9.5
176	53	88	須恵器	杯A	1区 №9～10	SR1001-a	第3層 粗砂	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	(10.9)	(2.8)	(8.85)
177	53	81	須恵器	杯A	1区 東端	SR1001-b	粗砂(溝底)	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	11.9	2.9	9.5
178	53	81	須恵器	杯A	1区 東端	SR1001-b	溝底まで	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「戸不ヵ」	(12.5)	2.8	(9.0)
179	53	81	須恵器	杯A	1区 東端	SR1001-b	溝底まで	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「□田」	(13.0)	3.5	9.8
180	53	82	須恵器	杯A	1区 東端	SR1001-b	粗砂(溝底)	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書あり	(13.8)	3.3	(9.2)
181	53	82	須恵器	皿	2区-a	SR1001-b		底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	13.6	2.0	11.2
182	53	82	須恵器	皿	1区 東端	SR1001-b	粗砂(溝底)	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書あり	(13.6)	(2.8)	(11.6)
183	53	88	須恵器	皿	1区 東端	SR1001-b	粗砂(溝底)	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	14.2	2.7	12.2
184	53	82	須恵器	皿(転用硯)	2区-a	SR1001-b		底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 外底・内面墨痕	14.1	2.8	12.1
185	53	83	須恵器	皿	2区-a	SR1001-b		底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「中」	(14.4)	3.1	(11.6)
186	53	82	須恵器	皿	1区 №9～10	SR1001	溝底付近	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	13.9	2.8	11.6
187	53	83	須恵器	皿	2区-a	SR1001-b		底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書あり	－	(1.6)	(9.7)

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)		
									口径	器高	底径
188	53	88	須恵器	Ⅲ(転用硯)	1区 東端	SR1001-b	粗砂(溝底)	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨痕あり	(14.6)	2.8	(12.2)
189	53	82	須恵器	Ⅲ	1区 東端	SR1001-b	溝底	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	(15.1)	3.1	13.1
190	53	82	須恵器	Ⅲ	1区 №9～10	SR1001-b	溝底付近まで	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	14.2	3.0	11.7
191	53	82	須恵器	Ⅲ	2区-a	SR1001-b	下半	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「□種ヵ」	(15.9)	3.3	12.0
192	53	82	須恵器	Ⅲ	1区 東端	SR1001-b	溝底まで	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書あり	15.2	3.1	12.8
193	53	82	須恵器	Ⅲ	1区 東端	SR1001-b	粗砂(溝底)	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「西」	15.6	3.0	13.0
194	54	83	須恵器	Ⅲ	1区 №9-10	SR1001-b	溝底付近まで	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書あり	(15.2)	2.4	(11.8)
195	54	83	須恵器	Ⅲ	2区-a	SR1001-b		底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「野ヵ田□」	15.9	2.9	13.0
196	54	83	須恵器	Ⅲ	2区-a	SR1001-b		底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	15.4	2.56	13.0
197	54	83	須恵器	Ⅲ	1区 №9-10	SR1001-a	溝底 第3層 粗面	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	(15.4)	(2.95)	(12.7)
198	54	84	須恵器	Ⅲ	1区 東端	SR1001-b	溝底まで	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「木ヵ」・「林」	15.74	2.77	13.0
199	54	88	須恵器	Ⅲ	1区 東端	SR1001-b	粗砂(溝底)	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ	(15.5)	2.6	(12.8)
200	54	83	須恵器	Ⅲ	1区 東端	SR1001-b	溝底まで	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 煤?付着	15.6	3.0	12.4
201	54	84	須恵器	Ⅲ	2区-a	SR1001-b	下半	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「宗我□」	－	(1.8)	12.06
202	54	84	須恵器	Ⅲ	1区 東端	SR1001-b	溝底まで	底部ヘラ切り 内外面回転ナデ 墨書「□」・「大田」	17.5	2.6	15.9
203	54	83	須恵器	Ⅲ	1区	SR1001-b №9周辺	溝底	底部ヘラ切り 墨書「上南ヵ」	－	(1.1)	(12.0)
204	54	84	須恵器	杯A?	1区 東端	SR1001-b	溝底直上 粗砂	墨書あり	－	(2.5)	－
205	54	84	須恵器	杯A	1区 №9-10	SR1001-b	溝底付近まで	墨書あり	－	(0.9)	－
206	54	84	須恵器	杯A	1区 東端	SR1001-b	粗砂(溝底)	墨書「中家」	－	(0.75)	－
207	54	84	須恵器	杯BorⅢB	2区-a	SR1001-b		墨書あり	長3.06	幅2.18	厚0.5
208	54	88	須恵器	杯B?	1区 №9～10	SR1001	溝底付近		(13.0)	(3.0)	－
209	54	85	須恵器	椀	2区-a	SR1001-b		底部ヘラ切り	15.6	6.07	9.4
210	54	85	須恵器	杯B	2区-a	SR1001-b	下半	内外面回転ナデ	(10.1)	4.15	7.36
211	54	85	須恵器	杯B	2区-a	SR1001-b		内外面回転ナデ	(12.3)	4.15	9.26
212	54	85	須恵器	杯蓋	2区-a	SR1001-b	下半	輪状のつまみをもつ(綾椀蓋)	(17.1)	(3.0)	
213	54	85	須恵器	稜椀	2区-a	SR1001-b	下半	内外面回転ナデ	15.6	5.86	9.6
214	55	88	須恵器	杯B	1区 №9～10	SR1001-b	溝底付近まで	内外面回転ナデ	(15.1)	(5.6)	8.15
215	55	85	須恵器	椀	2区-a	SR1001-b		内外面回転ナデ	16.0	5.5	10.3
216	55	88	須恵器	杯B	1区 東端	SR1001-b	粗砂(溝底)	内外面回転ナデ	(16.4)	7.8	(10.0)
217	55	85	須恵器	杯B	1区 東端	SR1001-b	粗砂(溝底)	内外面回転ナデ	(16.7)	7.2	16.2
218	55	86	須恵器	杯B	2区-a	SR1001-b	下半	内外面回転ナデ 墨書「上南家」	16.4	6.6	9.4
219	55	85	須恵器	杯B	1区 №9～10	SR1001-b	溝底付近まで	内外面回転ナデ	(17.1)	(7.5)	9.4
220	55	85	須恵器	杯B	2区(サブトレ2と2.5間)	SR1001	砂層のみ	内外面回転ナデ	(18.8)	8.4	12.7
221	55	88	須恵器	壺L	1区 №9～10	SR1001-b	溝底付近まで		(9.7)	7.1	
222	55	86	須恵器	壺L	1区 №9～10	SR1001-b	溝底付近まで		8.25	(9.2)	－
223	55	88	須恵器	壺	1区 №～10	SR1001	溝底付近		－	(8.5)	－
224	55	88	須恵器	壺	1区 №9～10	SR1001-b	溝底付近まで		－	(6.65)	－
225	55	88	須恵器	長頸壺	1区 №9～10	SR1001	溝底付近		－	(7.95)	－
226	55	88	須恵器	壺	1区 東端	SR1001-b	粗砂(溝底)		－	(8.0)	－
227	55	88	須恵器	壺	1区 №9～10	SR1001-a	第3層 粗砂		－	(8.05)	－
228	55	86	須恵器	平瓶	1区	SR1001-b			13.0	15.05	13.2
229	55	87	須恵器	横瓶	2区-a	SR1001-b		外面タタキ 内面当具痕(同心円)	(10.0)	25.95	
230	55	88	須恵器	甕(底部)	1区 №10	東側溝	流路下半	外面タタキ 内面当具痕(同心円)	－	7.9	3.05
231	56	89	弥生土器	壺	2区-a 東半	下層 掘削			－	(4.7)	－
232	56	89	弥生土器	甕底部	1区	№4～5 南側溝			－	(3.45)	6.35
233	55	89	土師器	小Ⅲ	1区	№6周辺	確認Ⅲ層	指押さえ	(7.7)	(1.6)	－
234	56	89	土師器	Ⅲ	2区-a	№13～西	茶褐色混礫土含む墨褐色土	外面底部指押さえ	(12.1)	(2.4)	体部との境不明瞭
235	56	89	土師器	杯	1区	杭№3～4	包含層下半	底部ヘラ切り 指押さえ	－	(4.1)	5.95
236	56	89	土製品	土錘	2区-a №14周辺	茶褐色混レキ土	黒褐色土 直上まで		長4.82+	幅1.06	厚0.96
237	56	89	土製品	土馬の脚部?	2区-a №14-13周辺	遺構面まで	黒褐色土主	胴部との接着部、孔あり	長6.55+	幅4.25	厚3.3
238	56	89	土師器	Ⅲ	1区	SR1001	下層(奈良)－内側		－	(2.7)	(8.9)
239	56	89	瓦質土器	火鉢	2区 №14周辺	茶褐色混礫土主	黒褐色土 直上まで		(34.0)	(5.5)	－
240	56	89	土師器	椀	1区	杭№3～4	包含層上半	底部回転ヘラ切り	(11.85)	(4.0)	5.95
241	56	89	須恵器	杯	1区	杭№3～4	包含層上半	底部回転糸切り	11.1	4.6	4.8
242	56	90	須恵器	小Ⅲ	1区	№6周辺 遺構面まで	確認Ⅲ層	底部回転糸切り	(8.75)	2.2	5.7
243	56	90	須恵器	稜椀	2区-a №14周辺	茶褐色混レキ土	黒褐色土 直上まで	体部外面綾より下、回転ヘラケズリ	(15.0)	(3.8)	－
244	56	90	須恵器	壺底部?	1区		褐色混礫土主(洪水砂礫)		－	(2.9)	7.4
245	56	90	須恵器	椀	1区	№5周辺	茶灰シルト	底部回転糸切り	－	(1.8)	(7.6)
246	56	90	須恵器	捏鉢	2区-a №14周辺	茶褐色混レキ土	黒褐色土 直上まで		(22.6)	(4.6)	－
247	56	90	須恵器	鉢(底部)	1区	№5周辺	茶灰シルト	底部静止糸切り、未調整	－	(4.35)	(7.5)
248	56	90	須恵器	水瓶	1区	杭№3～4	包含層上半	頸部2条の沈線	－	(8.9)	－
249	56	90	須恵器	短頸壺	1区	№4～5 南側溝			(13.2)	(3.6)	－
250	56	90	須恵器	壺(底部)	1区	№6周辺 遺構面まで	確認Ⅲ層	底部回転糸切り	－	(8.95)	10.1
251	56	90	須恵器	壺(底部)	1区	№4～5 南側溝		外面底部多方向の板ナデ	－	(6.55)	(11.95)

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量(cm)		
									口径	器高	底径
252	56	91	土師質	擂鉢	2区 東端～	イコウ面まで	茶灰～茶褐色土 洪水砂礫含む		32.0～ 33.0	(5.0)	－
253	56	91	丹波	擂鉢	2区-a №14周辺	茶褐色混レキ土	黒褐色土 直上まで		?	(5.9)	－
254	56	91	瀬戸美濃	丸皿	2区-a №14周辺	茶褐色混レキ土	黒褐色土 直上まで		(10.8)	(2.2)	－
255	56	91	青磁	皿?	2区-a №14-13周辺	遺構面まで	黒褐色土主	龍泉窯	(12.1)	(2.3)	－
256	56	91	瀬戸	卸皿	2区 №14周辺	茶褐色混礫土主	黒褐色土 直上まで	底部内面縦横の卸目	－	(1.0)	(7.2)
257	56	91	陶磁器	皿	1区	№4～5 南側溝		唐津焼	(13.6)	(1.5)	(7.8)
258	56	91	青磁	輪花皿	2区-a東端	黒褐色土上面まで	茶褐色土主		(11.0)	(2.1)	－
259	56	91	青磁	碗	2区-a №14-13周辺	遺構面まで	黒褐色土主	外面鎬蓮弁文	(15.8)	(2.7)	－
260	56	91	青磁	碗	2区-a	側溝	人力以下	外面蓮弁文	－	(2.2)	3.16
261	56	91	磁器	青磁碗	1区	№8～9遺構面まで		高台内側露胎	－	(1.95)	(3.65)
262	56	91	青磁	碗	1区	№8	(褐灰色洪水砂礫主)	内外面施釉	－	(3.8)	－
263	56	91	白磁	碗	1区	№0～3	機械	内外面施釉	(15.3)	(3.4)	－
264	56	91	白磁	碗	1区	№3～4	茶灰色洪水砂礫主確認 Ⅲ層直上まで	体部外面一部露胎	(17.6)	(3.7)	－
265	56	91	白磁	碗	1区	№8	(褐灰色洪水砂礫主)	見込み部1条の沈線	－	(3.1)	6.0
266	57	92	瓦	平瓦	1区	№5周辺	茶灰シルト		長(10.15)	幅(6.0)	厚(1.7)
267	57	92	瓦	平瓦	1区	№0～3	機械		長11.5+	厚(8.4)	厚(2.1)
268	57	92	瓦	平瓦	2区-a №14周辺	茶褐色混レキ土	黒褐色土 直上まで	両面ナデ 線切りの痕跡あり	長16.15+	幅7.84	厚最大2.2 断面1.93
269	57	93	須恵器	台付皿	3区	SB3001	1-3	底部回転ヘラ切り	14.22	2.4	つまみ径 6.42
270	57	93	白磁	紅皿	3区-a	西端 近世ゴミ穴?		型作り	4.4	1.1	1.25
271	57	93	製塩土器	鉢	3区	SK3001		ナデ　指押さえ	(14.5)	(13.8)	－
272	57	93	製塩土器	鉢	3区	SK3001		ナデ　指押さえ	(16.5)	(11.1)	－
273	57	93	製塩土器	鉢	3区	SK3001		ナデ　指押さえ	(17.3)	(7.3)	－
274	57	93	製塩土器	鉢	3区	SK3001		ナデ　指押さえ	(14.1)	(9.8)	－

表17　曽我井・沢田遺跡出土石製品観察表

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備考1	法　量(cm)			
									長さ	幅	厚み	重量g
S1	58	94	石器	鏃	1区	№1～2	遺構検出	赤チャート	15.1㎜	18.5㎜	2.7㎜	0.5
S2	58	94	石器	硯	1区	北側溝№4	濁褐色土中		42.5㎜	64.7㎜	7.3㎜	22.3
S3	58	94	石器	石庖丁	1区		褐色混礫土主(洪水砂礫)	未製品	95.7㎜	44.1㎜	10.5㎜	59.1
S4	58	94	石器	砥石	1区	杭№3～4	包含層上半		143.5㎜	98.8㎜	55.9㎜	840.5

表18　曽我井・沢田遺跡出土金属製品観察表

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備考1	法　量(cm)			
									長さ	幅	厚み	重量g
M1	59	95	鉄器	鉄斧	2区-a	SR1001-a			11.17+	4.7+	3.35+	162.0
M2	59	95	鉄器	ヤス?	1区	SD1006	検出面から4～6cm		16.97+	0.38 0.65 0.47	0.4 0.82 0.42	10.5
M3	59	95		椀形鉄滓	1区	SD1017			3.27	4.09	2.16	34.2
M4	59	95		椀形鉄滓	2区-a	№13～西	茶褐色混レキ土を含む 黒褐色土		4.05	3.37	2.1	18.8
M5	59	95		椀形鉄滓	1区	SD0013			2.33	2.47	1.3	6.1
M6	59	95		椀形鉄滓	1区	西端	遺構検出		5.7	3.66	2.42	42.1
M7	59	95		椀形鉄滓	1区	SD1017			5.74	3.32	2.31	30.9
M8	59	95		椀形鉄滓	2区-a	№13～西	茶褐色混レキ土を含む 黒褐色土		3.12	1.74	1.15	6.7

表19　曽我井・沢田遺跡出土木製品観察表

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備考1	法　量(cm)			
									長さ	幅	厚み	重量g
W1	60	96	祭祀具	人形	1区	SD1001-c(C区)	粗砂層 最上層	顔あり	36.46	3.3	0.42	
W2	60	96	祭祀具	人形	1区	SD1001-a	下層	顔あり	37.85+α	3.3	0.5	
W3	60	96	祭祀具	人形	1区	SD1001-c(D区)			35.05	2.85	0.5	
W4	60	97	祭祀具?	斎串状木製品?	1区	SD1001-c			14.6	1.8	0.45	
W5	60			不明(木札か?)	1区	SD1001-c(C区)	盛土層		12.58+α	2.35+α	0.32	
W6	60	97		加工材?付け木?	1区　西端	SD1001-c			24.6	1.8	0.6	
W7	60	97		付け木	1区	SD1001-c(B区)	砂層(11･12層)		23.0	1.8	1.4	
W8	60	97		付け木	1区	SD1001-c	粗砂上面	焼痕あり	26.5	1.45	0.7	
W9	60	97		付け木	1区	SD1001-c(C区)	盛土層	焼痕あり	15.4	1.1	0.7	
W10	60	97		部材	1区	SD1001-c(C区)	上面(砂層)		21.3+α	3.1	1.2	
W11	60	97	下駄		1区	SD1001-c(C区)	盛土層		20.85+α	4.5+α	4.1	
W12	60	98	祭祀具	鏃形?	1区	SD1001-c	粗砂上面		17.1	1.0	1.1	
W13	60	98		削りくず	1区	SD1001-c(C区)	盛土層		10.4+α	1.6	0.8	
W14	60	98		加工材の切端	1区	SD1001-c(B区)	砂層(11･12層)		13.2+α	5.6	厚2.6 薄0.4	
W15	61	99		箸状の斎串?	Ⅰ　№0～1	SD1001-a			16.68+α	0.9	0.76	
W16	61	99	容器	底板?蓋?	1区	SD1001-a(A区)	下層最下	中心に孔1つ側面部に半円1つ	9.35	1.6	0.45	
W17	61	99	容器	(挽物)皿	1区	SD1001-a(B区)	下層最下		16.5	2.3	0.7	
W18	61			柄?	1区	SD1001-a	茶灰シルト	中心に孔をあけ側面3ヶ所に孔	10.54+α	1.7	1.5	

報告番号	図版番号	写真番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備考１	法　量(cm)			
									長さ	幅	厚み	重量g
W19	61	99	その他	矢板	Ⅰ	SD1001-a	第2層 C区		35.7+α	5.2	1.0	
W20	61	99		板材杭	1区	SD1001-a(A区)			38.5+α	7.3	2.4	
W21	61	99		板状木製品	1区	SD1001-9(C区)			47.7+α	3.96+α	0.7	
W22	61	100		杭	1区	SD1001-a(B区)			44.1+α	4.2	3.7	
W23	61	100		杭	1区	SD1001-a(C区)			35.2+α	5.0	4.0	
W24	61	100		杭	1区	SD1001-a(C区)		焼痕?	59.8	5.5+α	4.4	
W25	61	100		杭	1区	SD1001-a(A区)			70.9+α	6.1	3.7	
W26	62	101		漆椀	2区	SD2005 北半	灰茶シルト	うるし加工	口(14.0)	高(4.8)	底(7.2)	
W27	62	101		付け木	2区	SD2005		焼痕あり	14.9	0.8	0.45	
W28	62	101		付け木	2区	SD2005		焼痕あり	13.8	1.15	0.45	
W29	62	101		付け木	2区	SD2005		焼痕あり	12.7	1.0	0.7	
W30	62	101	容器	曲物の底板木簡に転用?	2区 東端	側溝中		墨書あり	6.7+α	1.55+α	0.5	
W31	63	102	木簡	呪符 木簡	1区	SR1001	下層(奈良)内側	表面のみ 墨書あり	29.4+α	3.65+α	0.5	
W32	63	102	祭祀具	人形	1区 №8～9	SR1001－b 奈良	溝北肩付近	顔あり	22.0+α	2.7	0.2	
W33	63	102		未製品	1区 東端	SR1001－b	溝底直上 粗砂		38.5	2.2	1.2	
W34	63	102	祭祀具	斎串	1区 9～10	SR1001－b	溝石付近		32.4+α	2.0	0.75	
W35	63	102		加工木	1区	SR1001－b			23.2	2.0	1.65	
W36	63	102		付け木 斎串か?	1区 №9～10	SR1001－b	溝石付近	焼痕あり	25.9	1.6	1.2	
W37	63	103		箸状木製品(斎串か)付け木?	2区－a	SD1001－b		焼痕あり	21.0+α	0.9	0.5	
W38	63	103		箸状の斎串? 付け木	2区－a	SR1001－b		焼痕あり	22.0+α	2.1	0.8	
W39	63	103		?	1区 №9～8	SR1001－b	上半 暗灰シルト	墨書あり	6.4+α	0.5	0.3	
W40	63	103	祭祀具	斎串	1区 №9	SR1001－b	溝底		9.0	0.75	0.7	
W41	63	103		箸状の斎串か?	1区 №728	SR1001－b	溝底		22.35	1.0	0.8	
W42	63	103		加工木	1区 東端	SR1001－b	溝底直上 粗砂		17.5	1.1	0.4	
W43	63	103		斎串? 揚子?	1区 №9	SR1001－b	溝底		7.9	0.85	0.45	
W44	64	104	祭祀具	陽物形	1区 東端	SR1001－b	溝底まで		30.3	2.2	1.7	
W45	64	104		柄の一部	2区－a	SD1001－b			13.6+α	3.03	2.8	
W46	64	104		柄(?)	1区	SR1001	下層(奈良)内側	焼痕あり	58.0	2.0	1.6	
W47	64	104		棒状	2区－a	SR1001－b		焼痕あり	27.8	1.6	1.5	
W48	64	105	容器	皿	2区－a	SR1001－b			口(19.2)	高1.45	底(17.2)	
W49	64	105	容器	皿	1区 東端	SR1001－b	溝底・粗砂		口(18.0)	高1.25	底(11.8)	
W50	64	105	容器	曲物の側板	2区－a	SR1001－b 溝底	西端Pit		7.33+α	全体の幅4.1+α とじ皮の幅0.67	側板1枚 0.23	
W51	65	106		部材	2区－a	SD1001－b			14.2	4.5	3.6	
W52	65	106		付木?刀形?	1区 №8～7	SR1001－b	暗灰シルト(奈良1層)	焼痕あり	16.0	2.3	0.75	
W53	65	106		付け木	1区 東端	SR1001－b	溝底直上 粗砂	焼痕あり	14.85	1.77	0.6	
W54	65	106	祭祀具	斎串or形代?	1区	SR1001－bステップ	暗灰シルト 溝底シルト	焼痕あり	26.6	2.4	0.8	
W55	65	107		付け木	2区－a	SR1001－b		焼痕あり	13.8	1.5	0.8	
W56	65	107		付け木	1区 東端	SR1001－b	溝底 粗砂	焼痕あり	32.1	1.8	0.9+α	
W57	65	107		付け木	1区 №728	SR1001－b	溝底	焼痕あり	26.7	2.4	1.45	
W58	65	107	板材		2区－a	SD1001－b		焼痕あり	19.3	10.9	1.2	
W59	65		薄板材		1区 №8～9	SR1001－b 奈良	溝北肩付近		41.2+α	2.9	0.4+α	
W60	65	107		杭	2区－a	SR1001			37.2	5.8	5.8	
W61	66	109	祭祀具?	斎串状木製品?	2区(サブトレ2.5～3間)	SR1001	砂のみ		19.8	1.7	0.88	
W62	66	109		不明	2区－a	SR1001－a	溝底 粗砂		13.6	1.3	0.95	
W63	66	109		斎串?付け木?	2区	SR1001			17.2	1.2	1.15	
W64	66	109	祭祀具?	斎串?	1区	SR1001－a・b			26.8	0.8	0.2	
W65	66	109		斎串?	1区	SR1001 西半ステップ部分	茶灰シルト		12.6	1.0	0.4	
W66	66	109		斎串?付け木?	1区	SR1001－a	茶灰シルト 砂層より上		22.7+α	1.4	0.4+α	
W67	66	109		斎串?つけ木? チョウ木?	2区－a	SD1001－b			23.5	2.2	0.7	
W68	66	109		棒状木製品	1区	SR1001－a 西半	溝底 砂層 ステップ		9.2	1.0	1.1	
W69	66	110	容器	木皿	1区	SR1001－a・b		焼痕あり?	17.2	3.15	1.3	
W70	66	110		曲物	1区 東半	SR1001－a	下層 灰シルト		18.8	17.6	0.9	
W71	66	110	容器	曲物の底板	2区－a	SR1001			18.4+α	7.8+α	1.0	
W72	67	111	容器	曲物の底板の一部	1区 №7～8	SR1001－a	中(下層)砂レキ中		13.0+α	2.35+α	0.55	
W73	67	111	容器	曲物の底板の 一部	1区 №7～8	SR1001－a	中(下層)砂レキ中		18.1	5.3	0.65	
W74	67	111	容器	折敷の底板?	1区	SR1001 西半ステップ部分	茶灰シルト		8.9	2.3	0.5	
W75	67	111	杭	杭	2区－b	SR1001		焼痕あり	48.9	5.6	3.4	
W76	67	111		杭	2区－a	SR1001		焼痕あり	59.6	8.0+α	5.1	
W77	67	111		杭	2区－b	SR1001			59.3+α	5.6	5.1	
W78		98		斎串状木製品	1区	SD1001－c(C区)	盛土層		30.3	2.0	1.6	
W79		98		棒状	1区	SD1001－c(A区)	砂層(11・12層)		23.8	1.5	1.0	
W80		108		付け木?棒状	2区－a	SD1001－b			21.5	1.8	1.0	
W81		108		付け木?棒状	2区－a	SD1001－b			16.8	1.6	0.4	
W82		108		柄?	2区 №9・10間	流路タチワリ			42.5	2.5	1.0	
W83		108		?	1区 №8～9	SR1001－b			12.0	3.7	2.6	
W84		108		板状	2区－a	SR1001－b			23.0	5.0	0.3	
W85		108		板状	1区	SR1001－b			79.0	15.0	3.0	

第Ⅶ章　分　　析

第１節　曽我井・沢田遺跡の地形環境

青　木　哲　哉(立命館大学非常勤講師)

１　はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形の観察や堆積物の詳細な区分ができ、地形環境を細かいオーダーで復原できる。同時に、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。考古遺跡の調査区では、地形環境と人間生活の係わりについても考察できるのである。

本稿では、曽我井・沢田遺跡における地形環境を明らかにしたい。調査では、空中写真の判読と現地踏査にもとづいて地形を分類するとともに、遺跡の調査区(１区～３区)で堆積物の観察を実施した。地形分類では、5,000分の１空中写真の判読と現地踏査にもとづいて、調査区付近における地形面の区分と微地形の分類を行った。また、堆積物に関しては、１区～３区で遺構検出面付近より上位のものを観察し、さらに１区において掘削したトレンチ断面で遺構検出面以深の堆積物を確認した。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査区付近における地形環境の考察を行った。

２　調査区付近における地形の分布

(１)調査区周辺の地形

本遺跡の調査区(１区～３区)は杉原川の南岸にみられる平野に位置する。この川は加古川の中流部に存在する支流のひとつであり、平野の周囲には山地が広がる。調査区周辺に分布する山地は標高200～300mであり、山地の間に開けた平野は杉原川に沿って約1.5kmの幅でつくられた狭長なものである。調査区周辺では、平野が完新世段丘、現氾濫原、および支流性扇状地に分けられ(第８図)、これらのうち調査区は完新世段丘に位置する。

完新世段丘は杉原川の両岸にほぼ連続して認められる。段丘面は、ほぼ平坦で、緩やかに下流へ高度を下げる。そこには、近年の圃場整備以前に条里地割がみられた。このような完新世段丘は現氾濫原と比高およそ１mの段丘崖で境される。現氾濫原は、杉原川沿いに細長く延び、調査区周辺の杉原川南岸で200～300mの幅をもつ。これは、平野の中で最も低い地形面で、洪水の際に冠水の危険性が高い。そこでは、圃場整備以前の地割が不定形に乱れ、起伏が完新世段丘面と比べて大きい。

支流性扇状地は平野の縁辺にあたる山麓にみられる。杉原川流域におけるこの地形は、他地域より発

達がよく、広い面積を有する。調査区周辺では、複数の支流性扇状地が山地を刻む谷から発達し、山麓で複合扇状地をなしている。これらは、おおむね北へ8.0～10.8％で傾斜し、完新世段丘と傾斜変換線で接する。

（２）調査区付近の微地形と遺構の分布

調査区が位置する完新世段丘は埋没した扇状地が段丘化したものである。そこには、扇状地の微地形である旧中州と旧河道が埋没している。調査区付近では、２つの埋没旧中州とその間に延びる埋没旧河道が認められる（第９図）。埋没旧河道は、やや蛇行しながらほぼ東西に延び、１区南東部と２区北西部を通過する。これは杉原川の本流または比較的大きい分流の跡と考えられる。埋没旧河道上では、これと同じ方向に延びる大規模な溝跡が検出されている。溝跡は８世紀から10世紀に存在したものと11世紀から13世紀にかけてのそれとがほぼ同じ箇所に重複するものである。

埋没旧中州は埋没旧河道の北と南に認められる。北の埋没旧中州には、南東部を除く１区が位置する。ここでは、11世紀～13世紀に建てられた７棟の掘立柱建物跡や９世紀～13世紀ころの溝跡などが検出されている。中でも溝跡は、２ヶ所でみられ、それぞれ埋没旧中州の末端上を南側の埋没旧河道とほぼ同じ方向に延びる。他方、南の埋没旧中州には、北西部を除く２区と３区の全域が分布する。２区の埋没旧中州上ではほぼ南北に延びる12世紀ころの溝跡などが検出され、また３区では主に８世紀後半～９世紀前半の掘立柱建物跡が６棟と製塩土器を含む同時期の土坑が１基認められている。

３　調査区における堆積物の特徴

（１）遺構検出面以深の堆積物

１区の遺構検出面から掘削したトレンチ断面では、下位から順に砂礫、細粒堆積物、および旧河道堆積物が観察される（第10図）。最下位でみられる砂礫（第10図の堆積物14）は扇状地堆積物に相当する。トレンチ断面で観察できる砂礫は、埋没旧中州の末端を構成するもので、径２～４㎝の亜角礫を主体としている。砂礫の上面は、現地表下およそ2.3mの深さにみられ、東隣の埋没旧河道付近でさらに低くなる。これは、扇状地の形成期にも埋没旧河道の下に流路が存在していたことを暗示する。

こうした砂礫は３区の最下位でみられる暗黄灰色の砂礫に連続すると考えられる（第11図）。３区における砂礫（第11図の堆積物17）は、径３～12㎝の亜角礫～亜円礫を主体とする。これは埋没旧中州の堆積物にあたり、その上面は３区の西部から中央部で高くなる。

砂礫の上位に位置する細粒堆積物は、下位から青灰白色のシルト質砂（第10図の堆積物13）、青灰白色の砂質シルト（同図の堆積物12）、黄灰色のシルト（同図の堆積物11）、ならびに黒褐色のクロボク（同図の堆積物10）に細分される。これらは扇状地を被覆しそれを埋没させている。細粒堆積物のうち青灰白色のシルト質砂と砂質シルト、および黄灰色のシルトは洪水堆積物にあたる。とくに黄灰色のシルトは、広い範囲で観察され、１区西部や２区の中央部から東部、３区東部でもみられる（第11図）。また、クロボクは洪水によって短い距離を流された二次的な堆積物と考えられ、それには他のシルトが混入している。クロボクは地盤高のやや低い１区中央部から２区中央部にかけてと３区東部に分布する（第11図）。

旧河道堆積物はこのような細粒堆積物を切って認められる。旧河道は、2.2m以上の深さをもつ比較的大きいもので、クロボクの上面から切り込む。これは、１区南東部から２区北西部へ延びる旧河道に該当し、トレンチ断面ではその北岸付近が観察される。旧河道を埋積する堆積物は暗灰色や灰色などを呈するシルト質砂、砂質シルト、およびシルトからなり、とくにシルト質砂は旧河道の下半部に堆積す

る。

これらの堆積物には、黒灰色のシルトが３つみられ、旧河道内がしばしば低湿な環境になったことが伺える。

（２）遺構検出面より上位の堆積物

遺構検出面より上位には、９つの堆積物が認められる（第11図）。これらは暗褐灰色、褐灰色、ならびに黒灰色などを呈する礫混じり砂質シルトとシルトで（第11図の堆積物４～10・12・13）、いずれも洪水堆積物に相当する。礫混じり砂質シルトに混入する礫は小さく、径２～３㎝以下の亜角礫～亜円礫である。

最も下位でみられる黒灰色の礫混じり砂質シルト（同図の堆積物13）とその上位に位置する暗褐灰色のシルト（同図の堆積物12）は、それぞれ８世紀後半から９世紀前半の遺物と11世紀ごろの遺物を含む。黒灰色の礫混じり砂質シルトは、３区東部にのみ分布し、３区が居住域として利用された時期の旧表土に該当する。また暗褐灰色のシルトは１区の西部から中央部にみられ、これも土壌化している。

これより上位の堆積物には、黒灰色のシルト（同図の堆積物８・10）が２つ認められ、中でも下位のものが１区と２区の広範囲に分布する。これらは、やや低い箇所に分布しており、洪水によってもたらされたシルトがその後やや低湿な環境下で土壌化して生成された堆積物と考えられる。さらにその上位にみられる暗褐灰色の礫混じり砂質シルト（同図の堆積物６）と灰色のシルト（同図の堆積物４）には、それぞれ13世紀および15世紀の遺物が含まれる。暗褐灰色の礫混じり砂質シルトは３区の西部から中央部を除くほぼ全域に認められ、灰色のシルトは１区だけに分布する。

４　調査区付近における地形環境の変遷

調査区付近の地形環境はこれまでに述べた事柄から次のように考察される。

〔ステージ１〕　調査区付近には、杉原川によってもたらされた砂礫が堆積し、扇状地が形成された。これに伴って、南東部を除く１区と北西部を除く２区に中州がつくられた。これらの境界にあたる１区南東部から２区北西部にかけては、杉原川の流路が存在したと推定される。

〔ステージ２〕　扇状地の形成後、調査区付近ではシルト質砂やシルトなどが数度の洪水によって堆積した。これらの細粒堆積物は扇状地を覆い、その結果扇状地は埋没していった。

〔ステージ３〕　調査区の周辺に荒地ができ、そこでクロボクが生成された。これは、その後に発生した洪水によって侵食されるとともにわずかな距離を運搬され、調査区では地盤高のやや低い埋没旧河道上や埋没旧中州の末端上に二次的に堆積した。

〔ステージ４〕　杉原川の本流または分流が１区南東部から２区北西部にかけて流れた。その後この流路はシルト質砂やシルトなどの細粒堆積物によって埋積された。埋積の過程では、少なくとも３度にわたって流路内が低湿化し、黒灰色シルトの生成がみられた。

〔ステージ５〕　洪水によるシルトの堆積がみられた後、調査区付近は洪水が埋没旧中州上にほとんどおよばない比較的安定した環境となった。このような環境の下で８世紀後半から９世紀前半には、埋没旧中州上に位置する３区で掘立柱建物が数棟建てられ、集落が形成された。また８世紀には、１区南東部から２区北西部に延びる旧河道で大規模な溝がつくられた。

〔ステージ６〕　９世紀に入ると、１区では比較的大きい溝が埋没旧中州の末端上に開削された。これはその南側を蛇行する旧河道に沿うものであった。その後11世紀には１区の埋没旧中州上に掘立柱建物群

が建てられ、12世紀には２区の中央部に溝がつくられた。８世紀と９世紀に開削された溝および11世紀に建てられた掘立柱建物群は、比較的安定した環境が続いた13世紀まで存続した。

〔ステージ７〕 集落と溝が廃絶した直後、調査区付近には洪水がおよぶようになった。まず、わずかに低かった埋没旧河道上と埋没旧中州の末端上にシルトがもたらされ、やや低湿な環境下で黒灰色のシルトが生成された。さらにその後、調査区のほぼ全域に礫混じり砂質シルトが堆積した。これらの現象は13世紀の間に起こった。

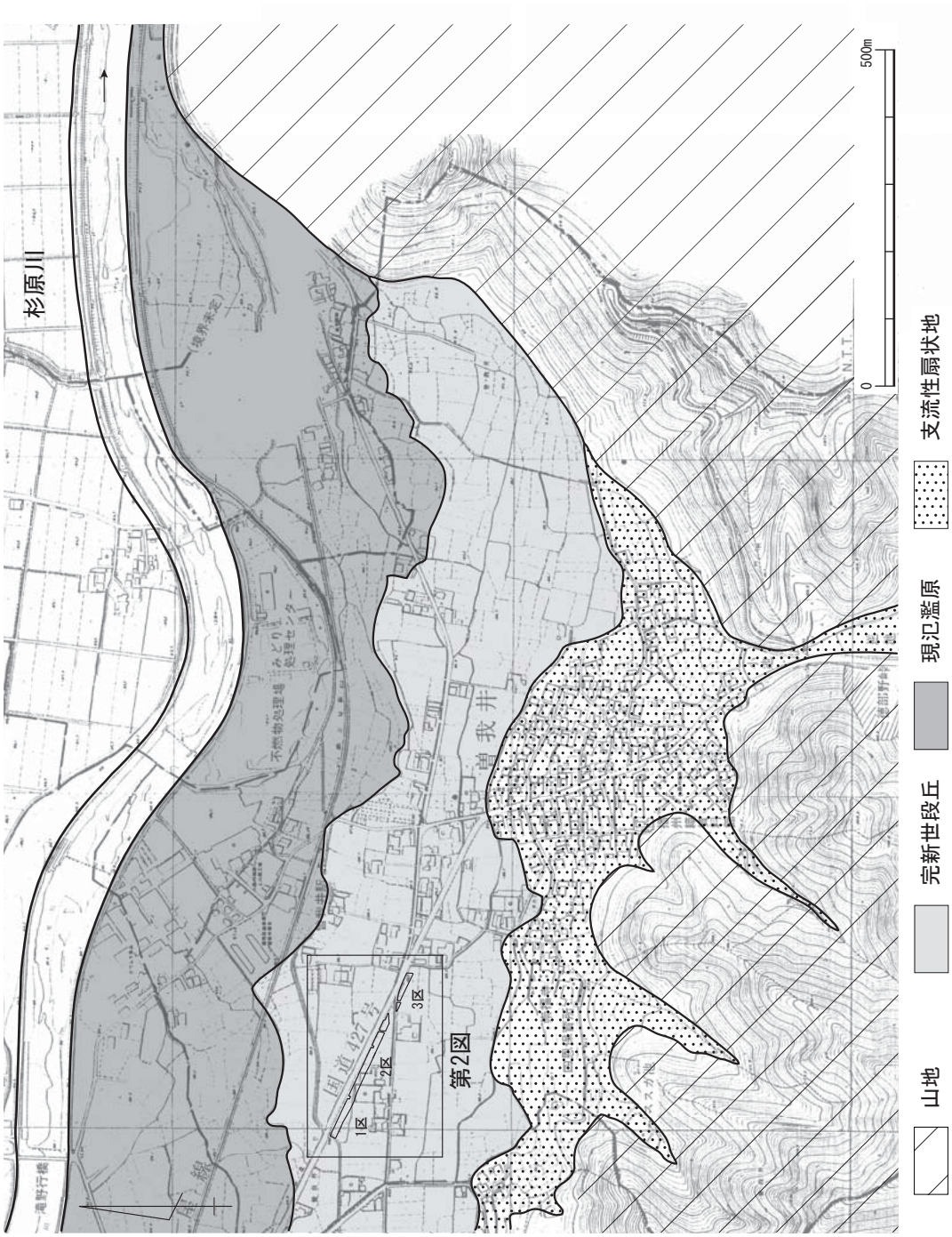
〔ステージ８〕 調査区付近では、13世紀以降15世紀までの間に洪水が発生し、シルトの堆積がみられた。この洪水が発生した後、調査区が位置する地形面は段丘化し、完新世段丘となった。

5　おわりに

本遺跡の調査区は杉原川に沿ってみられる完新世段丘に位置する。この段丘は埋没した扇状地が段丘化したものである。段丘化は、13世紀以降のことと考えられ、その後15世紀までの間に起こった可能性が高い。完新世段丘には扇状地の微地形である旧中州と旧河道が埋没した状態で認められる。調査区付近には２つの埋没旧中州が分布し、北のそれには南東部を除く１区、また南のものには北西部を除く２区と３区全域が位置する。埋没旧河道は、それらの間にあたる１区南東部から２区北西部にかけてやや蛇行して延びる。

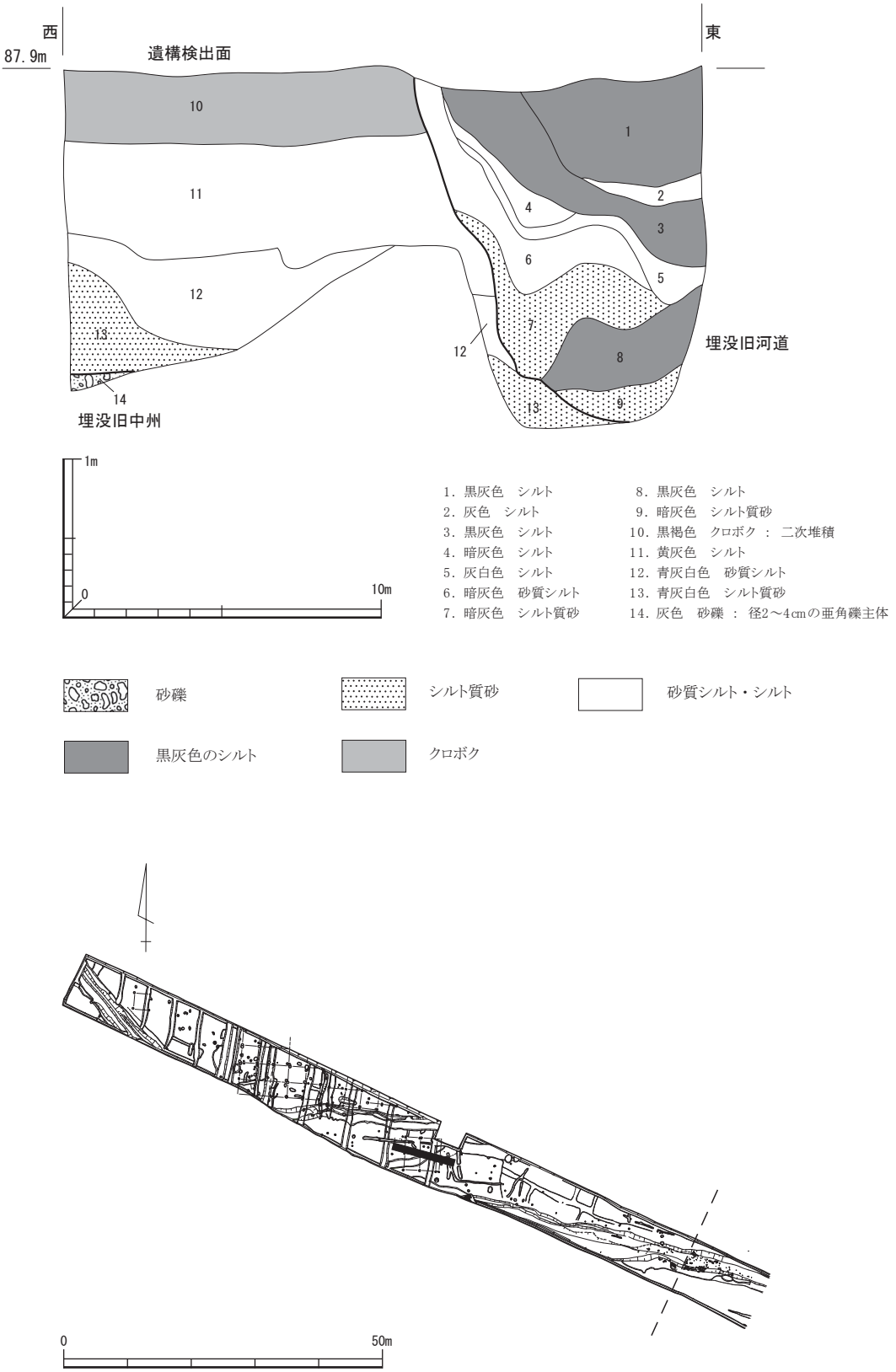
調査区での主たる人間活動は、洪水の危険性があるにもかかわらず比較的安定した環境が続いた８世紀以降13世紀にかけてみられた。そこでは、埋没旧中州上が主に居住域として、また埋没旧河道上は溝に利用された。３区が位置する埋没旧中州上では８世紀後半から９世紀前半に、また南東部を除く１区のそれでは11世紀から13世紀に掘立柱建物からなる集落が立地した。これは、埋没旧中州上がわずかに高いため比較的高燥で排水しやすいことに起因すると考えられる。

他方、埋没旧河道上は埋没旧中州上に比してわずかに低く、帯状に連続して延びる。そのため、１区南東部から２区北西部に分布する埋没旧河道上では、大規模な溝が８世紀に開削され、13世紀まで存続した。また１区では、埋没旧中州の末端上にも比較的大きい溝が９世紀から13世紀にみられた。この溝は、１区の南側でやや蛇行する埋没旧河道にほぼ平行しており、微地形と関連させてつくられた可能性がある。以上のように、本遺跡の調査区では地形環境と深く係わる人間活動が行われたと考えられる。

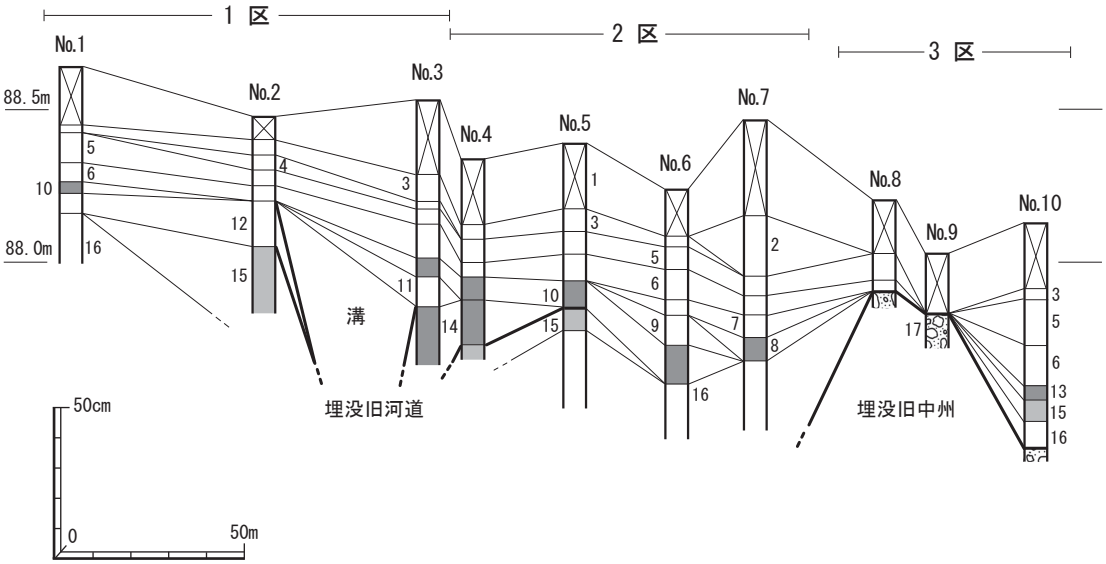


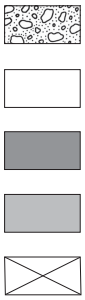
第8図　1区～3区周辺の地形分類図

第９図　１区～３区付近における微地形の分布

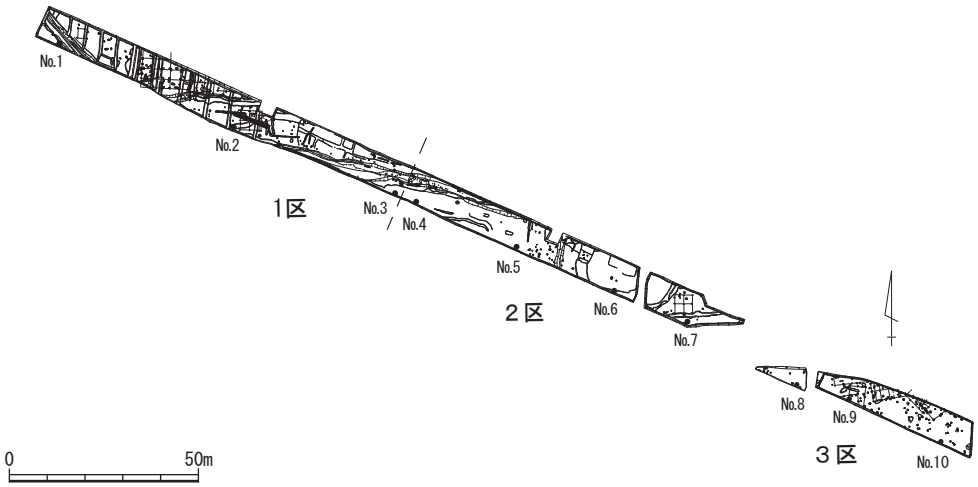


第10図　１区における遺構検出面からのトレンチ断面





1．表土(現耕土・盛土)
2．暗灰色　シルト ： 旧耕土
3．黄灰色　シルト: 床土
4．灰色　シルト ： 15世紀の遺物を含む
5．褐灰色　シルト
6．暗褐灰色　礫混じり砂質シルト ： 礫は径2㎝以下の亜角礫～亜円礫
13世紀の遺物を含む
7．褐灰色　シルト
8．黒灰色　シルト
9．暗灰色　礫混じり砂質シルト ： 礫は径2㎝以下の亜角礫～亜円礫
10．黒灰色　シルト
11．暗褐灰色　シルト
12．暗褐灰色　シルト ： 11世紀の遺物を含む
13．黒灰色　礫混じり砂質シルト ： 礫は径3㎝以下の亜角礫～亜円礫
8世紀後半～9世紀前半の遺物を含む
14．黒灰色　シルト
15．黒褐色　クロボク ： 二次堆積
16．黄灰色　シルト
17．暗黄灰色　砂礫 ： 径3～12㎝の亜角礫～亜円礫主体



第11図　1区～3区における遺構検出面以浅の堆積物

第２節　曽我井・沢田遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

１　測定対象試料

曽我井・沢田遺跡は、兵庫県多可郡多可町中区曽我井に所在し、杉原川によって形成された沖積低地の完新世段丘上に立地する。測定対象試料は、下層断割トレンチで採取された土壌試料３点で、№１(IAAA－102345)が旧河道堆積(黒灰シルト)、№２(IAAA－102346)が旧河道底堆積(黒灰シルト)、№３(IAAA－102347)が黒ボクの２次堆積(河道外)である(表１)。№３、№２、№１の順に堆積したと考えられる。

２　測定の意義

埋没旧河道等の形成時期を明らかにする。

３　化学処理工程

(１)メス・ピンセットを使い、石や根などの混入物を取り除く。

(２)酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には１mol／ℓ(１M)の塩酸(HCl)を用い、表20に「HCl」と記載する。

(３)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO_2)を発生させる。

(４)真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(５)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

(６)グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４　測定方法

３MVタンデム加速器(NEC Pelletron 9SDH－2)をベースとした^{14}C－AMS専用装置を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度(^{13}C／^{12}C)、^{14}C濃度(^{14}C／^{12}C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxⅡ)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

(１)δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度(^{13}C／^{12}C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表20)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(２)^{14}C年代(Libby Age：yrBP)は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(０yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表20に、補正していない値を参考値として表21に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差(±１σ)は、試料の^{14}C年代がその

誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表20に、補正していない値を参考値として表21に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表21に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC／AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

試料の^{14}C年代は、旧河道堆積（黒灰シルト）の№1が3040±30yrBP、旧河道底堆積（黒灰シルト）の№2が3810±30yrBP、黒ボクの2次堆積（河道外）の№3が7280±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は、№1が1379～1269cal BCの間に3つの範囲、№2が2291～2204cal BCの範囲、№3が6211～6080cal BCの間に2つの範囲で示される。3点の年代値と各層の堆積順序との関係に矛盾はなく、№1が縄文時代後期末～晩期初頭頃、№2が縄文時代後期初頭～前葉頃、№3が縄文時代早期後半頃に相当する年代値である。

試料の炭素含有率は約4～8%と土壌として適正な値であり、化学処理、測定上の問題は認められない。

表20　測定結果一覧表（1）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ13C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA－102345	№1	下層断割トレンチ 旧河道堆積（黒灰シルト）	土壌	HCl	－25.05±0.58	3,040±30	68.46±0.24
IAAA－102346	№2	下層断割トレンチ 旧河道底堆積（黒灰シルト）	土壌	HCl	－25.29±0.51	3,810±30	62.21±0.22
IAAA－102347	№3	下層断割トレンチ 黒ボクの2次堆積（河道外）	土壌	HCl	－25.13±0.59	7,280±30	40.42±0.17

［#4011］

表21　測定結果一覧表（２）

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用（yrBP）	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA－102345	3,050±30	68.45±0.23	3,044±28	1379calBC－1337calBC（33.3%） 1322calBC－1288calBC（25.6%） 1283calBC－1269calBC（9.3%）	1405calBC－1257calBC（91.4%） 1236calBC－1216calBC（4.0%）
IAAA－102346	3,820±30	62.17±0.21	3,813±28	2291calBC－2204calBC（68.2%）	2400calBC－2383calBC（1.6%） 2347calBC－2192calBC（86.2%） 2179calBC－2142calBC（7.7%）
IAAA－102347	7,280±30	40.41±0.17	7,276±34	6211calBC－6138calBC（49.1%） 6111calBC－6080calBC（19.1%）	6221calBC－6066calBC（95.4%）

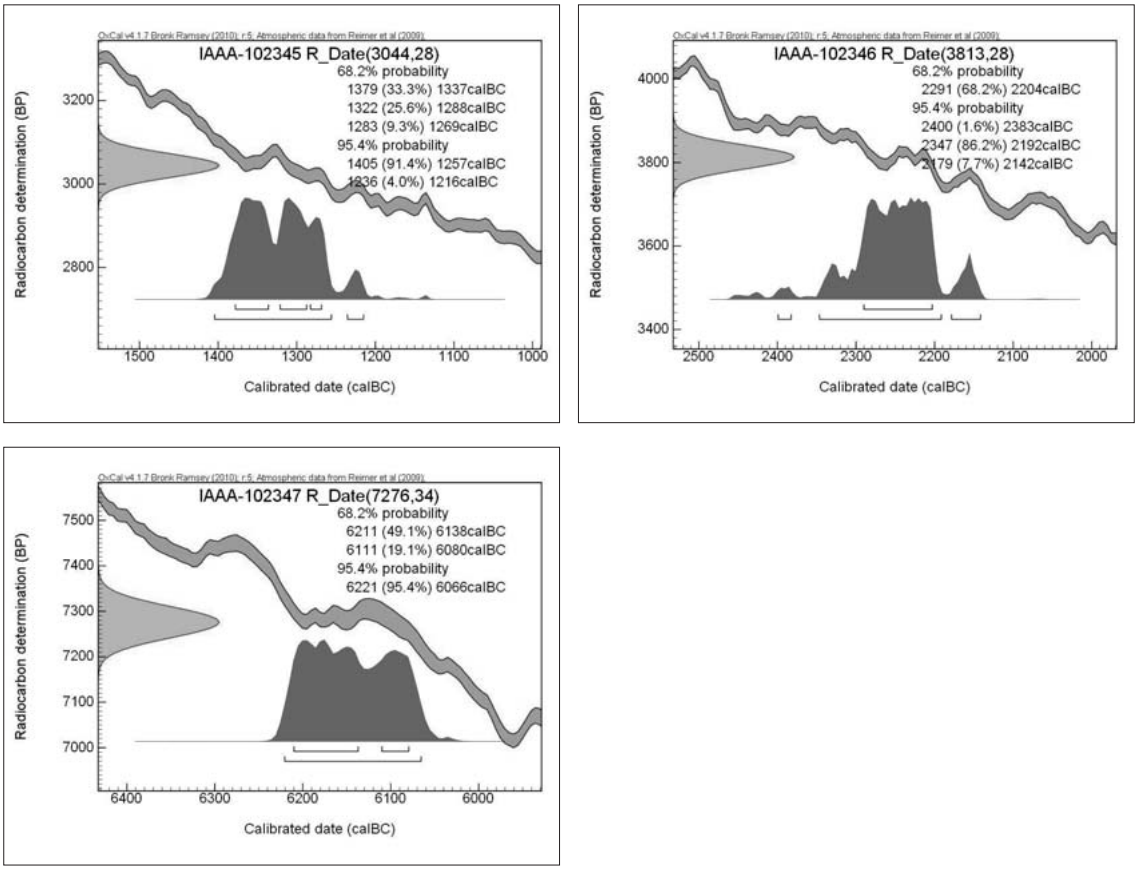
［参考値］

参考文献

Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355－363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337－360

Reimer, P. J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0－50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111－1150



第12図　歴年較正年代グラフ（参考）

第３節　曽我井・沢田遺跡おける樹種同定

株式会社古環境研究所

１　はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

ここでは、曽我井・沢田遺跡で出土した木材について樹種同定を行い、当時の木材利用ならびに周辺の森林植生について検討した。

２　試　料

試料は、曽我井・沢田遺跡より出土した木材37点である。

３　方　法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４　結　果

表22に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

モミ属　*Abies*　マツ科　写真１・17・20・21

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で１分野に１～４個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は日本に５種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの４種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

スギ　*Cryptomeria japonica* D. Don　スギ科　写真２

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～12細胞高ぐらいである。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。

スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.　ヒノキ科　写真３・４・６・７・８・９・10・11・12・13・14・16・19・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36・37

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～12細胞高ぐらいである。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭であり、耐朽性、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　写真５・22・24・25

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

コナラ属コナラ節　*Quercus sect. Prinus*　ブナ科　写真18

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

シキミ　*Illicium religiosum* Sieb. et Zucc.　モクレン科　写真23

横断面：小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。早材部の年輪界付近に於いて、道管が接線方向に並ぶ傾向を示す。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く40を超える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、１～３細胞幅で、単列部が太い。

以上の形質よりシキミに同定される。シキミは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、高さ10m、径30cmに達する。材は、強さ中庸で、旋作、器具、薪などに用いられる。

トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　トチノキ科　写真15

横断面：小型の道管が、単独ないし放射方向に２～数個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はすべて平伏細

胞からなり同性である。放射組織と道管との壁孔は、小型で密に分布する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、層階状に規則正しく配列する。

以上の形質よりトチノキに同定される。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmに達する。材は軟らかく緻密であるが耐朽性、保存性がなく、容器などに用いられる。

5　所　見

曽我井・沢田遺跡で出土した木材は、ヒノキ25点、モミ属４点、クリ４点、スギ１点、コナラ属コナラ節１点、シキミ１点、トチノキ１点であった。

最も多いヒノキは木理通直で大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高い。モミ属は温帯性のモミと考えられ、材は耐久性、保存性は低く軽軟なことから加工が容易な木材である。クリは重硬で保存性が良い材である。スギは加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。コナラ属コナラ節は強靭で弾力に富み、シキミはやや硬い材と言える。トチノキは耐朽性、保存性は極めて低く、切削、加工は容易で柔らかい材である。

ヒノキ、モミ、スギは温帯を中心に分布する針葉樹である。この内ヒノキは適潤性であるが乾燥した土壌にも耐え、尾根、急峻地または岩盤上にもよく生育する常緑高木で温帯中部に多い。モミは谷間や緩傾斜地の適潤な深層の肥沃地を好む常緑高木、スギは肥沃で湿潤な土壌を好む常緑高木で、特に積雪地帯や多雨地帯で純林を形成する。

次に広葉樹では、クリ、コナラ属コナラ節、トチノキは温帯を中心に広く分布する落葉高木である。この内クリは乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもあり、暖温帯と冷温帯の中間域では純林を形成することもある。コナラ属コナラ節は、日当たりの良い山野に生育し、ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帯性のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。トチノキは谷沿いなどの湿潤地を好んで生育する。シキミは暖地の山地に広く分布している常緑小高木である。

以上のことから、曽我井・沢田遺跡で出土した木材は、当時遺跡周辺もしくは近隣地域よりもたらされたと推定される。

参考文献

佐伯浩・原田浩　(1985)　針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 20－48.

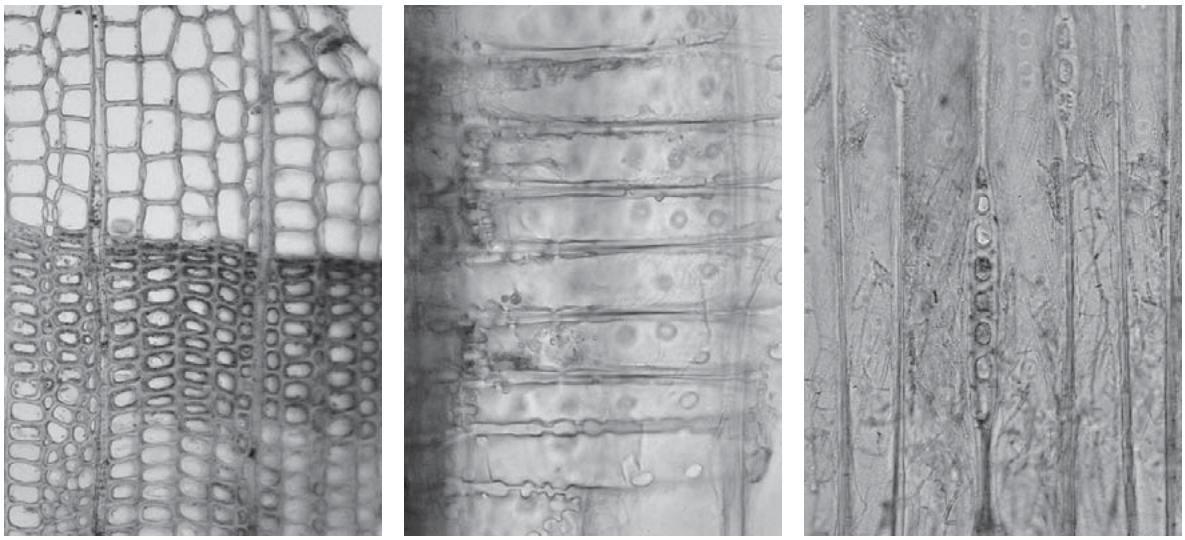
佐伯浩・原田浩　(1985)　広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 49－100.

島地謙・伊東隆夫　(1988)　日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p. 296.

山田昌久　(1993)　日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p. 242.

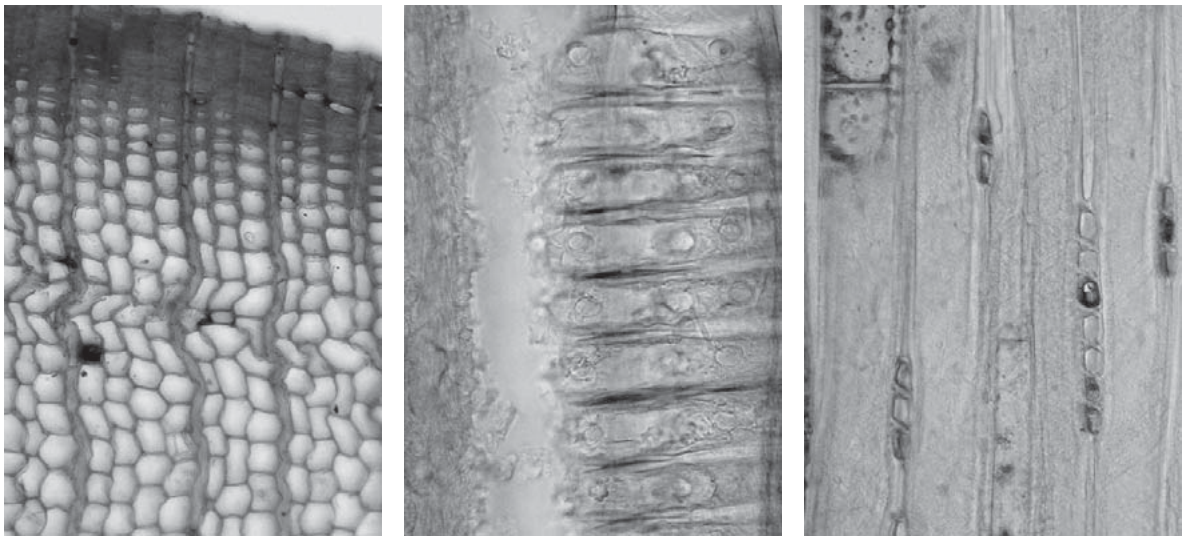
報告No.	種　類	結　果(学名／和名)		写真番号
W21	板状木製品	*Abies*	モミ属	1
W58	板材	*Cryptomeria japonica* D. Don	スギ	2
W67	斎串状木製品	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	3
W82	柄？	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	4
W60	杭	*Castanea crenata Sieb.* et Zucc.	クリ	5
W75	杭	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	6
W34	斎串	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	7
W46	柄？	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	8
W35	加工木	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	9
W42	加工木	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	10
W64	斎串状木製品	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	11
W 3	人形	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	12
W33	未製品	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	13
W48	木皿	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	14
W26	漆椀	*Aesculus turbinata* Blume	トチノキ	15
W 2	人形	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	16
—		*Abies*	モミ属	17
—		*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節	18
W11	下駄	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	19
W77	杭	*Abies*	モミ属	20
W76	杭	*Abies*	モミ属	21
W25	杭	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	22
W23	杭	*Illicium religiosum* Sieb. et Zucc.	シキミ	23
W24	杭	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	24
W20	板杭	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	25
W85		*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	26
W81	付け木？	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	27
W14	加工木	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	28
W27	付け木	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	29
W17	皿	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	30
W16	曲物底板or蓋	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	31
W 8	付け木	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	32
W30	曲物底板？	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	33
W66	付け木？	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	34
W 1	人形	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	35
W70	曲物底板	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	36
W31	呪符木簡	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ	37

表22　曽我井・沢田遺跡における樹種同定結果



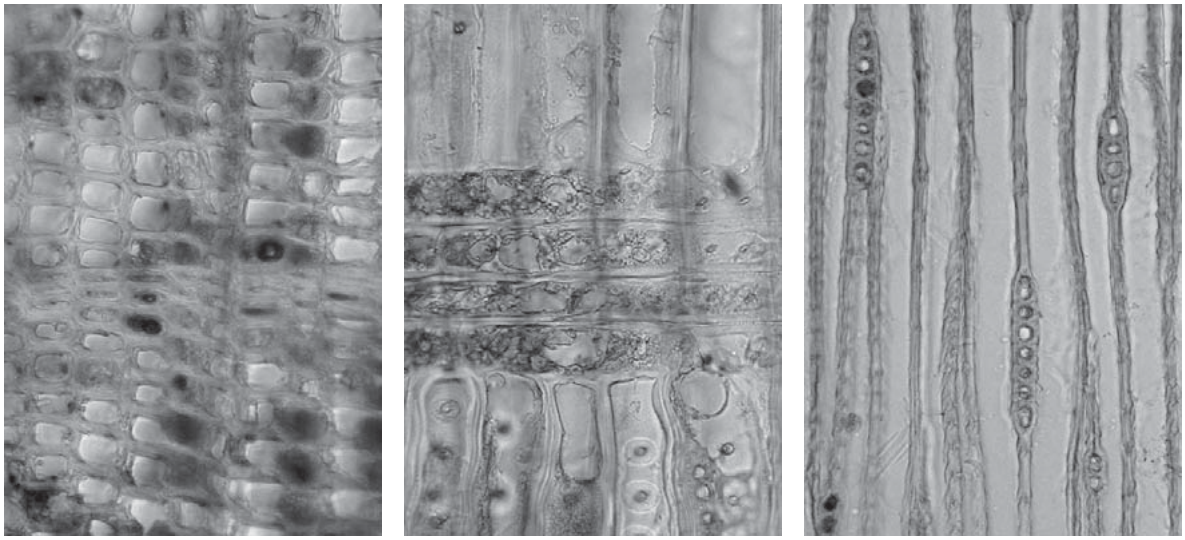
横断面 ―――― ：0.2mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.1mm

1.W21　モミ属



横断面 ―――― ：0.2mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.1mm

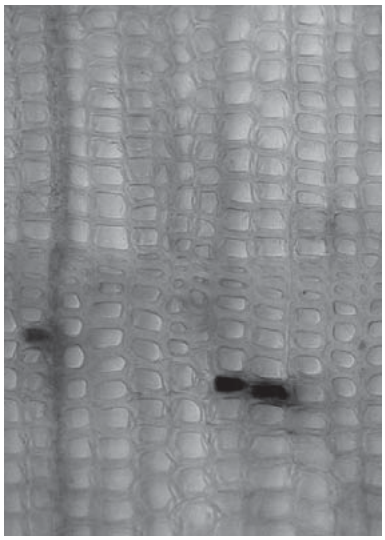
2.W58　スギ

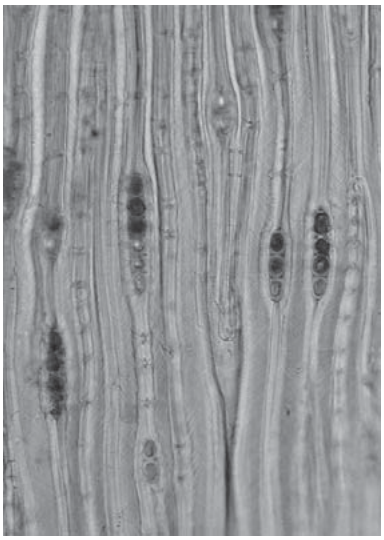


横断面 ―――― ：0.1mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.1mm

3.W67　ヒノキ

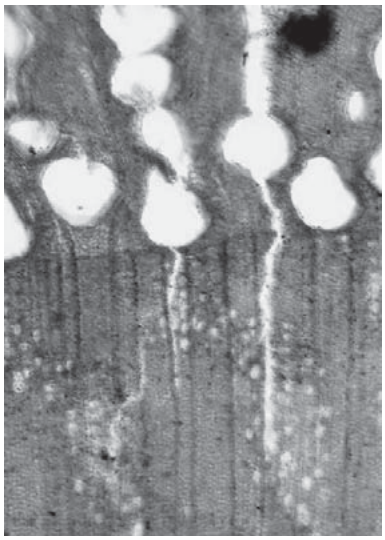
写真６　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅰ





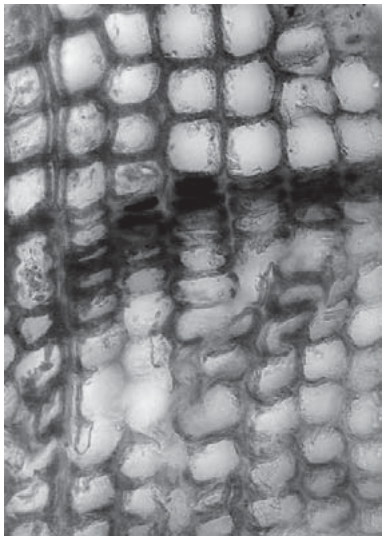
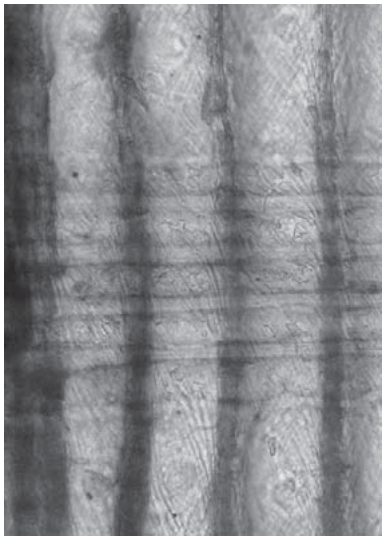
横断面 ―――― ：0.1mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.1mm

4.W82　ヒノキ



横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

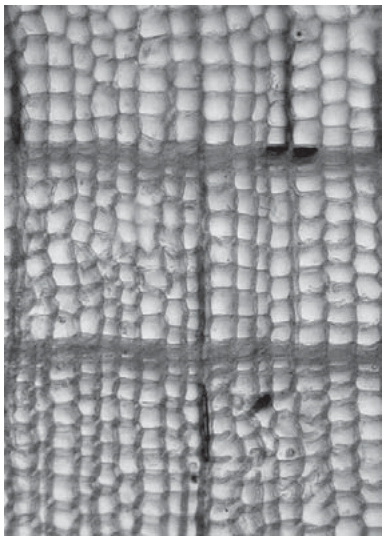
5.W60　クリ

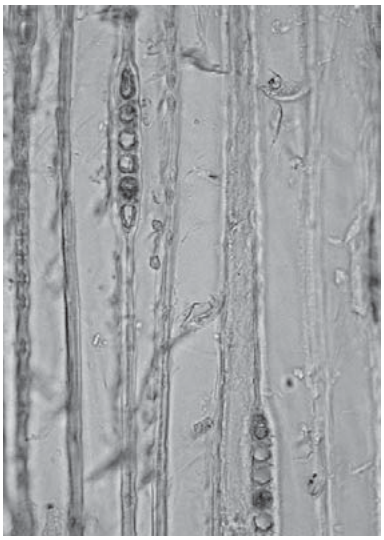



横断面 ―――― ：0.1mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.1mm

6.W75　ヒノキ

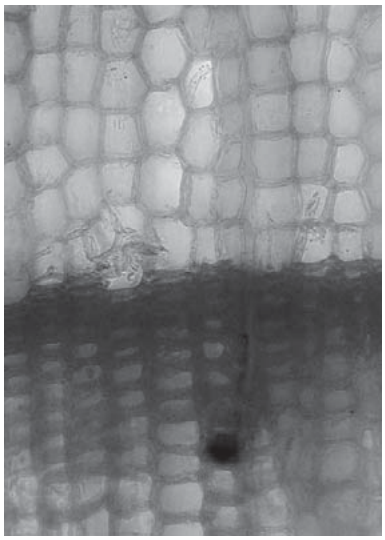
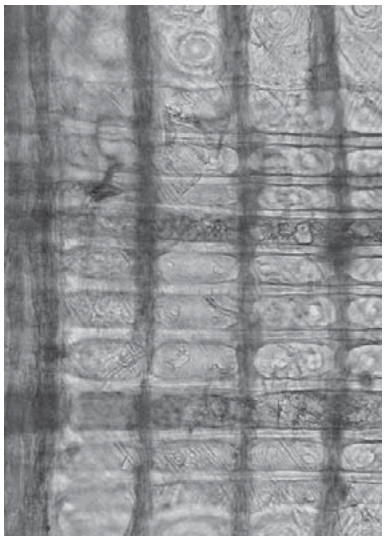
写真７　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅱ





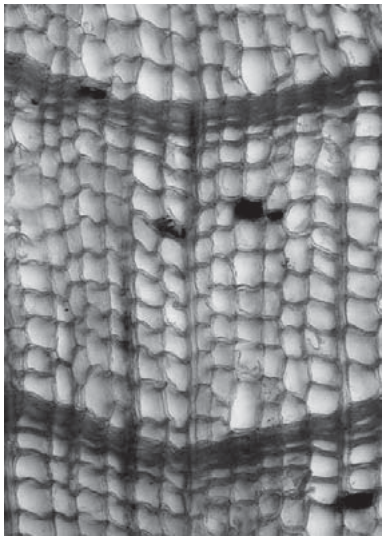
横断面 ―――― ：0.2mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.1mm

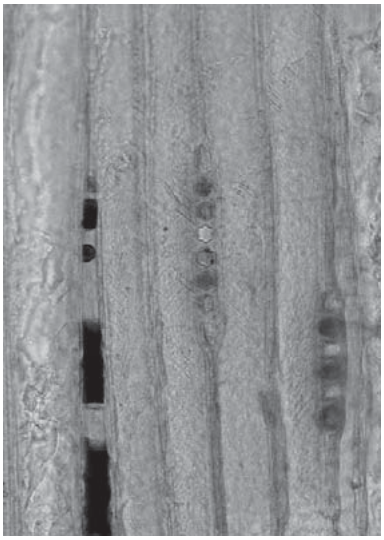
7.W34　ヒノキ

横断面 ―――― ：0.1mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.1mm

8.W46　ヒノキ

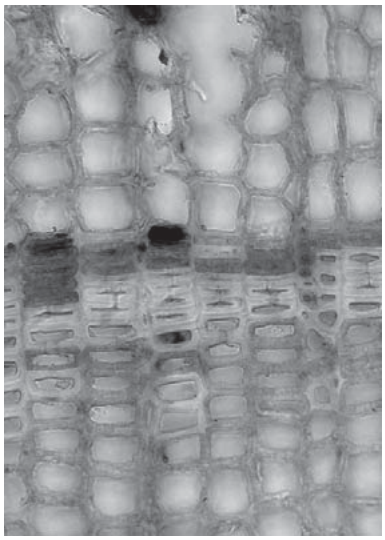


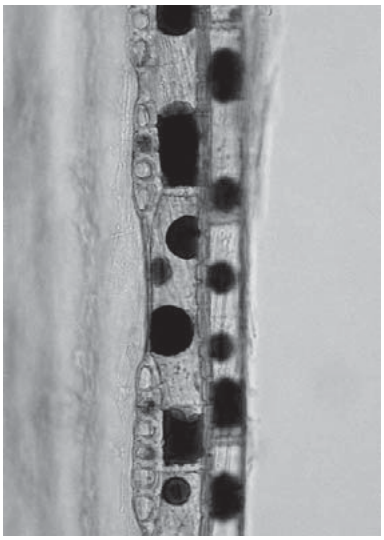


横断面 ―――― ：0.2mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.1mm

9.W35　ヒノキ

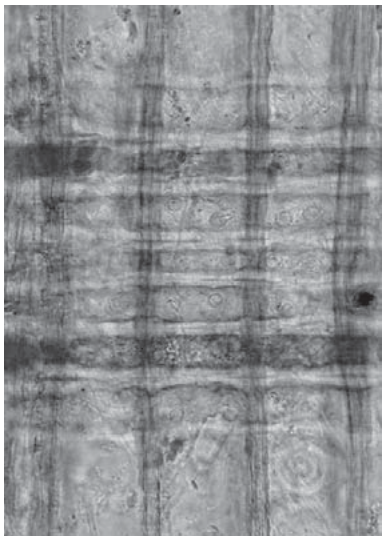
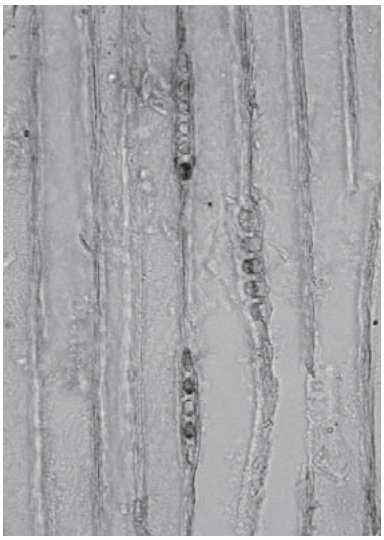
写真 8　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅲ





横断面 ：0.1mm　放射断面 ：0.05mm　接線断面 ：0.1mm

10.W42　ヒノキ

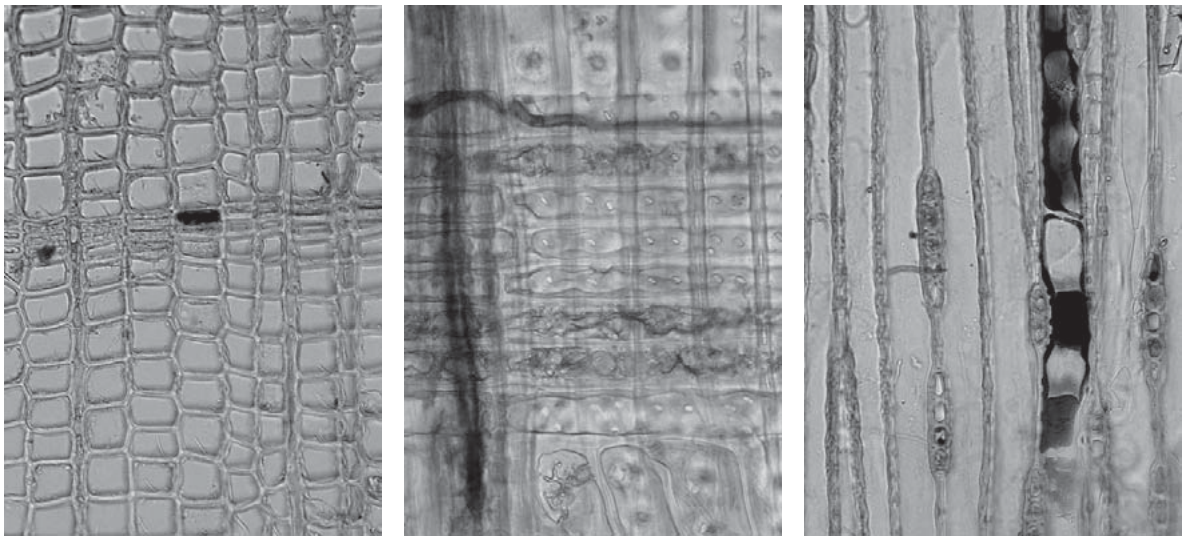
横断面 ：0.1mm　放射断面 ：0.05mm　接線断面 ：0.1mm

11.W64　ヒノキ

横断面 ：0.1mm　放射断面 ：0.05mm　接線断面 ：0.1mm

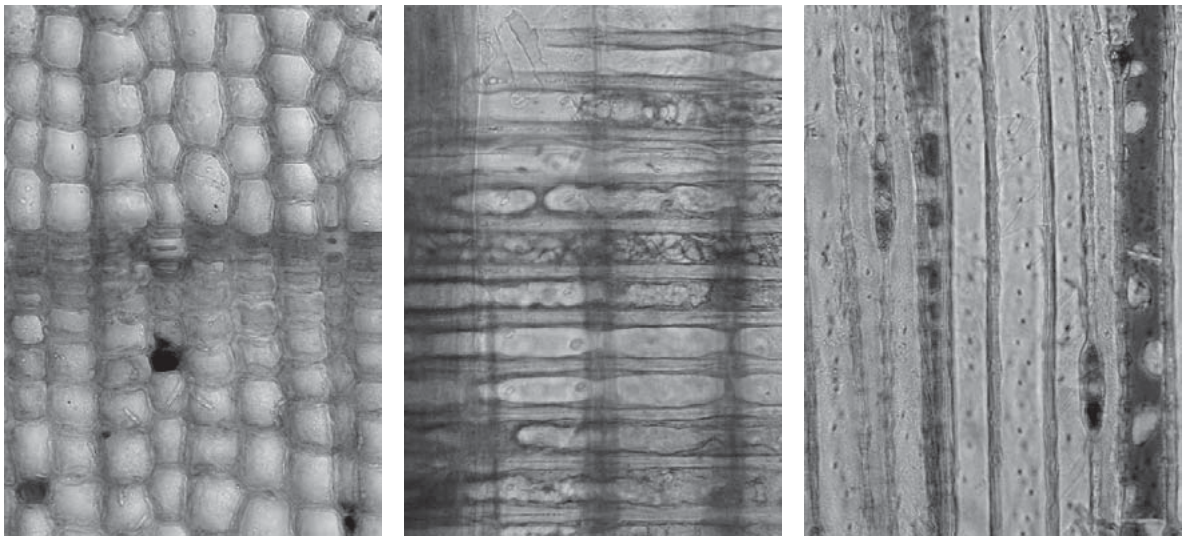
12.W3　ヒノキ

写真９　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅳ



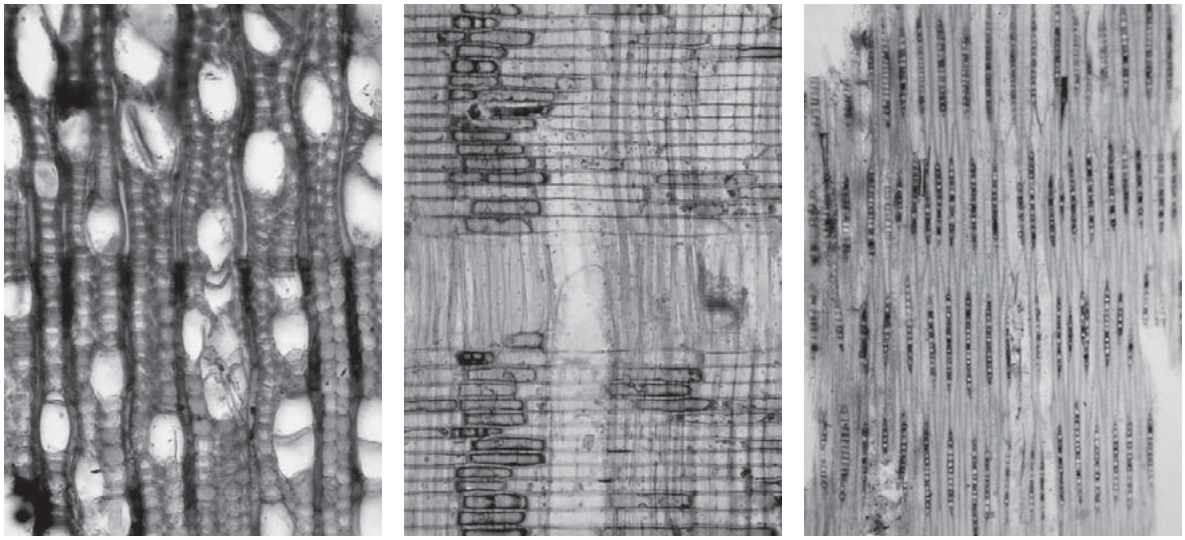
横断面 ：0.1mm　放射断面 ：0.05mm　接線断面 ：0.1mm

13.W33　ヒノキ



横断面 ：0.1mm　放射断面 ：0.05mm　接線断面 ：0.1mm

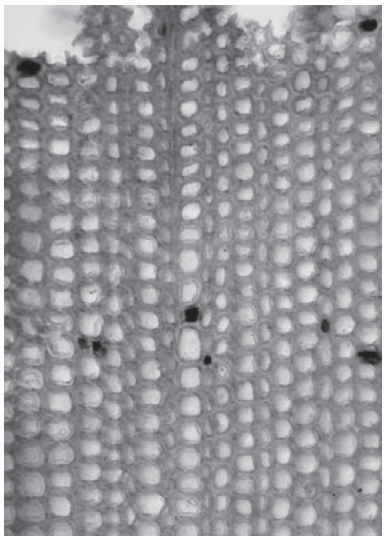
14.W48　ヒノキ



横断面 ：0.2mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.5mm

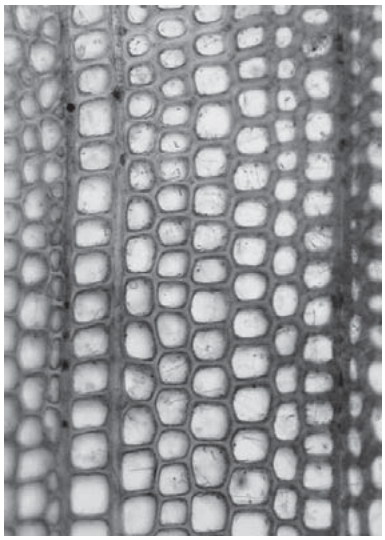
15.W26　トチノキ

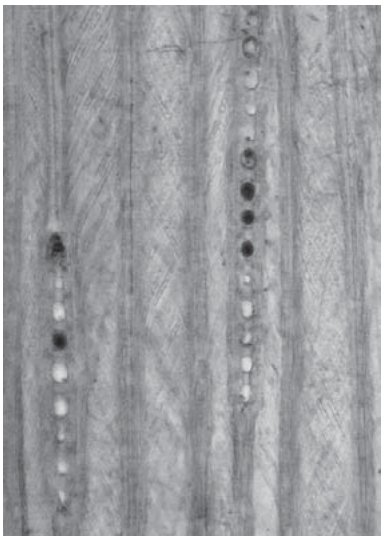
写真 10　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅴ



横断面 ：0.2mm　放射断面 ：0.05mm　接線断面 ：0.1mm

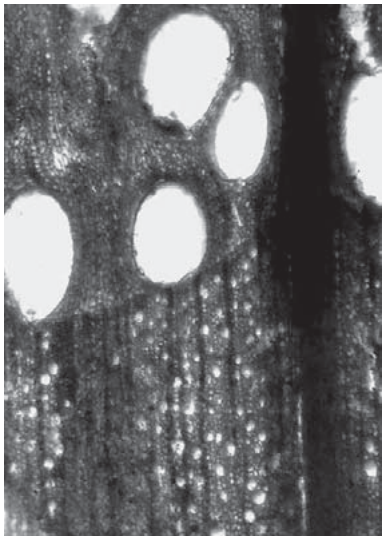
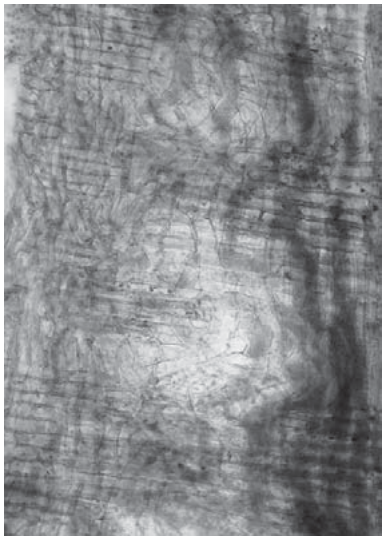
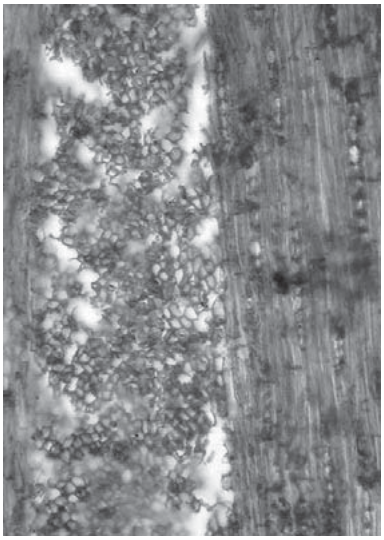
16.W2　ヒノキ





横断面 ：0.2mm　放射断面 ：0.05mm　接線断面 ：0.1mm

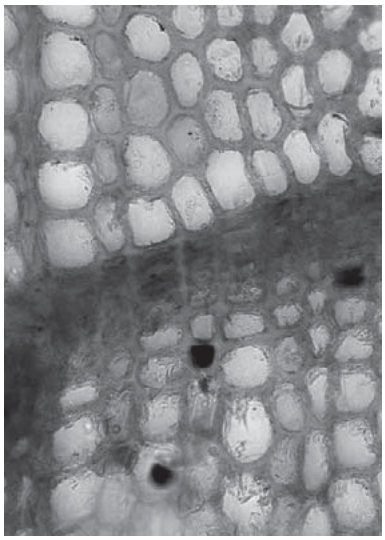
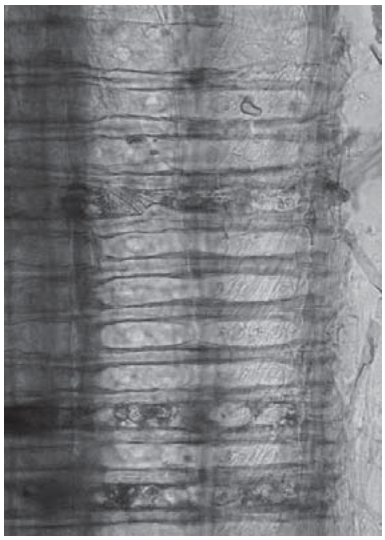
17.－　モミ属

横断面 ：0.5mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

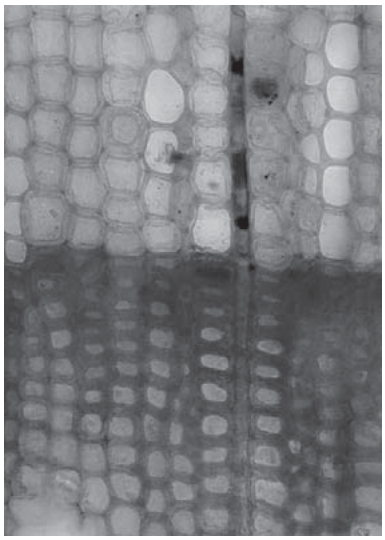
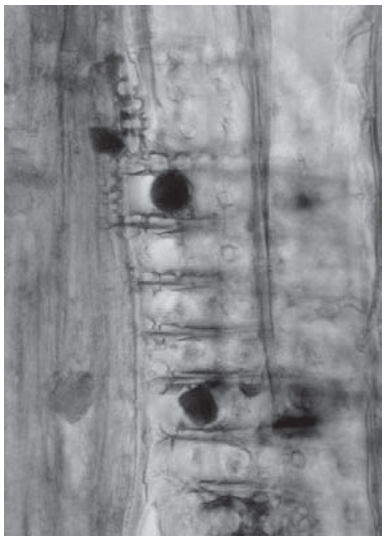
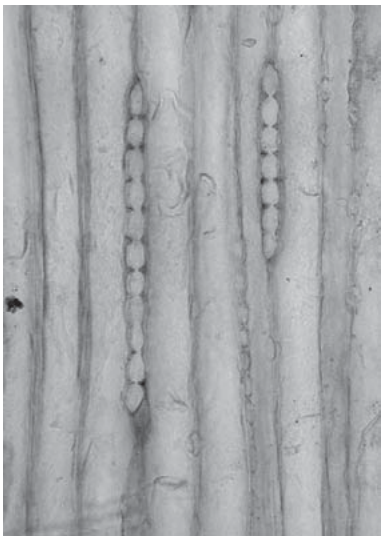
18.－　コナラ属コナラ節

写真 11　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅵ

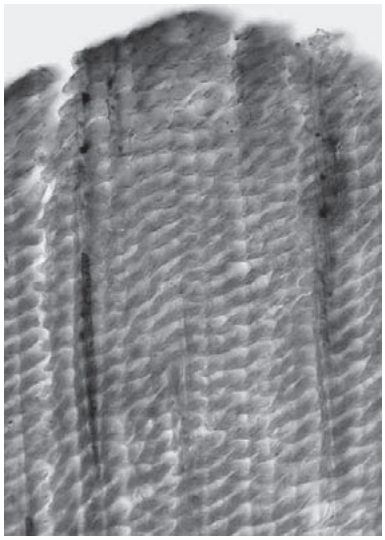
横断面 ―――― ：0.1mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.1mm

19.W11　ヒノキ

横断面 ―――― ：0.1mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.1mm

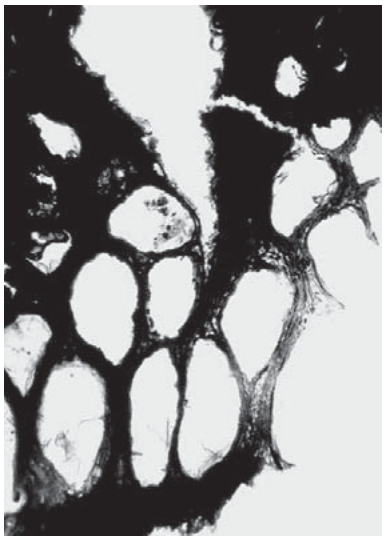
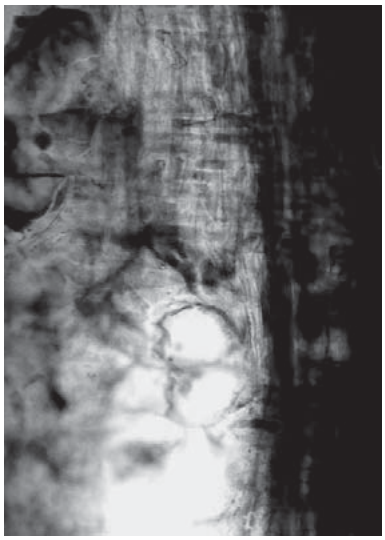
20.W77　モミ属



横断面 ―――― ：0.2mm　放射断面 ―――― ：0.05mm　接線断面 ―――― ：0.1mm

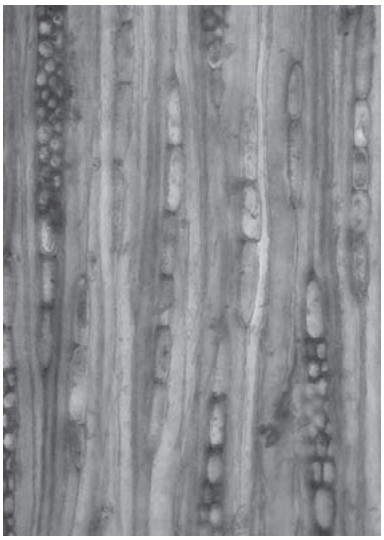
21.W76　モミ属

写真 12　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅶ

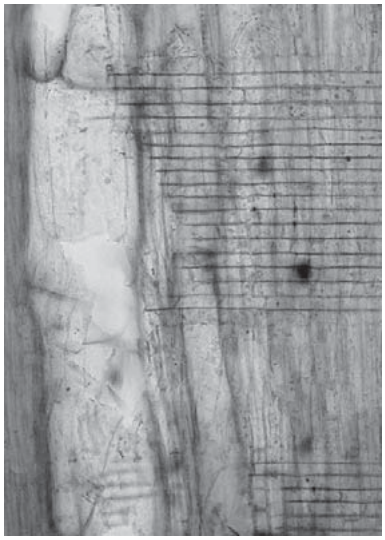
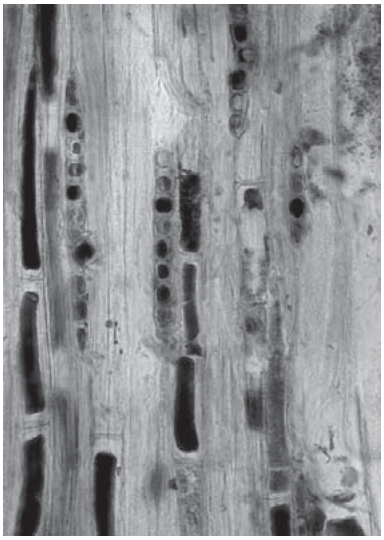
横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

22.W25　クリ



横断面 ―――― ：0.2mm　放射断面 ―――― ：0.1mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

23.W23　シキミ

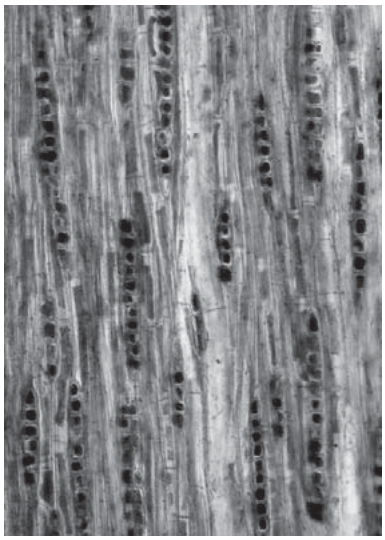



横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面 ―――― ：0.2mm　接線断面 ―――― ：0.2mm

24.W24　クリ

写真 13　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅷ

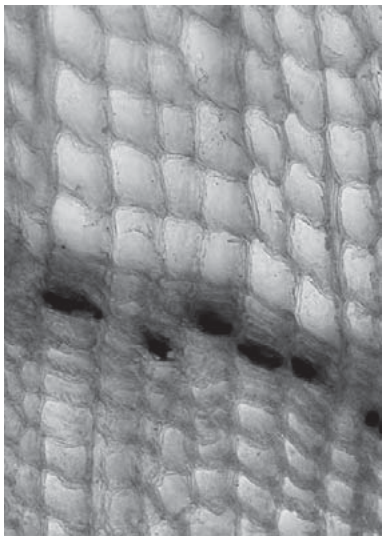
横断面 ：0.5mm



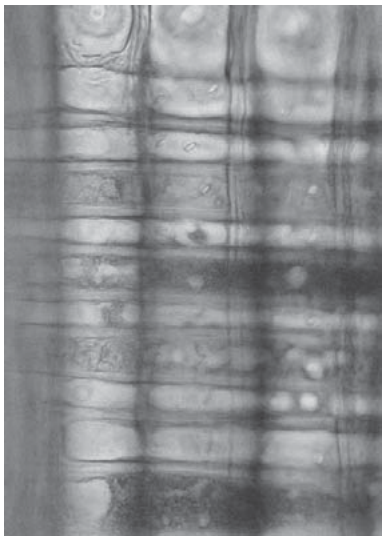
接線断面 ：0.2mm

接線断面 ：0.1mm

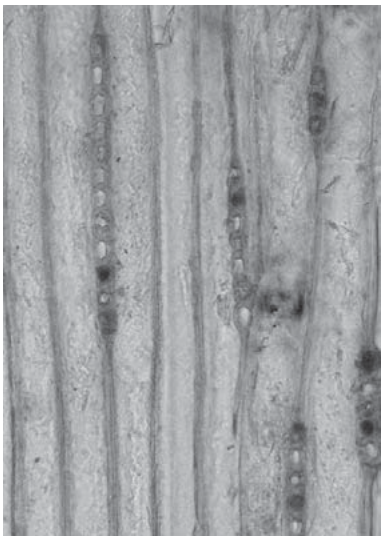
25.W20　クリ



横断面 ：0.1mm

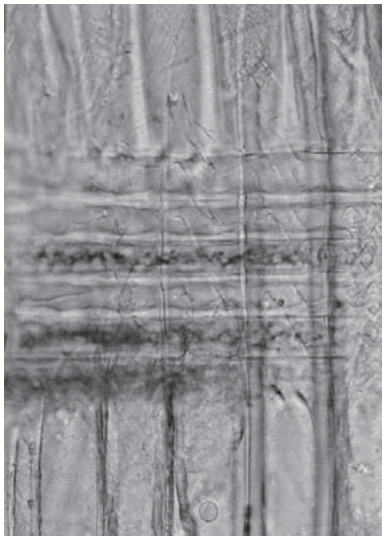


放射断面 ：0.05mm



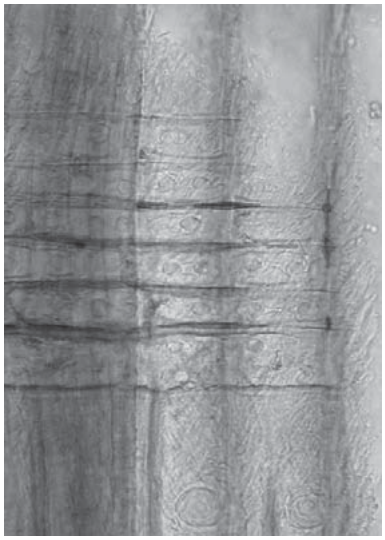
接線断面 ：0.1mm

26.W85　ヒノキ



放射断面 ：0.05mm

27.W81　ヒノキ



放射断面 ：0.05mm

28.W14　ヒノキ

接線断面 ：0.05mm

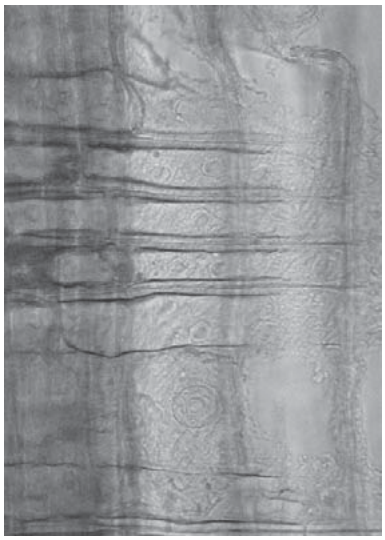
29.W27　ヒノキ

写真 14　曽我井・沢田遺跡の木材区

放射断面 ―――― ：0.05mm
30.W17　ヒノキ

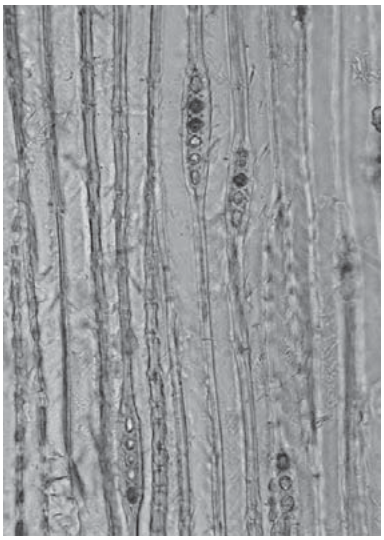
放射断面 ―――― ：0.05mm
31.W16　ヒノキ

放射断面 ―――― ：0.05mm
32.W8　ヒノキ

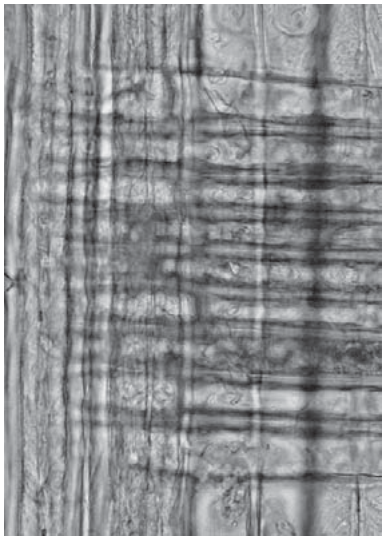


放射断面 ―――― ：0.05mm
33.W30　ヒノキ

放射断面 ―――― ：0.05mm
34.W66　ヒノキ

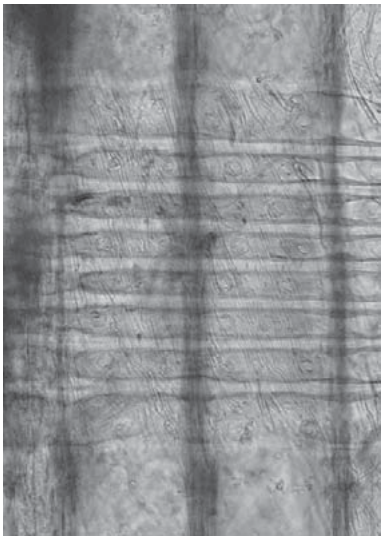


接線断面 ―――― ：0.1mm



放射断面 ―――― ：0.05mm
35.W1　ヒノキ

放射断面 ―――― ：0.05mm
36.W70　ヒノキ



放射断面 ―――― ：0.05mm
37.W31　ヒノキ

写真15　曽我井・沢田遺跡の木材Ⅹ

第Ⅷ章　ま　と　め

第１節　曽我井・堂ノ元遺跡について

堂ノ元遺跡の調査の結果、飛鳥～奈良時代初めの溝(SD04)、平安時代中期～末期の溝(SD01・06)とこれらの溝にほぼ直行し接続するため、同時期と理解できるSD02・03をはじめ平安時代後期の側柱建物(SB01)を含む建物跡が２棟検出された。これ以外に土器の出土がなく時期が確定できないが、前述した遺構群より古い段階と理解している集積土坑(SK09・10)群も見つかっている。

飛鳥～奈良時代の溝(SD04)は、調査区を東西方向に直線的にはしる溝で、被熱した石が置かれた集積土坑(SK10)を切って掘削されている。

平安時代中期の溝(SD01)は平安時代末期の土器を伴うSD06と並行しており、同じ機能をもった溝と理解できる。

溝の機能としては水田耕作に伴う水路、または屋敷地を限る溝の可能性が考えられる。前者の要素としては、この溝に直行して接続するSD02・03を小水路と理解し、両溝間に水田の存在を想定する場合である。とくにSD02とSD01接合部付近のSD01内は深く掘削されており、一時的な水溜の機能を想定することも可能である。

後者の要素としては、溝内に河原石による護岸の痕跡が認められることや、溝の東端が北側に進路を変えており、方形の地割り溝の可能性も考えられることである。この場合SD01に連結する２つの溝は、小区画の地割り溝と理解することも可能である。SD01と時期的に近い側柱建物(SB01・02)はいずれも棟軸方位を南北方向にもち、２つの溝とほぼ平行していることや、これらの建物以外に、B地区の東側と、西側のSD02とSD03間の西寄りで柱穴を検出しており、この付近にも建物の存在が予想されることも補強材料となる。

また今回の調査では瓦類の出土も確認されている。近隣に瓦葺の建物が存在する可能性も考えられ、SD01の機能として地割り機能を考えた場合、この事実も検討材料のひとつである。いずれにしても極めて限られた調査区のなかでは、溝の機能について断定はできない。調査区北側の調査事例を待ちたい。

出土した遺物のなかで、特筆すべきものに「足高高台杯」がある。この器種については第４節でもふれているが、「ハ」の字に開く高い高台を特徴とする土師器の杯で、県内では多可町内をはじめ北播磨・西播磨地域で出土事例を確認できる。

この「足高高台杯」の分布は主に島根県・鳥取県での出土が確認されており、播磨地域から中国地域に及んでいる。その時期については11世紀代の所産と考えられている。この器形は、須恵器の中にも求めることができ、県内摂津地域の三田市木戸窯で近似した須恵器杯が焼成されている。この杯の時期については11世紀第一四半期と考えられており、11世紀代でも早い時期が想定されている。土師器の足高高台杯の出現についても、須恵器模倣の観点も考慮すべきであろう。

平安時代後期の曽我井地区については、『和名類聚抄』に記載されている。多可郡には賀美・那珂・資母・荒田・黒田・蔓田の６郷があったことが記されているが、曽我井地区は那珂郷内に属していることが想定される以外詳細は不明である。平安時代末には安田荘曽我部郷に属しており、今回検出した溝の機能が明らかになれば、曽我部郷内での当遺跡の性格が明らかになる。

第２節　曽我井・野入遺跡について

１　A地区の調査について

A地区では、溝・柱穴群・土坑が検出された。調査区の北側で検出された柱穴群の存在は掘立柱建物があった可能性を示すが、柱穴の並び等の建物として識別はできなかった。時期についてはP1001より14世紀前半の須恵器椀が出土しており、柱穴群の年代を探る手掛かりとなる。溝の機能については今回の調査では明らかにできなかった。溝の時期についても、SD1008内より奈良時代の杯が出土している以外遺物の出土がなく不明瞭な点が多い。遺物については、SK1002の10世紀前半を中心とした土器の一括資料が特筆できる。土師器の皿（１・２）・椀（３～５）・杯（７）・羽釜（８）、須恵器椀（６・９～11）が投棄された状況で出土し、須恵器椀をはじめ底部回転ヘラ切りの土師器皿、回転糸切りの土師器椀は遺存状況も良好である。これ以外にいわゆる足高高台杯の高台部片、羽釜破片などの破片類も出土しているが、これらの破片も含め同時性の高い出土状況を示すと理解している。

A地区の遺構は出土遺物を見る限り、奈良時代、平安時代後期、中世の時期の遺構が複合していると理解できる。また、包含層からは弥生時代後期後半、庄内期、飛鳥・奈良時代、平安時代後期～末の遺物をはじめ14世紀～16世紀代の中世後期段階、17世紀～19世紀の近世段階の遺物が認められ。近隣にこの時期の遺構が存在する可能性がある。

２　B地区の調査結果について

B地区では、３棟の掘立柱建物を中心に柱穴群、溝、土坑が検出された。うちSB01・03の２×３間の南北方向に長い総柱建物は、ほぼ並列しており同時期の建物と推察できる。このうちSB01は西側に雨落ち溝をもっている。SB01を構成する柱穴内より出土した土師器擂鉢は後述するように15世紀を中心とした時期と考えられる。SB01・03もこの時期と考えておきたい。またSB01と重複して１×３間の側柱建物SB02が確認されている。この建物はSB01・03と同様に出土遺物から15世紀を中心とした時期と理解できる。土坑のうちSK02・05は出土遺物より14世紀代の時期と考えられる。また遺物について言及すると、SB01を構成する柱穴内より出土した土師器擂鉢(37)は、多可町内では安坂・門田遺跡、貝野前遺跡、段ノ城遺跡、糀屋・チガキ遺跡、思い出遺跡、糀屋・土井の後遺跡、極楽寺遺跡などで出土している。町内出土の擂鉢は、内面にハケ目を施した後クシ目の擂目を施すタイプと擂目を施さないタイプのみで、37のように１回１条描きの擂目をもつタイプは出土していない。県内で１回１条描きの擂目をもつ土師器擂鉢の出土事例は、篠山市(旧西紀町)西谷遺跡がある。井戸内(SE１)より丹波焼擂鉢(稲荷山窯併行期：14世紀後半～15世紀後半)とともに１回１条描きの擂目をもつタイプが出土している。しかし、口縁部に２段の強いナデを施しその間に断面三角形の小さな凸帯をもつが、口縁端部が外方へ大きく拡張することや、内面がハケ目調整ではなくナデ調整である点が異なる。これら以外に建物として識別できなかった柱穴内からは12世紀から13世紀代に比定できる東播系捏鉢・椀をはじめ龍泉窯系の青磁碗が出土しており、この時期の掘立柱建物の存在が想起される。またSK02・05の土坑内からは14世紀代の堝が出土していることから考えると、B地区には平安時代末から室町時代にかけ、掘立柱建物群で構成された集落が存在したと考えられる。

参考文献

宮原文隆　2011　『安坂・門田遺跡』多可町文化財報告13　多可郡多可町教育委員会

西田辰博　1991　『西谷遺跡発掘調査概要報告』西紀、丹南町文化財調査報告第９集　西紀、丹南町教育委員会

第３節　曽我井・沢田遺跡について

調査の結果、曽我井・沢田遺跡は、弥生時代前期・中期の遺物、奈良時代前期から平安時代前期、平安時代中期、更に平安時代後期から鎌倉時代、江戸時代の遺構・遺物が出土する遺跡であることが判明した。

１　遺構の方位からみた遺構の変遷

今回検出した遺構には時期決定資料に乏しい建物が大半を占めている。対してSD1001・SR1001などは長期間にわたって使用されており、遺構の変遷を考える上で時期を絞り難い遺構も存在する。このため、遺跡の変遷をまとめる作業の一つとして、遺構の方位から遺構の時期・変遷を検討する。

遺構名	建物形式	桁行×梁行(間)	桁行×梁行(m)	床面積㎡	軸方位	時　期	備　考
SB1001	総柱建物	5×4	12.1×9.5	115	N３°E	Ⅲ期	A群
SB1004	総柱建物	3×1	7.4×2.5	18.5	N８°E	Ⅳ期	B群
SB1006	総柱建物	2×2	5.2×4.7	24.4	N２°E	Ⅲ・Ⅳ期	A群
SB2001	総柱建物	2×1	4.8×4.4	21.1	N０°E	Ⅲ・Ⅳ期	A群
SB1005	側柱建物	1×1	2.4×2.3	5.5	N10°E	Ⅳ期	B群
SB1007	側柱建物	2×	4.3×		N５°E	Ⅲ・Ⅳ期	A群
SB3001	側柱建物	3×2	7.5×3.7	27.7	N38°W	Ⅲ期	D群
SB3002	総柱建物	4×2	6.0×3.2	19.2	N38°W	Ⅲ期	D群
SB3003	総柱建物	4以上×2以上	8.2以上×4.6以上	37.7以上	N83°E	Ⅱ期	E群
SB3004	側柱建物	2×2	5.3×4.0	21.2	N83°E	Ⅱ期	E群
SB3005	側柱建物	3×2	5.0×3.5	17.5	N84°E	Ⅱ期	E群
SB3006	側柱建物	4×1以上	8.2×2.5以上	20.5以上	N85°E	Ⅱ期	E群

表23　建物一覧

１・２・３地区を合わせ12棟の掘立柱建物を検出・復元した。掘立柱建物によって構成される集落は、限られた出土遺物からではあるが、８世紀前半から13世紀にかけて継続した古代末の集落遺跡であったと考えられる。

建物はその方位から以下のグループに分けることが可能である。

A群　建物の軸方位をN０°E前後にとるもの　SB1001・SB1006・SB2001・SB1007

B群　建物の軸方位をN10°E前後にとるもの　SB1004・SB1005

D群　建物の軸方位をN50°Eにとるもの　SB3002

E群　建物の軸方位をN10°W前後にとるもの　SB3003・SB3004・SB3005・SB3006

更に、溝・水田畦畔の方位を検討する。

溝

A群に属するものは、SD1021(N85°W)・SD2001(N90°E)がある。

B群に属するものは、SD1026(N13°E)・SD2005(N13°E)・SD2009(N80°W)・SD1003(N８°E)・SD1004(N８°E)・SD1005(N８°E)・SD1006(N10°E)・SD1007(N10°E)・SD1009(N９°E)・SD1010(N10°E)・SD1012(N12°E)・SD1013(N11°E)・SD1014(N11°E)・SD1016(N９°E)・SD1017(N７°E)・

SR1001－b（N80°W）がある。

C群に属するもの－建物にはないN20°E前後にとるもの　SD1002（N20°E）・SD1015（N15°E）・SR1001－a（N73°W）がある。

D群－方位をN50°Eにとるもの　SD1001－a（N40°W）・SD1001－b（N40°W）・SD1001－c（N40°W）がある。

E群－方位をN15°W前後にとるもの　SD1011（N81°E）・SD1019（N80°E）・SD1023（N５°W）がある。

水田遺構では、水田遺構aはA群（N３°E）、水田遺構bはC群（N65°W）である。

以上のように建物・溝・水田区画の方位はA群～E群の５群に分かれる。これらの時期を溝の出土遺物から推測する。

A群ではSD2001から12世紀代の須恵器椀が出土している。

A群の建物SB1001はSD1009・SD1010・SD1012に切られていることからB群よりも先行する遺構と考えられる。

B群に属するSD2005からは、SD2001よりもやや新しい須恵器椀が出土している。

このほか、畠に伴うと考えられる溝の多くは、B群もしくはC群に属している。

C群にはSR1001－aがあり少なくとも溝が埋没する13世紀にはC群の方位を取っていたと考えられる。

また、SD1002はSD1001－aの中層に流れ込んでいたと考えられ、少なくともC群は12世紀から13世紀にわたって形成されていた遺構と考えられる。

D群はSD1001－cが最も古い時期の遺物を出土しており、10世紀代に遡る須恵器椀が若干出土している。

SD1001－a・bの出土遺物は概ね12世紀である。

E群の遺構は３区の掘立柱建物に集中しており、出土した須恵器皿から10世紀代の可能性が高い。

溝内から11世紀代の土器がまとまって出土するSD1017や長期間に渡って使用されているSD1001・SR1001などがあるため、厳密な時期設定はできないが、概ね以下の様に推移すると推定される。

E群（10世紀）⇒D群（10世紀～12世紀）⇒A群（12世紀）⇒C群（12世紀から13世紀）⇒C群（13世紀）の順である。

２　遺構・遺物の概要と変遷

上記の作業をもとに、遺構・遺物の概要と変遷を以下にまとめておく。

Ⅰ期　弥生時代前期・中期の遺物

遺構は検出されず、弥生時代前期の甕44、中期の壺・甕21・22・231・232が出土している。

弥生時代中期の甕21（Ⅳ様式）は比較的大きな破片がSD1001に流れ込んでおり、周辺に弥生時代中期の遺跡が存在する可能性は高い。

弥生時代前期の甕44は細片であるが、周辺に生活址が存在した可能性は高い。弥生時代前期の遺構は本遺跡より西側の坂本・土井畑遺跡において検出されている。

Ⅱ期　奈良時代前期から平安時代前期を主に平安時代中期までの遺構・遺物

３区ではE群の遺構が形成される。また１・２区のSR1001bでは墨書土器・木製祭祀具が投棄される。

明確な遺構は、SD1001－C・SR1001－b・SX1001・SX1003・SX3001（３－b区）及びSB3001である。

また、SD1001－Cより須恵器杯・椀、土師器甕・木製祭祀具が出土している。SR1001－bからは多量の墨書土器を含む須恵器杯・皿・鉢・甕・平瓶、土師器杯などの土器類、木製祭祀具・呪符木簡が出土している。

SX1001からは平安時代中期(10世紀代)の須恵器椀が出土しており当該期の遺構と考えられる。

SX1003はSR1001－aに損壊されており、須恵器壺が出土している。

Ⅱ期からⅢ期にかけて、３区では建物群が形成される。SB3001の柱穴からは平安時代中期の須恵器高台付き皿(269)が出土しており、製塩土器を多量に埋納する。SX3001は建物に付随する土坑と考えられる。

Ⅲ期　平安時代中期から後期

D群及びA群の遺構が機能する。

SD1012・SD1015・SD1017からは10世紀から11世紀にかけての須恵器椀・黒色土器椀が出土している。

SD1001・SR1001などは継続して機能している。

Ⅳ期　平安時代後期から鎌倉時代の遺構・遺物

A群、C群、B群の遺構が順次機能する。

SD1001－a・SR1001－a・SD2005及びSK2001最上層、更に畠に伴うと考えられる南北方向の溝が当該期にあたると考えられる。

A群・B群・C群の建物が形成される。

Ⅴ期　南北朝から室町時代前半

明確な遺構がなく、調査区全域に洪水砂が被覆し、ほぼ全域が耕作され水田化する時期である。詳細は青木哲哉氏の考察(第Ⅶ章第１節)にゆずる。

Ⅵ期　室町時代後半以降と江戸時代

明確な遺構が少なく、調査区内は水田化している。当該期の遺跡の本体は現集落の下に移ると考えられる。紅皿が出土する廃棄土坑が調査区内に存在する。

３　木製祭祀具について

今回の調査では、SD1001及びSR1001より木製祭祀具が出土している。

木製祭祀具は人形、斎串、形代の可能性があるもの、陽物が出土しており、これに呪符木簡が加わる。

ここでは、人形、斎串について述べ、曽我井・沢田遺跡の特色について述べたい。

人　形

人形と確認できるものは計５点あげた。うち、W32・Ｗ１・Ｗ２は１本脚の人形である。

今回出土したなかで、SR1001－bから出土したW32は小型であり、肩表現の分類からは、撫で肩の人形、腕は欠失しているが腰部の張りを表現して左右１本ずつの切り欠きがあったと考えられ、大平分類のⅢ類a型式に属する。SR1001－bは８世紀後半～９世紀前半から10世紀にかけて機能しており時期的

な齟齬はない。

Ｗ１・Ｗ２はSD1001出土しており、概ね10世代以降の遺構から出土した。

Ｗ１は頭頂部に穿孔がある。肩は張る。腕は欠失しているが腰部を表現して左右２本ずつの切り欠きがあったと考えられる。大平分類のⅢ類C型式に属する。頭部の穿孔は複数枚の人形を束ねたものと考えられる。

Ｗ２はＷ１同様に肩は張る。腕は欠失しているが腰部を表現して左右１本ずつの切り欠きは確認できる。このことから大平分類のⅢ類C型式に属する。Ｗ２の人形は頭部に大きな烏帽子を表現しており、Ｗ１より若干時期が下るかもしれない。

Ｗ３は頭部を欠くが、肩は張る。腕は欠失している。腰部を表現せず左右２本ずつの切り欠きがあったと考えられる。このことから大平分類のⅢ類c型式に属する。この人形の大きな特徴は足が２本存在することである。

W61は棒状の材を使用した人形と考えられる。線刻にて眉・目・口を表現している。肩、腕はなく、１本脚である。この人形に近い例は平安京左京四条一坊五・六町トレンチ出土の棒状の人形である。大平編年のⅣ類d型式にあたり、平安時代末頃の時期が想定されている。本人形はSD1001－aから出土しており、時期的齟齬はない。

１本脚の人形は周辺では安坂・城の堀遺跡から出土している。安坂・城の堀遺跡は曽我井沢田遺跡より北西約５kmに所在する律令期の祭祀遺跡である。８・９世紀の溝より多量の人形・馬形・斎串・墨書土器が出土している。その出土人形は１本脚であり、大半が大型である。Ⅲ類a型式が多く、Ⅲ類c型式の人形が出土している。

兵庫県下において１本脚人形の出土例は乏しく、管見の限り、他には旧氷上郡(現丹波市)所在の市辺遺跡があげられるのみである。市辺遺跡は氷上郡家関連遺跡として律令期の木製祭祀具が一定量出土している。出土した人形の殆どは２本脚の人形であるが、数点１本脚の人形が存在している。その点においてＷ３が２本脚であることは注目に値する。中村　弘は『日本海域における古代の祭祀』において市辺遺跡と安坂・城の堀遺跡の１本脚人形に言及しており、両遺跡の位置関係に注目している。曽我井沢田遺跡はその中間に位置しており２種の人形が併存する点は興味深い。

W61は異形の人形であるが、１本脚人形と考えれば、Ⅳ類d型式の１本脚として平安時代後期までその系譜を引き継いだものと理解できる。

斎　串

斎串としたものは15点前後ある。曽我井・沢田遺跡の斎串の特徴は以下の点があげられる。

１．切り欠きをもつ砂入遺跡A類・B類・E類がない。

２．薄板から作製しない。

３．棒もしくは箸状の厚みをもつ個体で占められている。

４．大半の斎串が焼け焦げている。

大半を占めるものは箸状の形状をもつ斎串で、下端を尖らせ、上箸には縦に切れ目を入れる砂入遺跡C1類の斎串である。また、上部を圭頭に加工し、下端を尖らせる形状の全長が短いC2類が存在する。また、上部を斜めにカットし切れ目を入れる砂入遺跡分類D類に分類されるものがある。

特徴的な斎串としてW33がある。角棒の上部を圭頭にカットし、下端については部分的に削り斎串としている。上部が折損し状況がはっきりしない棒状木製品の多くに部分的な削りがあり、W33と同様の

斎串と判断した。これらは形状からは砂入遺跡C2類の斎串に分類できる。

W37は細い箸状の材の上端を圭頭にカットし、下端については細く削り出している。砂入遺跡C２類の斎串である。W38についても同様の技法がみられる。

これら砂入遺跡C2類の斎串に対して、上部に縦に切れ目を入れ、下端を尖らせる箸状の製品がある。W15・W41やW64が相当する。また、厚みのあるW34についても上端は斜めにカットし、縦に切れ目がはいること、下端が尖ることからC１類の斎串に分類される。

以上の斎串のなかで、細い箸状の材の斎串については大半が焼け焦げており、付け木として使用されたか、祭祀の段階で焼かれた可能性が指摘できる。対して厚みのあるW33・W34・W35については火を受けていない。

冗長になったが、曽我井・沢田遺跡では概ね斎串は砂入遺跡分類のC1類・C2類あるいはD類に限定され、使用後は箸状のC1類・C2類については焼かれた後流路・溝に廃棄したと考えられる。火を使う痕跡は墨書土器とともに出土した須恵器杯にも認められる点は興味を引く。

墨書土器について

墨書土器が出土している。内訳は大きく須恵器杯に墨書を施す、８世紀前半から９世紀前半の墨書と、須恵器椀に記す平安時代後期のものがある。

(律令期の墨書土器)

SR1001－bより出土している。その内訳は以下に分類できる。

① 遺跡の所在地に関連する『宗我』『宗我西』と記すもの

② 『中家』と記すもの

③ 『上南家』あるいは『上南』と記すもの

④ 『西』と記すもの

⑤ 『野田』『野』と記すもの

⑥ 『嶋山』と記すもの

⑦ その他『大田』『林』『合』など

以上の中で、注目されるのは、『宗我』『宗我西』と記すものである。

『宗我』は『そが』と読める。一つは現在の地名『曽我井』、近世初期の『播磨国絵図記載の下そがい村』の名のルーツが８世紀代に遡ることが判明した。

また、正倉院文書には奈良時代の播磨国多可郡奈何郷に宗我部(そがべ)を名乗る人々が住んでいたことが記されている。正倉院文書『優婆塞貢進文』には「播磨国多可郡奈何郷戸主　宗我部老人戸口」の記載がある。『優婆塞貢進文』は多可郡賀美郷山直国足とともに宗我部小敷十九才が大仏造立に伴い、奉仕・功徳を行い、得度を許されている。これは天平17年(745)頃と考えられている。宗我部は曽我氏の私有部民であり、戸主　宗我部老人は中区曽我井を遺称とする那珂郷の豪族であったと考えられている(中町史　神崎　1992)。

この奈何郷は中世安田庄曽我部郷にあたり、曽我井は下曽我部を解消したものである。『宗我』『宗我西』はこの曽我部あるいは奈何郷宗我部の所在を実証する資料といえるであろう。

いま一つ注目されるものは、『家』の文言がある墨書である。特に『中家』の墨書土器は複数点出土している。一般に『中家』は、『大家』あるいは『小家』などの墨書とともに、いわゆる『ヤケ』を表していると考えられる。『中家』は『大家』(オオヤケ)に対して規模的に劣る拠点集落を示すとも考え

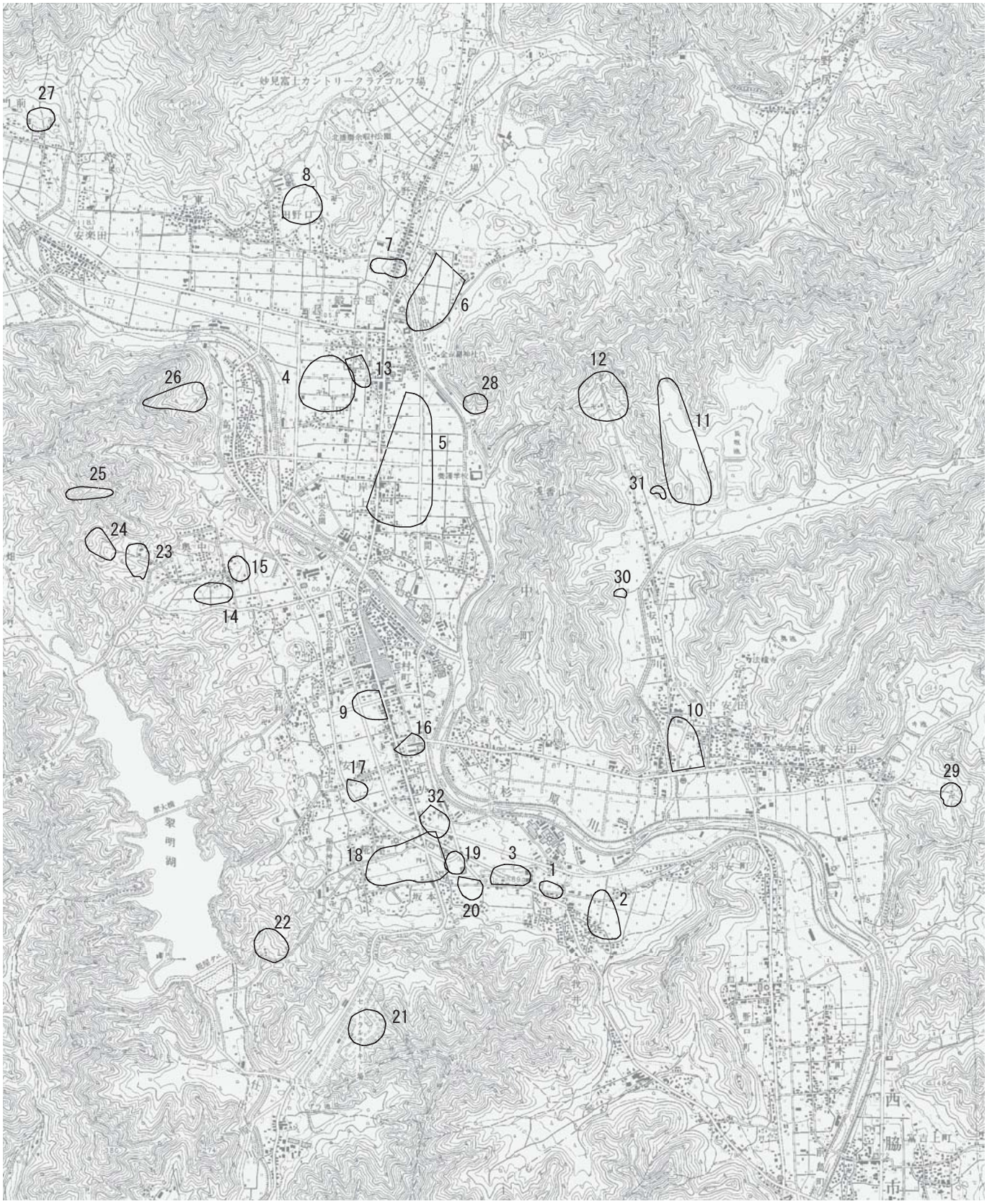
られるが、本遺跡が那珂郷に所在することから更に熟考を要する問題である。
また、『中家』以外にも『上南家』墨書が２点存在する。『上南家』を『カムナミのヤケ』と読めるならば、今回出土した祭祀遺物と関連する可能性も考慮しなければならないであろう。
(平安時代後期の墨書土器)
『西殿』の墨書がある須恵器椀がSR1001より出土している。平安時代後期から中世の曽我井は、安田庄曽我部郷にあたる。今回、１区より５×４間以上(床面積115㎡)の大型掘立柱建物跡が検出されている。『西殿』の墨書・大型建物の存在は当該地に安田荘の荘所があった可能性を想起させる。『平家物語』『源平盛衰記』には多賀菅六久利なる安田荘下司職が登場する。多賀は多可、菅はスガ、即ち曽我の可能性が指摘されている。即ち、古代の宗我部を氏名とする者が当地の荘官であった可能性が考えられるのである。

おわりに

今回の調査では、平安時代後期～鎌倉時代及び奈良時代後半から平安時代の多可町における重要な資料を発見できた。

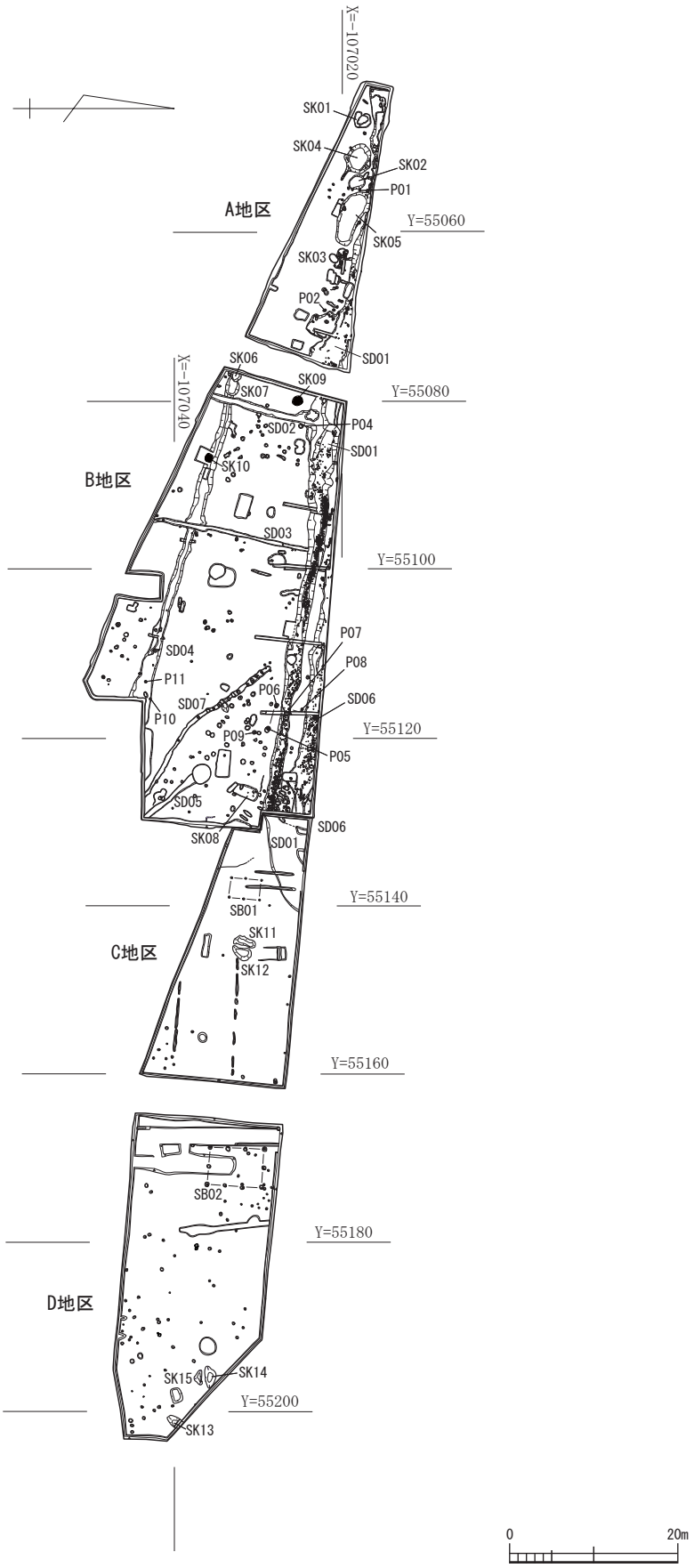
平安時代後期～鎌倉時代の掘立柱建物跡は規模が大きく、また、SR1001からは『西殿』と書いた平安時代後期の須恵器椀が出土している。このことから、本遺跡は中区の広範囲を占めていた荘園(安田荘)の経営に関わった建物(荘所)であった可能性が考えられる。また、SR1001からは人形や斎串、呪符、『宗我西』『宗我□』『西』『中家』などの墨書土器、転用硯などが出土している。これらの遺物は主に集落の『祓え等の祭祀』に使用され、集落の端にある水路に捨てられたものと考えられる。このことから、調査地点は、集落遺跡の縁辺に位置することが予想される。正倉院文書には奈良時代の播磨国多可郡奈何郷に宗我部(そがべ)を名乗る人々が住んでいたことが記されており、『宗我西』等の墨書土器は調査地点の近くに宗我部(そがべ)を名乗る人々が住んでいたことを示す重要な資料となった。また、『中家』・『上南家』の墨書は宗我部氏の集落を考える上で興味深い資料となりえるものと考えられる。

図　　版

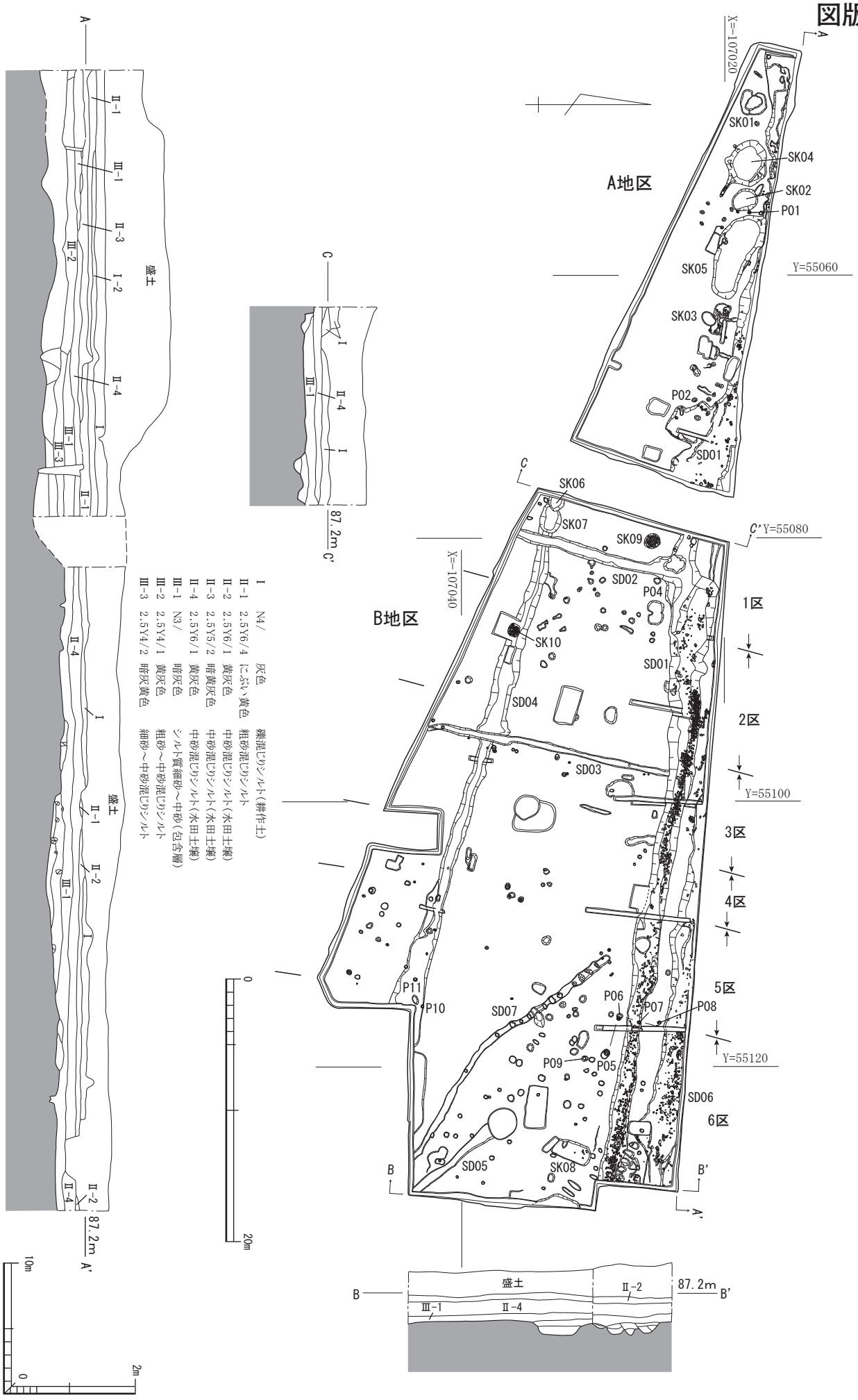


1　曽我井・堂ノ元遺跡	**2　曽我井・野入遺跡**	**3　曽我井・沢田遺跡**	4　多哥寺遺跡	5　思い出遺跡
6　牧野・大日遺跡	7　牧野・町西遺跡	8　田野口・北遺跡	9　安坂・城の堀遺跡	10　西安田長野遺跡Ａ
11　西安田長野遺跡	12　円満寺遺跡	13　鍛冶屋・下川遺跡	14　奥中・前田遺跡	15　奥中・桜木遺跡
16　森本・上島原遺跡	17　安坂・前田遺跡	18　糀屋・土井の後遺跡	19　坂本・土井畑遺跡	20　坂本・丁田遺跡
21　坂本･観音谷遺跡	22　糀屋・奥の谷遺跡	23　奥中・観音寺遺跡Ａ群	24　奥中・観音寺遺跡Ｂ群	25　奥中・観音寺遺跡Ｃ群
26　高岸・西山遺跡	27　門前・上山遺跡	28　妙法寺遺跡	29　善光寺遺跡	30　西安田西窯
31　西安田東窯	32　糀屋・里の垣内遺跡			

周辺の遺跡

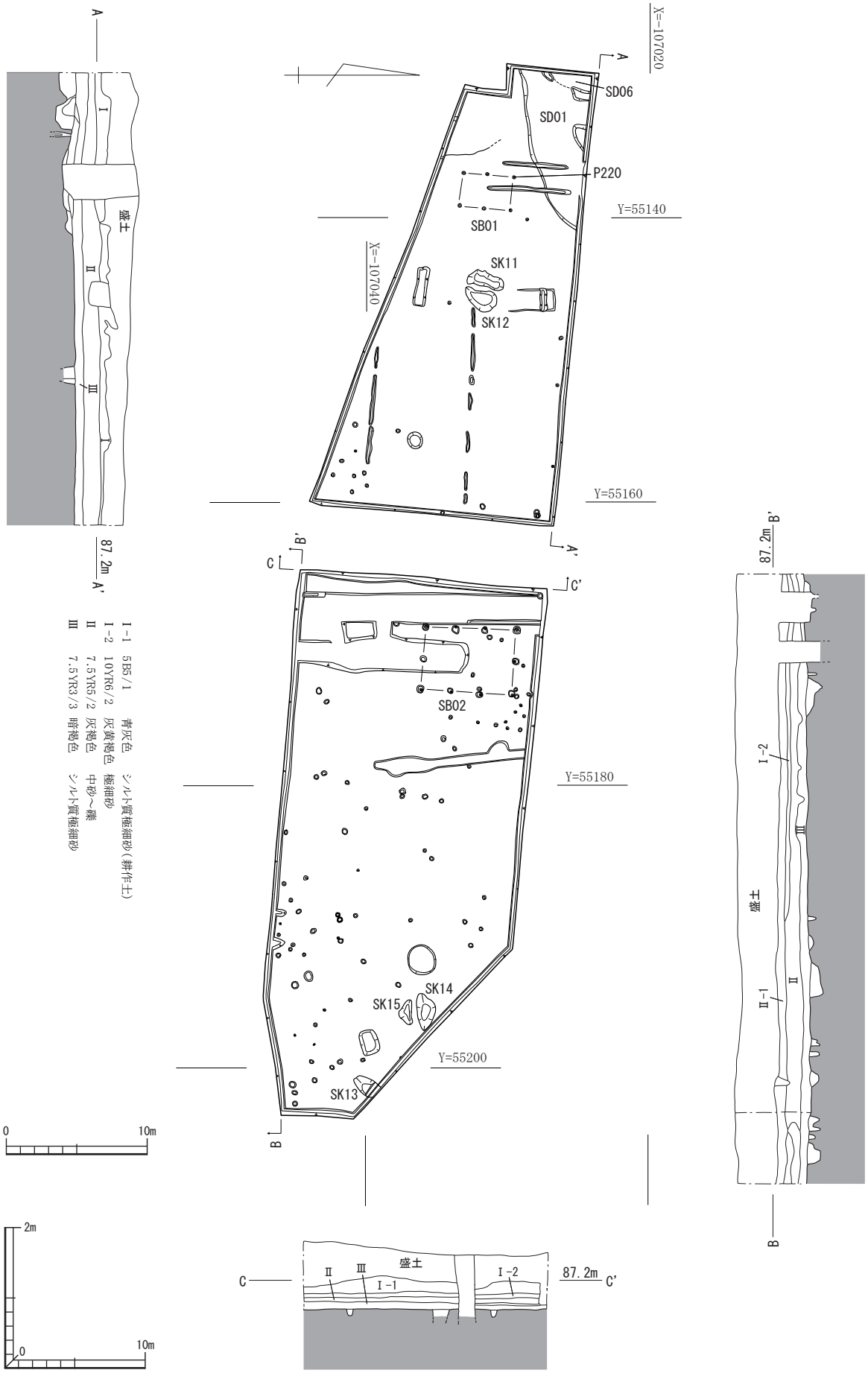


曽我井・堂ノ元遺跡全体図



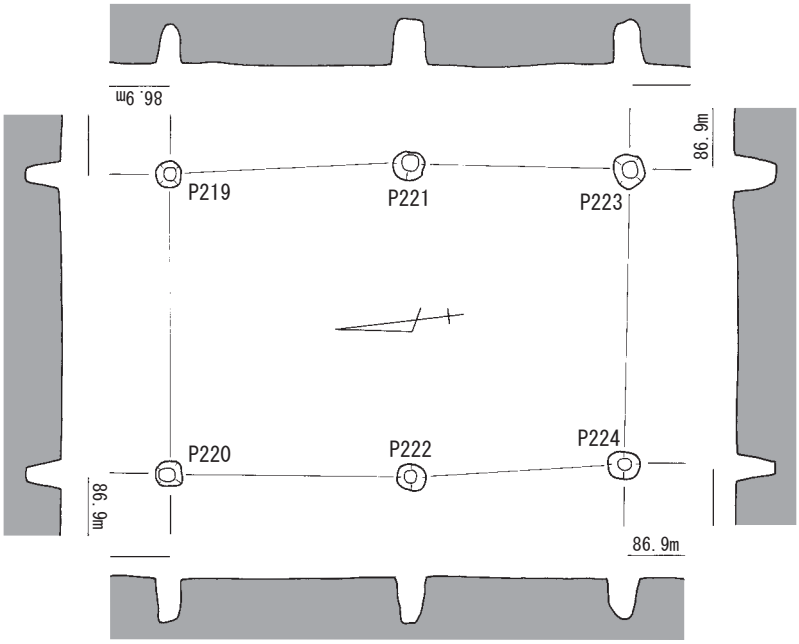
I	N4/	灰色	礫混じりシルト(耕作土)
II-1	2.5Y6/4	にぶい黄色	粗砂混じりシルト
II-2	2.5Y6/1	黄灰色	中砂混じりシルト(水田土壌)
II-3	2.5Y5/2	暗黄灰色	中砂混じりシルト(水田土壌)
II-4	2.5Y6/1	黄灰色	中砂混じりシルト(水田土壌)
III-1	N3/	暗灰色	シルト質細砂～中砂(包含層)
III-2	2.5Y4/1	黄灰色	粗砂～中砂混じりシルト
III-3	2.5Y4/2	暗灰黄色	細砂～中砂混じりシルト

A・B地区遺構配置図

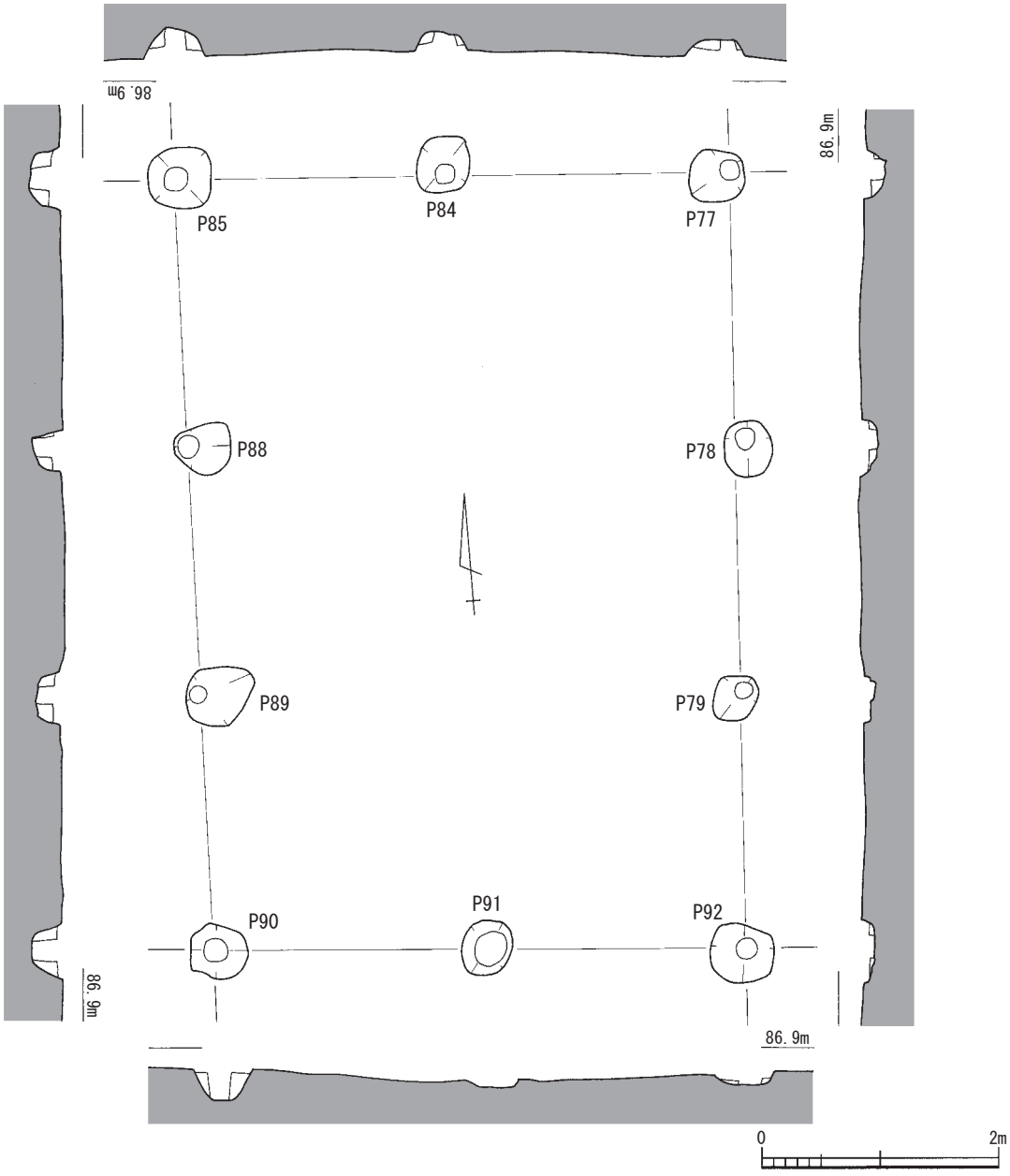

X=-107020
A
SD06
SD01
P220
Y=55140
SB01
X=-107040
SK11
SK12
Y=55160
A'
B'
C
C'
SB02
Y=55180
SK14
SK15
Y=55200
SK13
B
87.2m
盛土
Ⅰ-1 5B5/1 青灰色 シルト質極細砂(耕作土)
Ⅰ-2 10YR6/2 灰黄褐色 極細砂
Ⅱ 7.5YR5/2 灰褐色 中砂～礫
Ⅲ 7.5YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂
Ⅰ-2
Ⅲ
Ⅱ-1
Ⅱ
Ⅰ-1
0
10m
2m

C・D地区遺構配置図

SB01

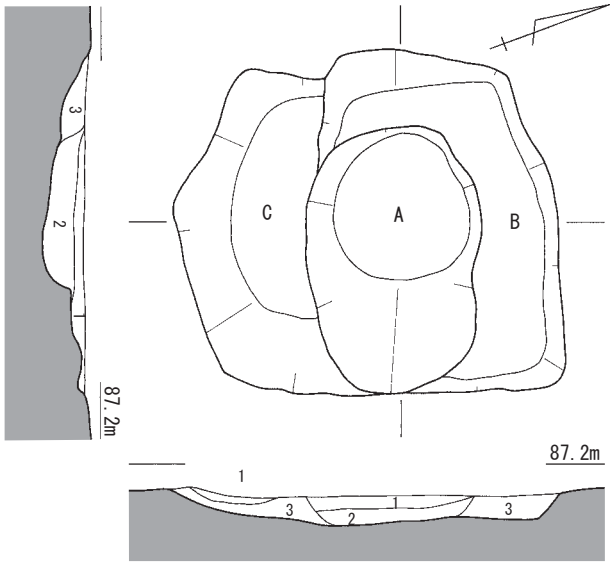


SB02



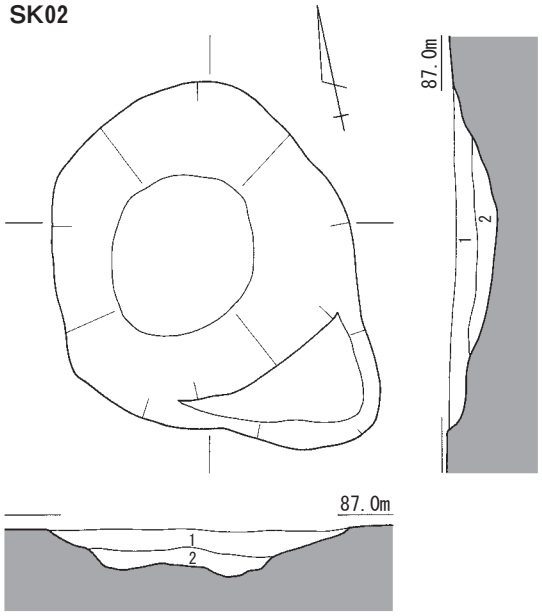
掘立柱建物(SB01・02)

SK01

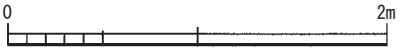


SK01
1. 5Y2/1　黒色　シルト質極細砂
2. 2.5Y6/1　黄灰色　中砂混じりシルト ＋2.5Y7/2　灰黄色シルトブロック
3. 10YR5/1　褐灰色　中砂混じりシルト ＋2.5Y7/2　灰黄色シルトブロック

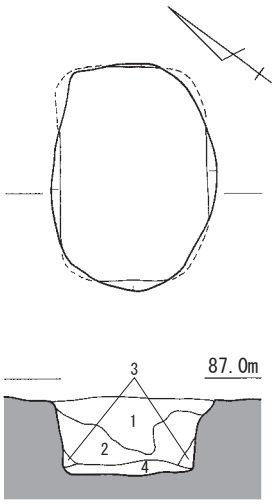
SK02



SK02
1. 10YR3/1　黒褐色　シルト質極細砂（土師器片含む）
2. 10YR1.7/1　黒色　シルト質極細砂

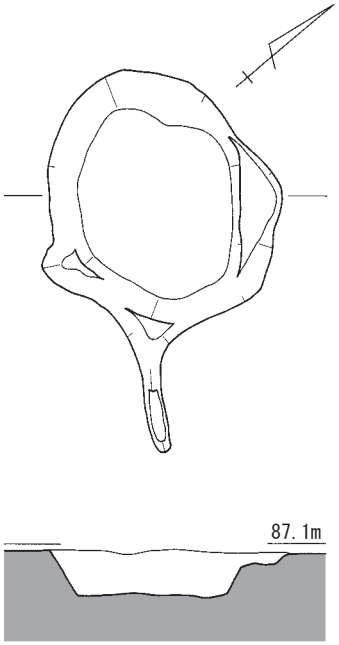


SK03

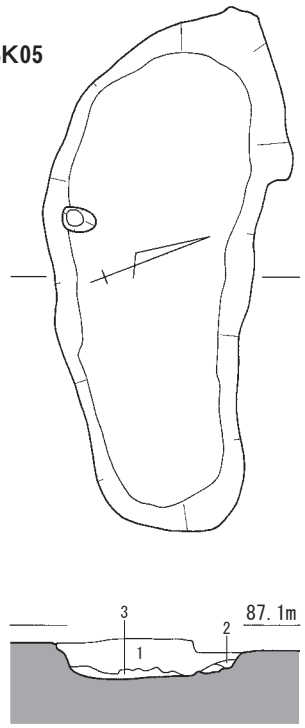


SK03
1. N2/　黒色　シルト質極細砂
2. N1.5/　黒色　クロボク
3. N2/　黒色　＋2.5Y8/2　灰白色ブロック
4. N2/　黒色　シルト

SK04



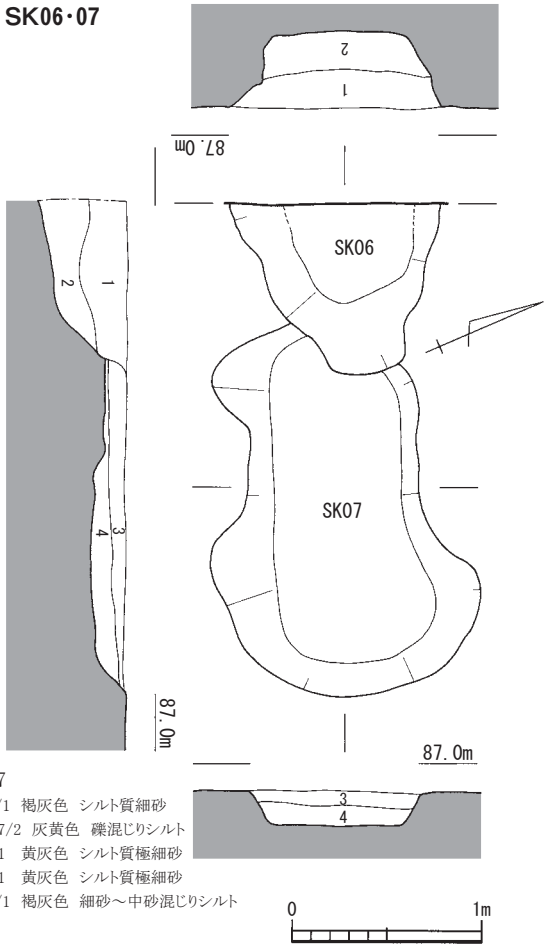
SK05



SK05
1. 10YR2/7　黒色　シルト質極細砂（土師器片含む）
2. 10YR1.7/1　黒色　シルト質極細砂～中砂
3. 2.5Y5.2　暗灰色　シルト質極細砂＋径0.2～7cmの地山ブロック

土坑（SK01～05）

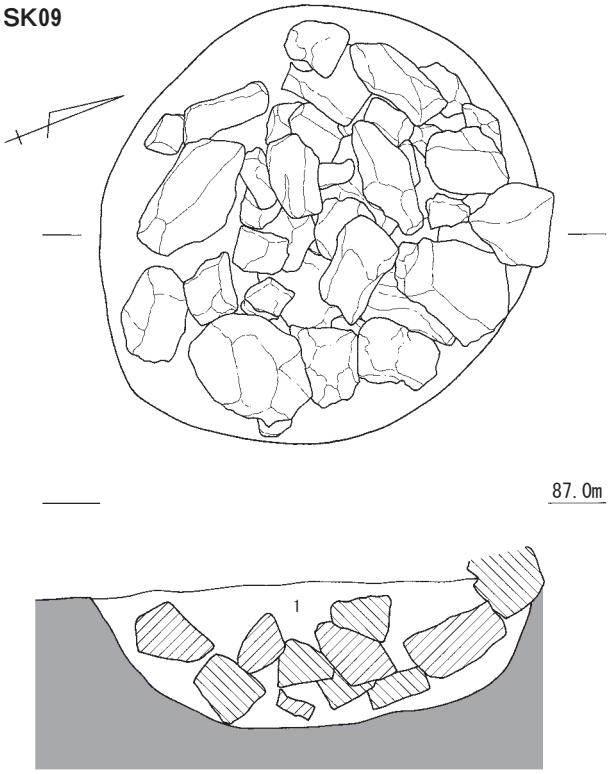
SK06・07



SK06・07
1. 10YR5/1 褐灰色 シルト質細砂
＋2.5Y7/2 灰黄色 礫混じりシルト
2. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト質極細砂
3. 2.5Y5/1 黄灰色 シルト質極細砂
4. 10YR4/1 褐灰色 細砂～中砂混じりシルト

0 1m

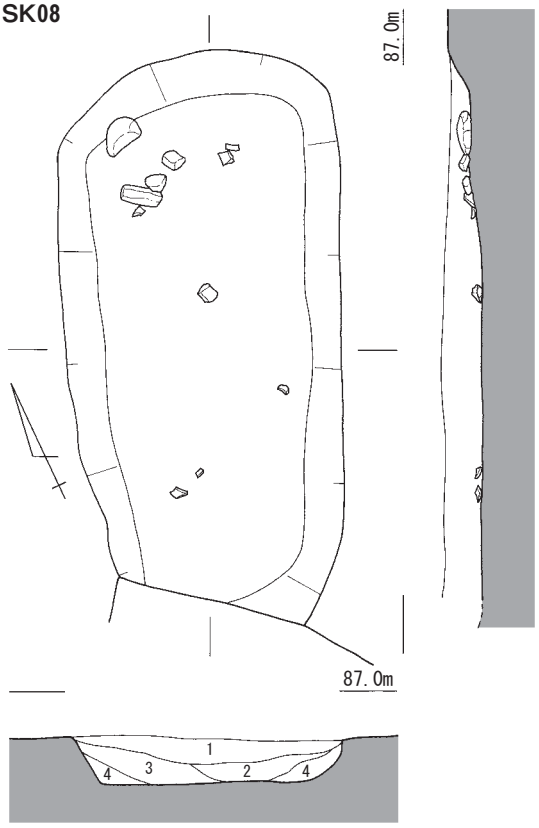
SK09



SK09
1. 10YR4/1 褐灰色 シルト質極細砂～細砂

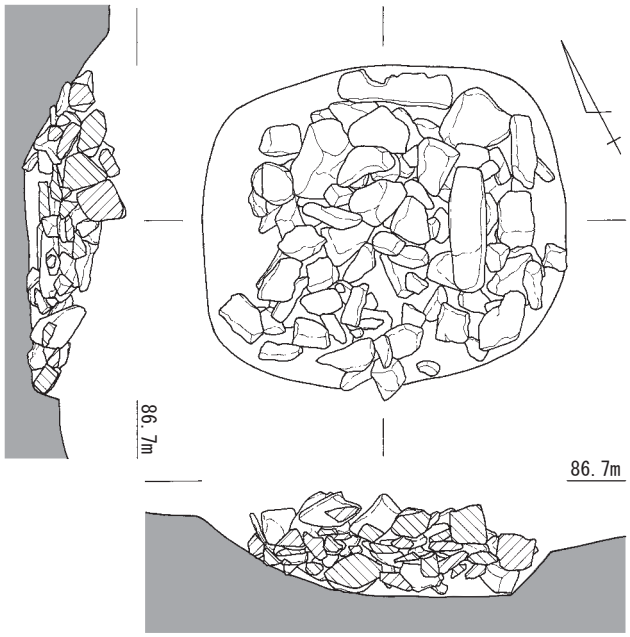
0 1m

SK08



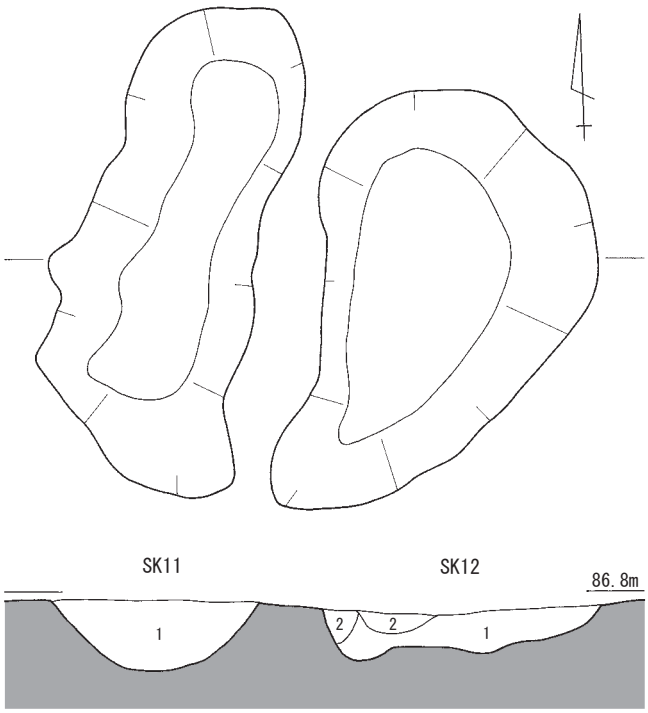
SK08
1. 2.5Y3/1 黒褐色 中砂混じりシルト
2. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト質細砂
3. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト質細砂
4. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト質細砂 ＋2.5Y6/1 黄灰色 シルトブロック

SK10



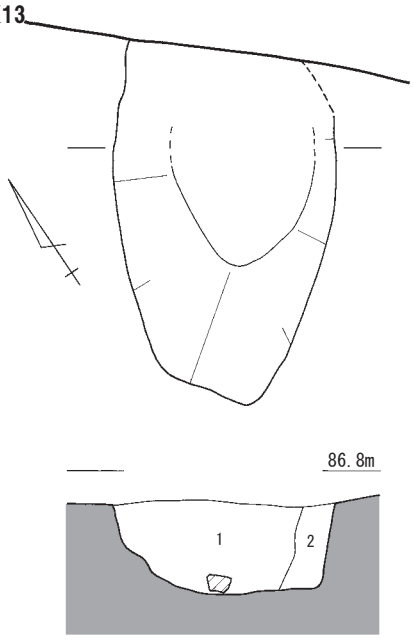
0 2m

SK11・12



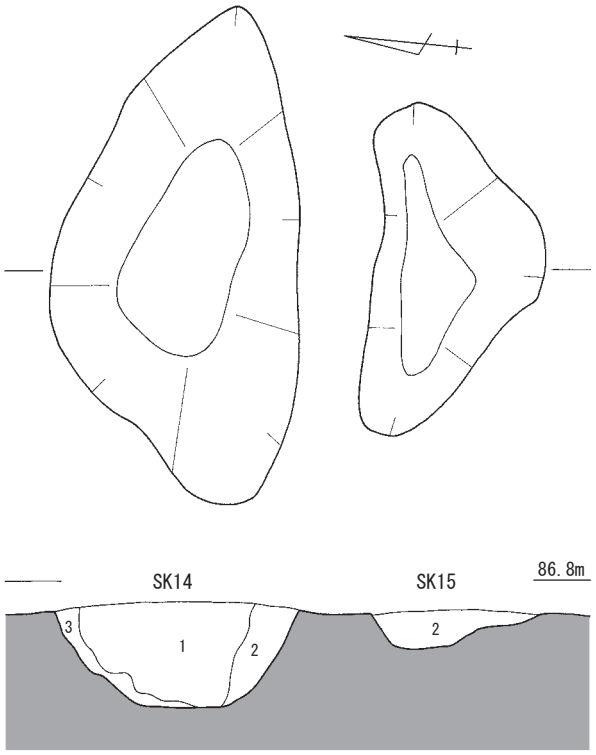
SK11・12
1. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト質極細砂
2. 10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂～中砂

SK13

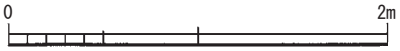


SK13
1. 10YR1.7/1 黒色 シルト質極細砂
2. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質極細砂

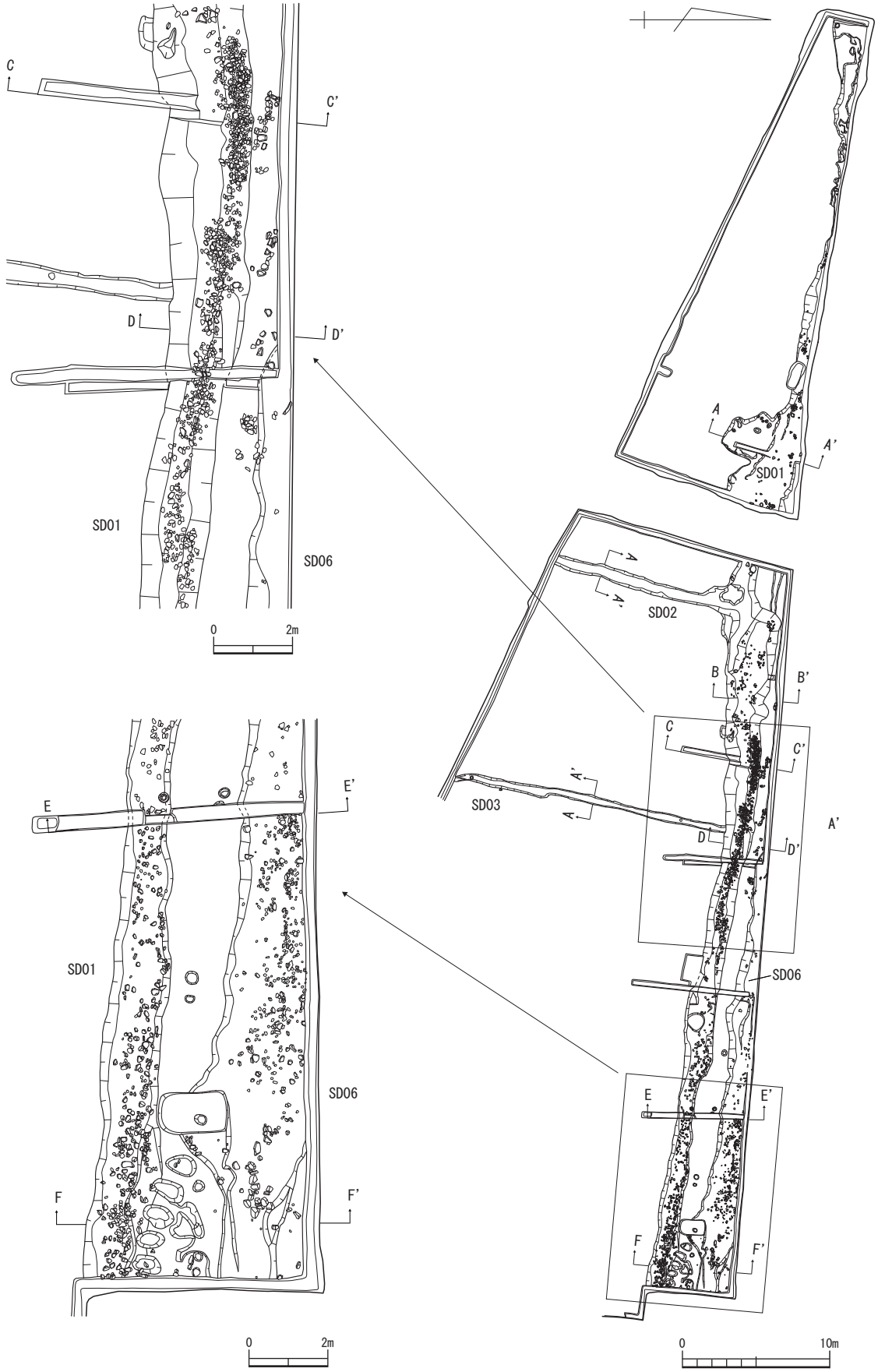
SK14・15



SK14・15
1. 10YR1.7/1 黒色 シルト質極細砂
2. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質極細砂
3. 10YR6/4 にぶい黄橙色 シルト質極細砂

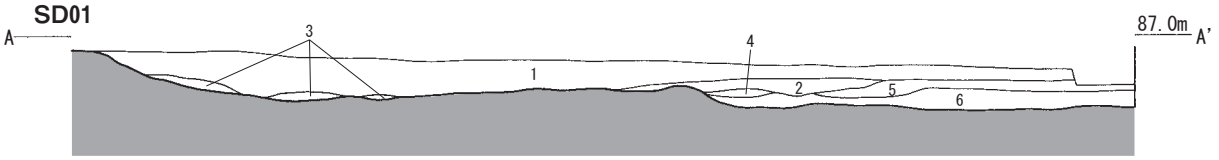


土坑（SK11～15）

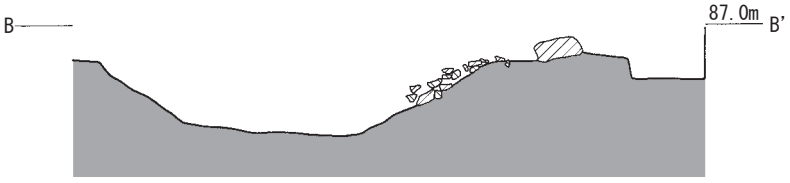

C
C'
D
D'
SD01
SD06
0
2m
A
A'
SD01
SD02
SD03
B
B'
C
C'
D
D'
SD06
E
E'
F
F'
0
10m
E
E'
SD01
SD06
F
F'
0
2m

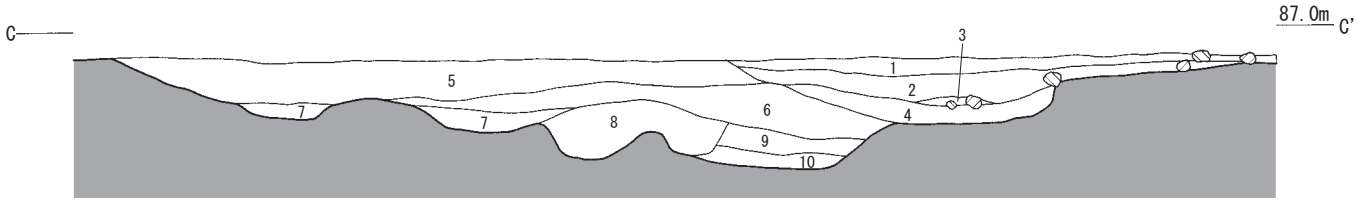
溝（SD01～03・06）

SD01

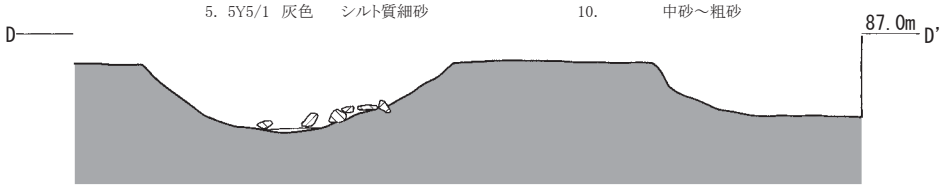


SD01
1. 10YR3/1 黒褐色 シルト質極細砂(土師器含む)
2. 10YR2/1 黒色 シルト質極細砂
3. 10YR7/1 黒色 シルト質細砂～中砂
4. 粗砂
5. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト質細砂
6. 2.5Y4/2 暗灰色 細砂～中砂

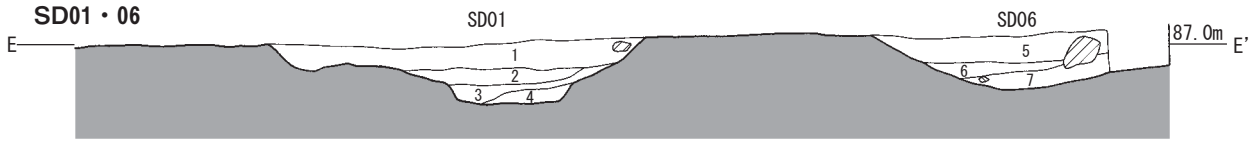




SD01
1. 5Y5/1 灰色 シルト質細砂
2. 5Y5/1 灰色 細砂混じりシルト
3. 中砂～粗砂
4. N4/ 暗灰色 シルト質細砂
5. 5Y5/1 灰色 シルト質細砂
6. 5Y5/1 灰色 中砂～粗砂混じりシルト
7. 細砂～中砂
8. 中砂～粗砂
9. 5Y5/1 灰色 細砂～中砂混じりシルト
10. 中砂～粗砂



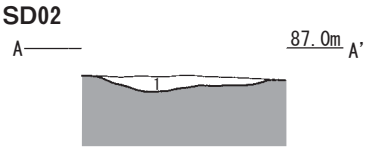
SD01・06



SD01
1. 7.5YR4/1 褐灰色 細砂～粗砂混じりシルト
2. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質細砂～中砂
3. 5Y5/1 灰色 中砂～粗砂混じりシルト
4. 中砂～粗砂

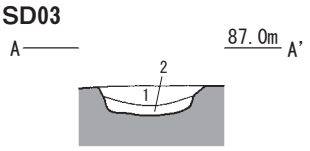
SD06
5. 2.5Y4/1 褐灰色 シルト質細砂～中砂
6. 10YR4/1 褐灰色 粗砂混じりシルト
7. 中砂～粗砂

SD02

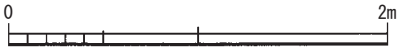


SD02
1. 2.5Y5/1 黄灰色 シルト質細砂 ＋N3/ 黒灰色 シルト

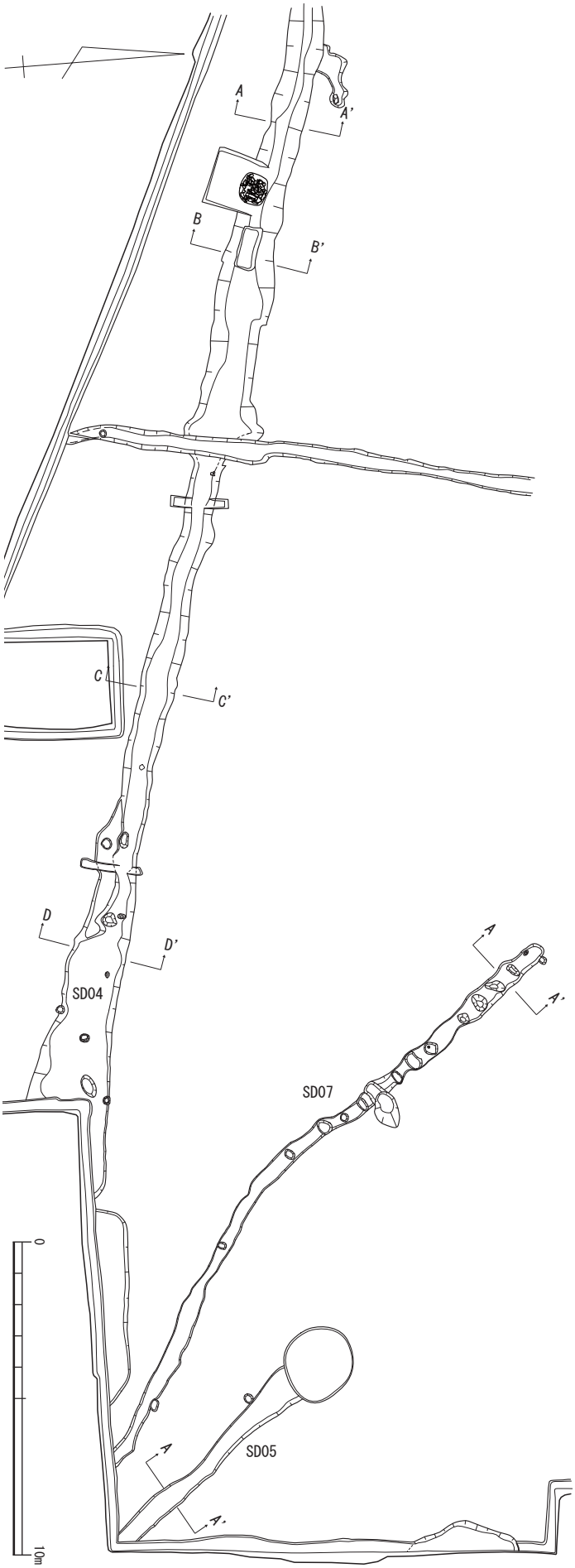
SD03

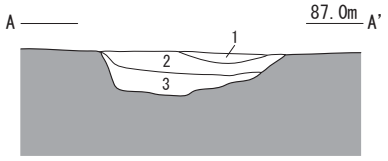


SD03
1. 10YR4/1 褐灰色 細砂～中砂混じりシルト
2. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト質極細砂

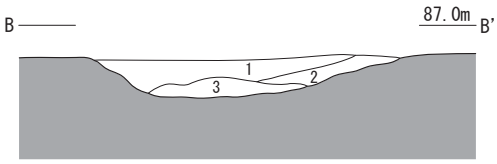


SD01～03・06土層図

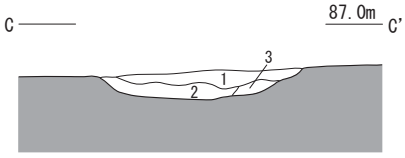




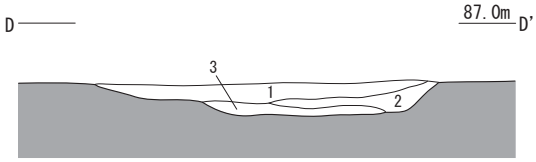
SD04
1. 10YR4/1 褐灰色 細砂混じりシルト
2. 10YR4/1 褐灰色 粗砂混じりシルト
3. 10YR2/1 黒色 シルト ＋10YR7/6 明黄褐色シルトブロック
（中世土師器出土）



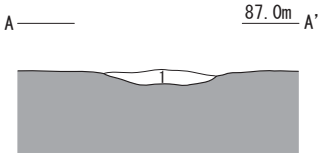
SD04
1. 10YR4/1 褐灰色 粗砂混じりシルト
2. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト質極細砂
3. 10YR2/1 黒色 シルト ＋10YR7/6 明黄褐色シルトブロック



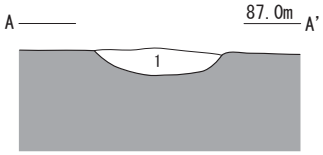
SD04
1. 10YR4/1 褐灰色 細砂混じりシルト
2. 2.5Y3/1 黒褐色 中砂混じりシルト
3. 10YR2/1 黒色 シルト ＋10YR7/6 明黄褐色シルトブロック



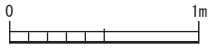
SD04
1. 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト質細砂
2. 5Y4/1 灰色 シルト混じり粗砂
3. 粗砂



SD05
1. 2.5Y4/1 黄灰色 中砂混じりシルト



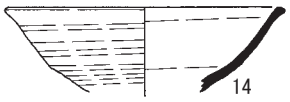
SD07
1. 2.5YR3/3 暗褐色 中砂～粗砂混じりシルト



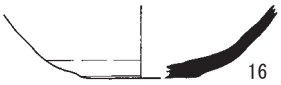
B地区SD04・SD05・SD07

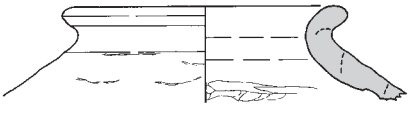
図版12

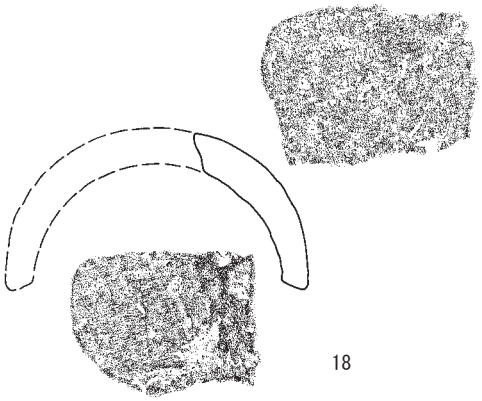
SB01（P220）



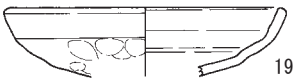
SK05

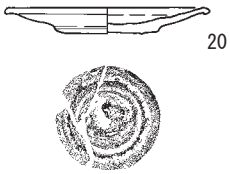


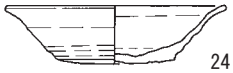


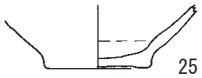


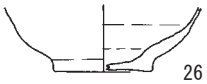
SD01

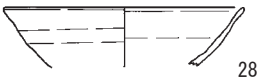


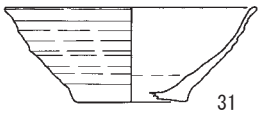


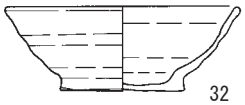


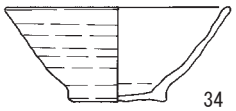


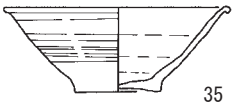




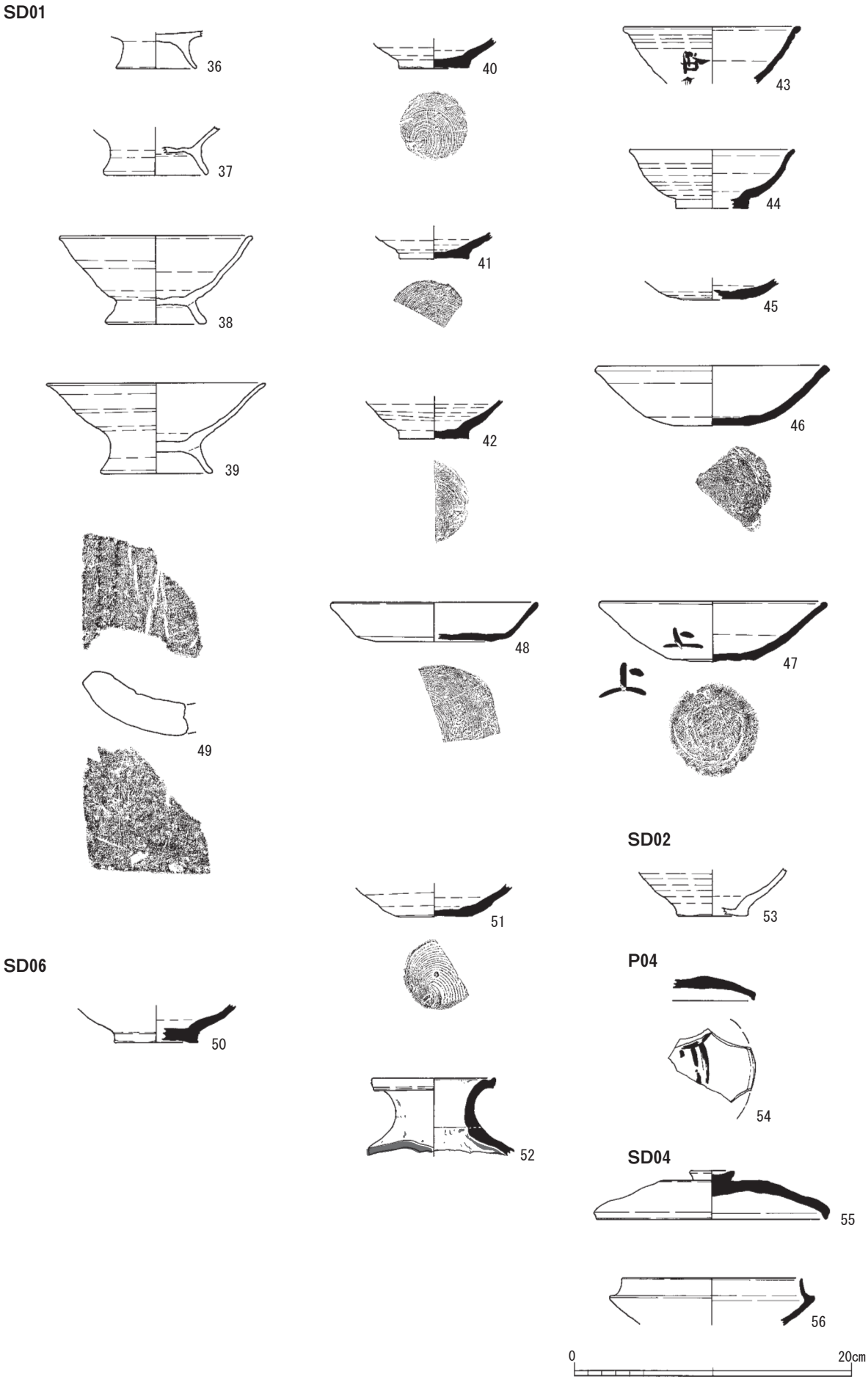




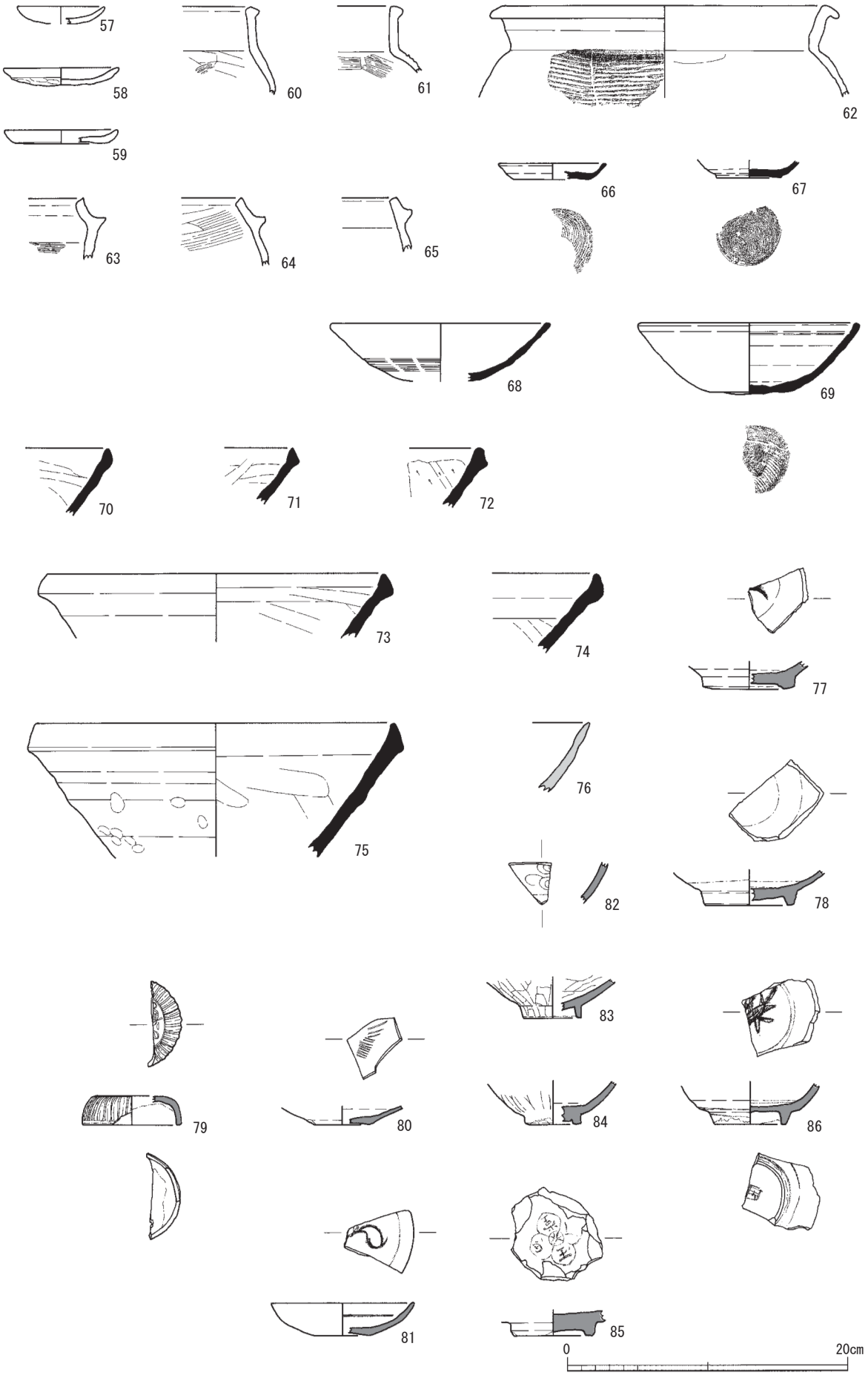




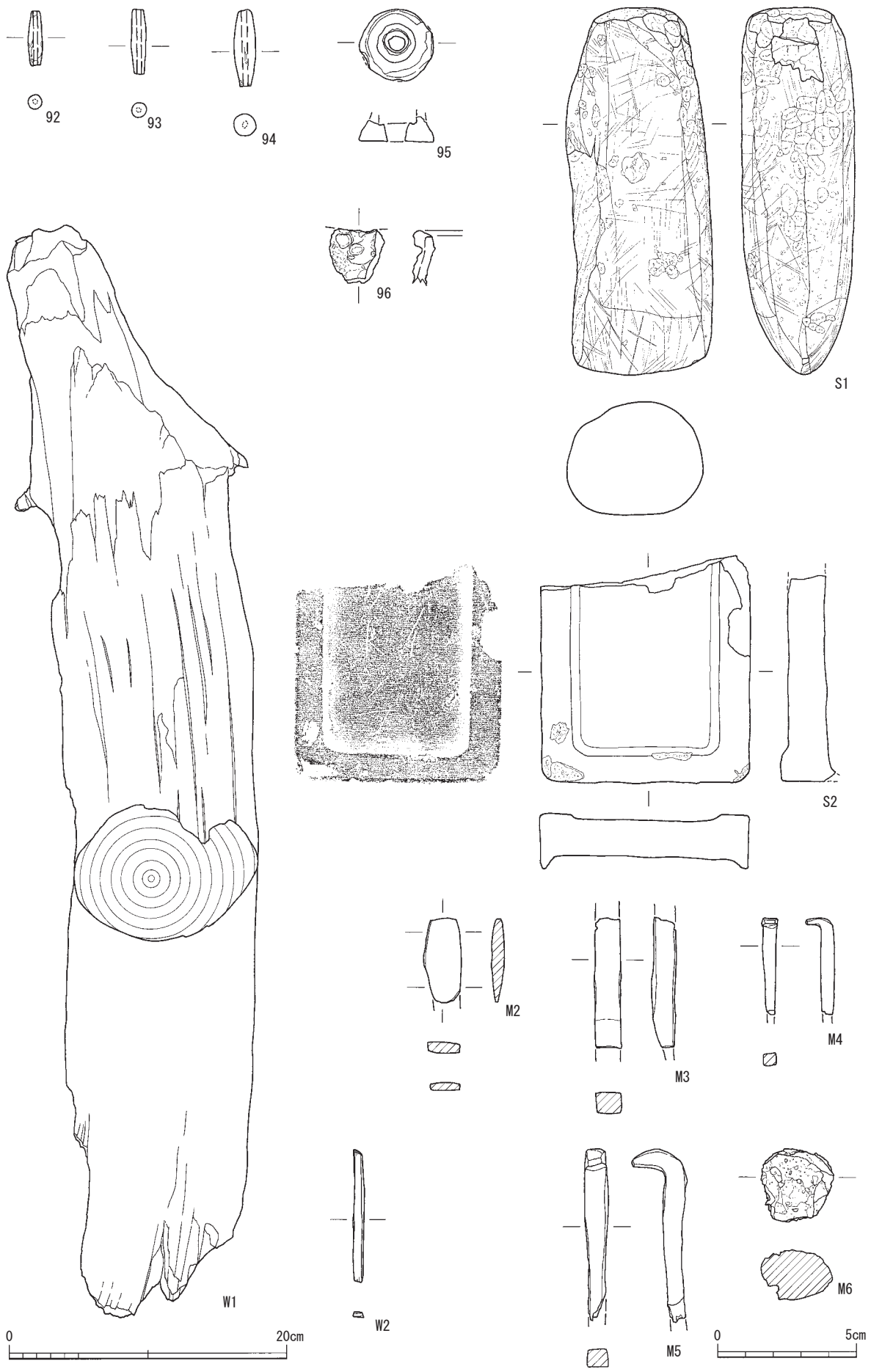
遺構出土土器（1）


SD01
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
SD02
53
51
52
SD06
50
P04
54
SD04
55
56
0
20cm

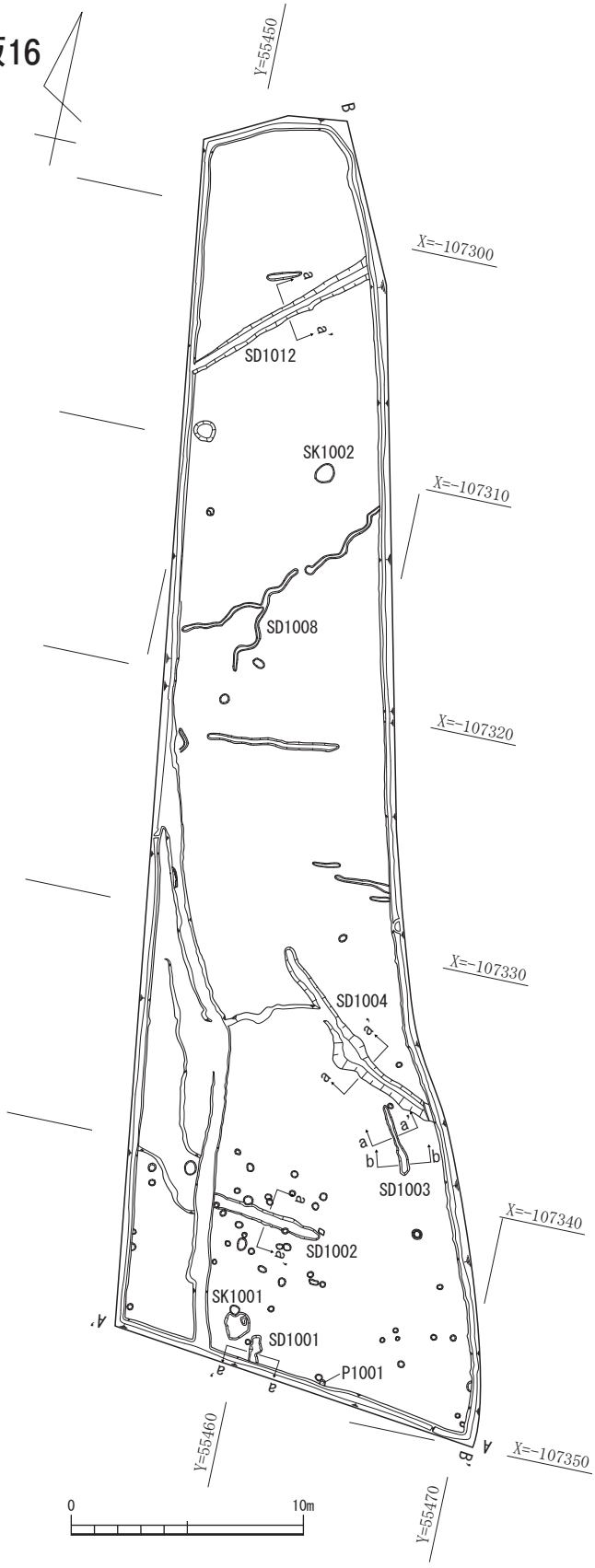
遺構出土土器(2)

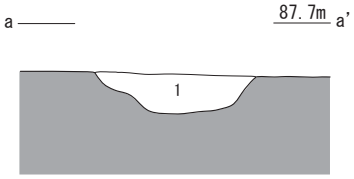

57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
0
20cm

包含層出土土器

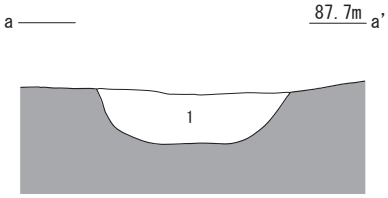


土製品・石製品・金属製品・木製品

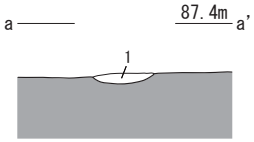




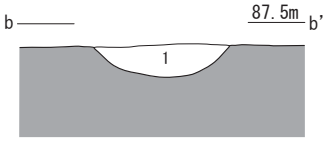
SD1001
1．10YR3/3 暗褐色 粗砂混じりシルト



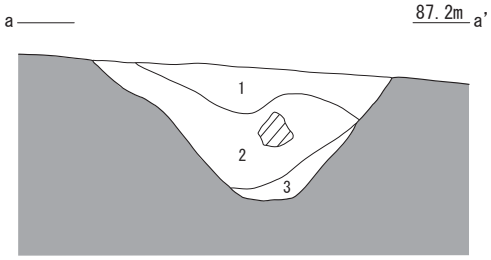
SD1002
1．10YR1.7/1 黒色 シルト ＋10YR5/8 黄褐色 粗砂含む



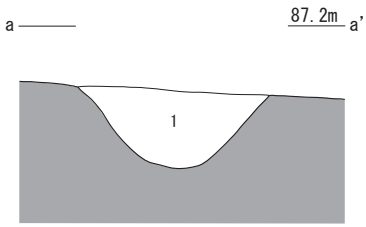
SD1003
1．5YR3/2 暗赤褐色 シルト質極細砂



SD1003
1．5YR3/2 暗赤褐色 シルト質極細砂



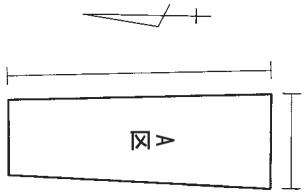
SD1004
1．7.5YR3/4 暗褐色 極細砂
2．7.5YR2/2 黒褐色 極細砂～中砂
3．10YR4/2 灰黄褐色 シルト質極細砂（SD1004）



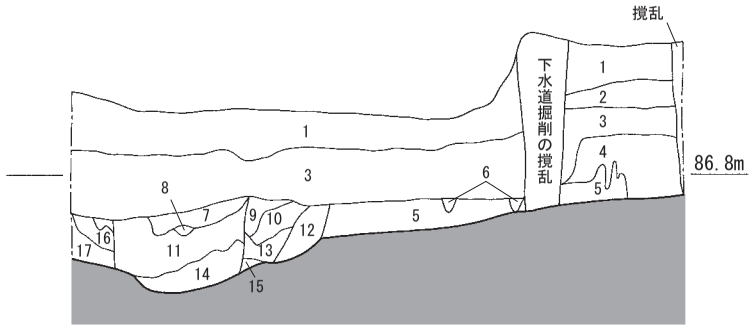
SD1012
1．7.5YR2/2 黒褐色 シルト質極細砂

曽我井・野入遺跡A地区遺構配置図・溝土層断面図

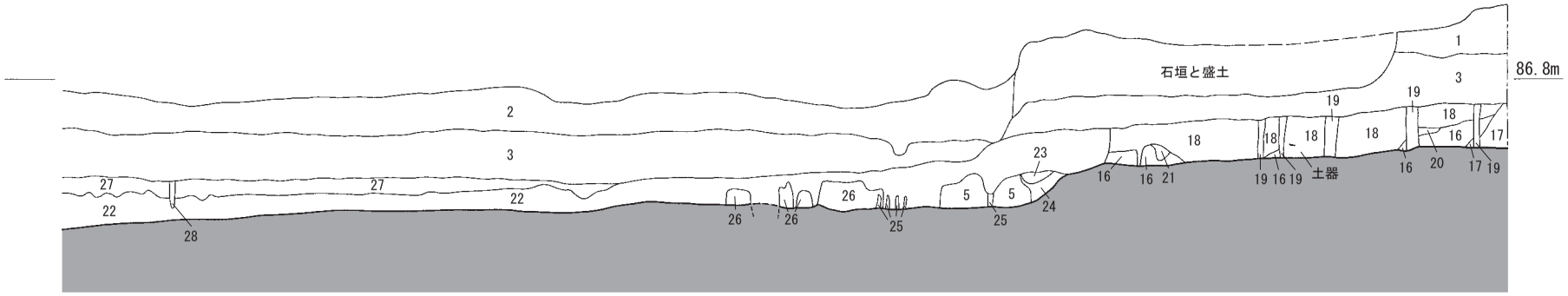
A地区南壁・東壁土層断面図



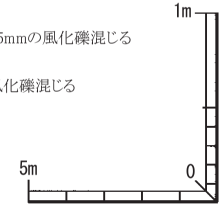
南壁

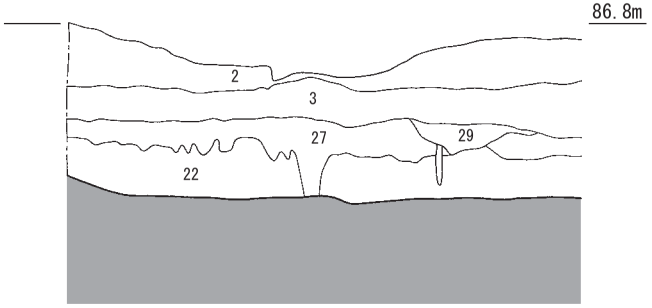


東壁

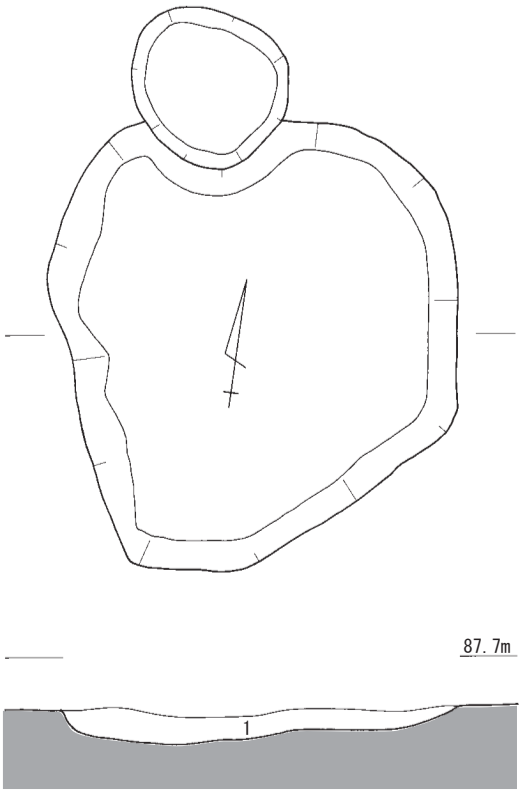


1. 盛土と耕作土
2. 現代耕作土
3. 7.5YR5/2 灰褐色 極細砂 地山風化礫混じる
4. 7.5YR3/1 黒褐色 細砂～極細砂 径1～5mmの小石混じる
5. 2.5Y8/6 黄色 極細砂(地山)
6. 7.5YR3/2 黒褐色 極細砂シルト質(遺構埋土)
7. 10YR3/1 黒褐色 極細砂シルト質
8. 10YR3/1 黒褐色 中砂～極細砂
9. 5YR2/2 黒褐色 極細砂シルト質 径4～10mmの風化礫 土器片混じる
10. 5YR2/1 黒褐色 極細砂シルト質
11. 5YR2/2 黒褐色 極細砂シルト
12. 2.5Y6/4 にぶい黄色 細砂～極細砂シルト質
13. 7.5YR5/2 灰褐色 中砂～細砂
14. 2.5Y3/1 黒褐色 極細砂シルト
15. 2.5Y7/3 浅黄色 細砂(地山)
16. 5Y6/1 灰色 シルト
17. 5Y6/1 灰色 中砂～細砂
18. 7.5YR4/1 褐灰色 極細砂
19. 5YR3/2 暗赤褐色 細砂～極細砂 土器片・炭化物混じる(遺構埋土)
20. 5YR4/1 褐灰色 極細砂 土器片・炭化物混じる(遺構埋土)
21. 10YR7/1 灰白色 中砂
22. 10YR5/2 灰黄褐色 極細砂 マンガン・土器片混じる
23. 10YR5/2 灰黄褐色 極細砂シルト質(SD埋土)
24. 7.5YR5/2 灰褐色 極細砂シルト質 風化礫混じる(SD埋土)
25. 10YR3/1 黒褐色 極細砂シルト質 粘りあり
26. 7.5YR6/1 褐灰色 中砂～極細砂シルト質
27. 2.5YR3/2 暗赤褐色 極細砂シルト質 径3～5mmの風化礫混じる
28. 7.5YR6/1 褐灰色 シルト 溝埋土
29. 7.5YR5/2 灰褐色 極細砂 径3～5mmの風化礫混じる



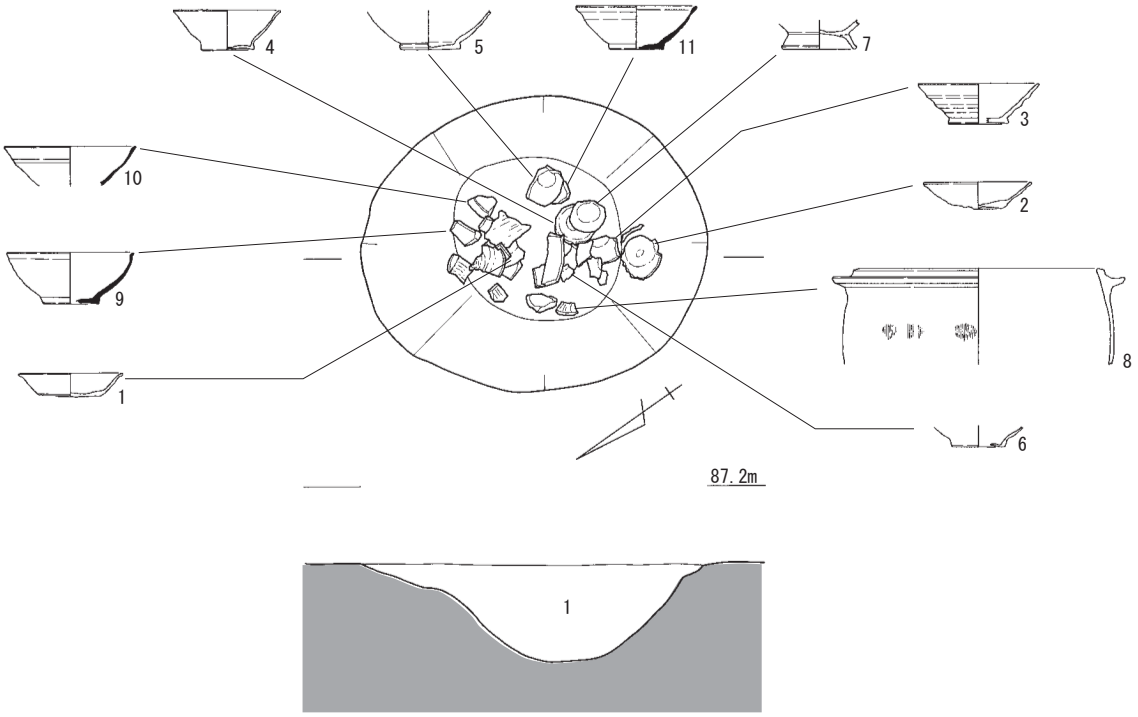


SK1001

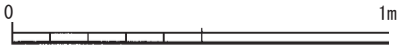


SK1001
1. 10YR2/3 黒褐色 粗砂混じり粘質シルト マンガン混じる

SK1002



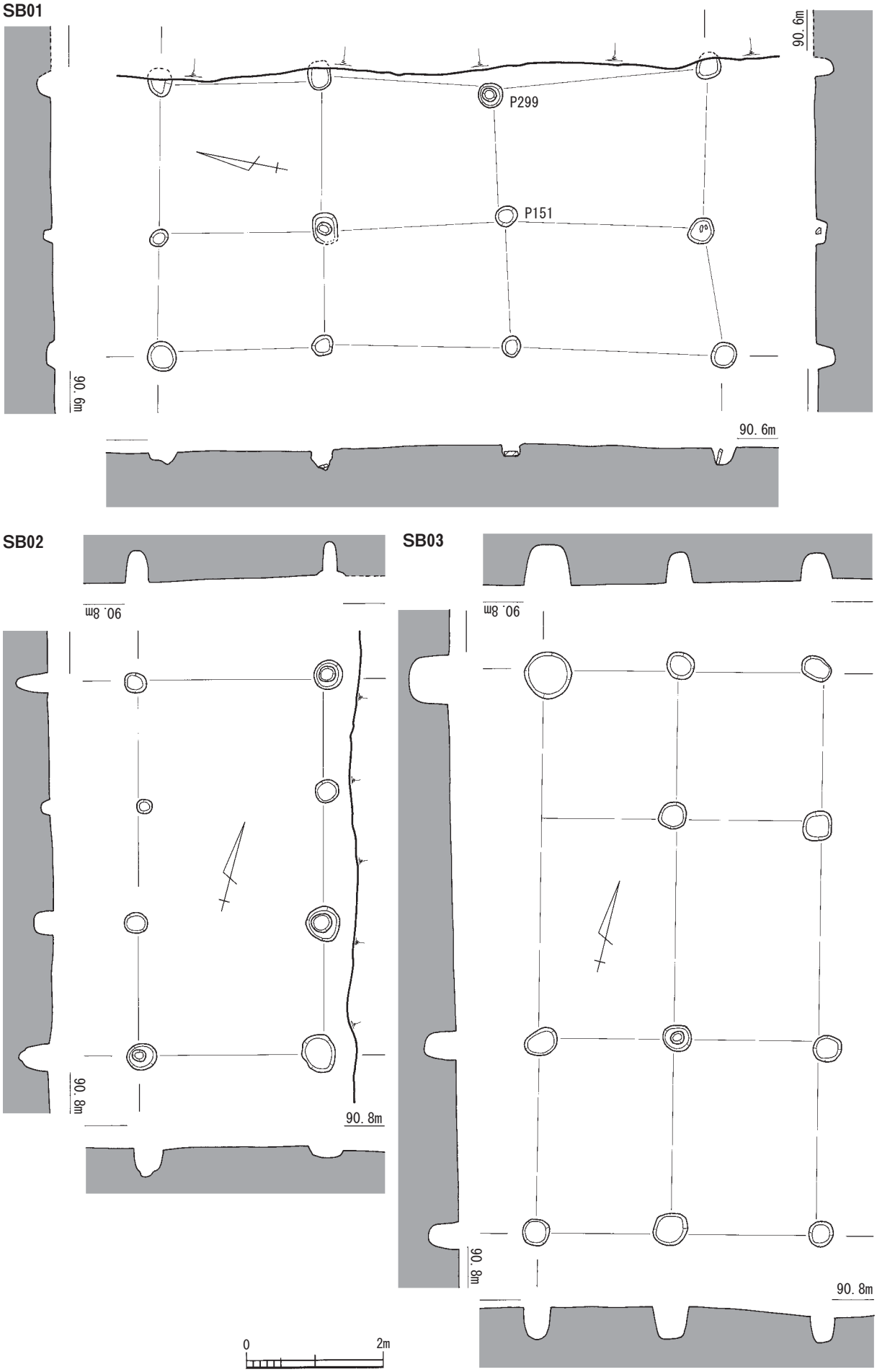
SK1002
1. 10YR5/2 灰黄褐色 極細砂



A地区土坑（SK1001・1002）

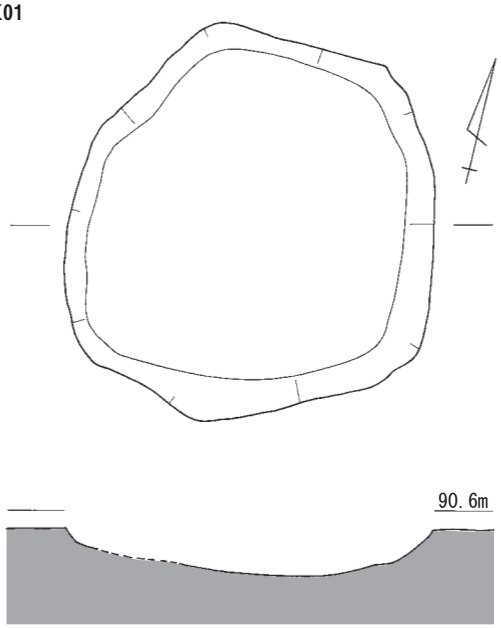
1.	2.5Y4/1	黄灰色	細砂(現代耕作土)	9. 10YR4/2	灰黄褐色	極細砂シルト 土器片混じる
2.	7.5YR7/2	明灰褐色	極細砂	10. 10YR5/1	褐灰色	極細砂(新しい柱穴)
3.	7.5YR6/2	灰褐色	極細砂	11. 5Y5/1	灰色	細砂～中砂シルト質
4.	10YR5/3	にぶい黄褐色	極細砂 マンガン含む 土器片混じる	12. 5Y5/1	灰色	細砂～中砂シルト質
5.	10YR7/6	明黄褐色	細砂～極細砂 風化礫(地山)	13. 2.5Y4/2	暗灰黄色	極細砂～中砂シルト質
6.	7.5YR3/2	黒褐色	極細砂シルト	14. 5Y6/1	灰色	シルト 砂との互層
7.	2.5Y6/1	黄灰色	細砂(新しい柱穴)	15. 5Y3/2	オリーブ黒色	シルト
8.	10YR7/6	明黄褐色	細砂～極細砂 風化礫(整地層 時期不明)	16. 7.5Y7/1	オリーブ黒色	シルト
				17. 2.5GY8/1	灰白色	細砂(地山)

B地区遺構配置図

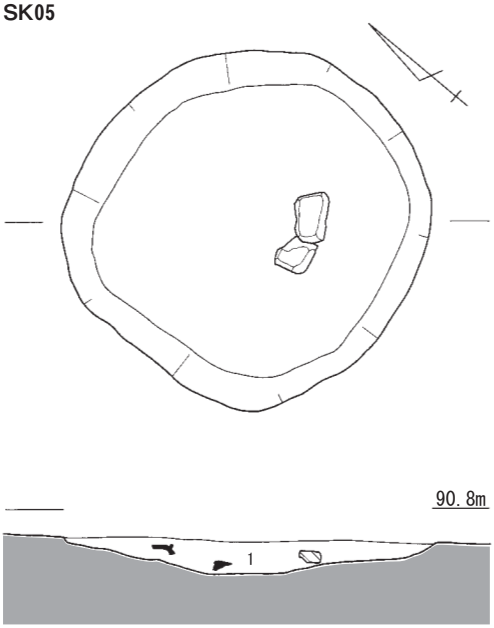


B地区掘立柱建物(SB01～03)

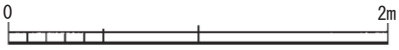
SK01



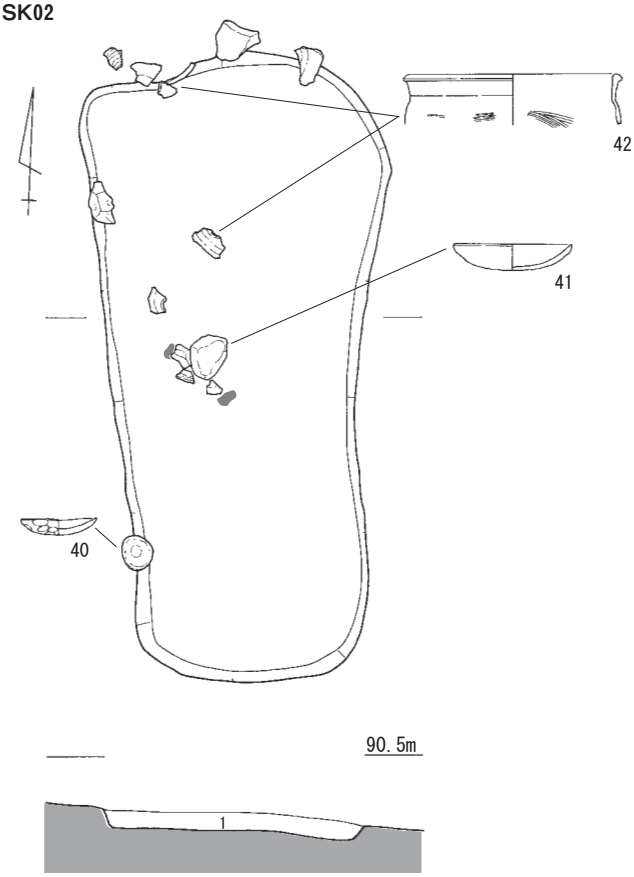
SK05



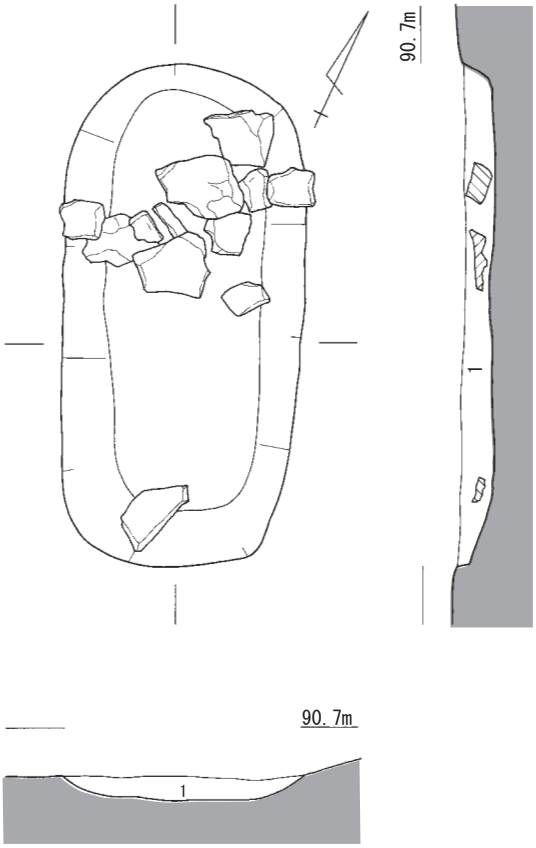
SK05
1. 10YR4/2 灰黄褐色 細砂～粗砂に10YR5/8 黄褐色
粘質シルトブロック混じる



SK02

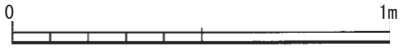


SK04



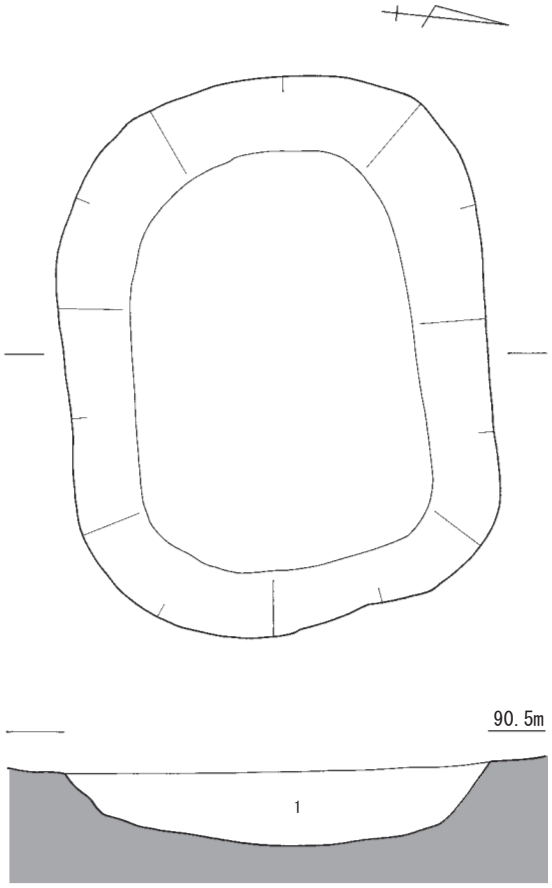
SK02
1. 10YR5/2 灰黄褐色 極細砂 黄褐色土ブロック混じる
10YR5/6 赤色焼土混じる

SK04
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック混じる
炭化物・粗砂含む



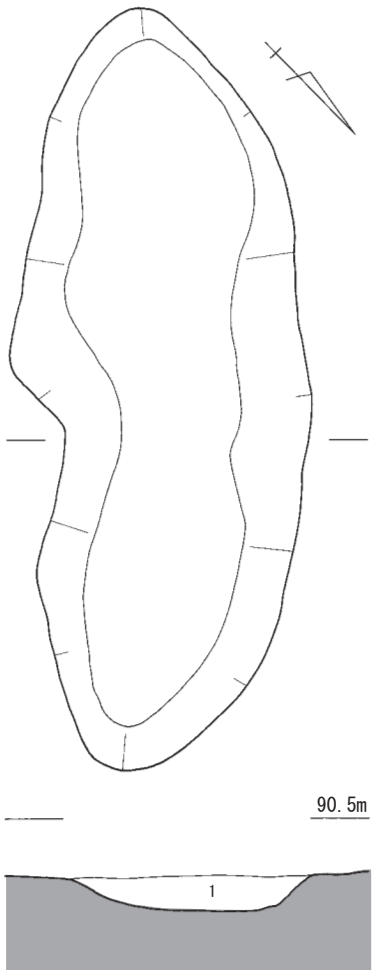
B地区土坑（SK01～05）

SK06



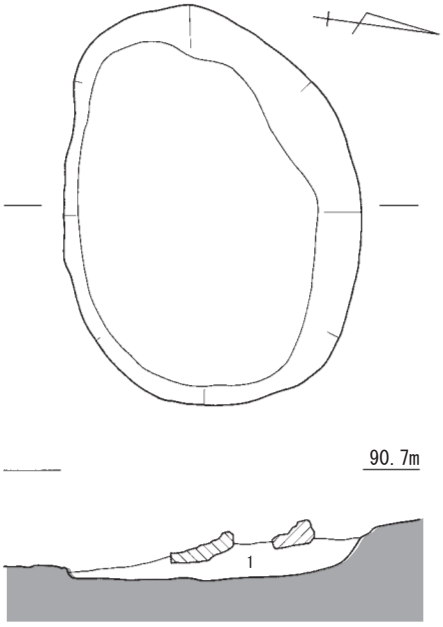
SK06
1．10YR4/2 灰黄褐色 細砂～粗砂に
10YR5/8 黄褐色 粘質シルトブロック混じる

SK07



SK07
1．10YR3/3 暗褐色～10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト～細砂

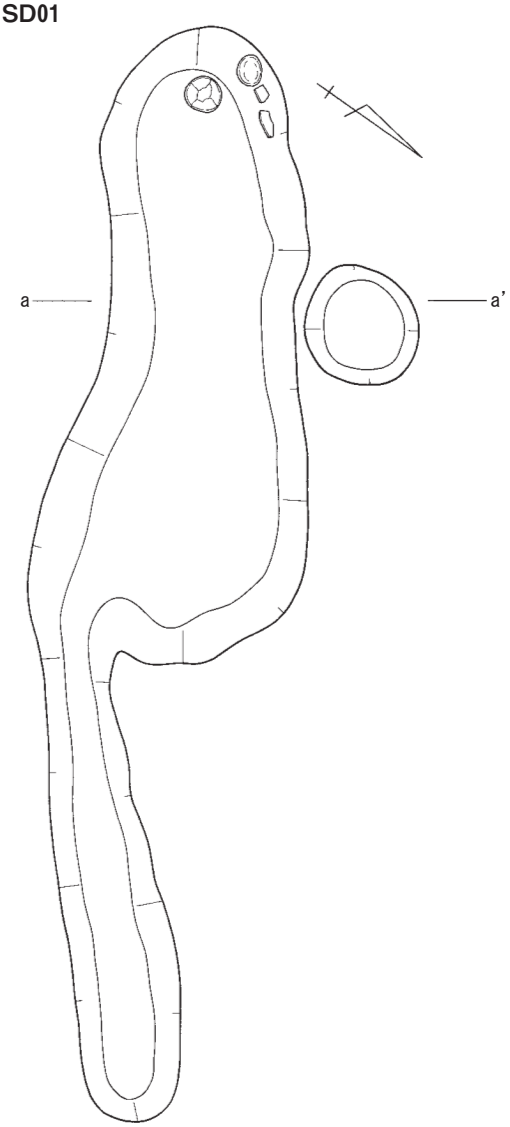
SK08

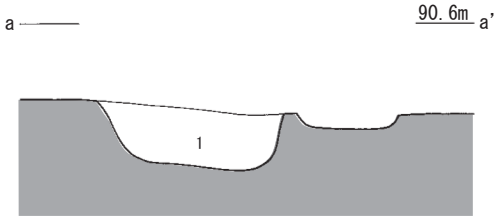


SK08
1．10YR4/2 灰黄褐色 細砂～粗砂 地山ブロック
(10YR5/8 黄褐色 粘質シルト)がごく少量混じる

B地区土坑(SK06～08)

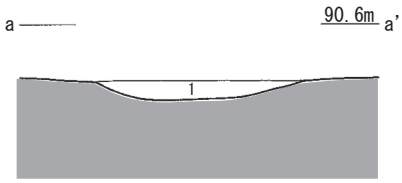
SD01



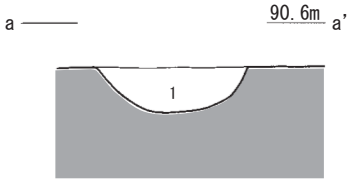


SD01
1. 10YR4/2 灰黄褐色 極細砂

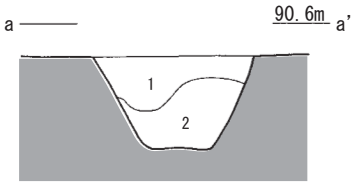
SD02
1. 10YR4/2 灰黄褐色 細砂～極細砂



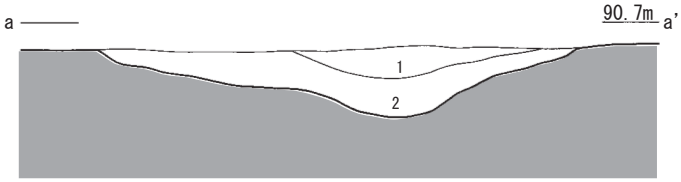
SD02
1. 10YR4/2 灰黄褐色 細砂～極細砂



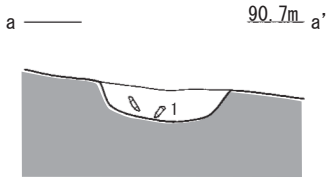
SD05
1. 7.5YR5/3 にぶい褐色 細砂～極細砂



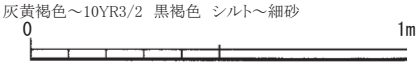
SD07
1. 10YR5/4 にぶい褐色 細砂シルト質
2. 10YR6/2 灰黄褐色 細砂シルト質



SD11
1. 10YR3/2 黒褐色 粗砂混じりシルト マンガン含む
2. 10YR3/3 暗褐色 粗砂混じりシルト

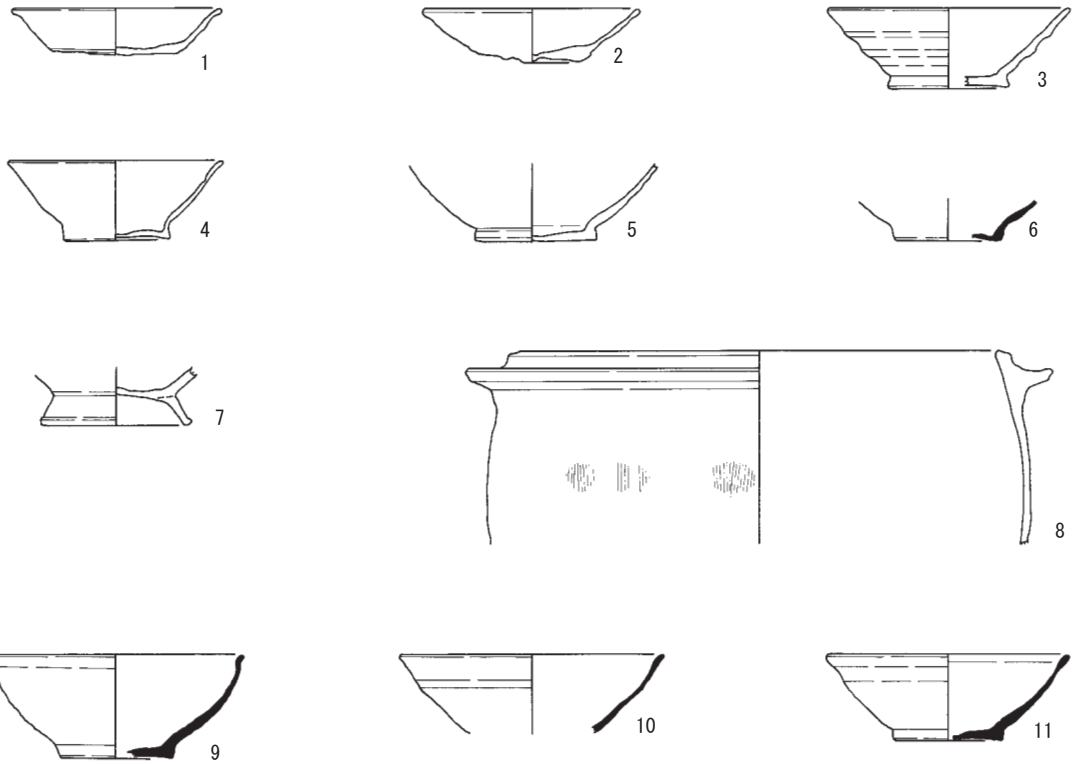


SD12
1. 10YR4/2 灰黄褐色～10YR3/2 黒褐色 シルト～細砂



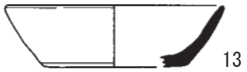
B地区溝(SD01・02・05・07・11・12)

SK1002

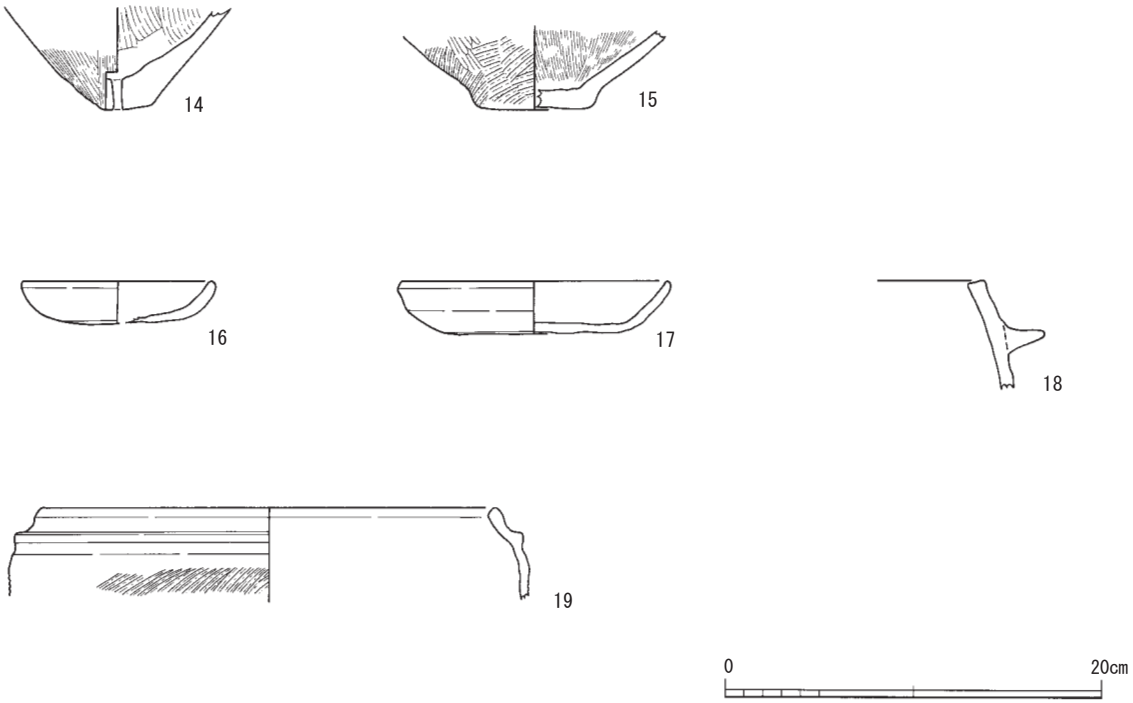


P1001

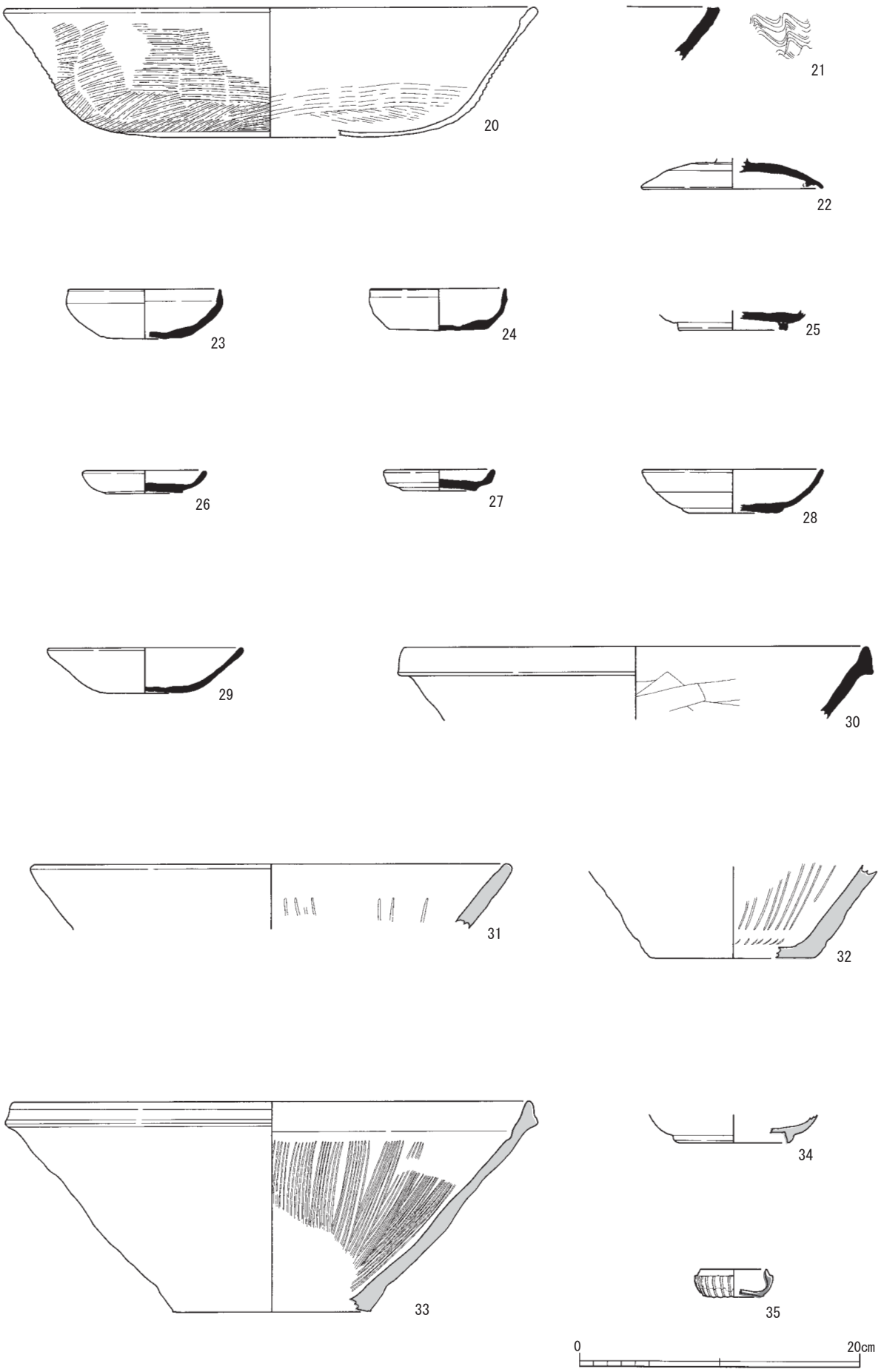
SD1008



包含層

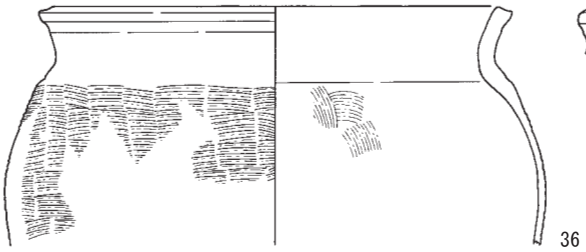


A地区出土土器(1)

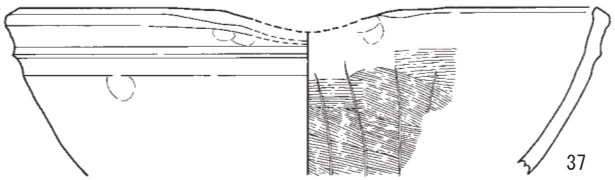


A地区出土土器(2)

SB02



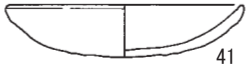
P151

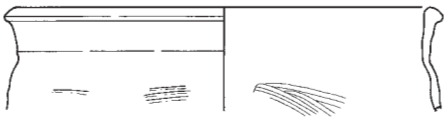


P299

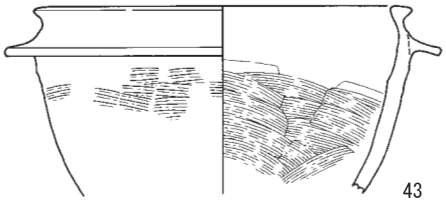
SK01

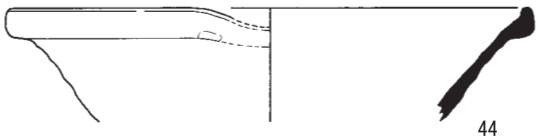
SK02



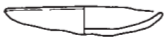


SK05

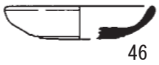


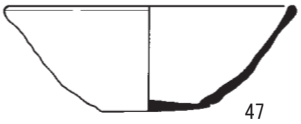


SD02



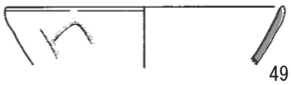
P142



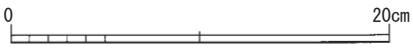


P144

P149

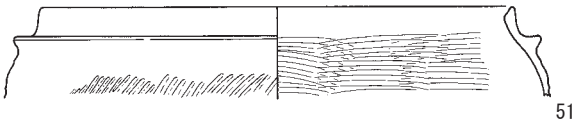


P170

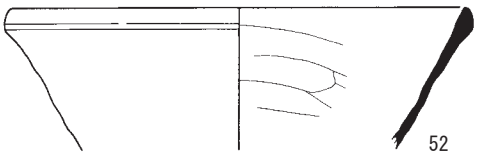


B地区出土土器(1)

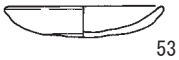
P203



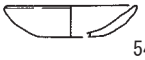
P205



P267

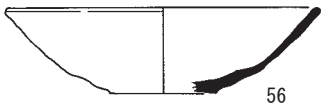


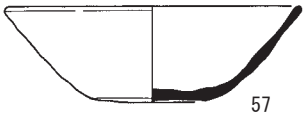
P290

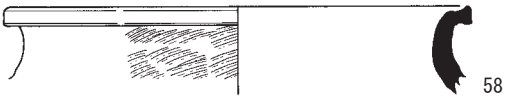


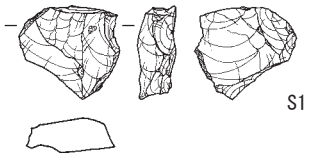
P420

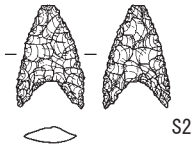
包含層

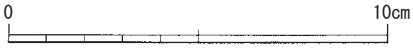






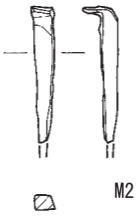




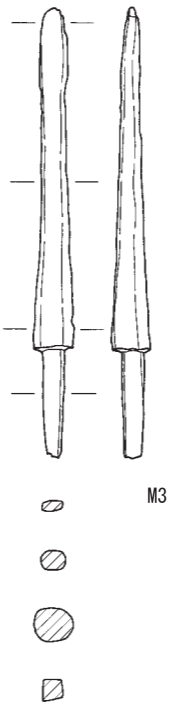


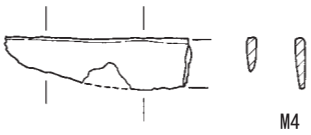
B地区出土土器(2)・石器

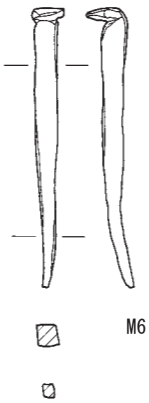
A地区

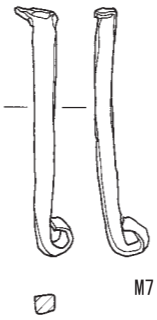


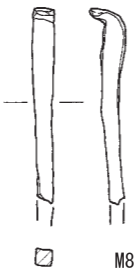
B地区

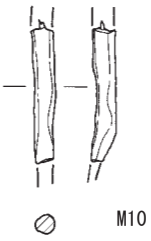




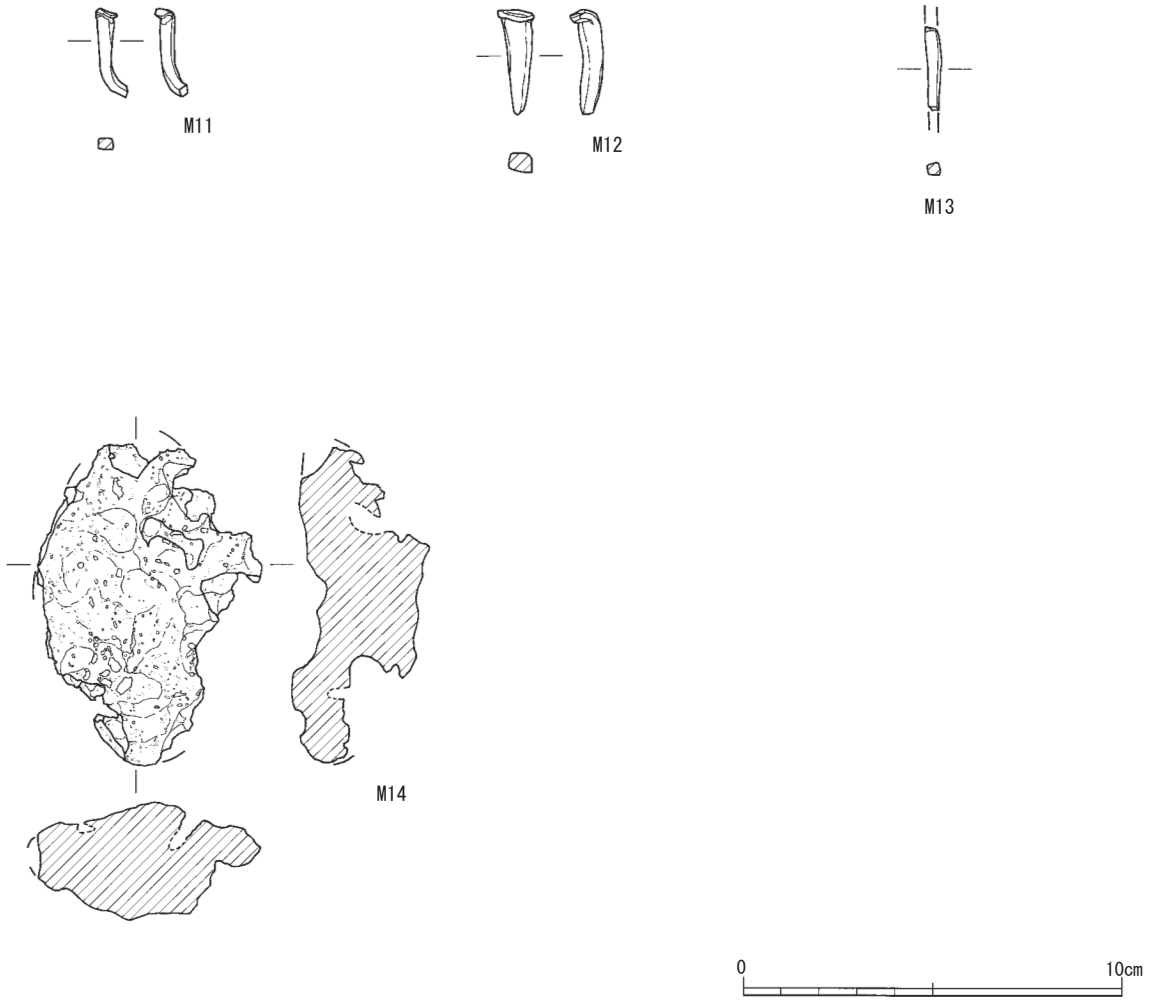




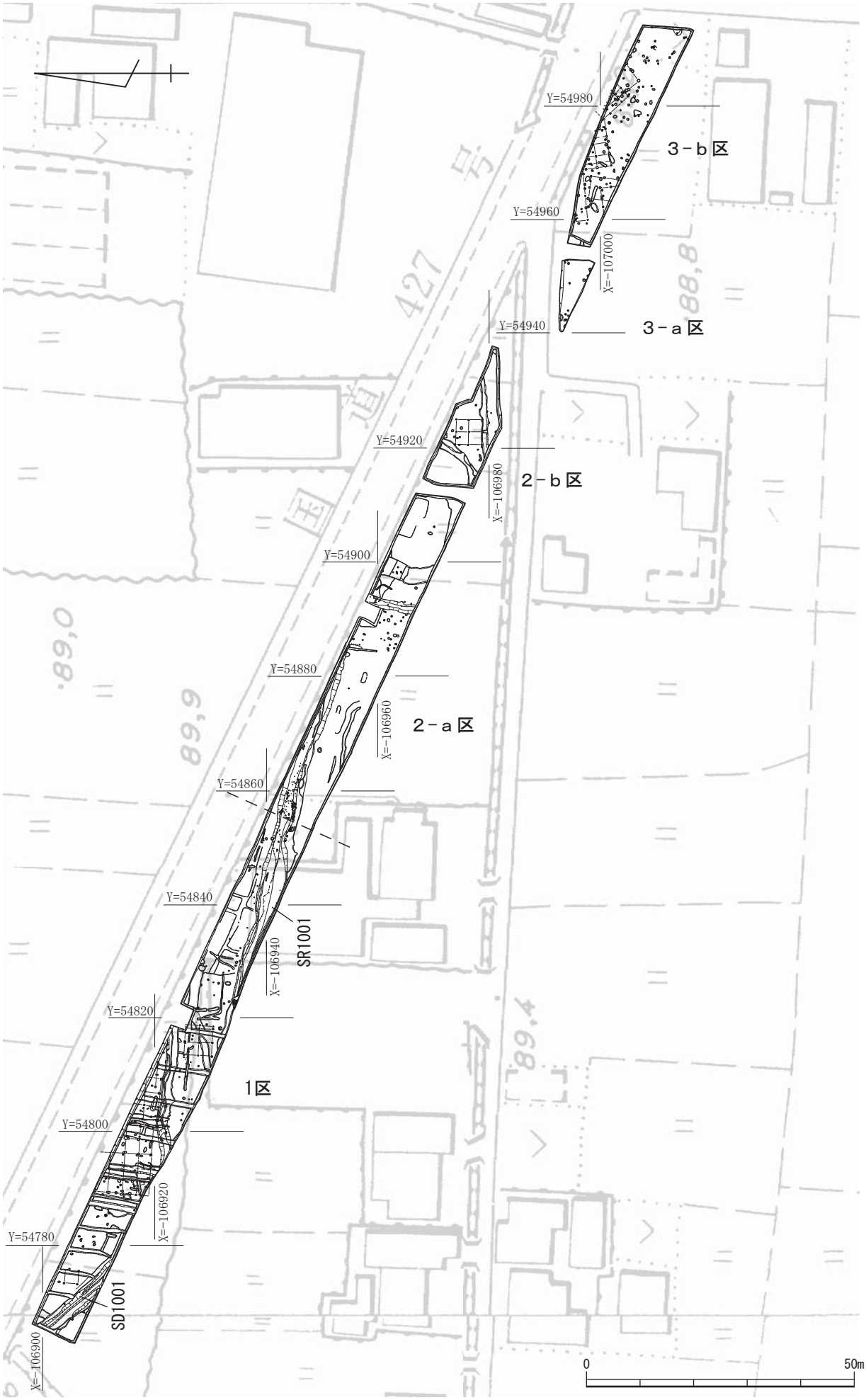




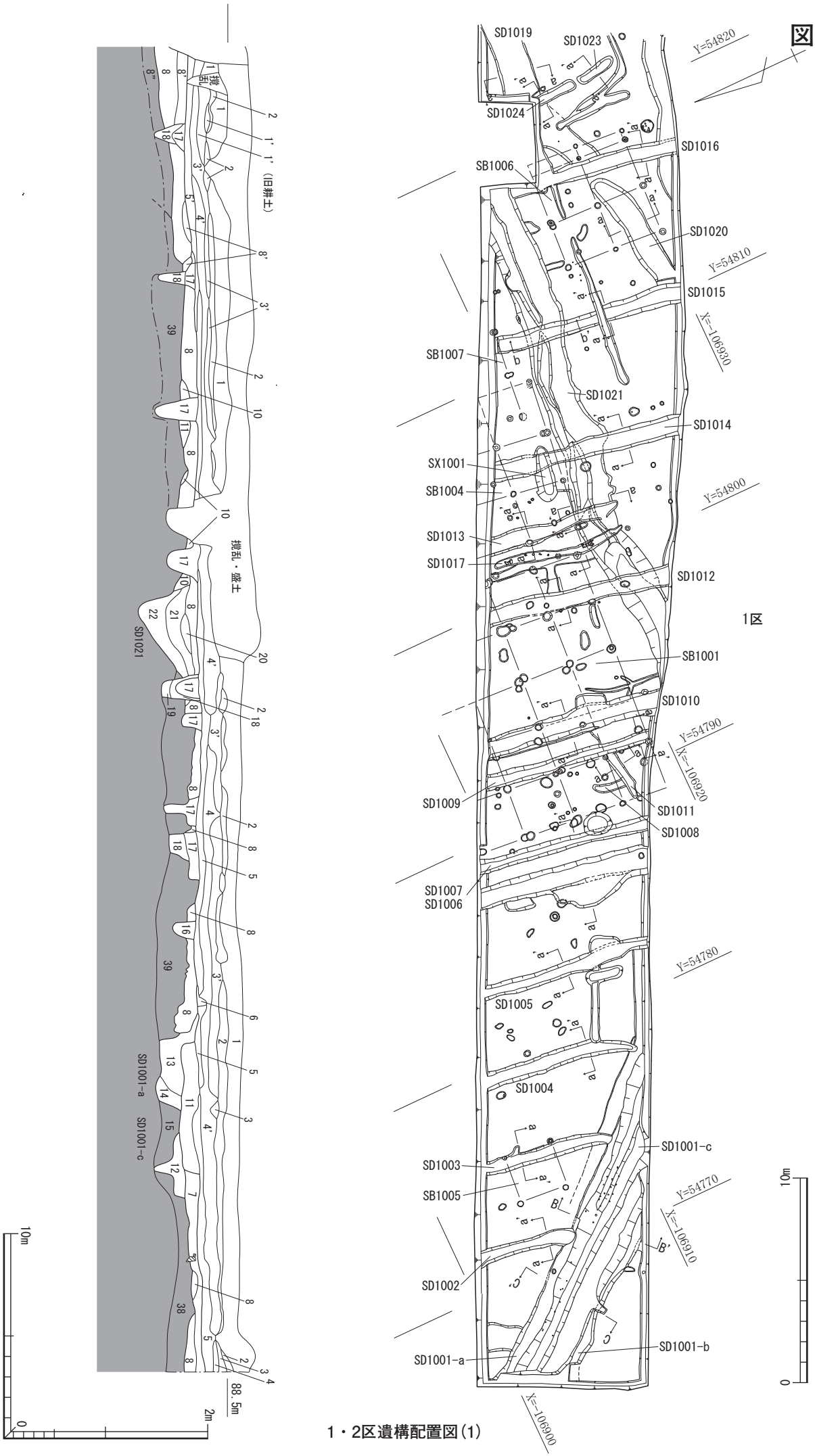
A・B地区出土金属製品(1)



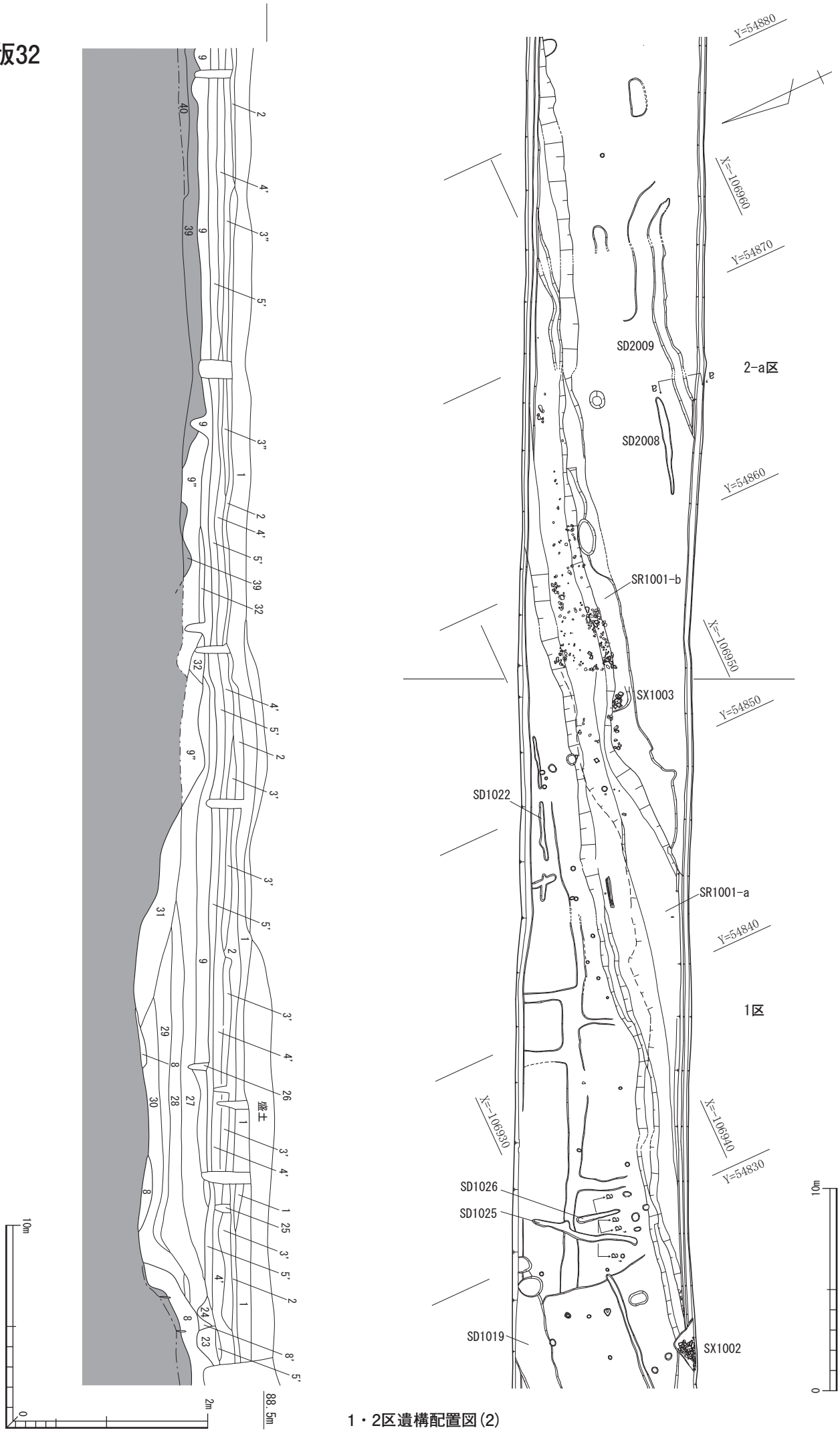
A・B地区出土金属製品(2)


Y=54980
3－b区
Y=54960
X=−107000
3－a区
Y=54940
Y=54920
2－b区
X=−106980
Y=54900
Y=54880
2－a区
X=−106960
Y=54860
Y=54840
SR1001
X=−106940
Y=54820
1区
Y=54800
X=−106920
Y=54780
SD1001
X=−106900
427
89,0
89,9
89,4
0
50m

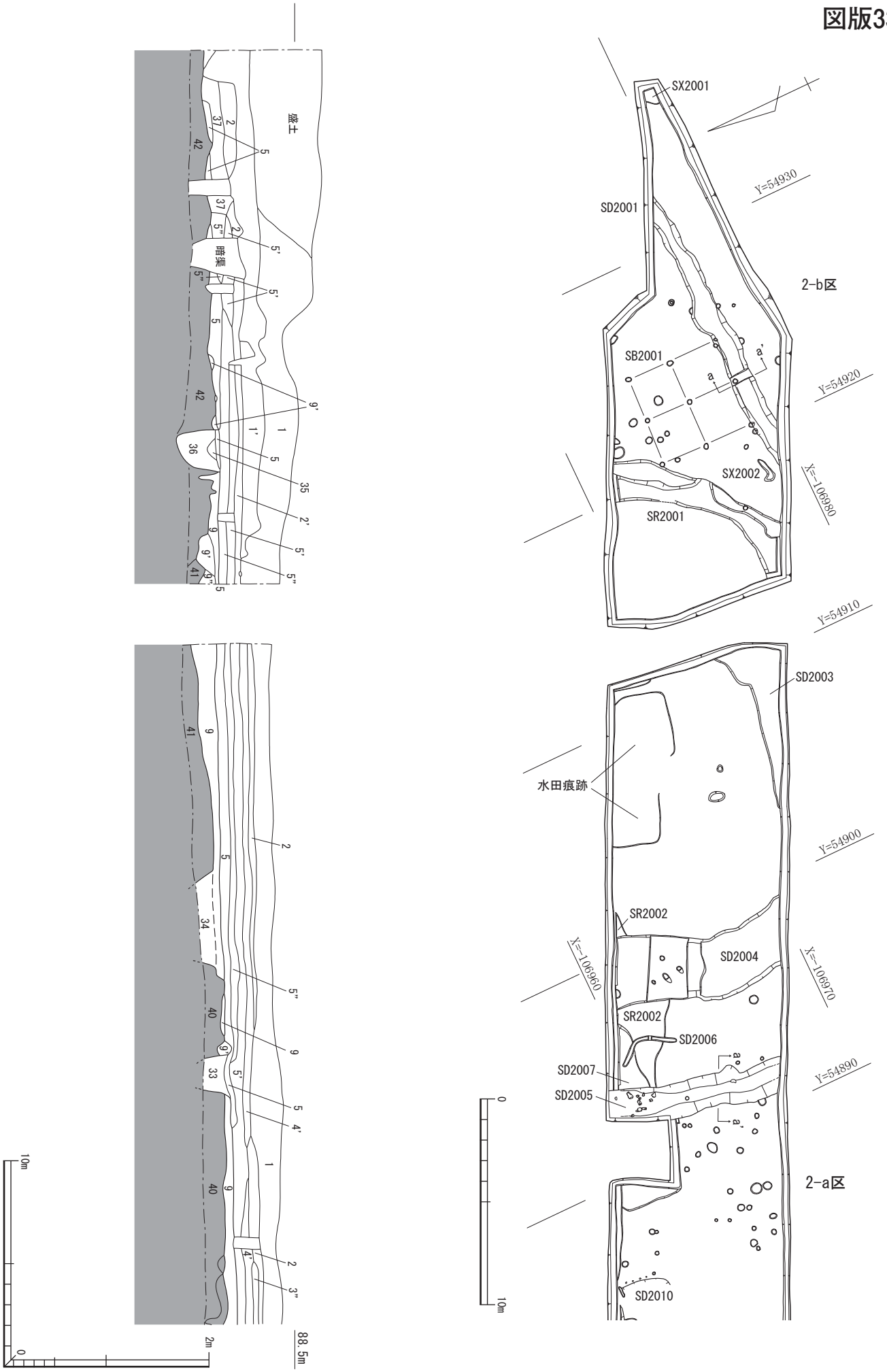
曽我井・沢田遺跡全体図


SD1019
SD1023
SD1024
SD1016
SB1006
SD1020
SD1015
SB1007
SD1021
SD1014
SX1001
SB1004
SD1013
SD1017
SD1012
1区
SB1001
SD1010
SD1009
SD1011
SD1008
SD1007
SD1006
SD1005
SD1004
SD1001-c
SD1003
SB1005
SD1002
SD1001-a
SD1001-b
Y=54820
Y=54810
Y=54800
Y=54790
Y=54780
Y=54770
X=-106930
X=-106920
X=-106910
X=-106900
10m
0
撹乱
1'
1'(旧耕土)
8'
3'
撹乱・盛土
SD1021
SD1001-a
SD1001-c
88.5m
2m

1・2区遺構配置図(1)


Y=54880
Y=-106960
Y=54870
SD2009
2-a区
SD2008
Y=54860
SR1001-b
Y=-106950
SX1003
Y=54850
SD1022
SR1001-a
Y=54840
1区
Y=-106930
Y=-106940
Y=54830
SD1026
SD1025
SD1019
SX1002
盛土
88.5m
10m
0
2m

1・2区遺構配置図(2)


SX2001
SD2001
Y=54930
2-b区
SB2001
a
a'
Y=54920
SX2002
X=-106980
SR2001
Y=54910
SD2003
水田痕跡
Y=54900
SR2002
X=-106960
SD2004
X=-106970
SR2002
SD2006
SD2007
SD2005
Y=54890
2-a区
SD2010
0
10m
盛土
暗渠
88.5m
2m

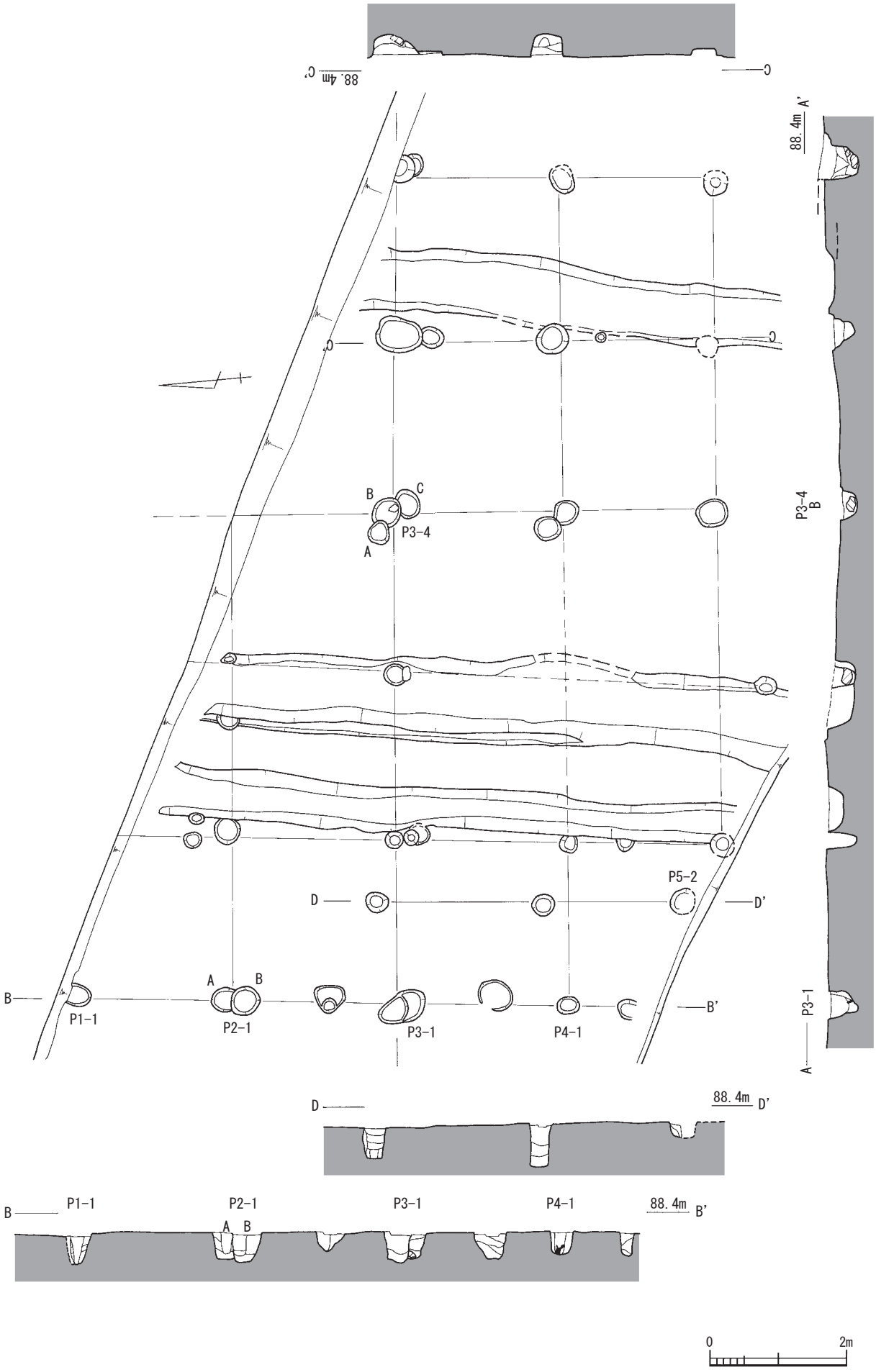
1・2区遺構配置図(3)

2-b区　南壁

1.	10YR5/1	褐灰色	シルト混じり細砂　耕土
1′.	10YR6/1	褐灰色	シルト混じり細砂　旧耕土
2.	10YR4/4	褐色	細砂混じりシルト質極細砂
2′.	10YR4/4	褐色	細砂混じりシルト質極細砂　Fe集積層(床土)
5.	7.5YR3/2	黒褐色	礫混じりシルト
5′.	10R3/1	暗赤灰色	細砂混じり極細砂質シルト
9.	2.5YR2/1～2/2	赤黒色～極暗赤褐色	極細砂質シルト
9′.	2.5YR2/1	赤黒色	シルト
9″.	2.5YR2/1	赤黒色	シルト
35.	2.5YR2.5/1	赤黒色	腐植質シルト混じり粗砂
36.	2.5YR3/1	暗赤灰色	腐植質シルト
37.	10YR4/1	褐灰色	シルト混じり細砂
41.	2.5YR3.5/1	黒褐色	シルト混じり極細砂
42.	10YR4.5/1	褐灰色	細砂混じりシルト　Fe多い

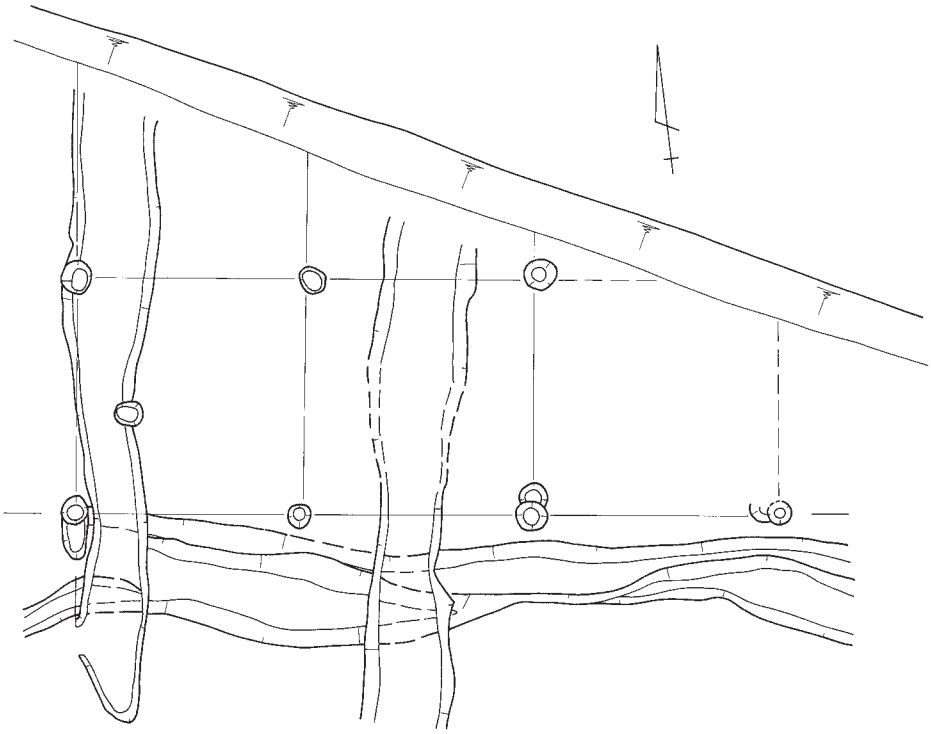
1・2-a区　南壁

1.	7.5YR4/2	灰褐色	シルト混じり細砂　現耕土
2.	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト質極細砂混じり細砂　床土　Fe多い
3.	5YR5/2～4/2	灰褐色	細砂混じり極細砂
3′.	7.5YR4/2	灰褐色	シルト混じり細砂
3″.	7.5YR3/3	暗褐色	礫・シルト混じり細砂
4.	5YR3/2	暗赤褐色	細砂混じりシルト質極細砂
4′.	7.5YR4/2	灰褐色	シルト混じり細砂　径3～5mm前後の礫を多く含む
5.	5YR3/1	黒褐色	細砂混じり極細砂質シルト　径1cm前後の礫を含む
5′.	2.5YR3/1	暗赤灰色	粗砂・礫混じり腐植質シルト質極細砂
5″.			礫・シルト混じり極細砂
6.	10YR3/1	黒褐色	腐植質シルト混じり細砂
7.	2.5YR3/1	暗赤灰色	シルト混じり　細砂質極細砂
8.	10YR3/1～4/1	黒褐色～褐灰色	細砂混じり　シルト質極細砂
8′.	7.5R3/1	暗赤灰色	極細砂まじりシルト
8″.	5YR3/2	暗赤褐色	シルト
9.	2.5YR2/1	赤黒色	極細砂質シルト
9′.	7.5R1.7/1	赤黒色	細砂混じり腐植質シルト
9″.	5YR3/1	黒褐色	シルト質極細砂
10.	5YR3/2	暗赤褐色	シルト
11.	7.5YR3/2	黒褐色	細砂混じり　シルト質極細砂
12.	5YR2/1	黒褐色	腐植質シルト混じり細砂　Mn・Fe斑あり　SD1001-b
13.	10R3/1	暗赤灰色	細砂混じり腐植質シルト　SD1001-a
14.	5YR3/2	暗赤褐色	腐植質シルト混じり極細砂　SD1001-a
15.	2.5YR2/1	赤黒色	細砂混じり腐植質シルト　ベース(黄)をブロック状に含む　盛土　SD1001-c
16.	7.5R3/1	黒褐色	細砂混じりシルト　SD1005
17.	7.5R3/1	黒褐色	極細砂混じり腐植質シルト
18.	10YR3/1	黒褐色	細砂混じり腐植質シルト
19.	7.5R3/1	黒褐色	SD1010
20.	2.5YR3/1	暗赤灰色	細砂混じり　腐植物混じりシルト
21.	10YR3/1	黒褐色	腐植質シルト混じり細砂
22.	2.5YR3/2	暗赤褐色	粗砂及びシルトの互層　SD1021
23.	7.5YR3/1	黒褐色	細砂混じりシルト　炭化物を含む　SX1002
24.			径15cm前後の集石　SR1001-a
25.	5YR3/2	暗赤褐色	シルト混じり中砂～細砂　Mn・Feを含む
26.	2.5YR2/1	赤黒色	シルト　細砂を若干含む
28.			細砂混じり腐植質シルト
29.			SR1001-aの中層　粗砂
30.			SR1002-a
32.	5YR2/2	黒褐色	細砂混じり極細砂質シルト
33.	7.5YR3/1	黒褐色	細砂混じり腐植質シルト　SD2005
34.	10YR1.7/1	黒色	腐植質シルト　SD2004
38.	7.5YR3/2	黒褐色	極細砂
39.	2.5YR2/1	赤黒色	腐植質シルト　ベース
40.	5Y7/4	浅黄色	砂粒混じりシルト　Fe含む
41.	2.5YR3.5/1	黒褐色	シルト混じり極細砂



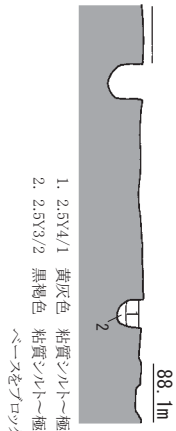
掘立柱建物(SB1001)

SB1004



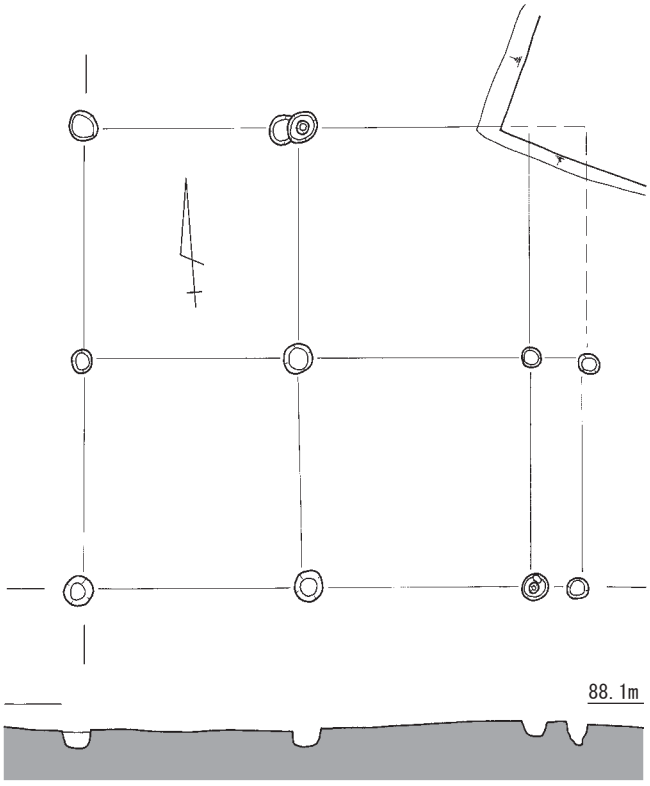
1. 2.5Y2/1　黒色　粘土～粘質シルト
2. 2.5Y2/2　黒色　粘土～粘質シルト

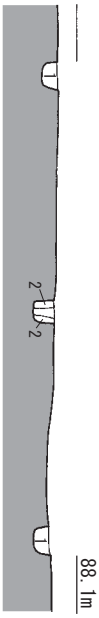
1. 10YR3/2　黒褐色　粘質シルト～極細砂
2. 10YR2/1　黒色　粘質シルト～極細砂
1. 10YR2/1　黒色　粘質シルト～極細砂
2. 10YR3/1　黒褐色　粘質シルト～極細砂
ベースをブロック状に含む



1. 2.5Y4/1　黄灰色　粘質シルト～極細砂
2. 2.5Y3/2　黒褐色　粘質シルト～極細砂
ベースをブロック状に含む

SB1006

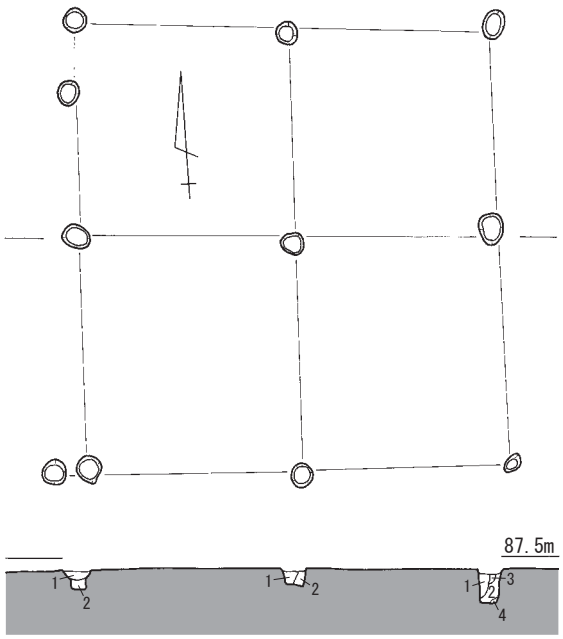




1. 10YR3/1　黒褐色　粘質シルト～細砂
2. 2.5Y3/1　黒褐色　粘土～粘質シルト

1. 2.5Y3/2　黒褐色　粘土～粘質シルト
1. 10YR4/1　褐灰色　粘土～粘質シルト

SB2001



1. 10YR3/1　黒褐色　極細砂
　ベースをブロック状に含む
2. 10YR5/6　黄褐色　極細砂～シルト
　ベースをブロック状に含む

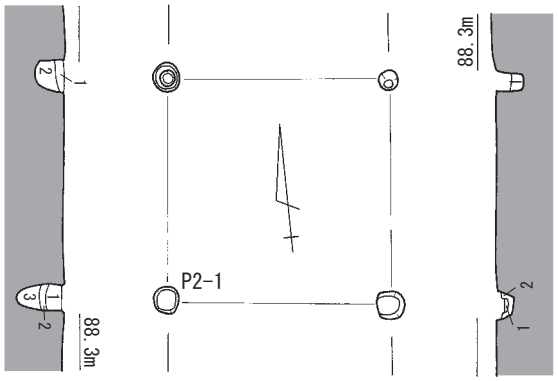
1. 10YR5/6　黄褐色　極細砂～シルト　2層をわずかに含む
　ベースをブロック状に含む
2. 10YR3/1　黒褐色　極細砂　ベースをブロック状に含む

1. 10YR3/1　黄褐色　極細砂
2. 10YR3/1　黒褐色　極細砂　木片を少量含む
3. 10YR3/1　黒褐色　ベースを40%ほど含む
4. 2.5Y4/6　オリーブ褐色　極細砂～シルト

SB1005

1. 10YR3/2　黒褐色　粘質シルト～細砂
2. 10YR4/2　灰黄褐色　粘質シルト～細砂
　ベースをブロック状に含む

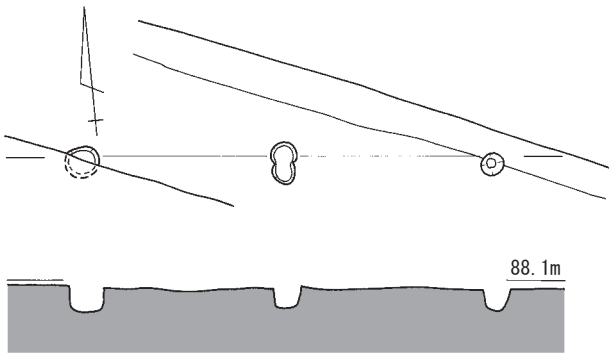
1. 10YR3/2　黒褐色　粘土～粘質シルト
2. 10YR2/2　黒褐色　粘質シルト～細砂
　ベースに近い
3. 10YR4/2　灰黄褐色　粘土～粘質シルト
　ベースをブロック状に含む



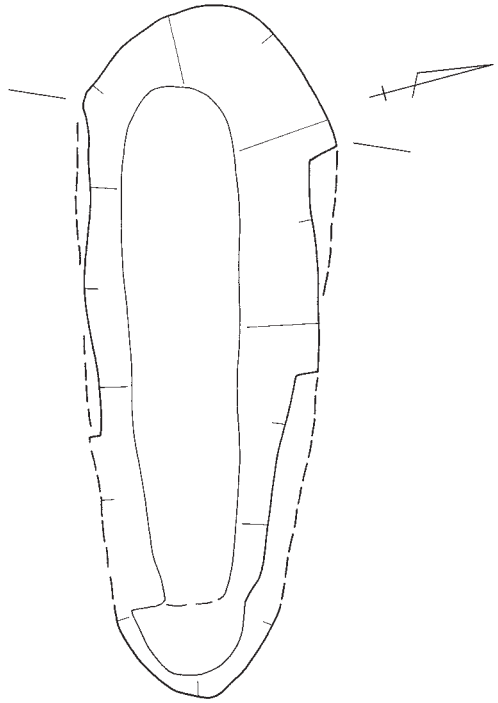
1. 10YR3/2　黒褐色　粘質シルト～細砂

1. 10YR2/2　黒褐色　粘質シルト～細砂
2. 10YR3/3　暗褐色　シルト～細砂
　ベースをブロック状に含む

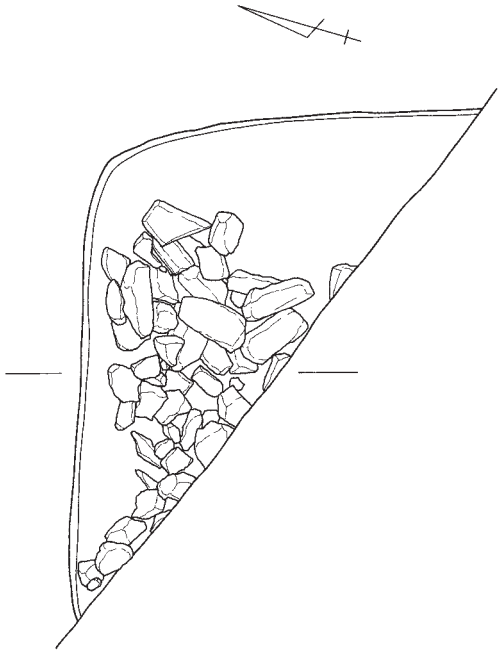
SB1007

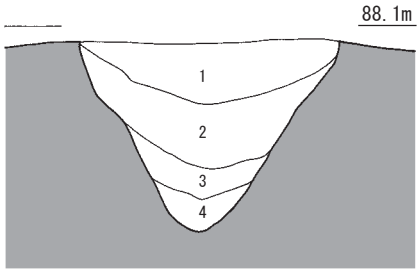


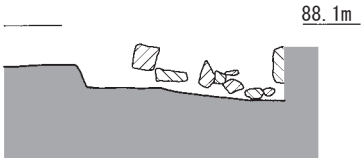
SX1001



SX1002

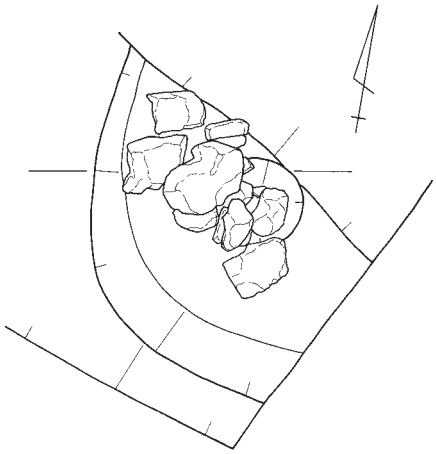


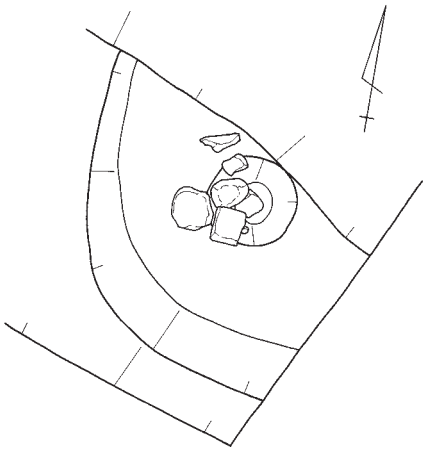


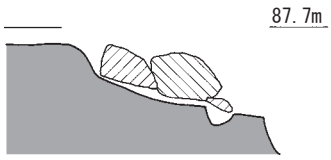


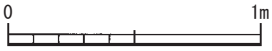
1. 10YR2/1　黒色　粘質シルト～細砂
2. 10YR3/1　黒褐色　粘質シルト～細砂
3. 10YR1.7/1　黒色　粘質シルト～細砂
4. 10YR3/1　黒褐色　粘質シルト～細砂　下半でベースをブロック状に含む

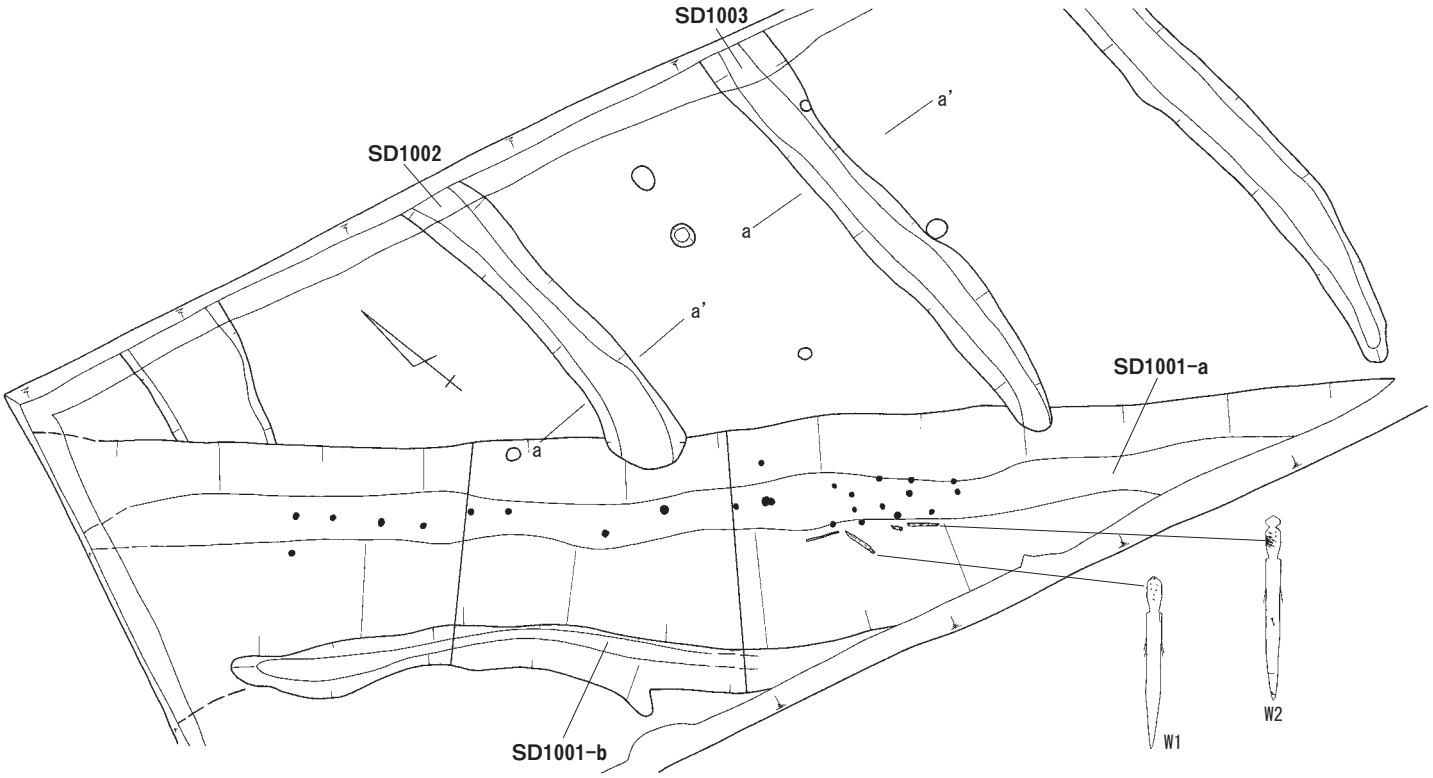
SX1003

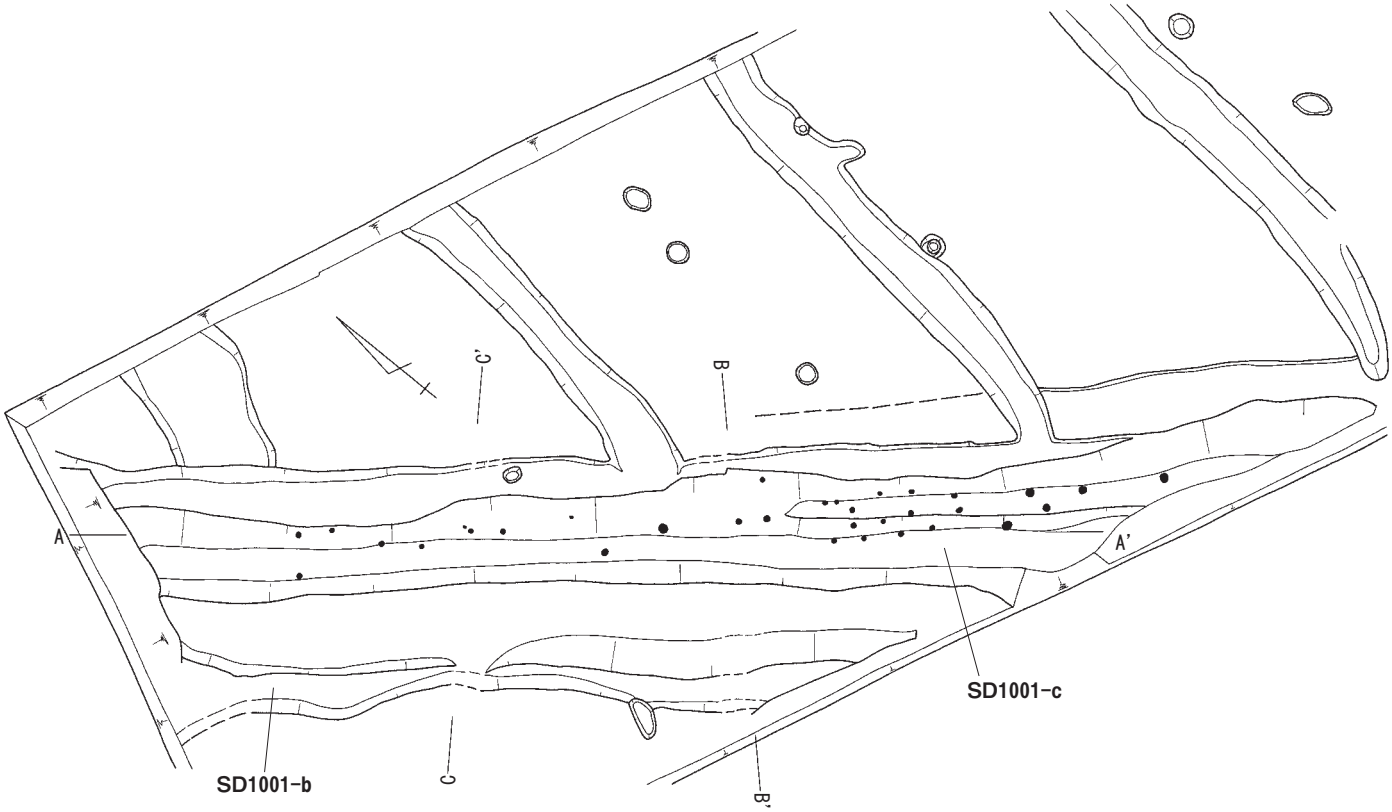


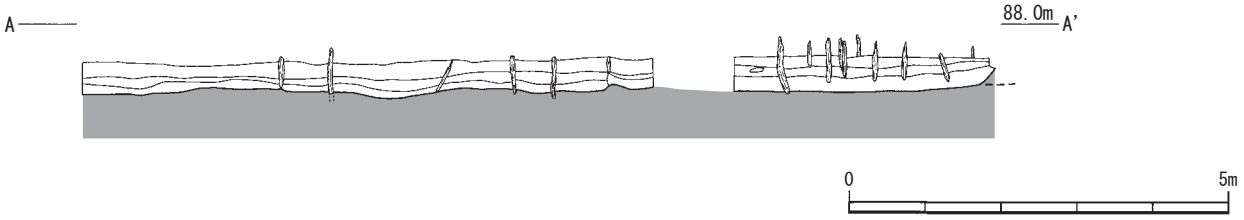




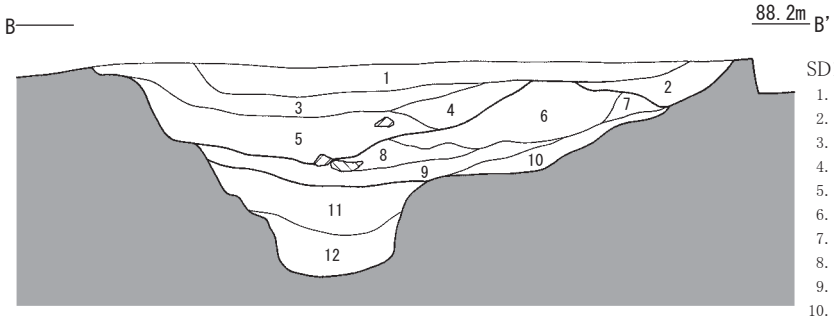



SD1003
SD1002
a'
a
a'
a
SD1001-a
SD1001-b
W1
W2


C'
B
A
A'
SD1001-c
SD1001-b
C
B'

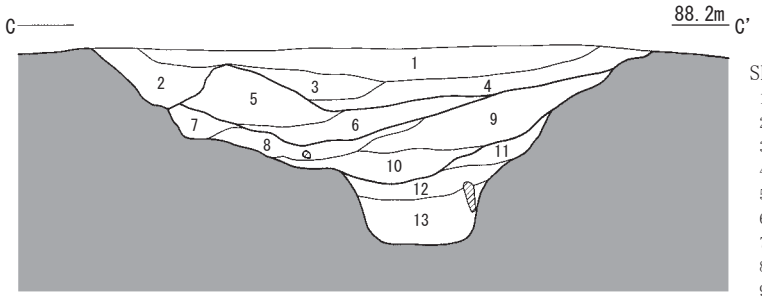

A
88.0m
A'
0
5m

溝(SD1001)



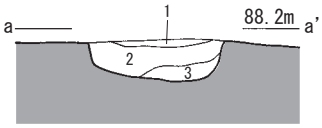
SD1001　東壁

1. 10YR3/2　黒褐色　極細砂～細砂
2. 10YR3/1　黒褐色　極細砂～細砂
3. 10YR3/1　黒褐色　極細砂～細砂
4. 2.5Y3/1　黒褐色　シルト～細砂
5. 2.5Y3/1　黒褐色　粘土～粘質シルト
6. 2.5Y2/1　黒色　粘土～極細砂
7. 2.5Y3/2　黒褐色　粘質シルト～細砂
8. 5Y3/1　オリーブ黒色　粘土
9. 5Y3/1　オリーブ黒色　中砂混じり粘質シルト～細砂
10. 2.5Y3/1　黒褐色　細砂混じり粘土～粘質シルト
11. 2.5Y2/1　黒色　中砂混じり粘質シルト～極細砂
12. 2.5Y1.7/1　黒色　細砂混じり粘土～粘質シルト



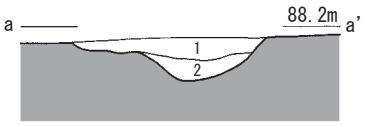
SD1001　西壁

1. 10YR3/2　黒褐色　極細砂～細砂
2. 10YR3/1　黒褐色　極細砂～細砂
3. 2.5Y3/1　黒褐色　シルト～細砂
4. 2.5Y3/1　黒褐色　粘土～粘質シルト
5. 2.5Y2/1　黒色　粘土～極細砂
6. 2.5Y3/1　黒褐色　粘質シルト～極細砂
7. 2.5Y3/1　黒褐色　中砂混じり粘質シルト～極細砂
8. 2.5Y4/2　暗灰黄色　中砂混じり粘質シルト
9. 5Y3/1　オリーブ黒色　中砂混じり粘質シルト～細砂
10. 2.5Y2/1　黒色　中砂～粗砂混じり粘質シルト～極細砂
11. 2.5Y2/1　黒色　細砂～中砂混じり粘土～粘質シルト
12. 2.5Y2/1　黒色　中砂混じり粘質シルト～極細砂
13. 2.5Y1.7/1　黒色　中砂混じり粘質シルト～極細砂



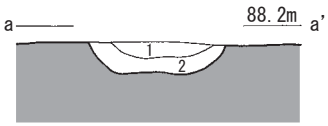
SD1002

1. 10YR3/1　黒褐色　極細砂～細砂
　2層をブロック状に含む
2. 10YR3/2　黒褐色　粘質シルト～極細砂
3. 10YR4/2　灰黄褐色　細砂混じり粘質シルト



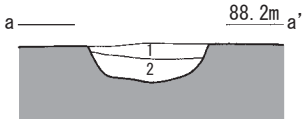
SD1003

1. 10YR2/2　黒褐色　粘質シルト～細砂
2. 10YR1.7/1　黒色　粘質シルト～細砂
　ベースをブロック状に含む



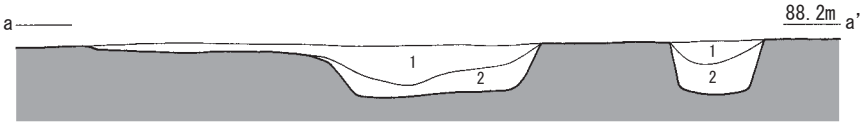
SD1004

1. 10YR3/2　黒褐色　粘質シルト～極細砂
2. 10YR2/1　黒色　粘質シルト～極細砂



SD1005

1. 10YR3/2　黒褐色　極細砂～細砂
　2層をブロック状に含む
2. 10YR4/1　褐灰色　粘質シルト～細砂
　ベースをブロック状に含む

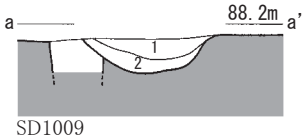


SD1006

1. 10YR2/1　黒色　粘質シルト～細砂
　2層をブロック状に含む
2. 10YR3/2　黒褐色　粘質シルト～細砂

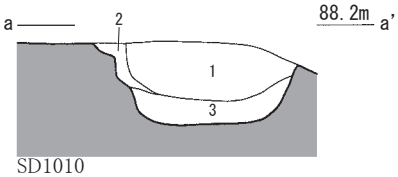
SD1007

1. 10YR3/1　黒褐色　粘質シルト
2. 10YR3/2　黒褐色　粘質シルト～細砂
　ベース(黒ボク)をブロック状に含む



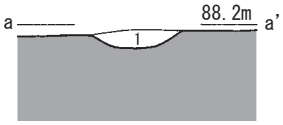
SD1009

1. 10YR4/2　灰黄褐色　粘質シルト～極細砂
2. 10YR2/1　黒色　極細砂～細砂
　ベースよりやや薄い色調で
　1層に似たブロックを含む



SD1010

1. 10YR4/1　褐灰色　粘質シルト～極細砂
　3層ないしベースをブロック状に含む
2. 10YR3/1　黒褐色　粘質シルト～細砂
　3層ないしベースをブロック状に含む
3. 2.5Y2/1　黒色　粘質シルト～細砂

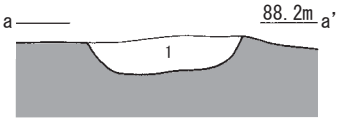


SD1011

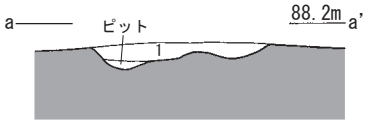
1. 10YR2/2　黒褐色　シルト～細砂

0　2m

SD1001～1011土層断面図

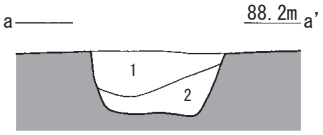


SD1012
1. 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルト～極細砂
ベースと包含層をブロック状に含む

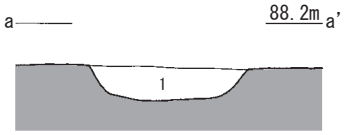


SD1013
1. 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト～極細砂
ベースを含む

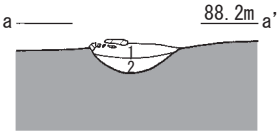
SD1014
1. 10YR3/1 黒褐色 粘土～極細砂



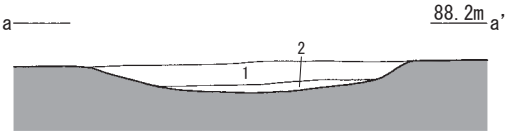
SD1015
1. 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルト～細砂
2層をブロック状に含む
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト混じり細砂



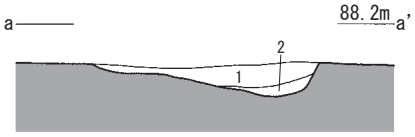
SD1016
1. 10YR3/2 黒褐色 粘質シルト



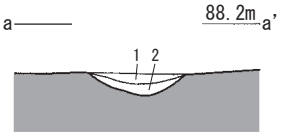
SD1017
1. 10YR3/1 黒褐色 粘質シルト～細砂
2. 10YR3/2 黒褐色 粘質シルト～細砂



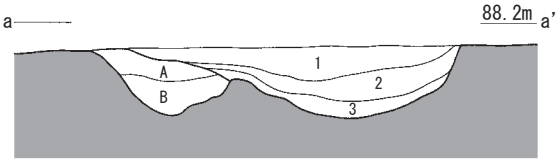
SD1019
1. 10YR3/2 黒褐色 極細砂～細砂
2. 10YR2/1 黒色 シルト～極細砂



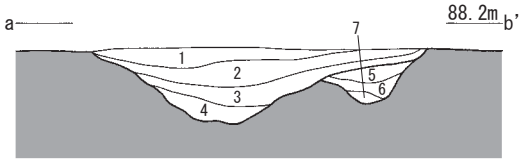
SD1020
1. 10YR4/1 褐灰色 粘土～粘質シルト
2. 10YR3/1 黒褐色 粘土～粘質シルト



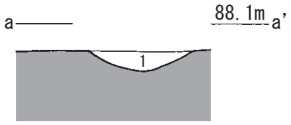
SD1023
1. 10YR4/1 褐灰色 シルト～極細砂
2. 2.5Y3/1 黒褐色 粘質シルト～極細砂



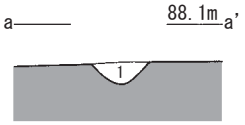
SD1021 西側
1. 10YR3/2 黒褐色 中砂混じり粘質シルト～極細砂
2. 10YR3/1 黒褐色 中砂～粗砂混じり粘質シルト～極細砂
3. 10YR2/1 黒色 中砂～粗砂混じり粘質シルト～細砂
A. 10YR3/1 黒褐色 中砂混じり粘質シルト～細砂
B. 10YR2/1 黒色 粘質シルト～細砂



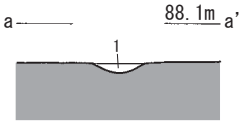
SD1021 東側
1. 10YR3/2 黒褐色 粘質シルト～細砂
2. 10YR3/1 黒褐色 中砂混じり粘質シルト～極細砂
3. 10YR2/2 黒褐色 中砂～粗砂混じり粘質シルト～極細砂
4. 2.5Y3/2 黒褐色 粘土～粘質シルト
5. 10YR3/1 黒褐色 中砂混じり粘質シルト～細砂
6. 2.5Y3/2 黒褐色 細砂混じり粘土～粘質シルト
7. 2.5Y4/1 黄灰色 中砂混じり粘質シルト～細砂



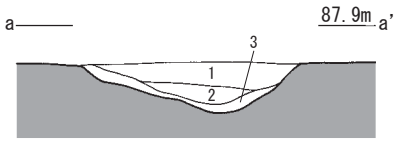
SD1024
1. 10YR4/1 褐灰色 シルト～極細砂



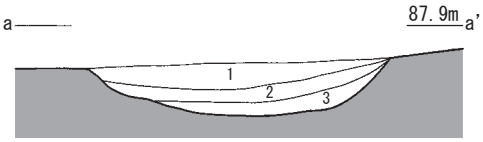
SD1025
1. 2.5Y4/1 黄灰色 粗砂混じりシルト～極細砂



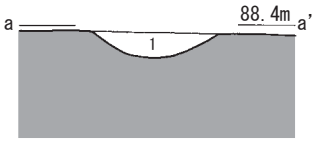
SD1026
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粗砂混じりシルト～極細砂



SD2001
1. 2.5YR2/1 赤黒色 腐植質シルト
2. 7.5YR2/1～3/1 黒～黒褐色 腐植質シルト混じり粗砂
3. 5YR3/1 黒褐色 細砂含む腐植質シルト

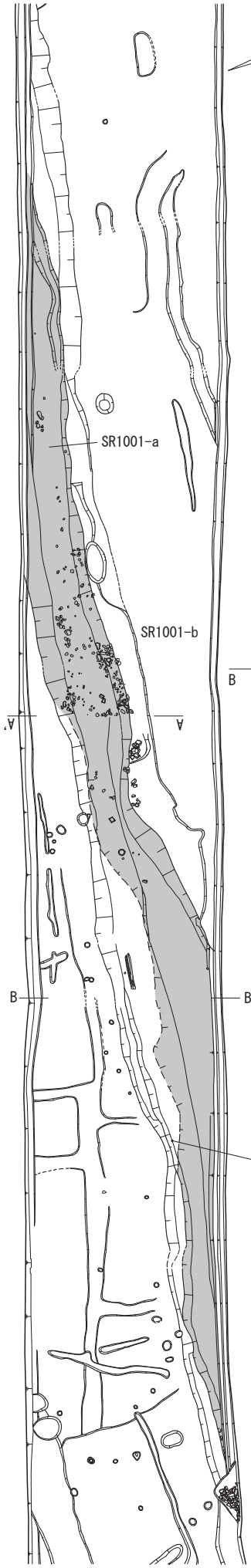


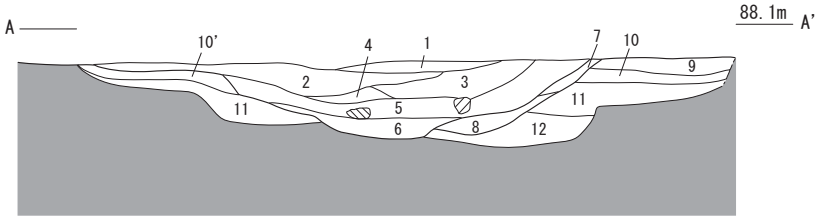
SD2005
1. 5YR3/1 黒褐色 腐植質極細砂
2. 2.5YR3/1 暗赤灰色 腐植質シルト
3. 10YR3/1 黒褐色 2＋4層ブロック含む粗砂



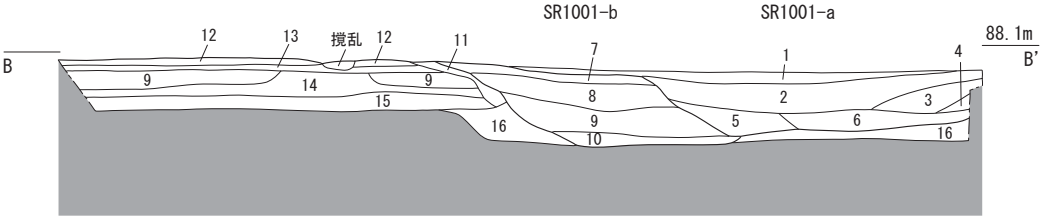
SD2009
1. 7.5YR4/1 褐灰色 粘質シルト～極細砂

SD1015～1026・2001・2005・2009土層断面図





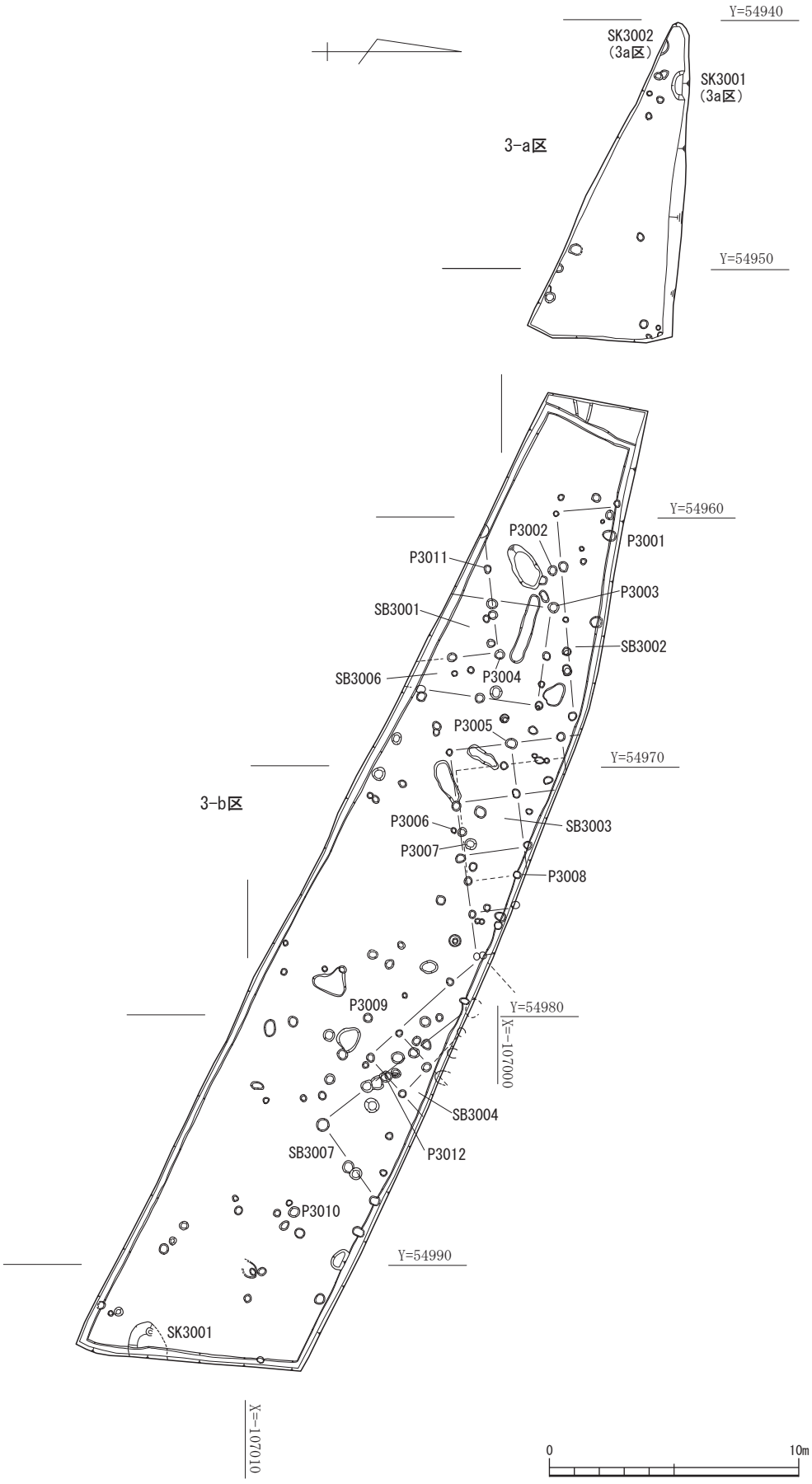
1.	10R3/1	暗赤灰色	礫混じりシルト質極細砂 径2～5mmの礫を多く含む 13C洪水砂礫
2.	2.5YR3/1	暗赤灰色	極細砂質シルト
3.	2.5YR3/1	暗赤灰色	細砂混じりシルト
4.	7.5YR3/1	黒褐色	極細砂混じりシルト 10YR7/8黄色シルトブロック混じり
5.	7.5YR3/1	黒褐色	シルト 腐植物を多く含む(グライ化)
6.	10R3/1～4/1	暗赤灰色	灰色シルト混じりの中砂 11C代溝 SR1001-a
7.	7.5R3/1	黒褐色	9層ブロック混じり極細砂質シルト SR1001-b
8.	7.5R2/1	黒色	粗砂混じり腐植質シルト SR1001-b
9.	10R2/2～2.5YR2/2	極暗赤褐色	極細砂混じりシルト Mn斑
10.	5YR3/1	黒褐色	シルト混じり極細砂
10'.	5YR3/1	黒褐色	極細砂混じり腐植質シルト
11.	10R3/1	暗赤灰色	有機物を含むシルト混じり極細砂
12.	5YR4/1～3/1	褐灰色～黒褐色	シルト混じり極細砂



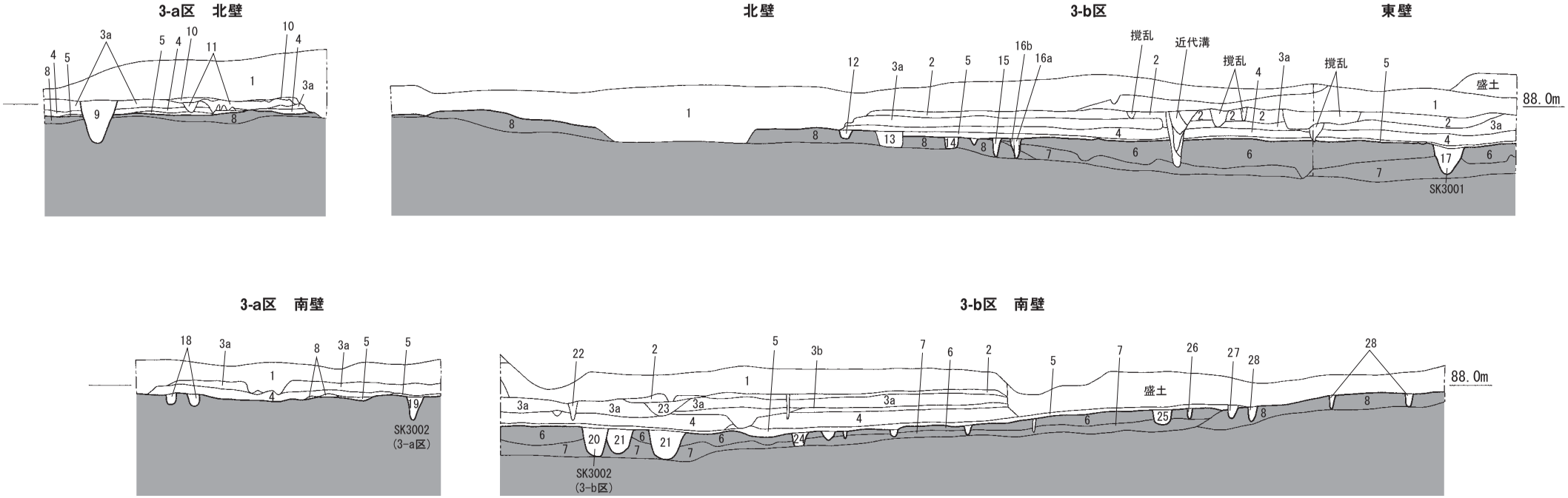
1.	10R3/1	暗赤灰色	礫混じりシルト質極細砂 径1～3mmの礫を含む 13C洪水砂礫
2.	2.5YR3/1	暗赤灰色	極細砂質シルト
3.	2.5YR3/1	暗赤灰色	細砂混じりシルト
4.	7.5YR3/1	黒褐色	シルト混じり極細砂
5.	10R3/1	暗赤灰色	シルト混じり細砂
6.	10R3/1～4/1	暗赤灰色	灰色シルト混じりの中砂 11C代溝 SR1001-a
7.	2.5YR3/1	暗赤灰色	腐植質礫混じり極細砂(シルト質)
8.	7.5R3/1	暗赤灰色	腐植質シルト
9.	7.5R2/1	赤黒色	中・細砂混じり腐植質シルト
10.	5YR3/1～2/1	黒褐色	腐植質シルト混じり中砂
11.	5YR3/1	黒褐色	腐植質極細砂混じりシルト
12.	7.5YR3/2	黒褐色	腐植質シルト質極細砂
13.	5YR3/2～7.5YR3/2	暗赤褐色～黒褐色	細砂混じり極細砂質シルト Fe集積多い
14.	5YR3/1	黒褐色	シルト混じり極細砂
15.	10R3/1	暗赤灰色	腐植物混じり極細砂(細砂粒混じる)
16.	5YR4/1～3/1	褐灰色～黒褐色	極細砂質シルト

0 2m

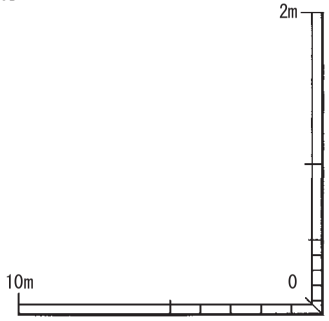
流路(SR1001)


Y=54940
SK3002
(3a区)
SK3001
(3a区)
3-a区
Y=54950
Y=54960
P3002
P3001
P3011
P3003
SB3001
SB3002
SB3006
P3004
P3005
Y=54970
3-b区
P3006
SB3003
P3007
P3008
P3009
Y=54980
X=-107000
SB3004
SB3007
P3012
P3010
Y=54990
SK3001
X=-107010
0
10m

3区遺構配置図



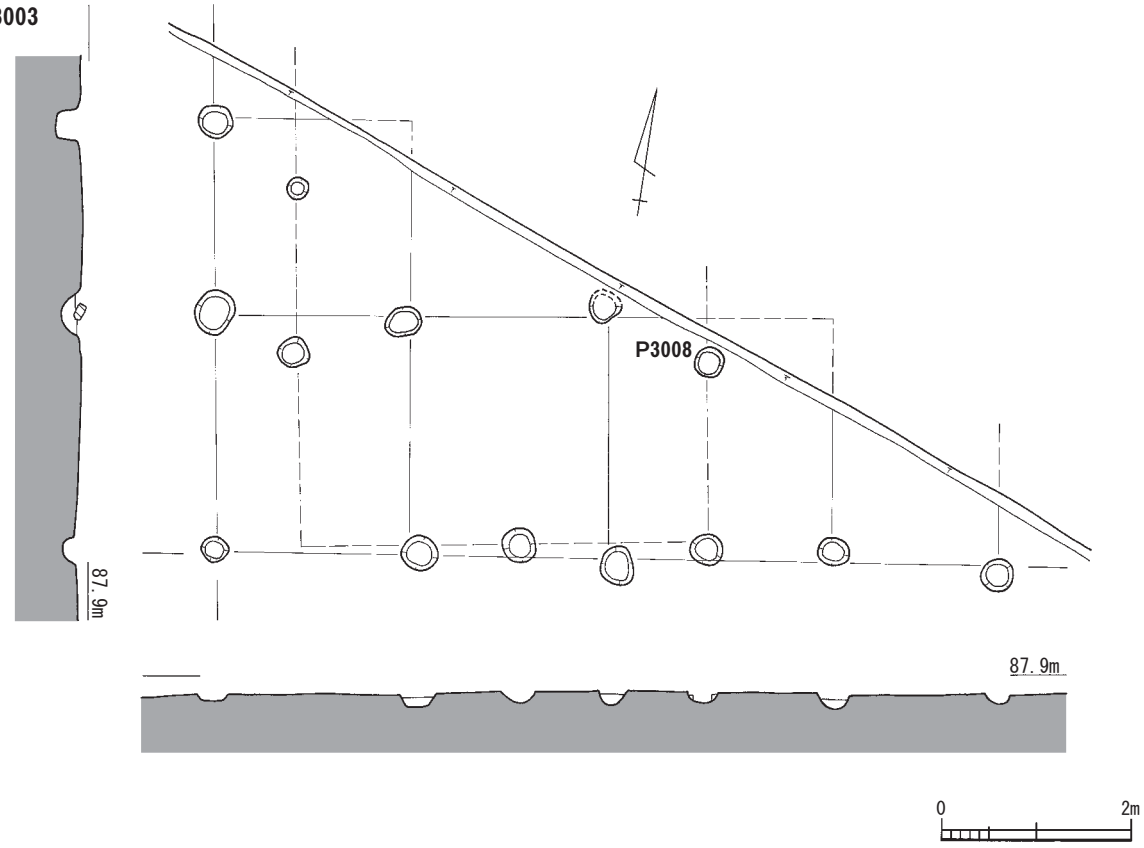
1.			現耕土
2.	10YR3/3	暗褐色	粗砂混じりシルト～細砂　上面にFe沈着顕著
3a.	10YR3/2	黒褐色	シルト～細砂　南壁では粗砂を噛む
3b.	10YR3/2	黒褐色	粗砂混じり粘質シルト～極細砂
4.	10YR2/2	黒褐色	粘質シルト～極細砂
5.	10YR2/1	黒色	中砂～中礫混じり粘質シルト～極細砂　洪水砂礫
6.	10YR2/1	黒色	粘質シルト～細砂　黒ボク:ベース1
7.	2.5Y5/3	黄褐色	粗砂混じり粘質シルト～極細砂　ベース2
8.	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト混じり細砂～中礫　ベース 沖積世？砂礫
9.			SK3001
10.	2.5Y4/3	オリーブ褐色	極細砂～細砂　近代以前の整地層
11.	2.5Y3/1	黒褐色	粗砂～中礫混じり極細砂～中砂　炭化物・焼土をブロック状に含む 近代以前の整地層
12.	10YR3/2	黒褐色	中礫混じり粘質シルト～極細砂
13.	10YR3/1	黒褐色	中礫混じり粘質シルト～極細砂
14.	10YR2/1	黒色	粘質シルト～極細砂
16a.	10YR3/1	黒褐色	粘質シルト～極細砂
16b.	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト
17.	10YR2/1	黒色	粘土～粘質シルト　ベース2　製塩土器を含む　SK3001
19.			SK3002(3-a区)
20.			SK3002(3-b区)
21.			風倒木痕
22.	10YR4/2	灰黄褐色	粗砂混じり極細砂～細砂
23.	10YR4/3	にぶい黄褐色	粗砂混じりシルト～極細砂
24.	10YR1.7/1	黒色	粘質シルト～極細砂
15. 18. 28.			ピット
25.			土坑
26.			柱穴の芯？
27.			土坑？溝？



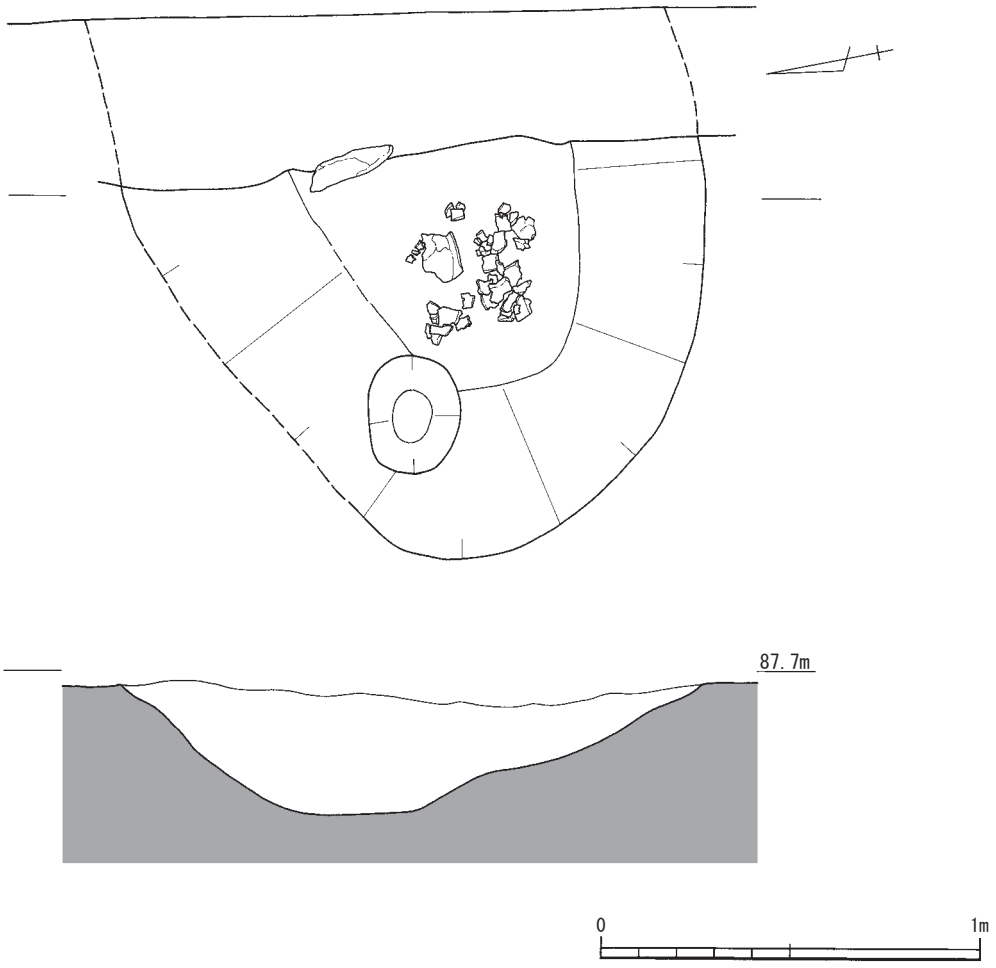
3区北壁・東壁・南壁土層断面図

図版44

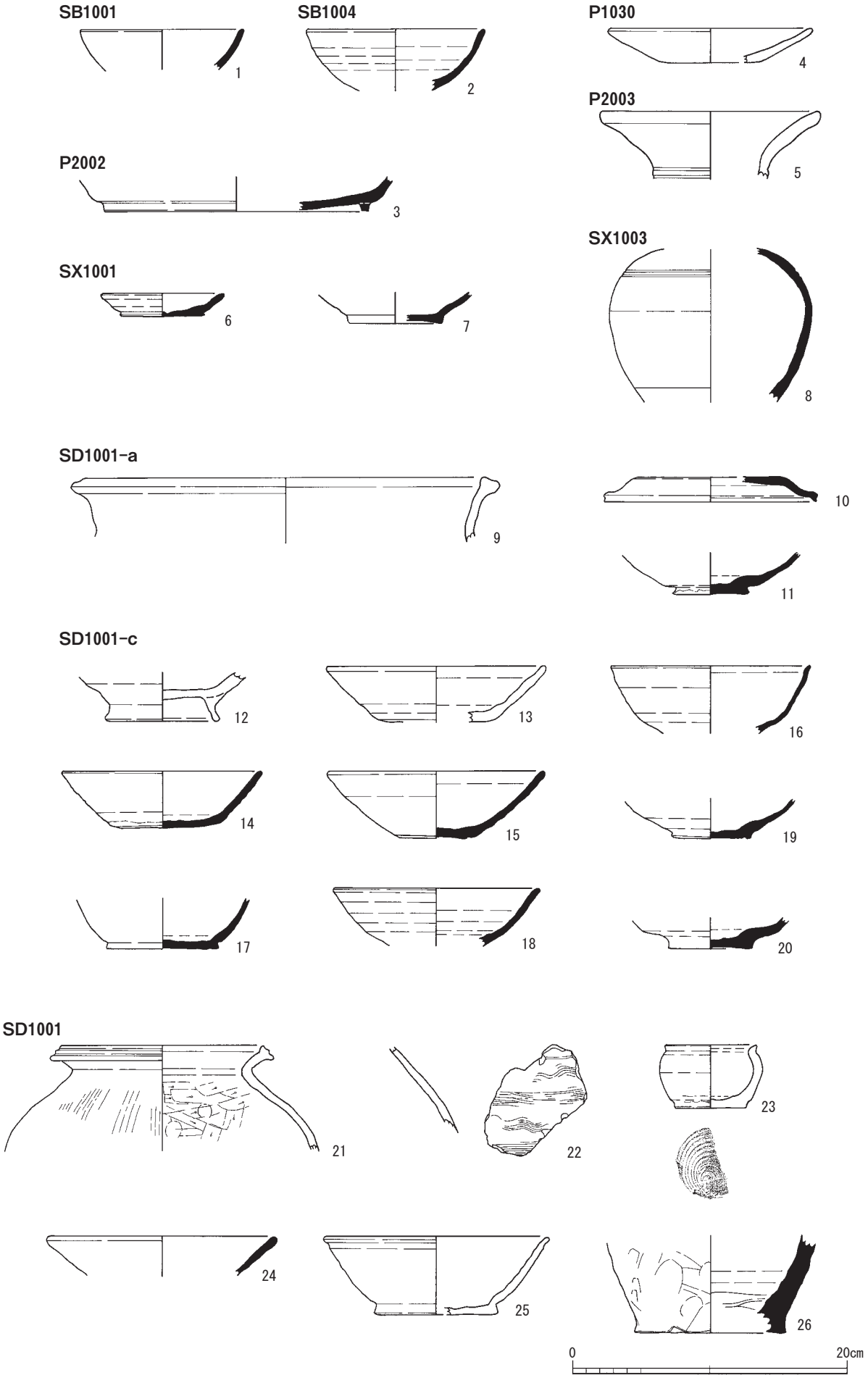
SB3003



SK3001

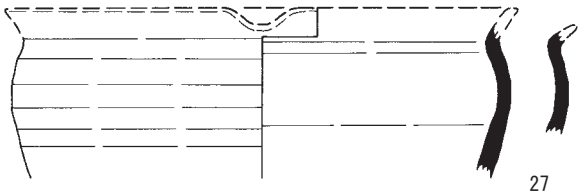


掘立柱建物(SB3003)・土坑(SK3001)


SB1001
1
SB1004
2
P1030
4
P2003
5
P2002
3
SX1003
8
SX1001
6
7
SD1001-a
9
10
11
SD1001-c
12
13
16
14
15
19
17
18
20
SD1001
21
22
23
24
25
26
0
20cm

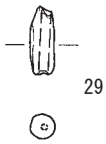
1・2区遺構出土土器(1)

SD1012

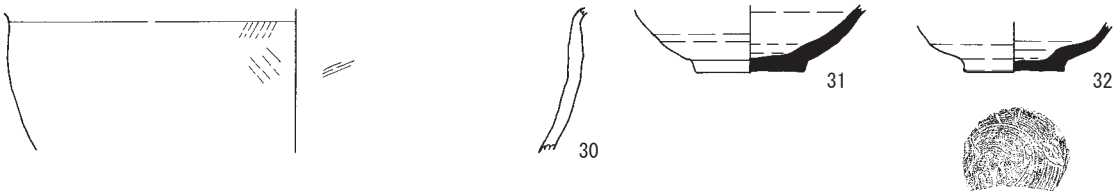


SD1015

SD1010



SD1013

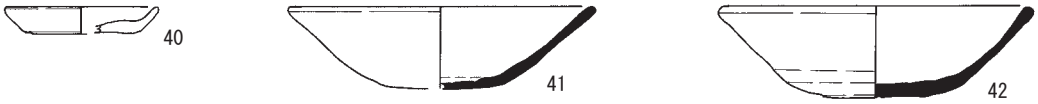


SD1017

SD1018

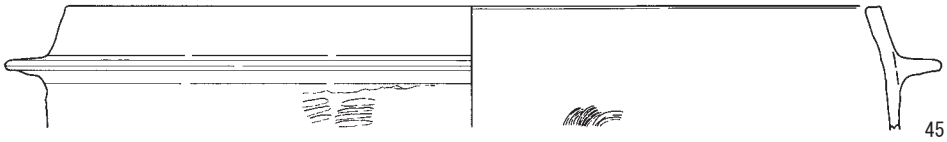
SD1019

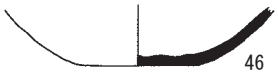
SD2005

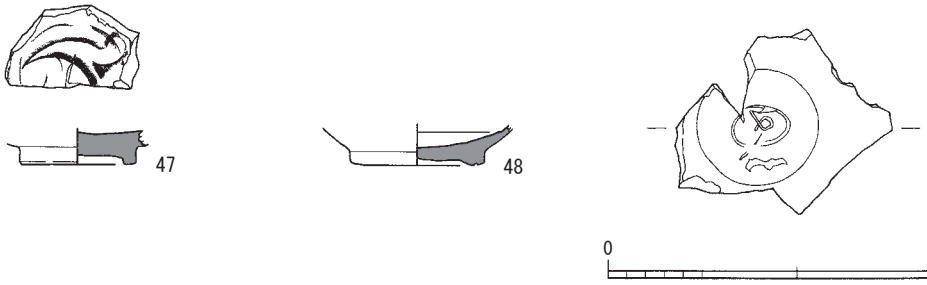


SR2001

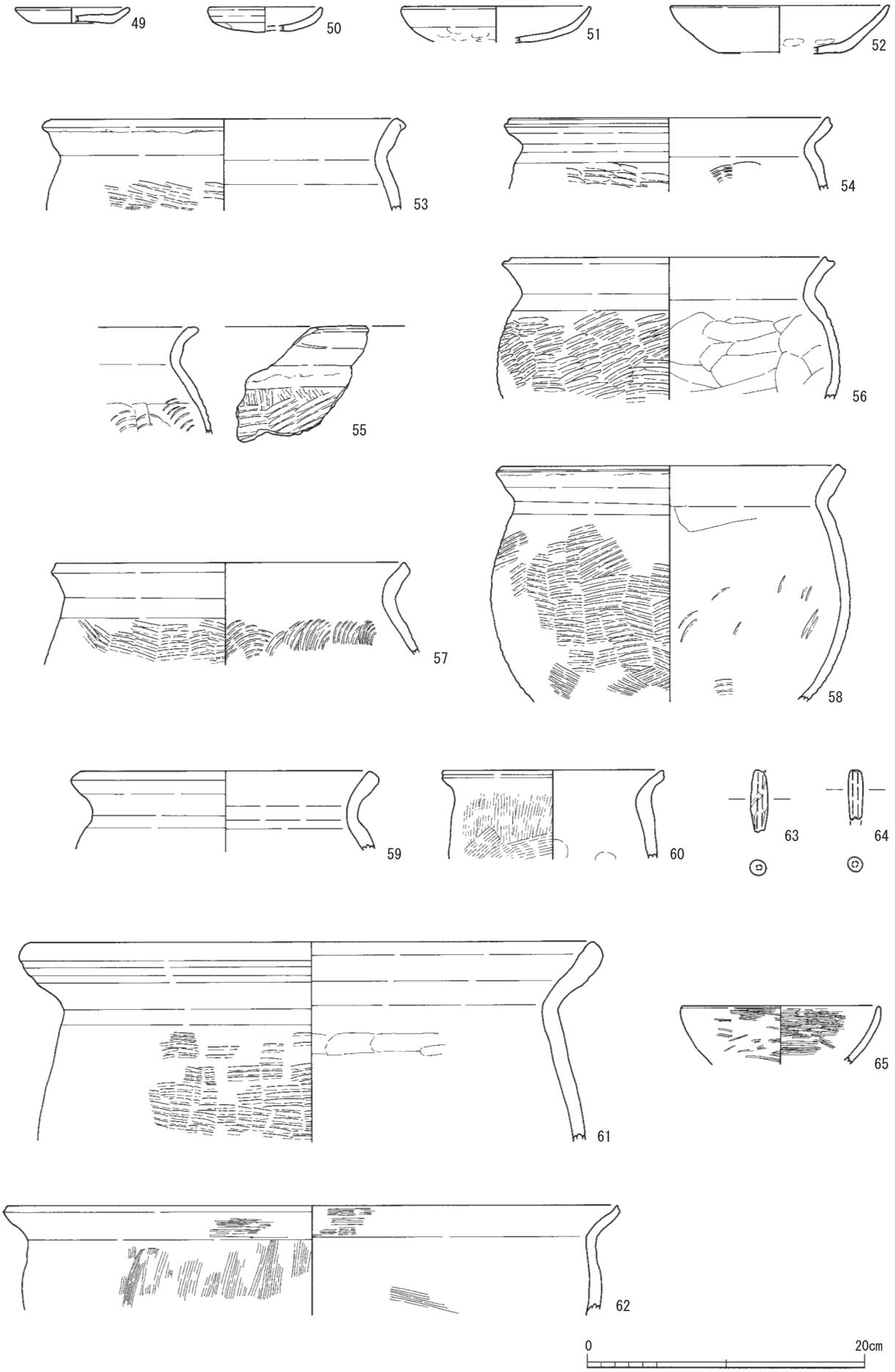
SR1001-a　最上層　茶灰色混礫土





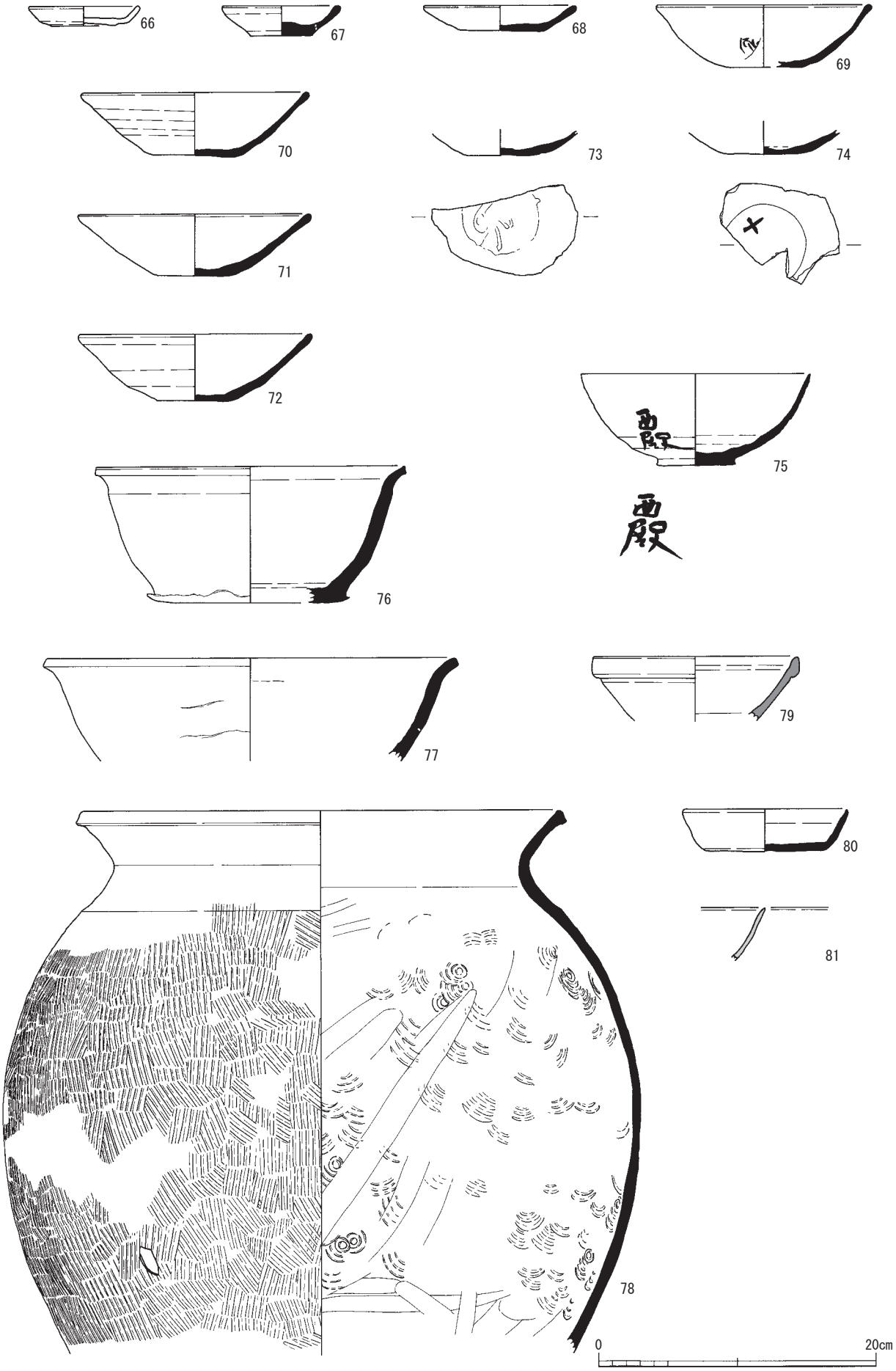


SR1001-a　茶灰シルト



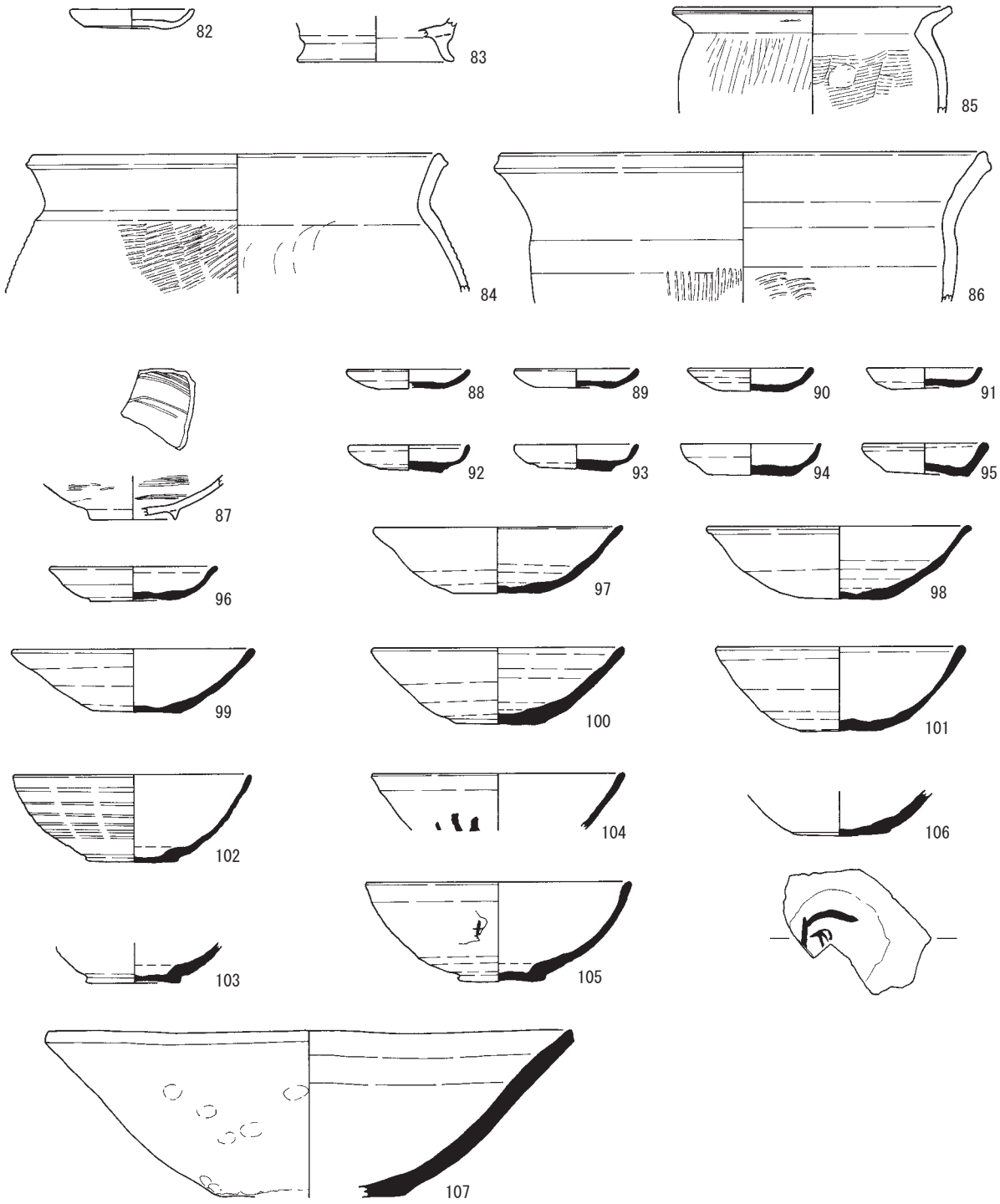
1・2区遺構出土土器(3)

SR1001-a　茶灰シルト

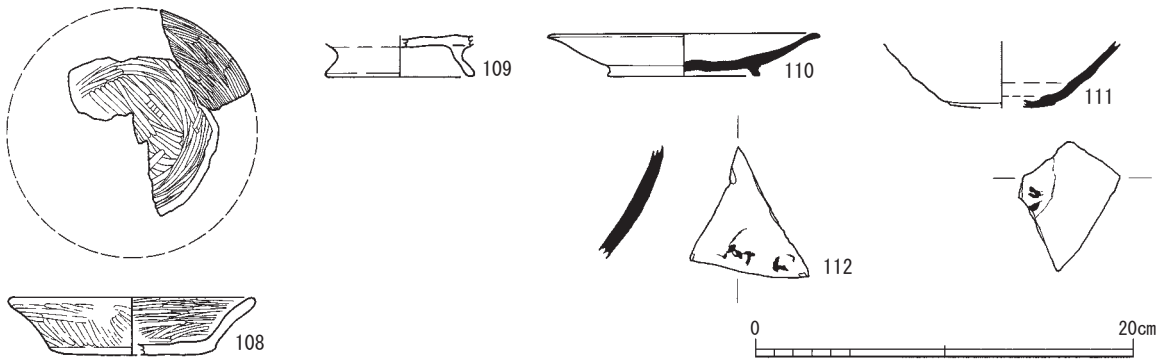


1・2区遺構出土土器(4)

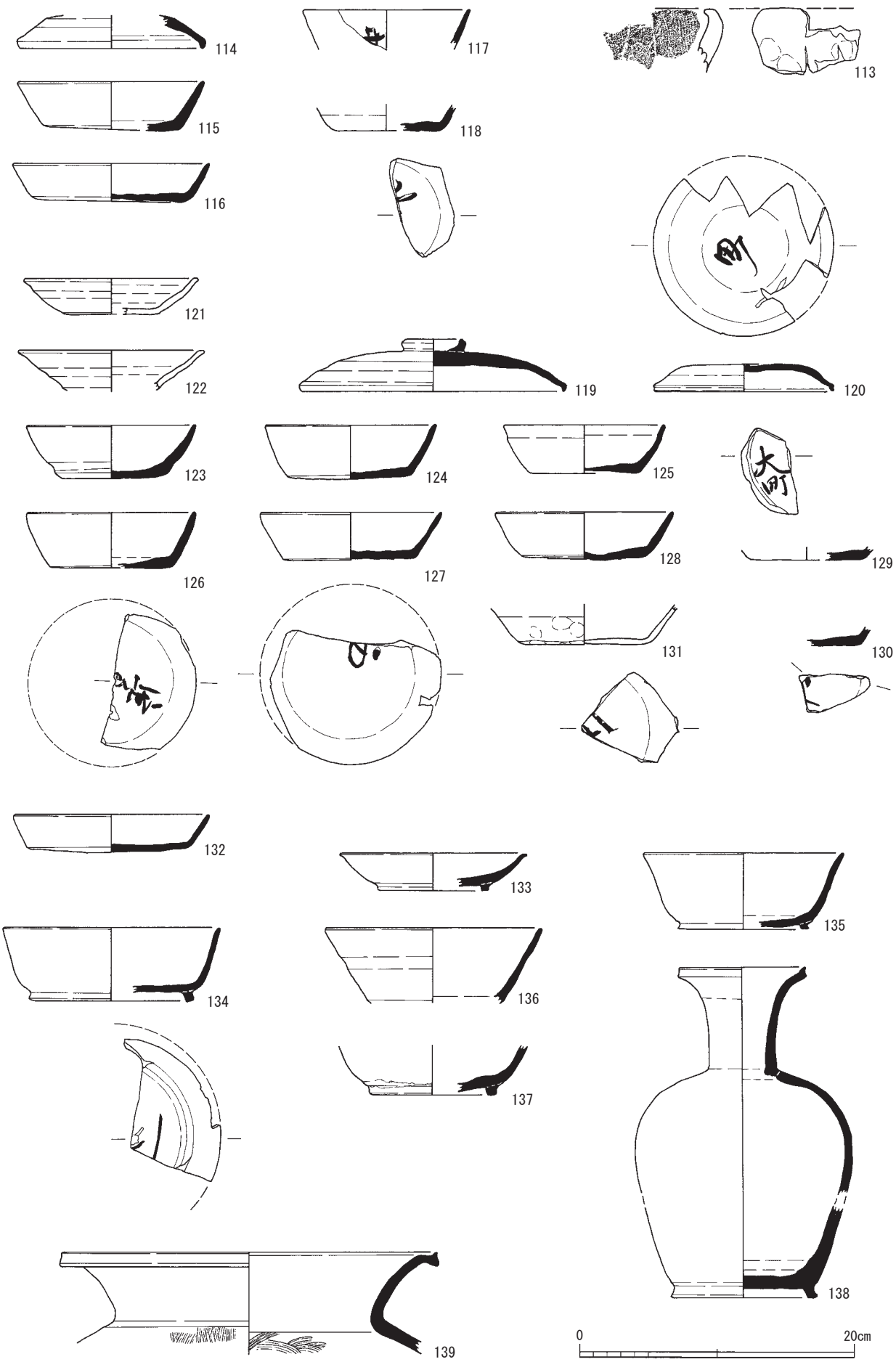
SR1001-a　粗砂層



SR1001-a　最下層

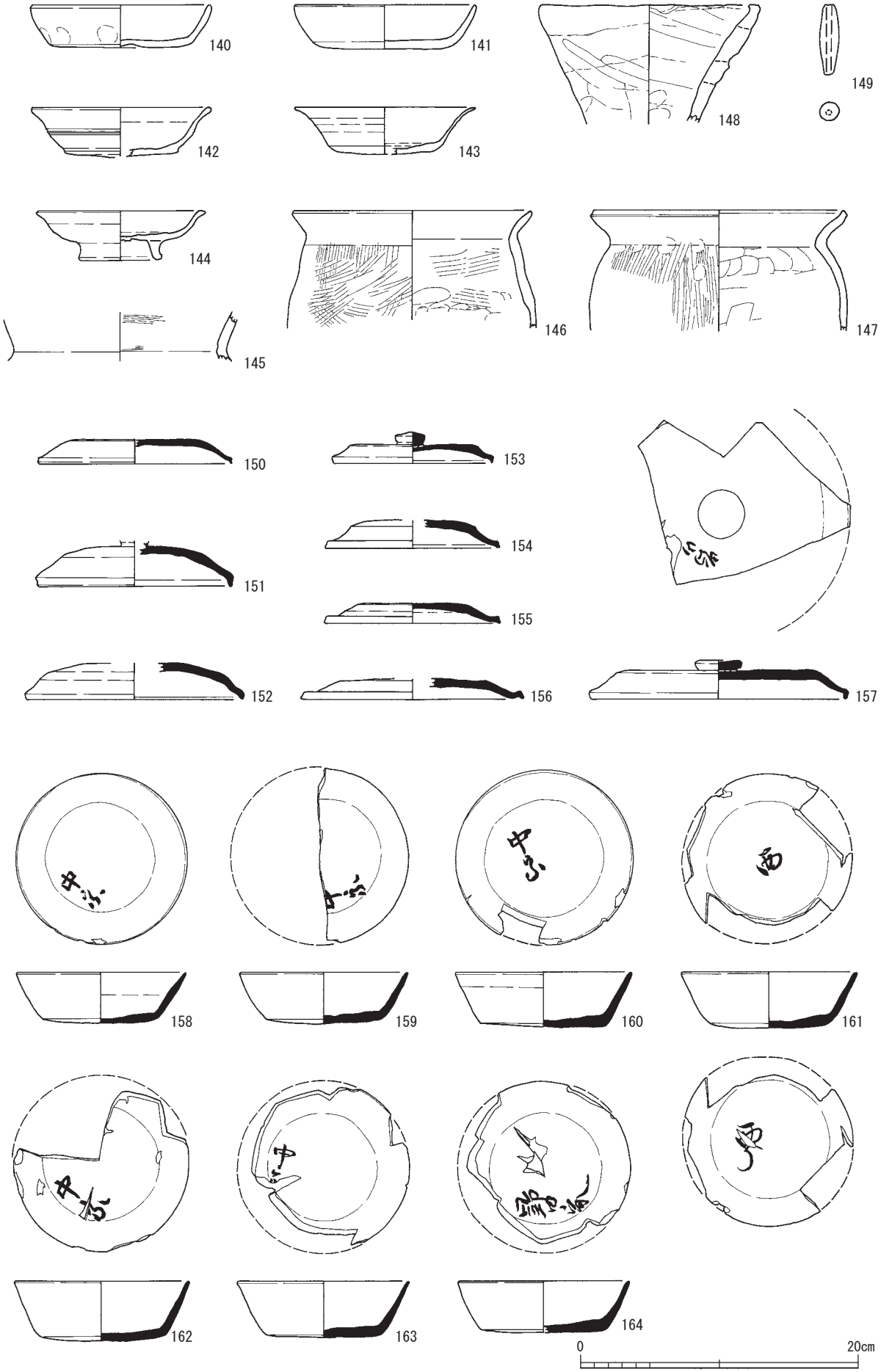


SR1001-b



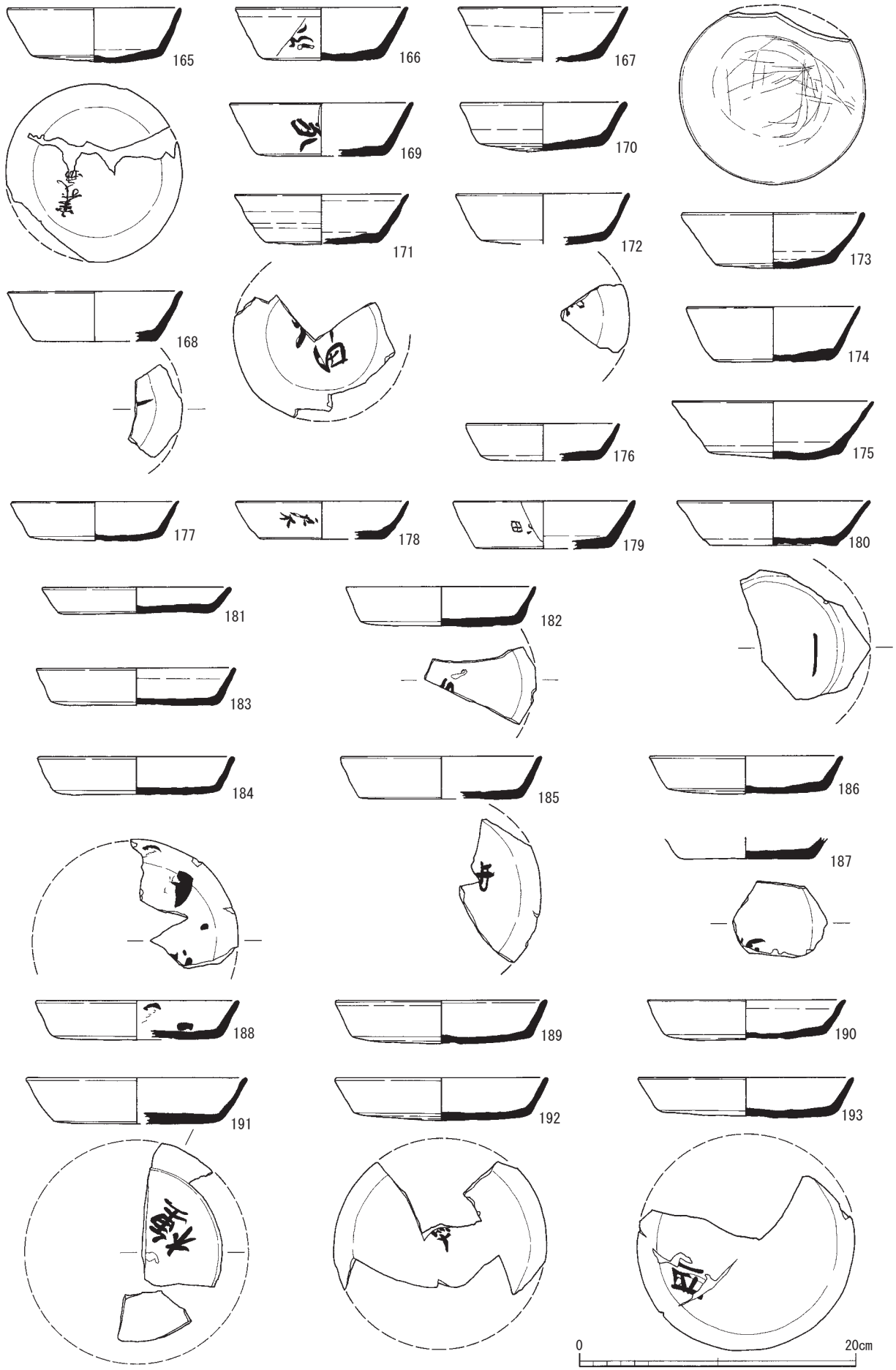
1・2区遺構出土土器(6)

SR1001-b　溝底



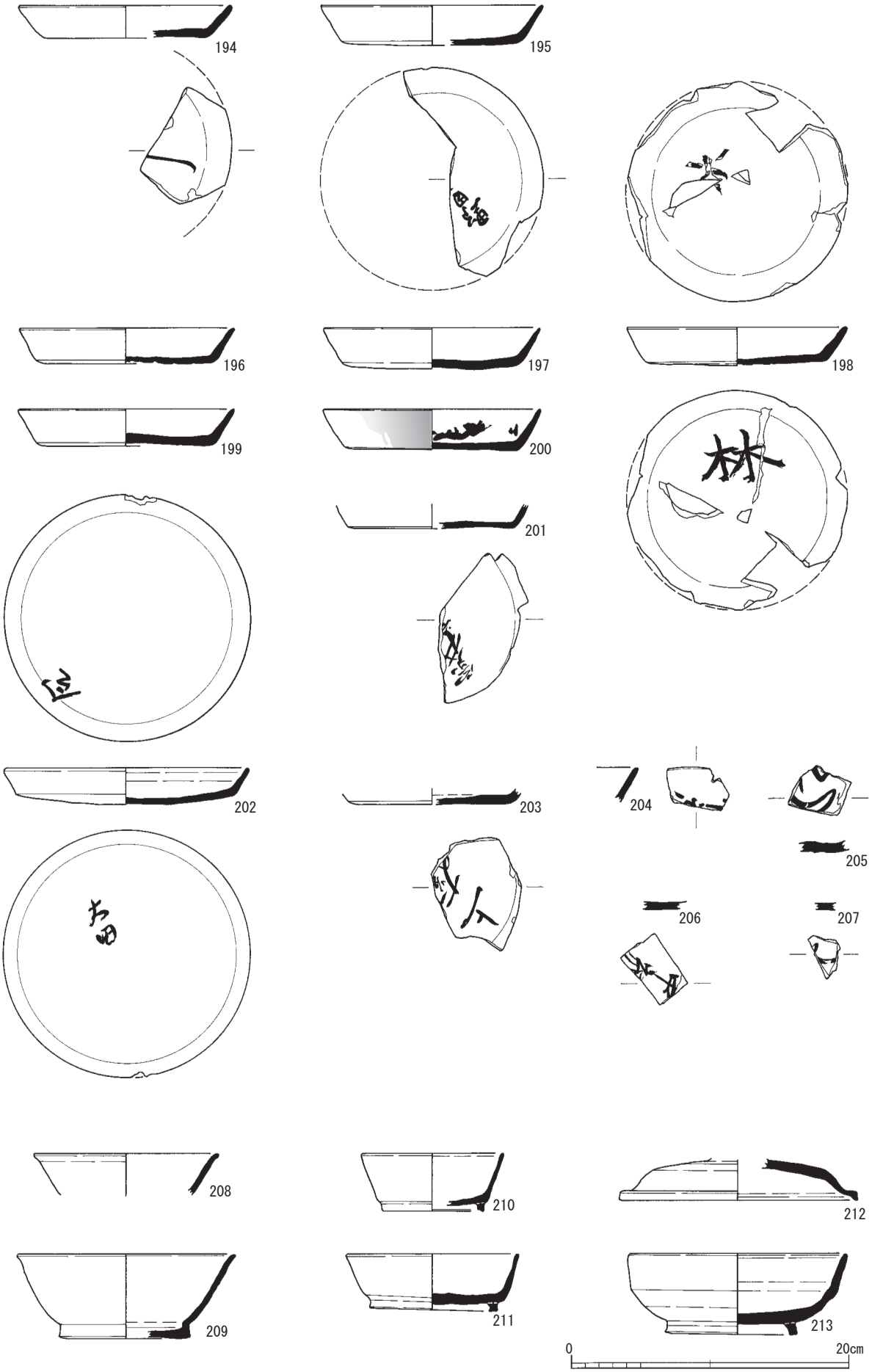
1・2区遺構出土土器(7)

SR1001-b　溝底

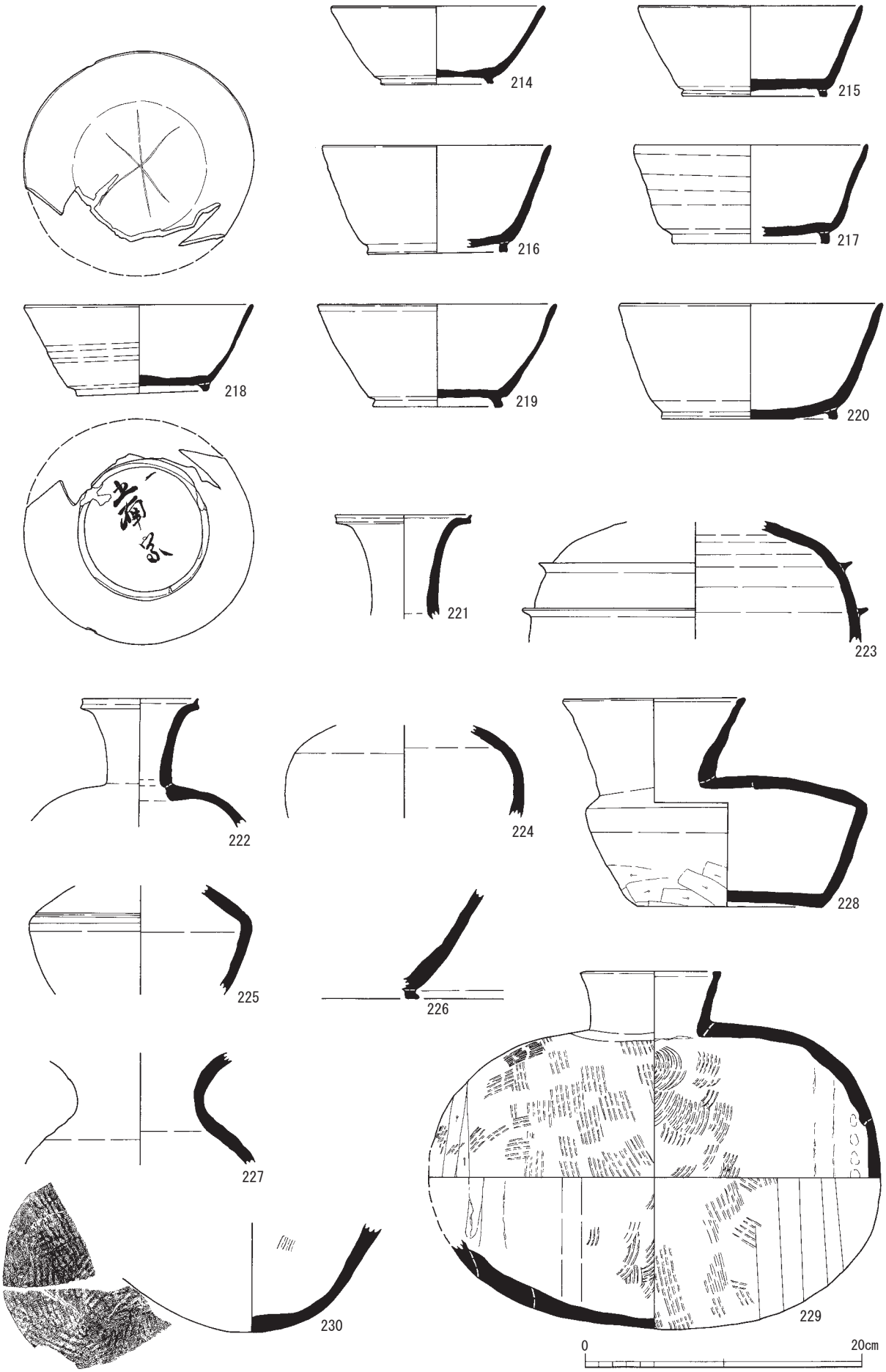


1・2区遺構出土土器(8)

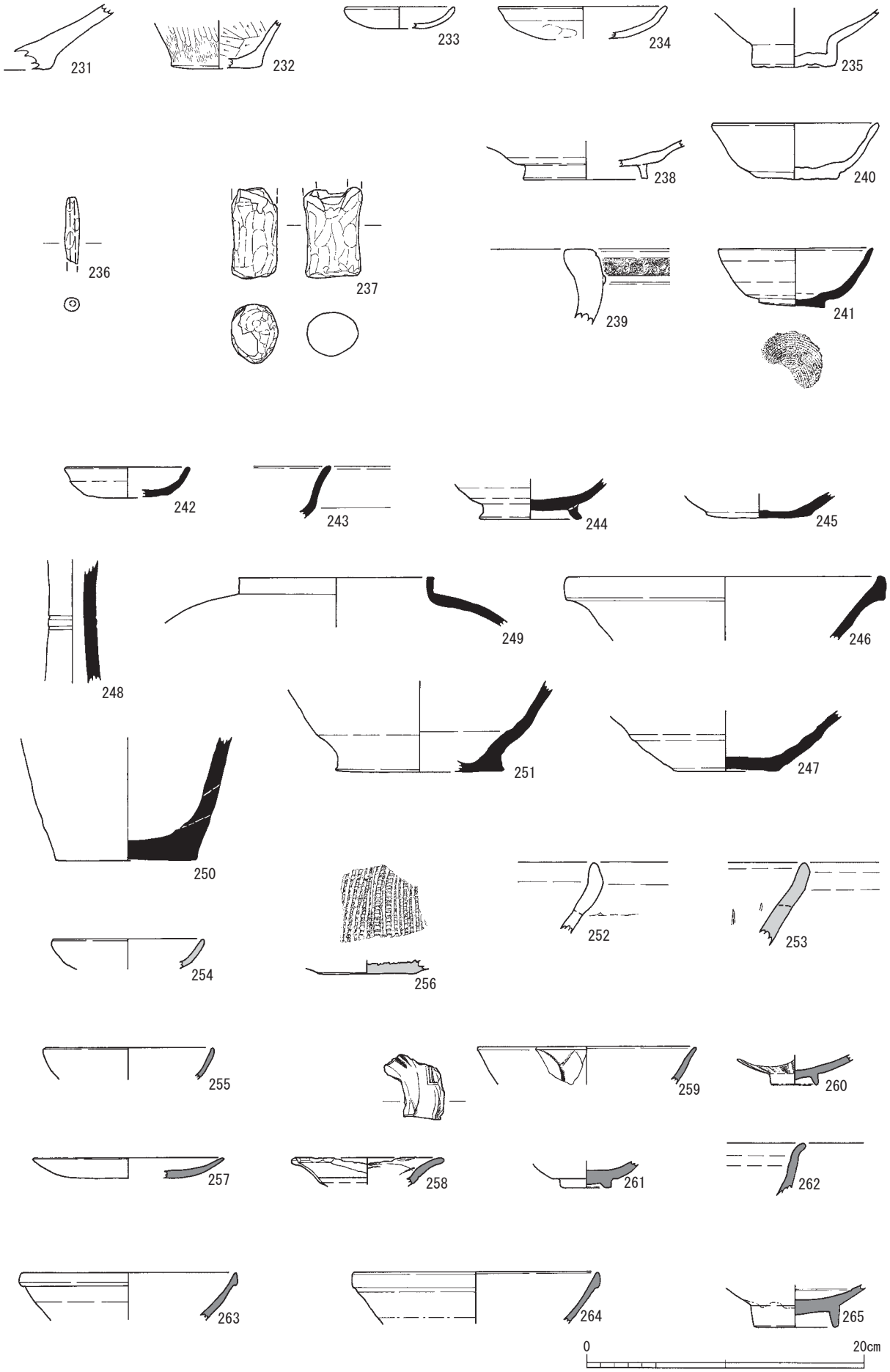
SR1001-b　溝底


194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
0
20cm

SR1001-b　溝底

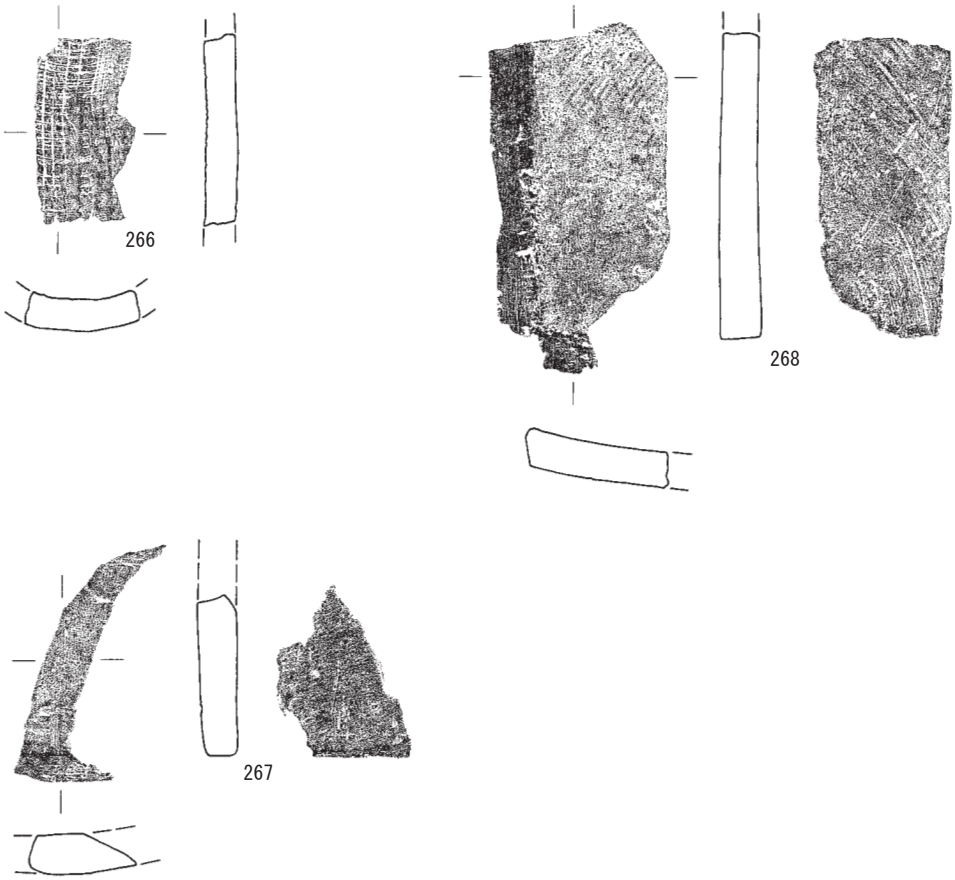


1・2区遺構出土土器(10)

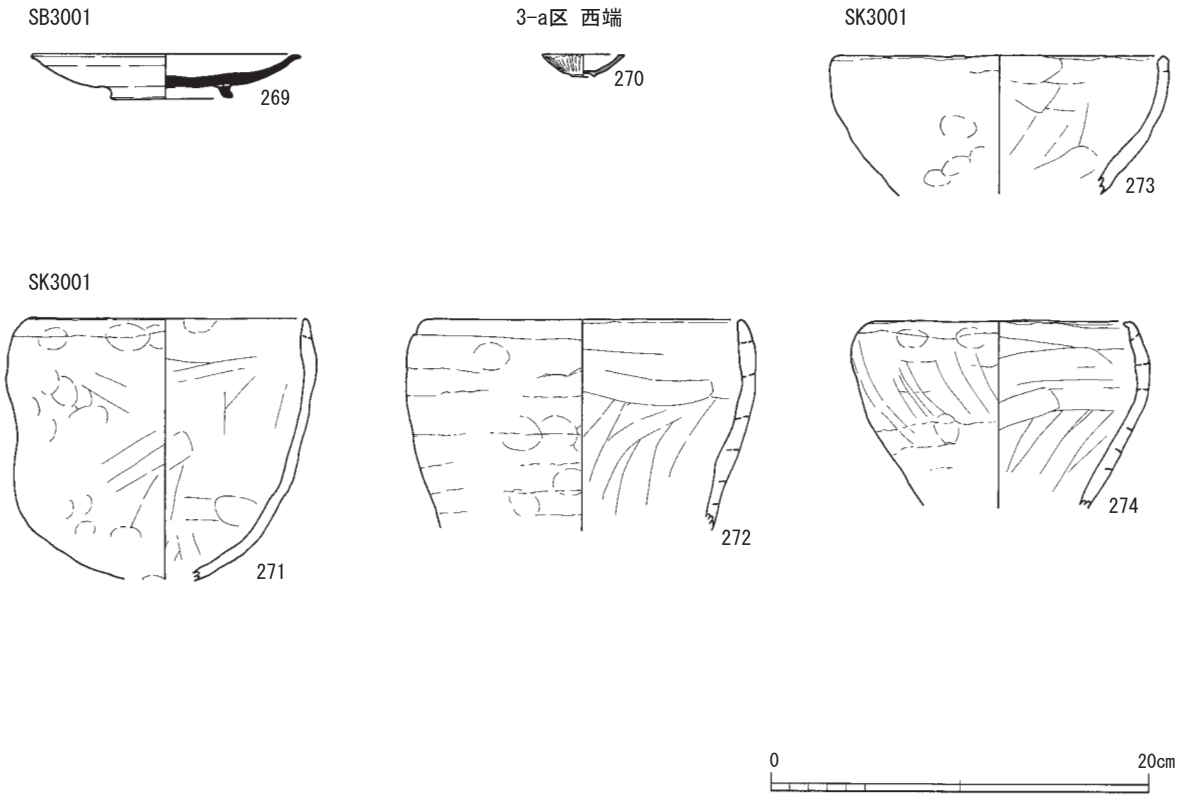


1・2区包含層出土土器(1)

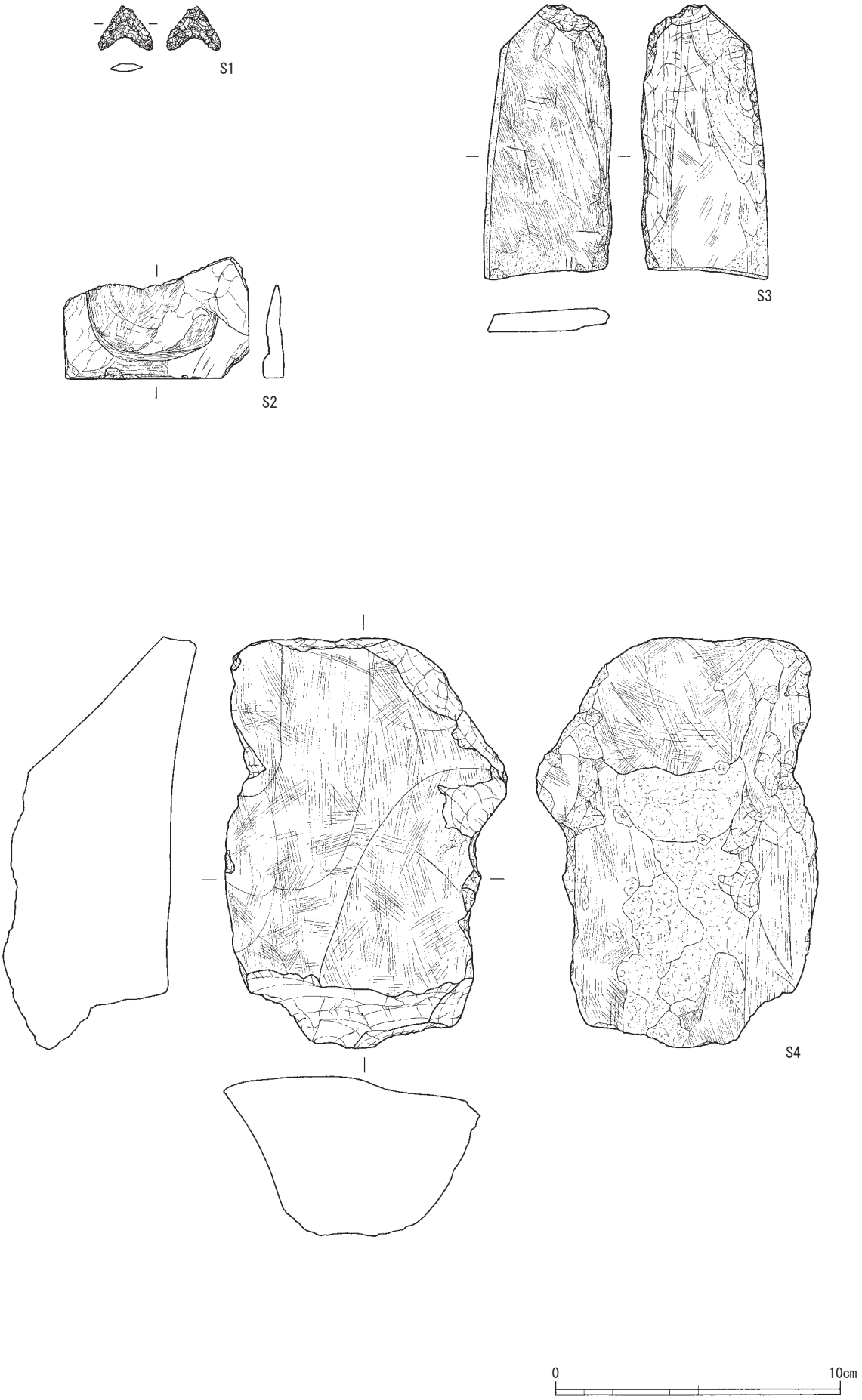
1区・2区　包含層



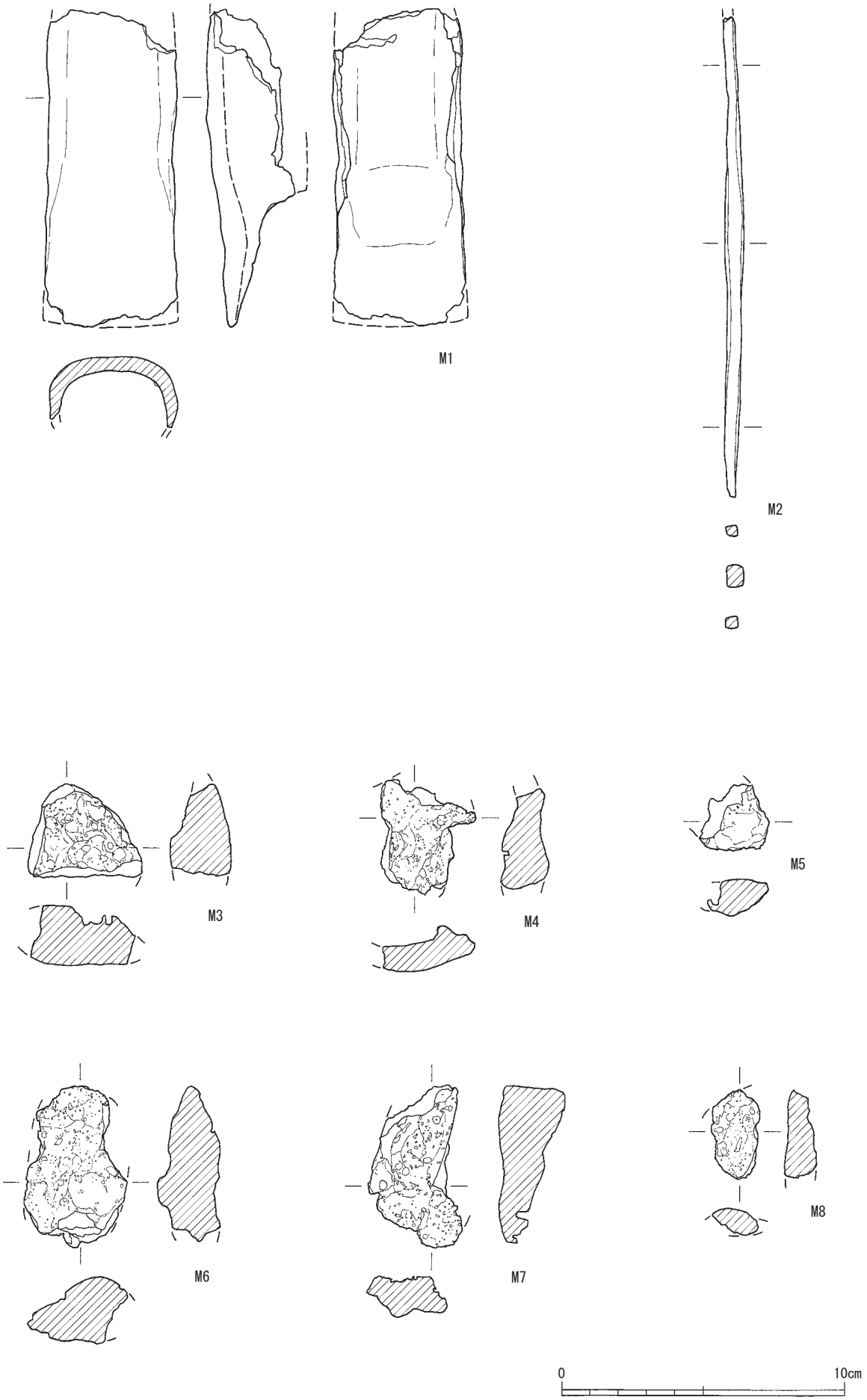
3区



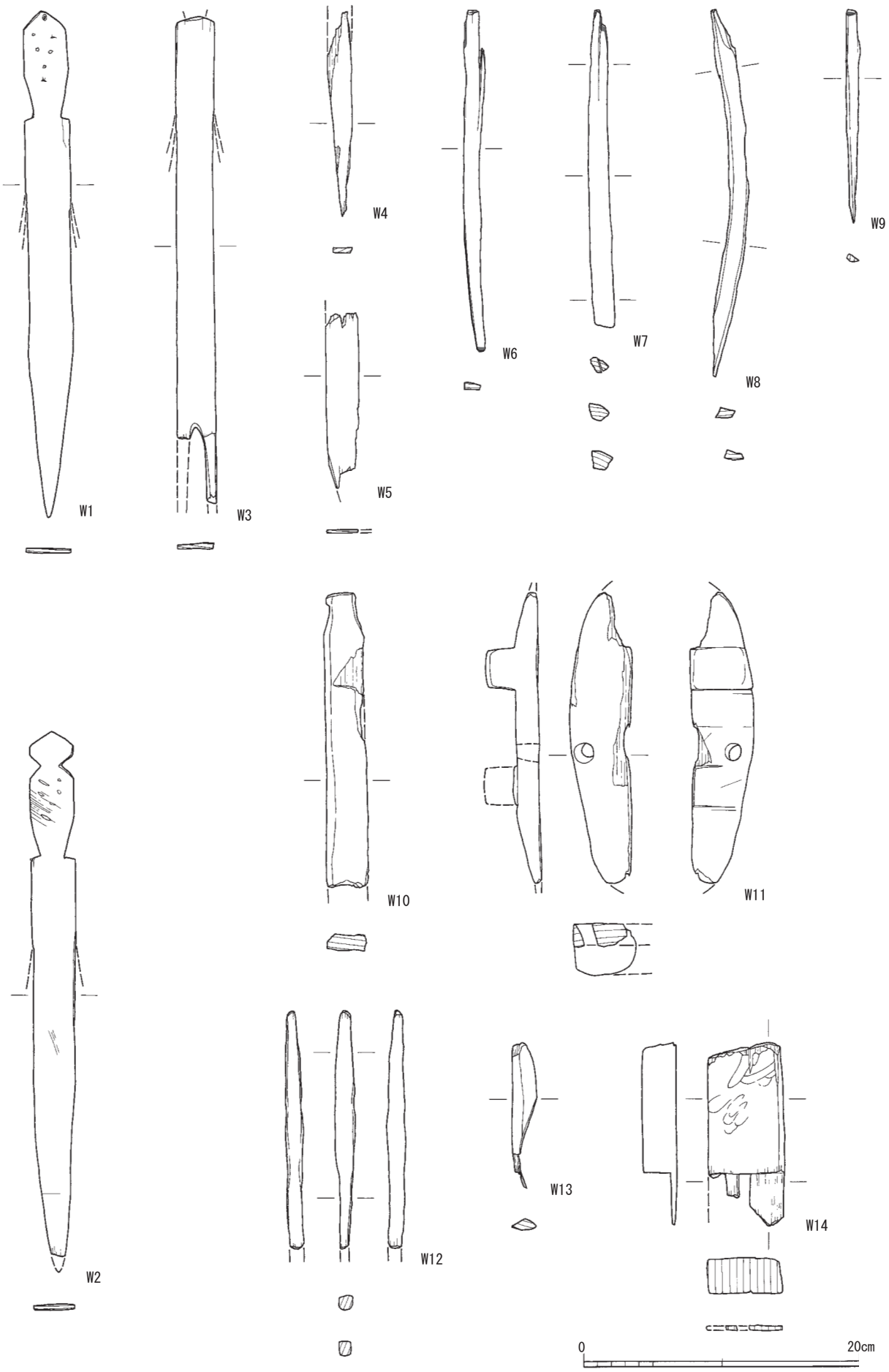
1・2区包含層出土器(2)・3区遺構出土土器



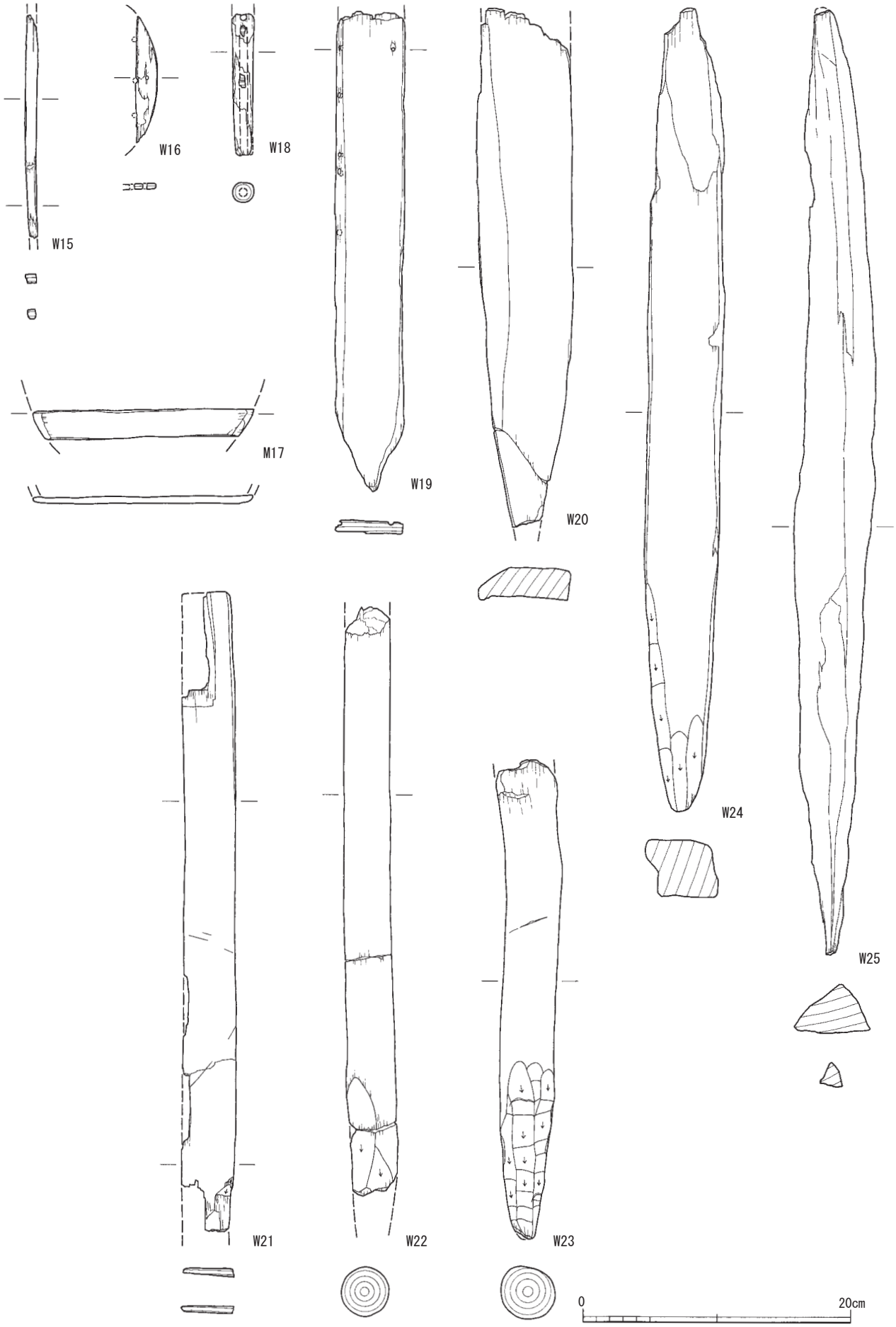
1～3区出土石製品



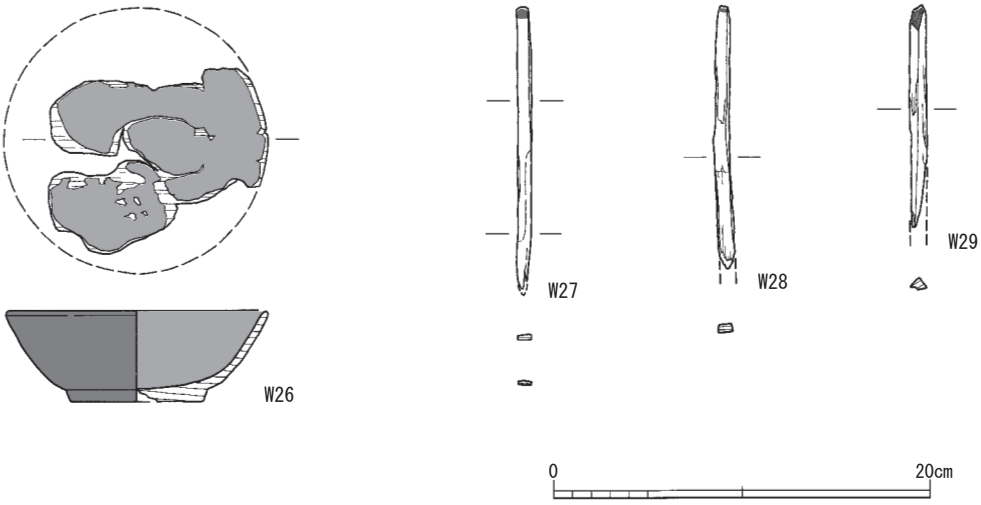
1・2区出土金属製品

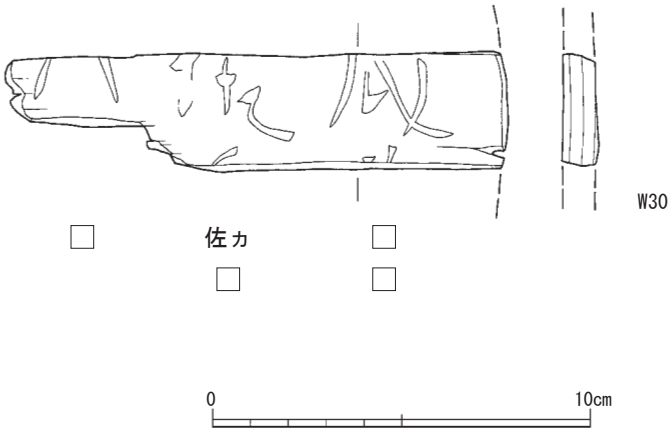


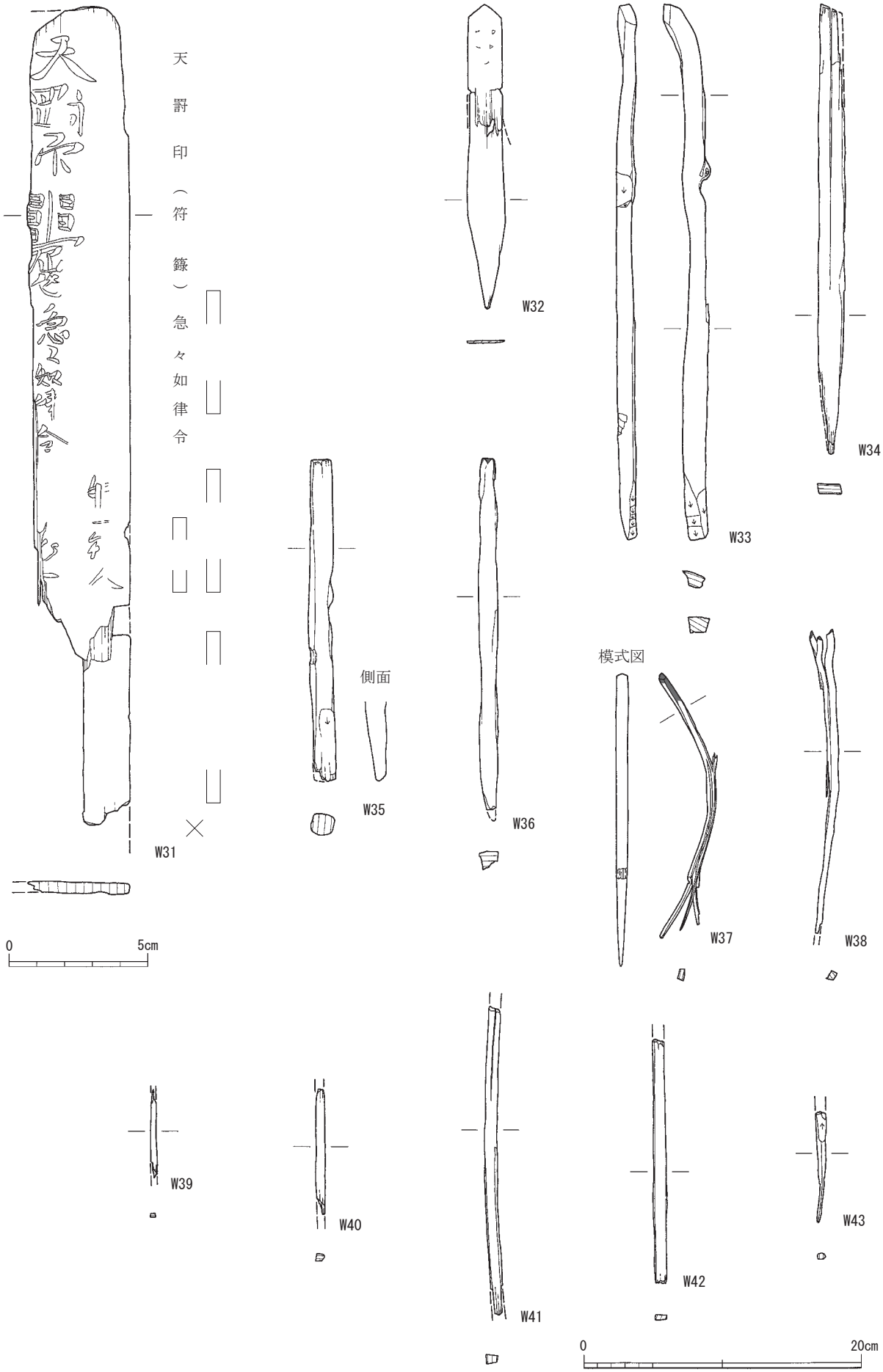
木製品(1)

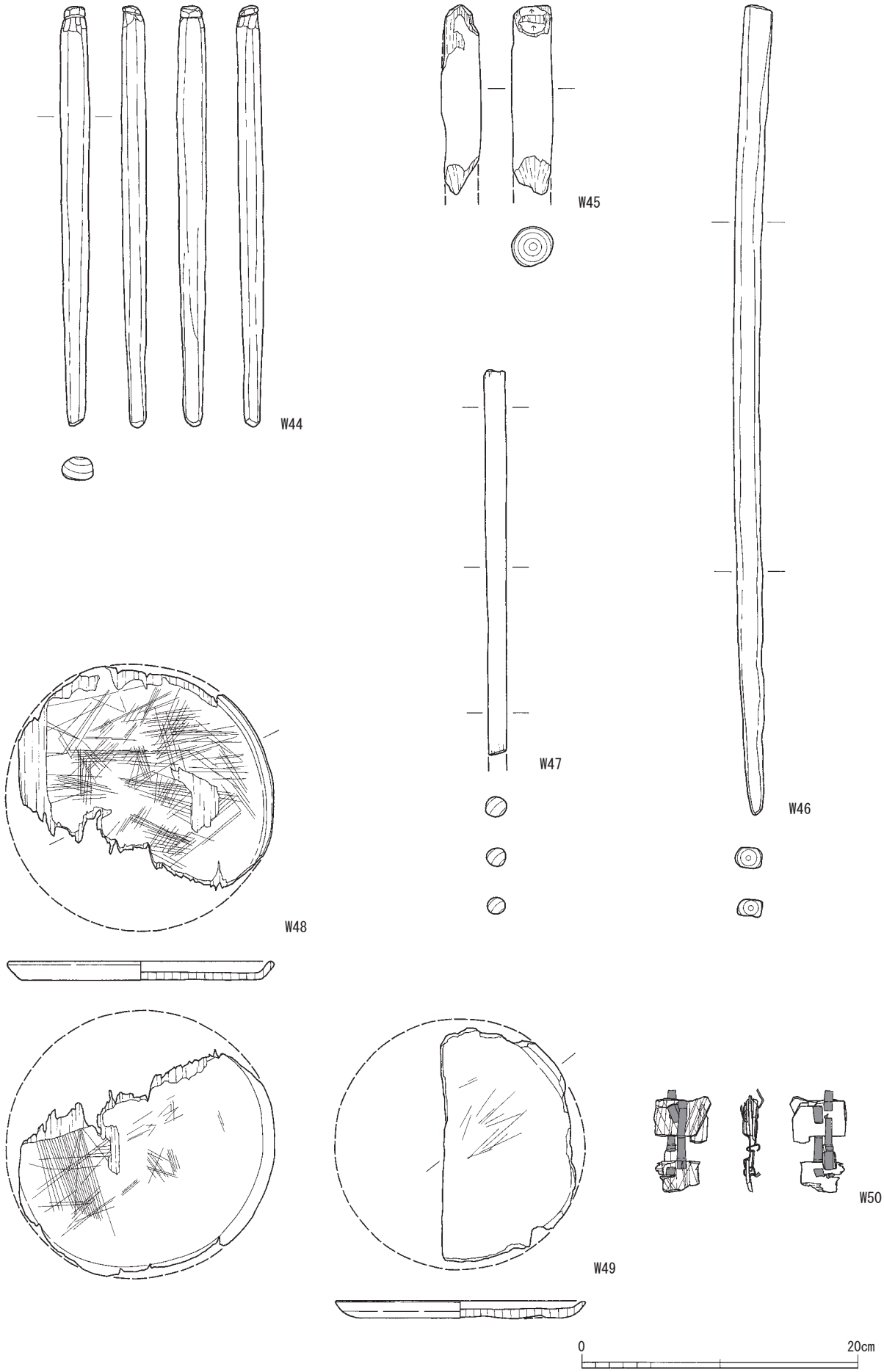


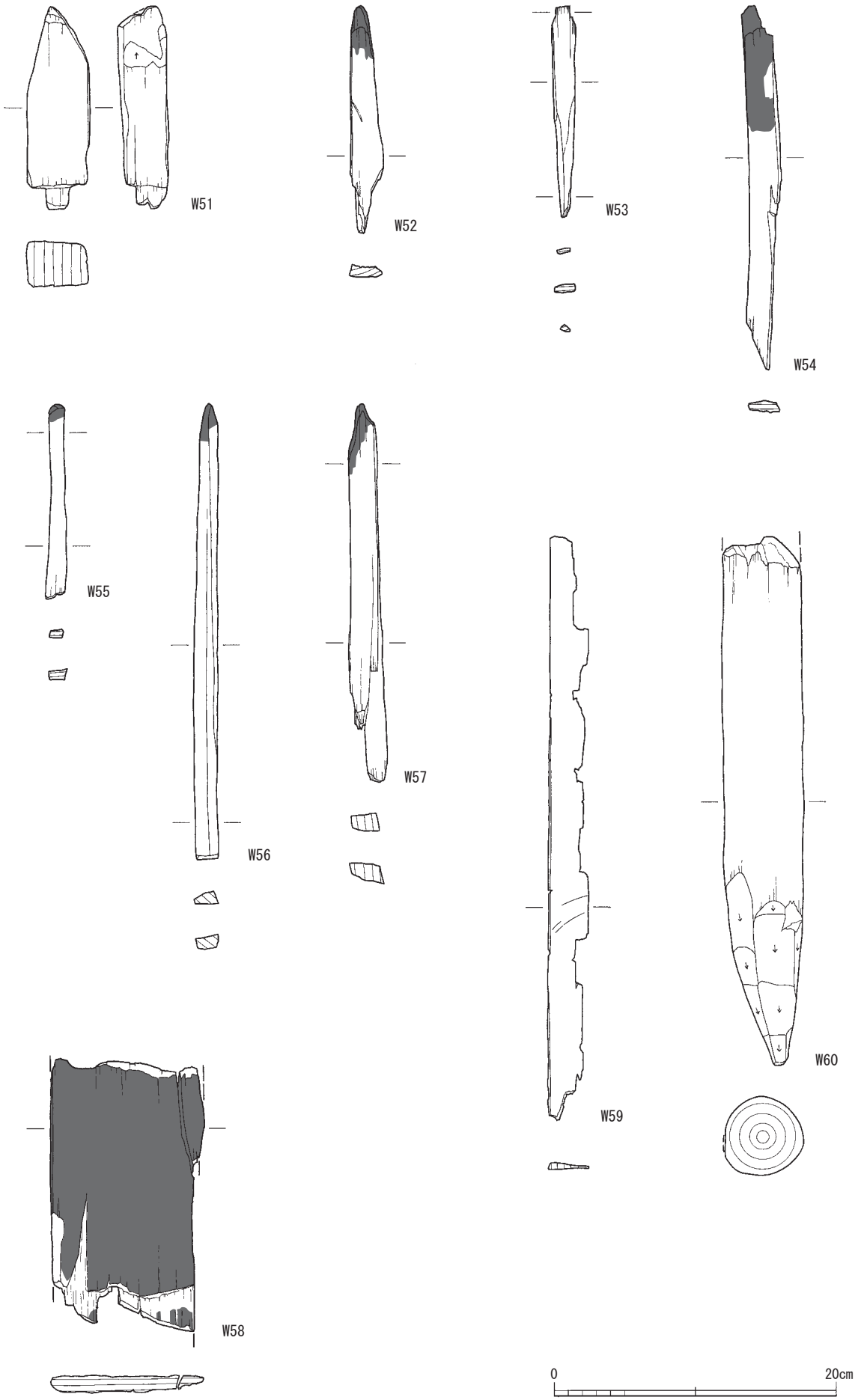
木製品(2)

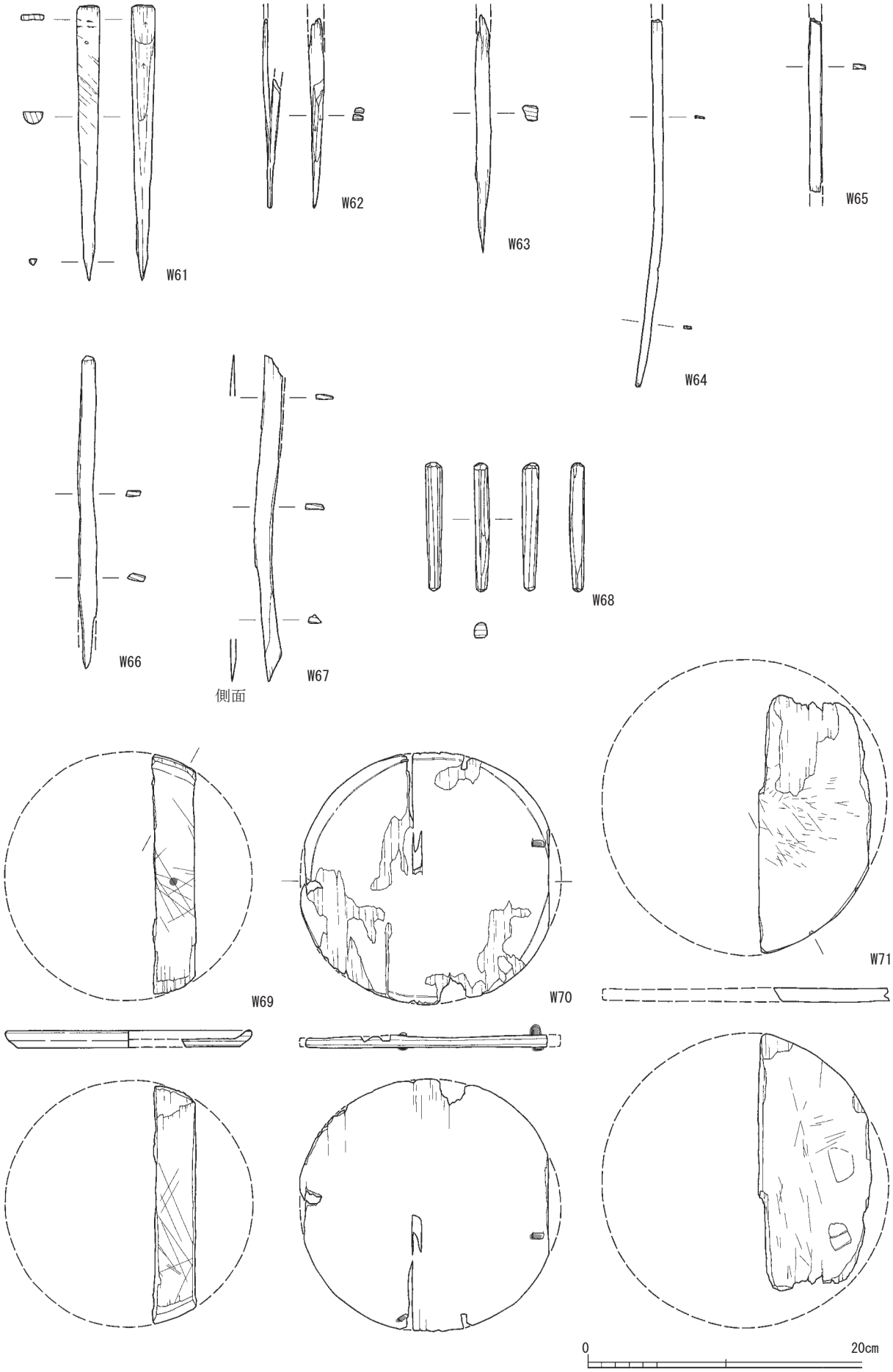

W26
W27
W28
W29
0
20cm

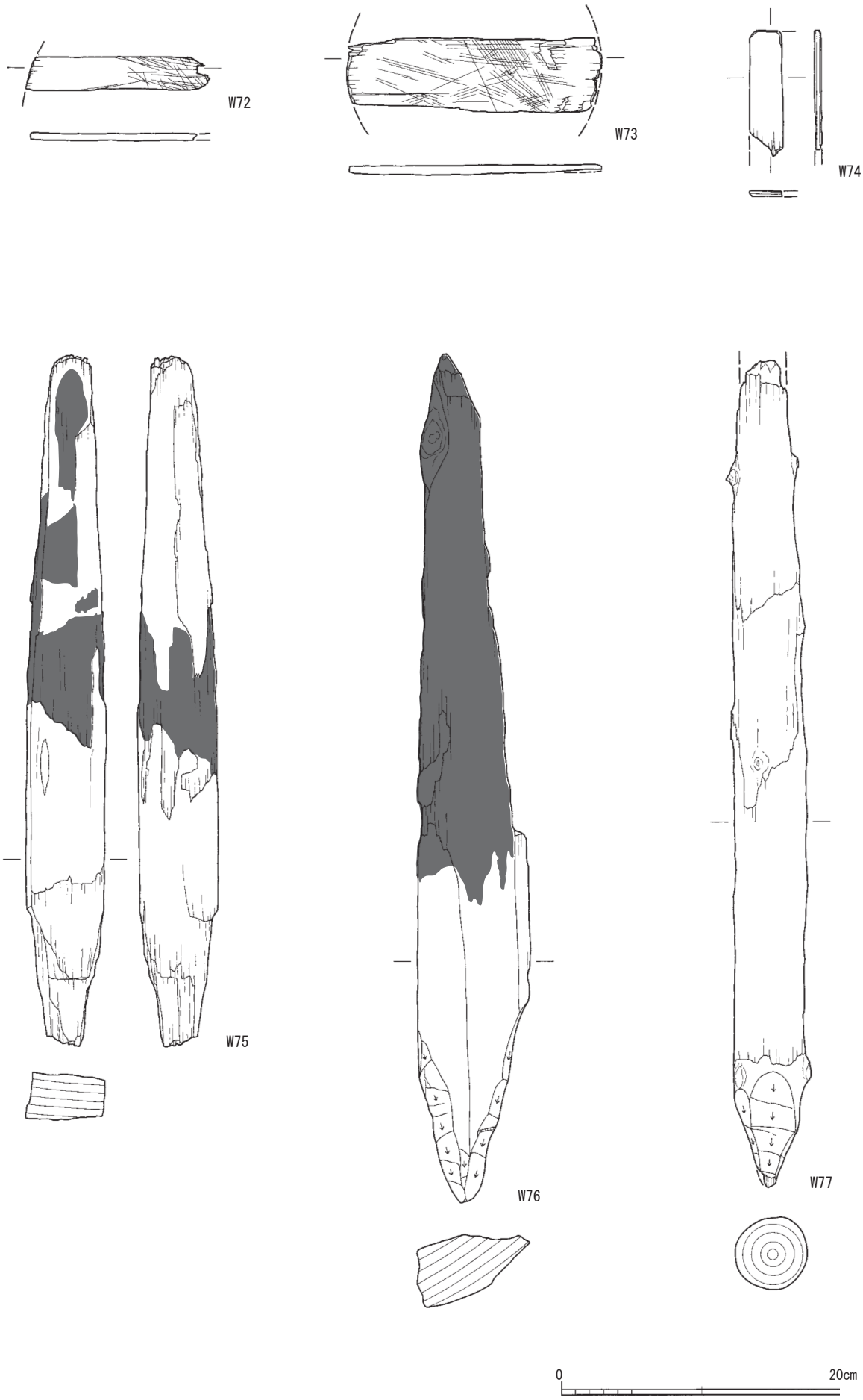

W30
佐ヵ
0
10cm


天罰印（符籙）急々如律令
W31
0
5cm
W32
W33
W34
側面
W35
W36
模式図
W37
W38
W39
W40
W41
W42
W43
0
20cm

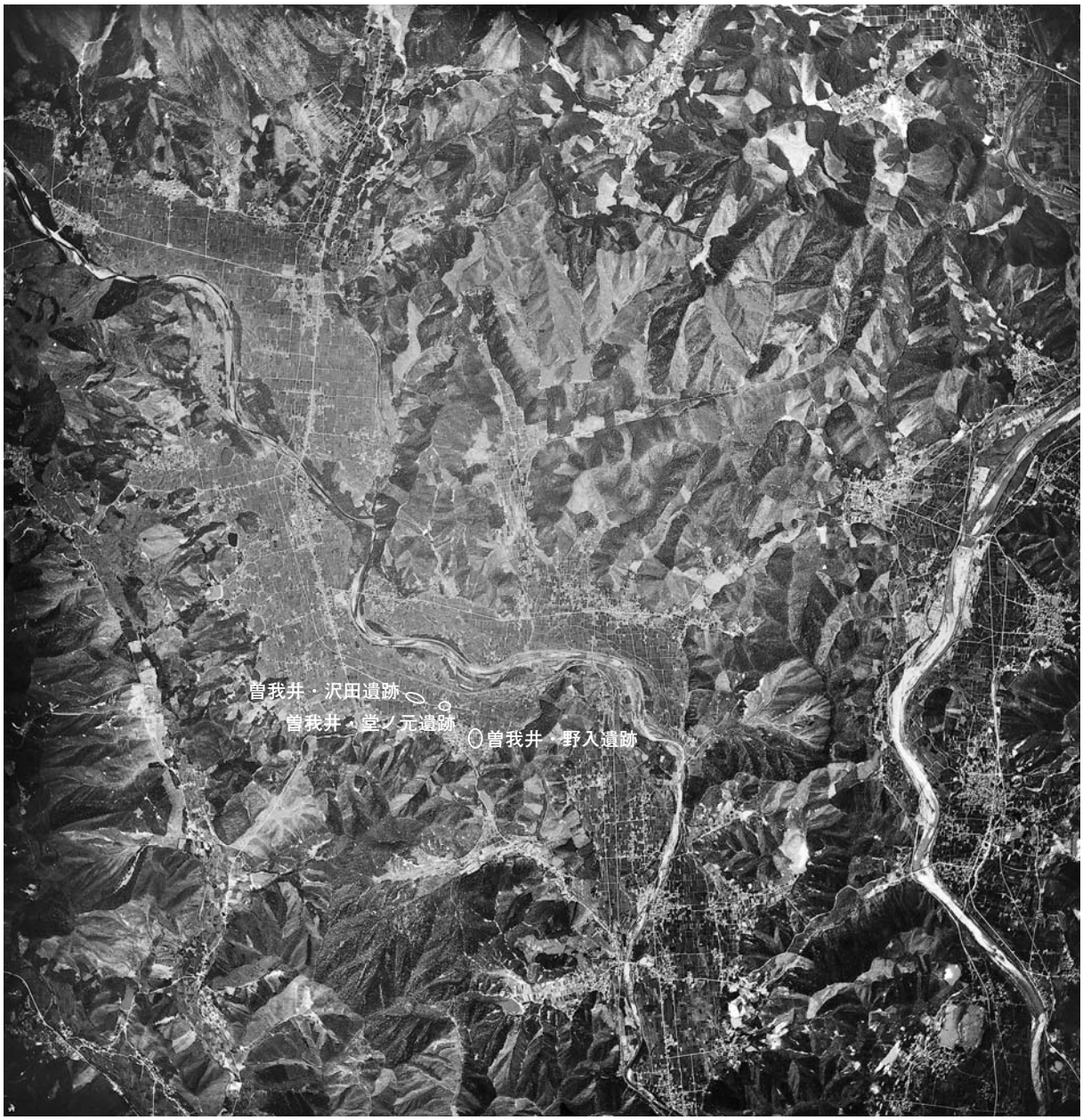

W44
W45
W46
W47
W48
W49
W50
0
20cm


W51
W52
W53
W54
W55
W56
W57
W58
W59
W60
0
20cm


W61
W62
W63
W64
W65
W66
W67
側面
W68
W69
W70
W71
0
20cm


W72
W73
W74
W75
W76
W77
0
20cm

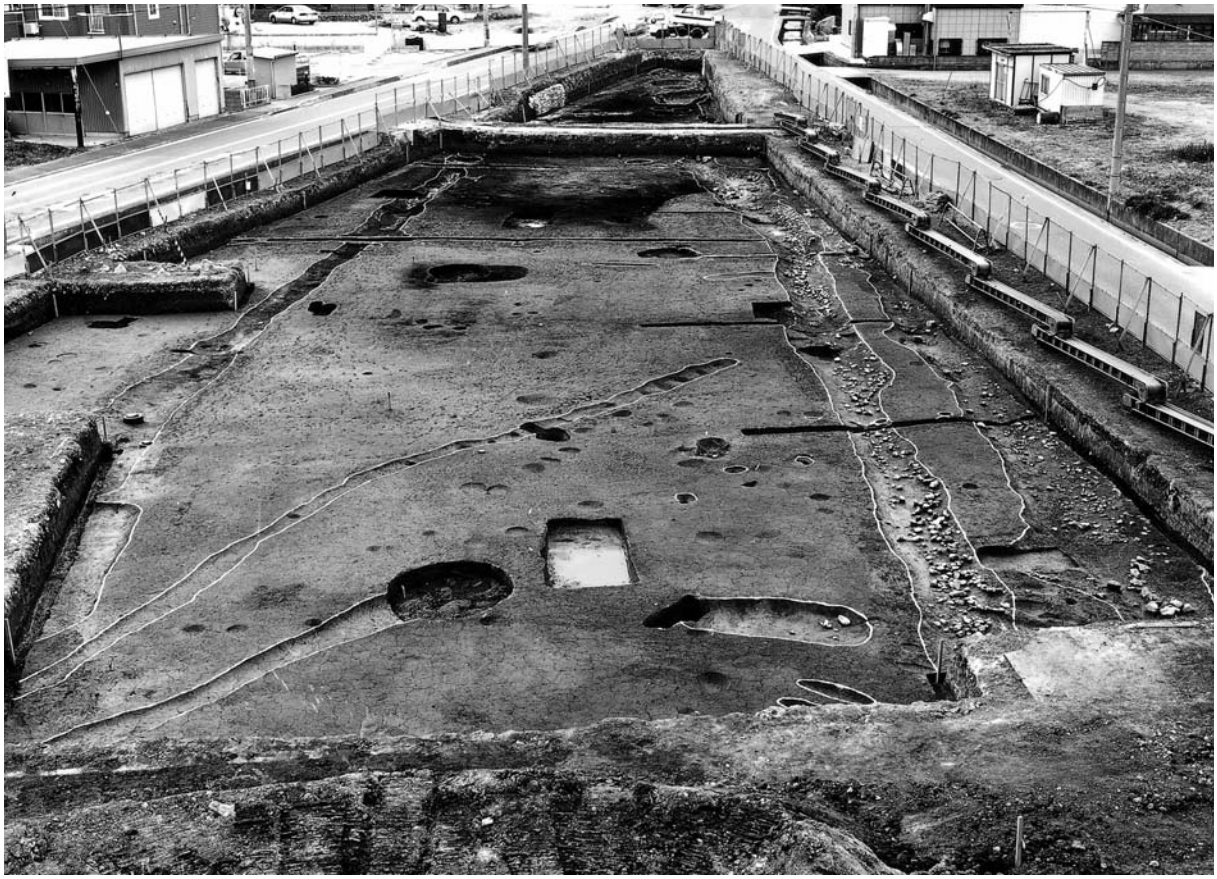
写　真　図　版


曽我井・沢田遺跡
曽我井・堂ノ元遺跡
曽我井・野入遺跡

A・B地区全景

C・D地区全景

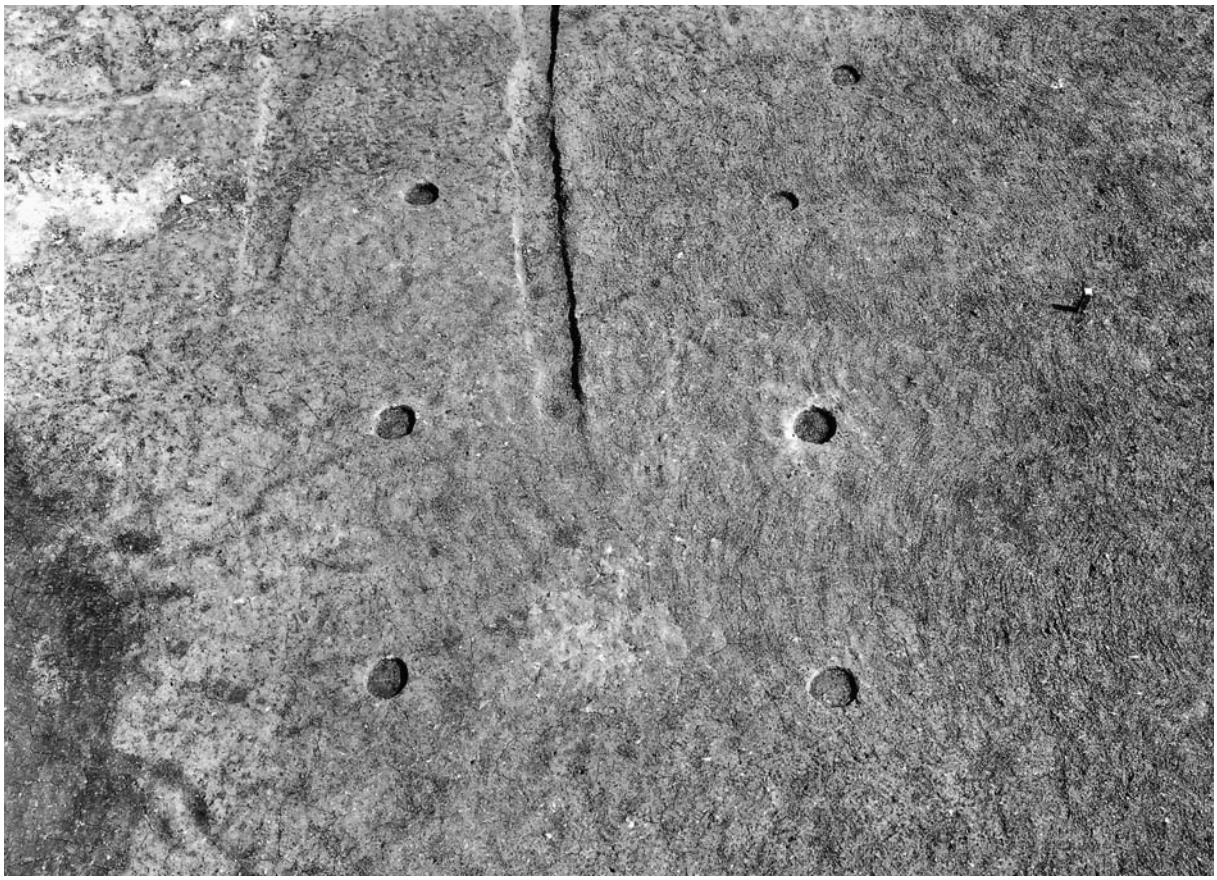
A地区全景（東から）



B地区全景（東から）

C地区全景（西から）

D地区全景（西から）

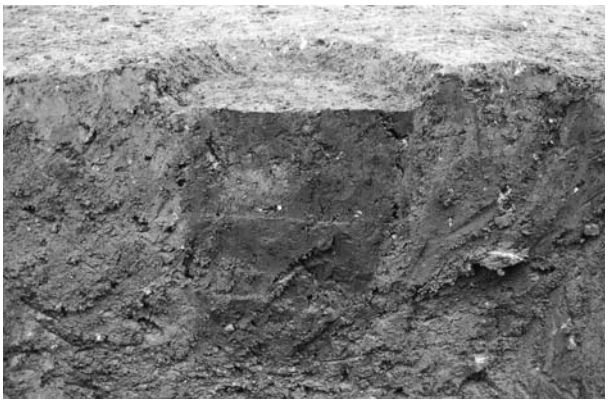


SB01（南から）

P220（西から）

P224（西から）

P219（東から）



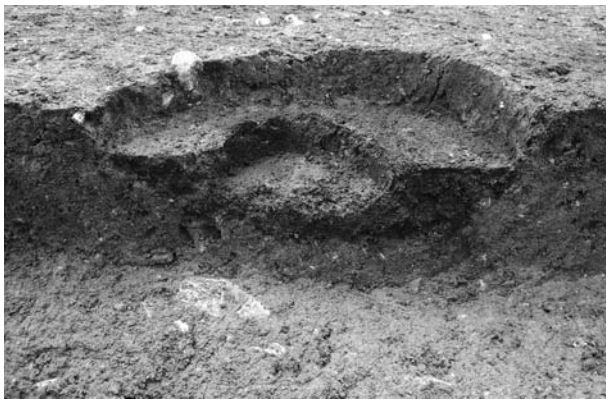
P222（西から）

SB01　検出断割り

SB02（西から）

SB02・P85（西から）

SB02・P90（東から）



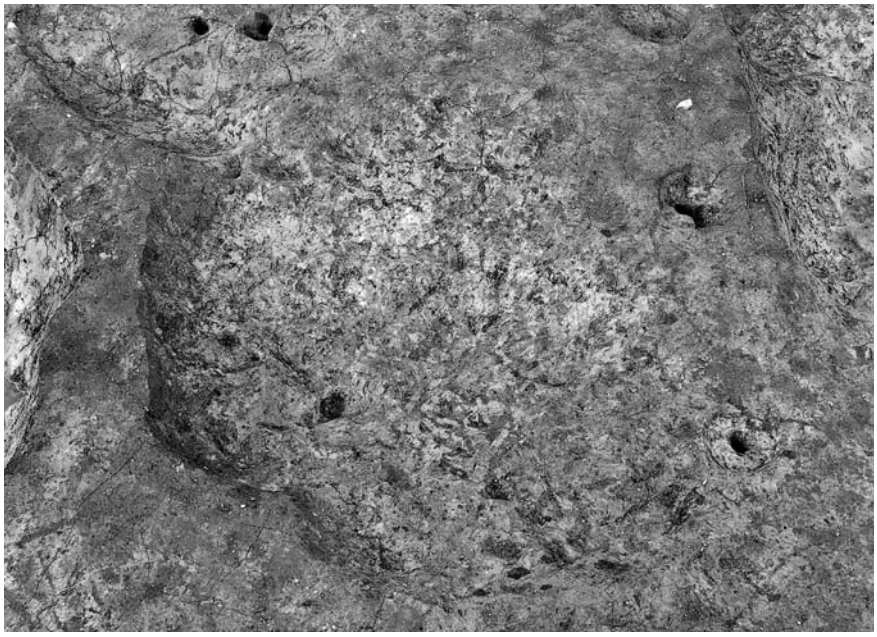
SB02・P89（北から）

SB02・P88（西から）

SB02　柱穴断割り

B地区　P05断割り

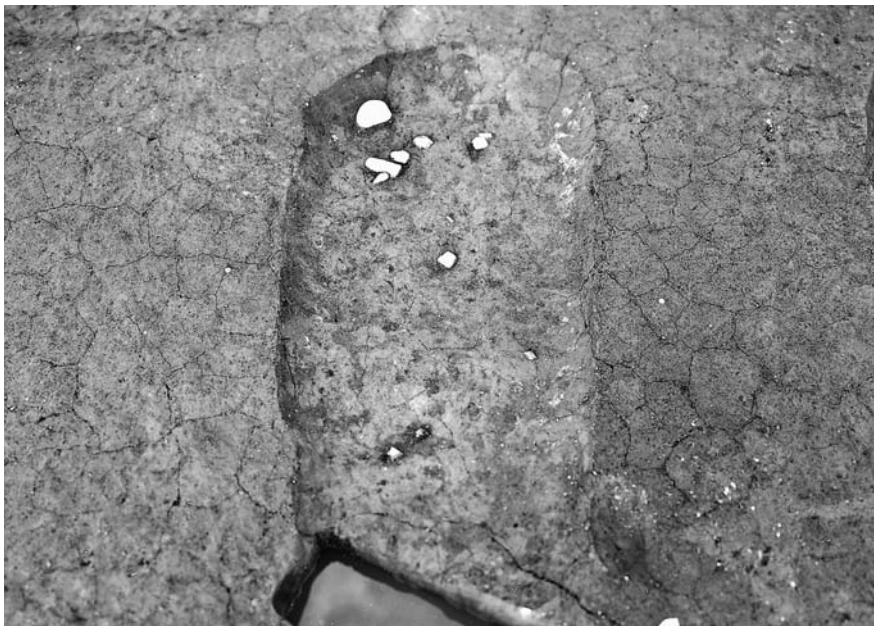
A地区　SK01（西から）



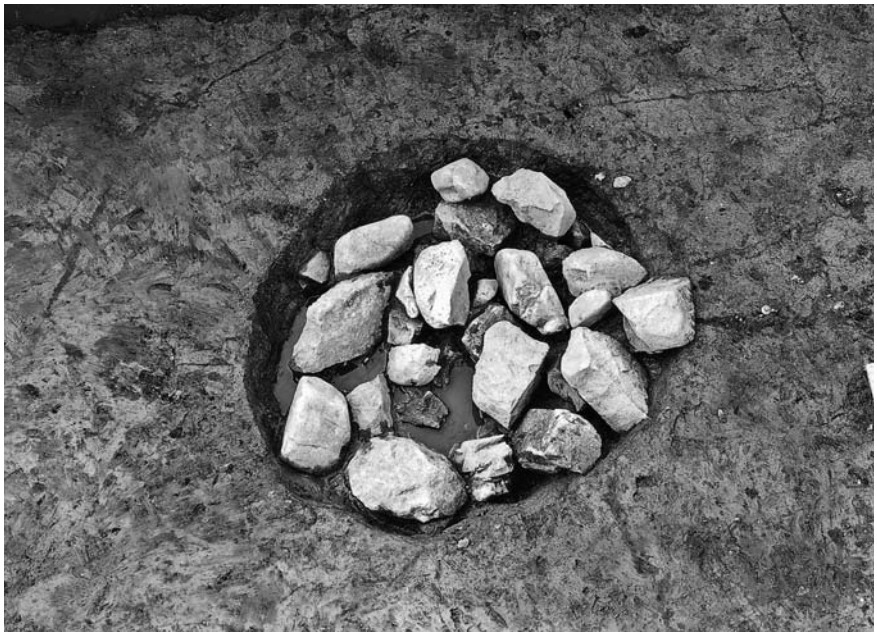
A地区　SK02（東から）

A地区　SK03（南西から）

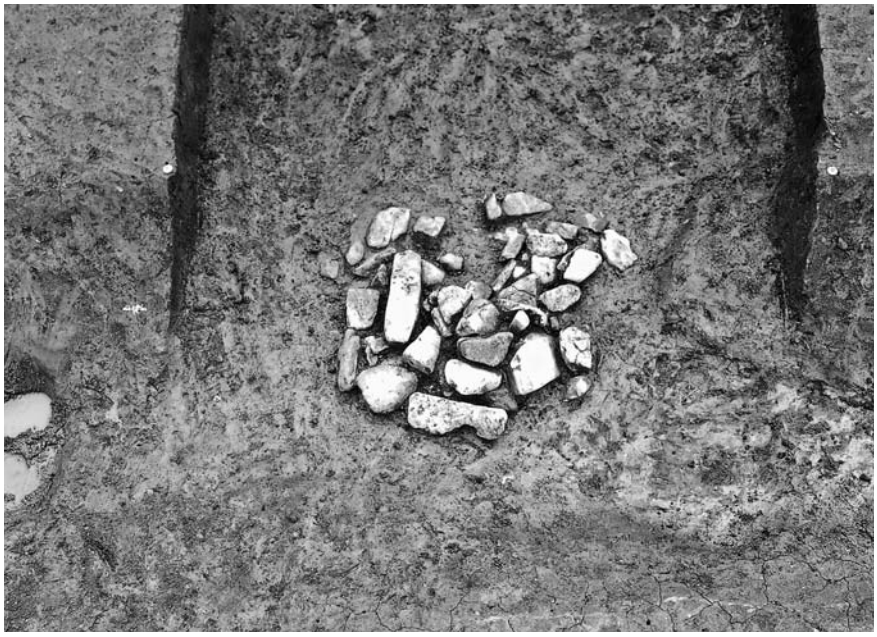
A地区　SK05（東から）



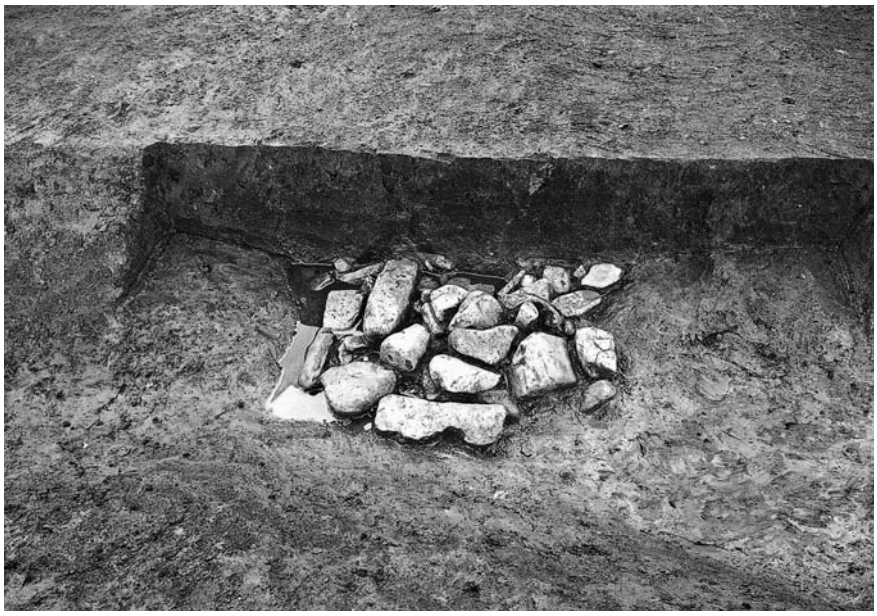
B地区　SK08（南から）



B地区　SK09（東から）



B地区　SK10（北から）



B地区　SK10（北から）

B地区　SK10（西から）

D地区　SK14・15
（西から）

B地区　SD01・06全景
（東から）

SD01　内土層堆積状況
（南から）

A地区　SD01内
遺物出土状況（東から）

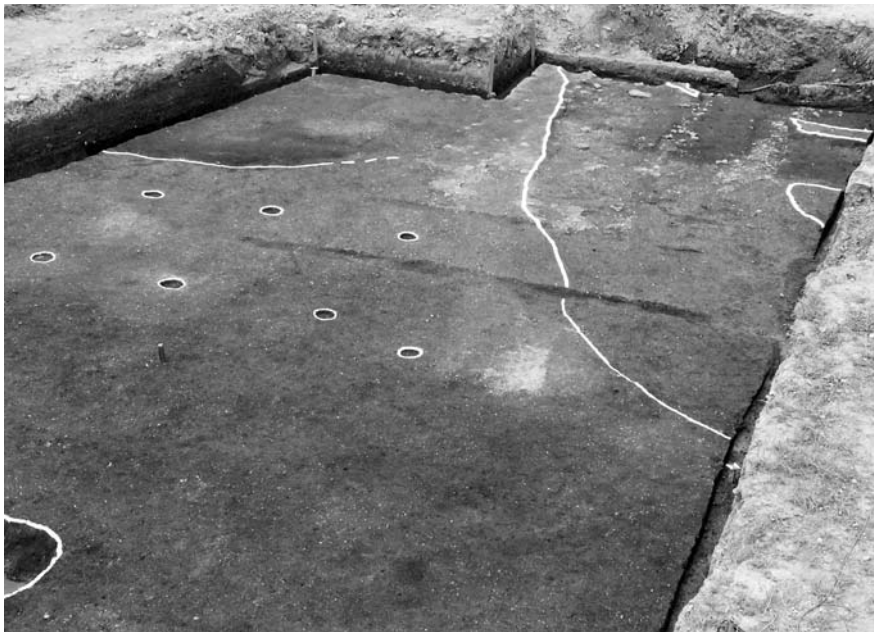
B地区 1 区　SD01
（西から）

B地区 2 区　SD01
（西から）

B地区 3 区　SD01
（西から）

B地区４区　SD01・06
（西から）

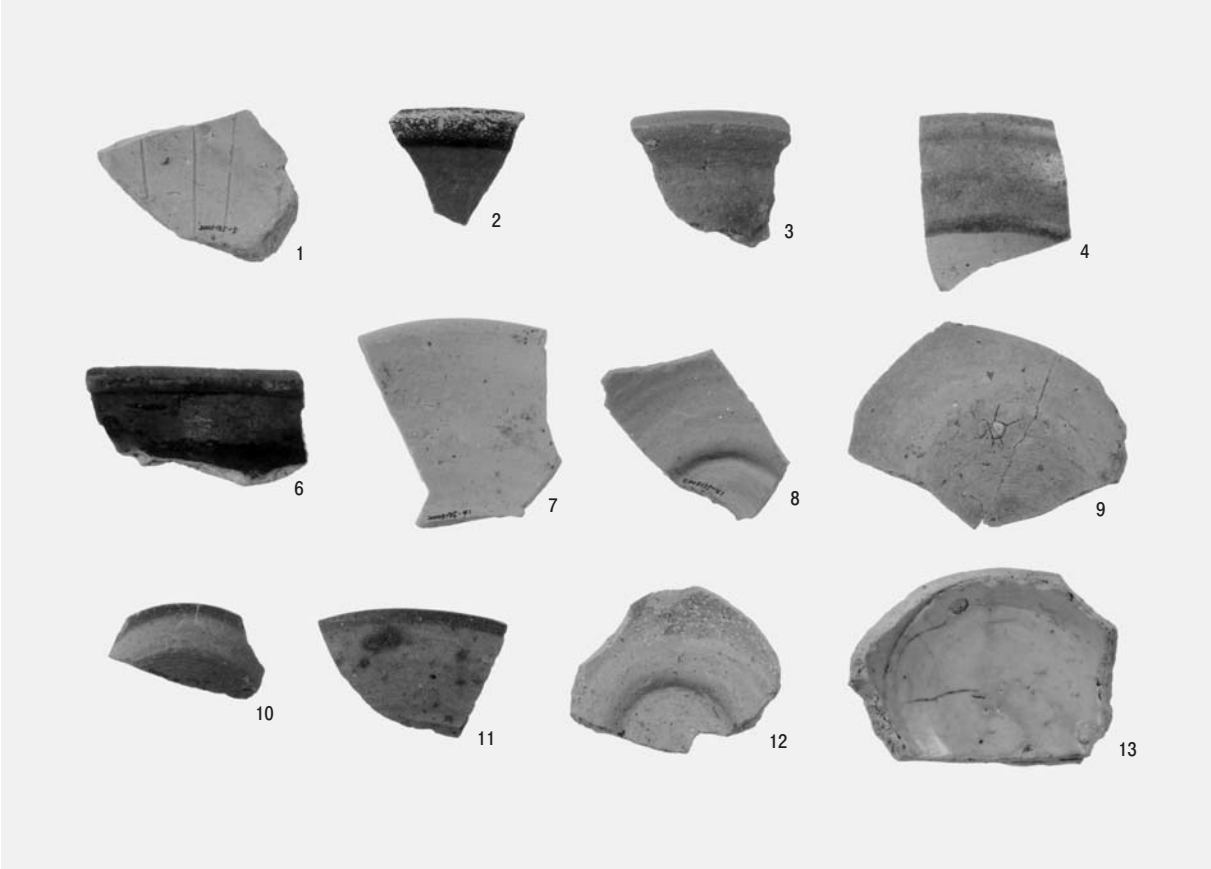
B地区５・６区　SD01・06
（西から）



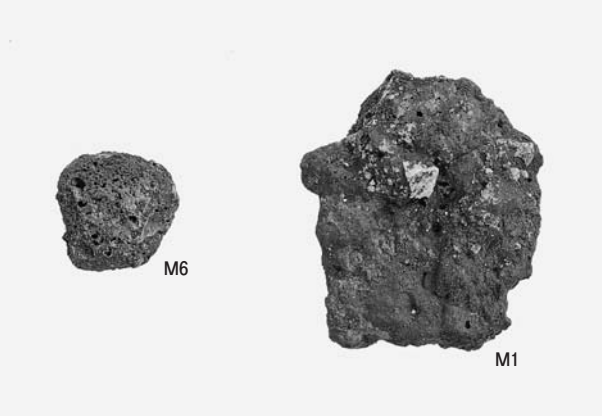
C地区　SD01・06
（東から）

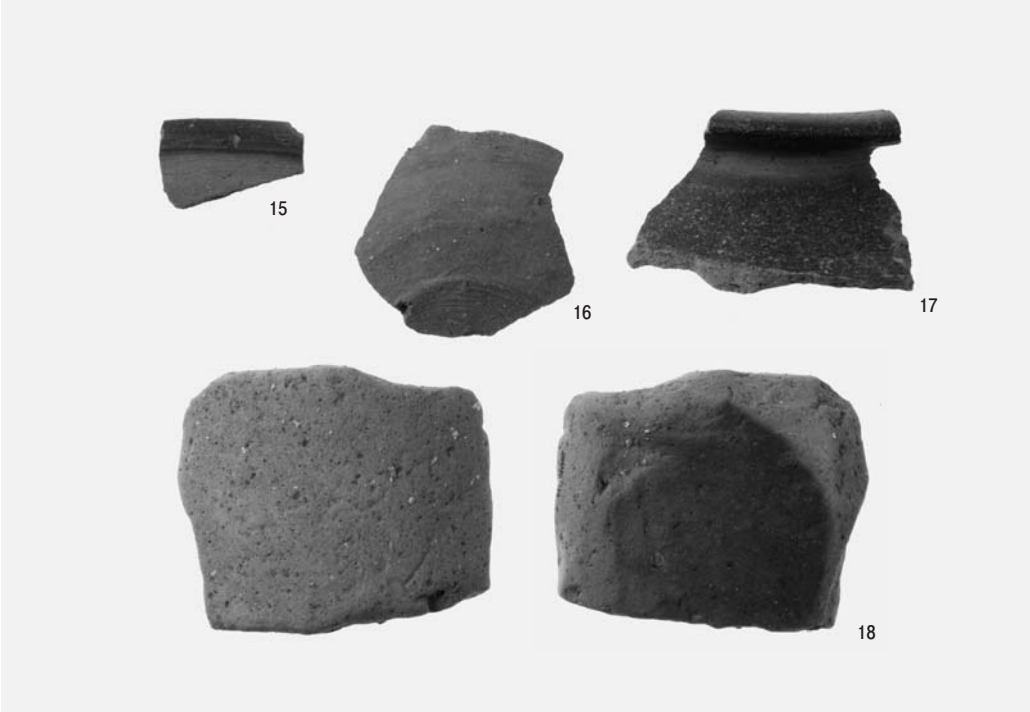
B地区　SD04（東から）

B地区　SD05・07（南東から）


1
2
3
4
6
7
8
9
10
11
12
13

5


M6
M1


15
16
17
18

19

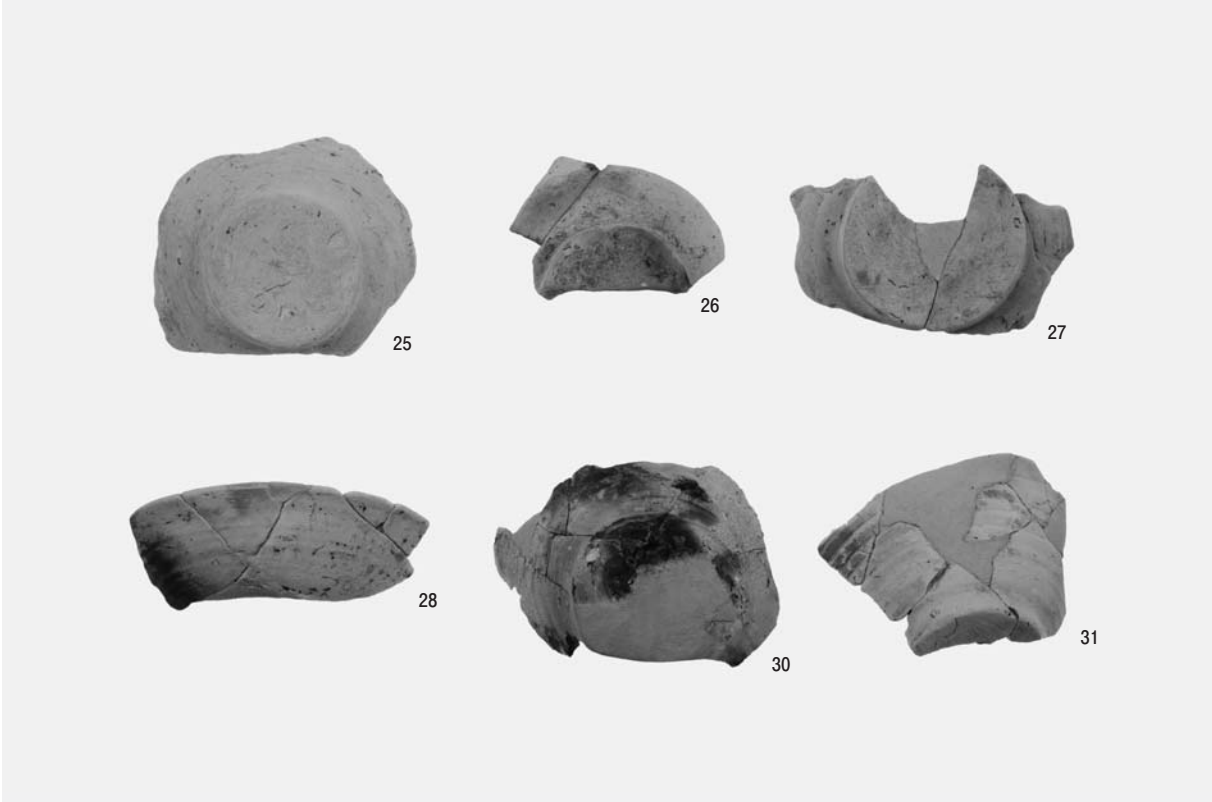
20

21

23

22

24


25
26
27
28
30
31

32

33

34

35

38

39

47

44

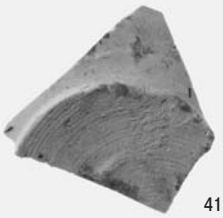
46

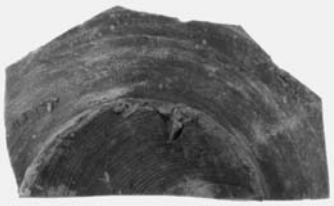
48

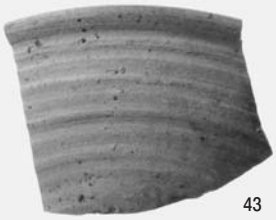
52

55

40


41

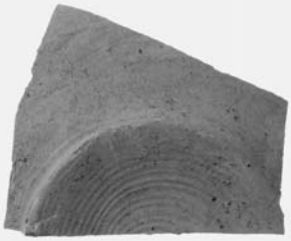

42


43

45

49

54


50

51

53

56

66

69

79

57

58

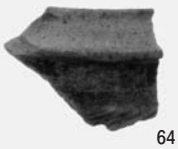
59

60

61

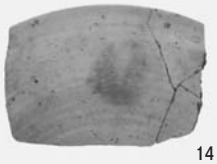
62

63

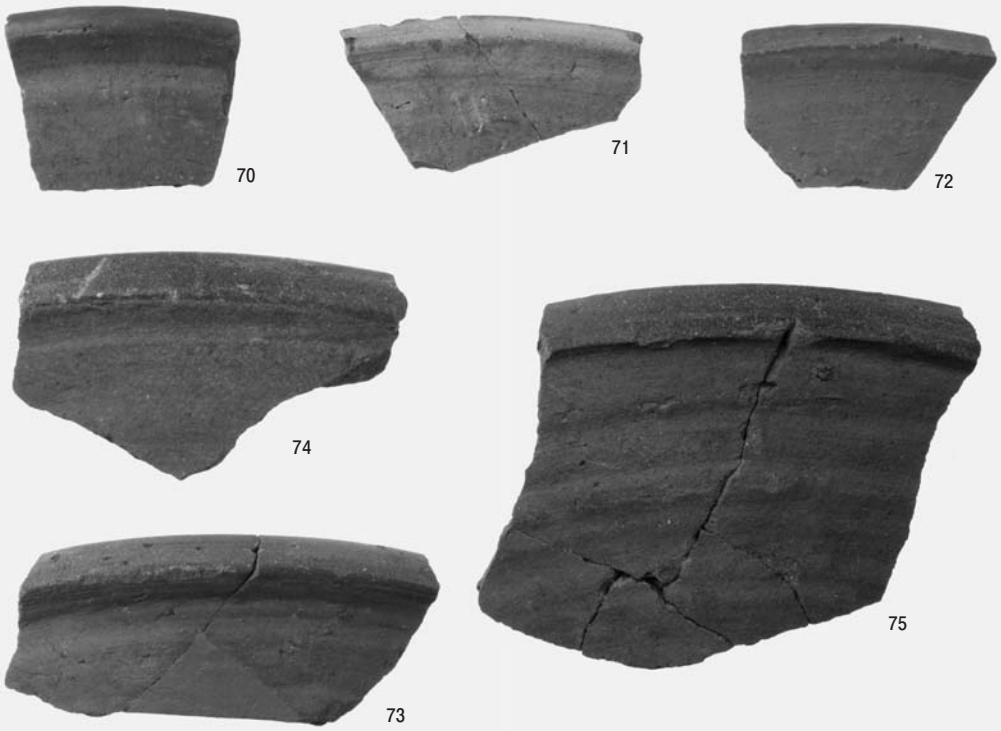

64

65

67


14

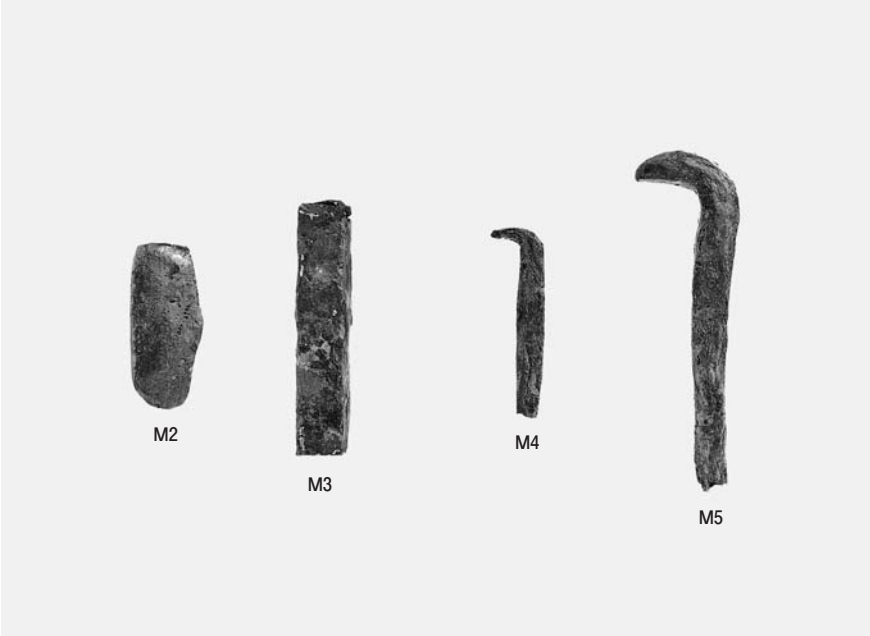
68


70
71
72
74
75
73

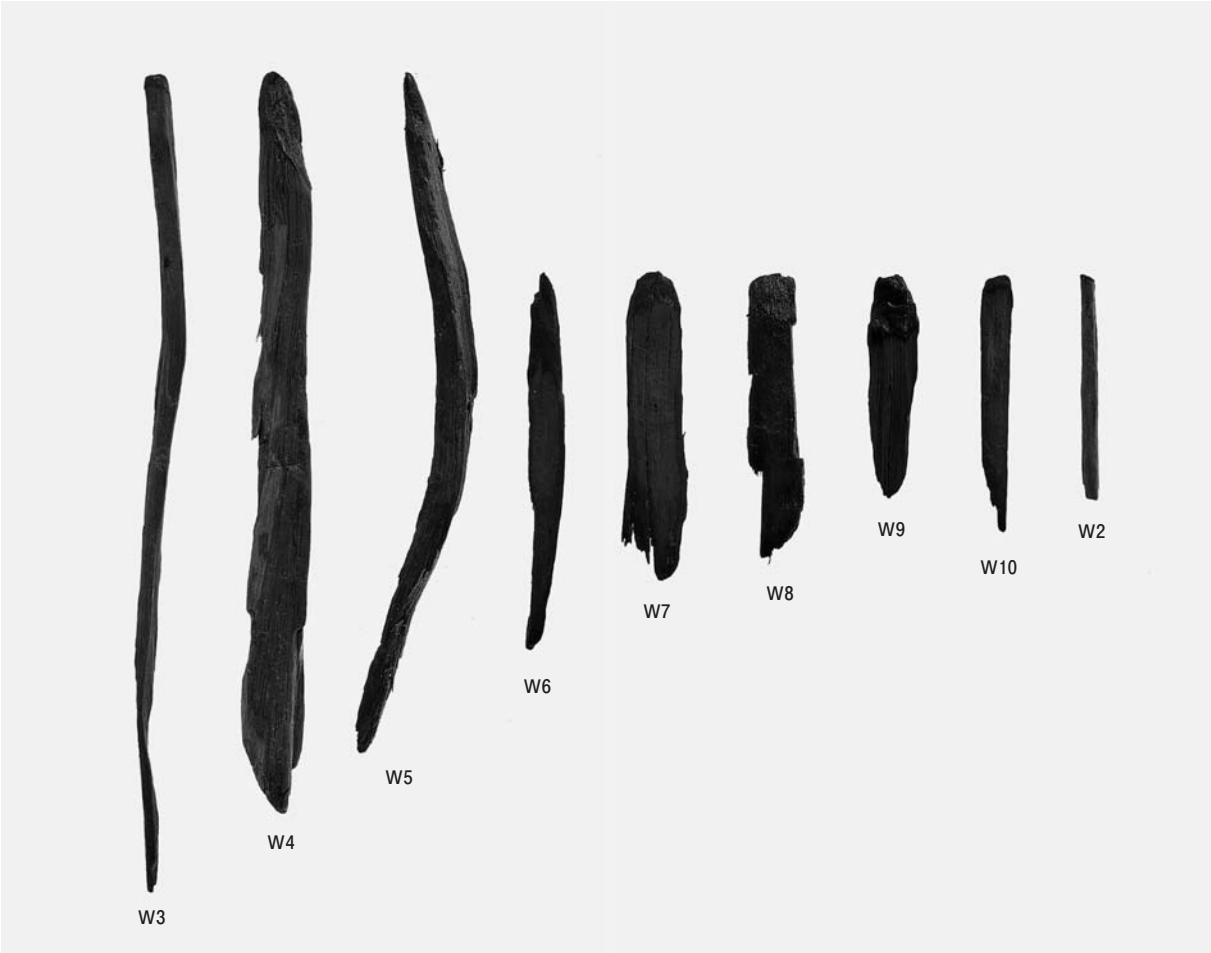
92
93
94
95
96

S1

S2



W1

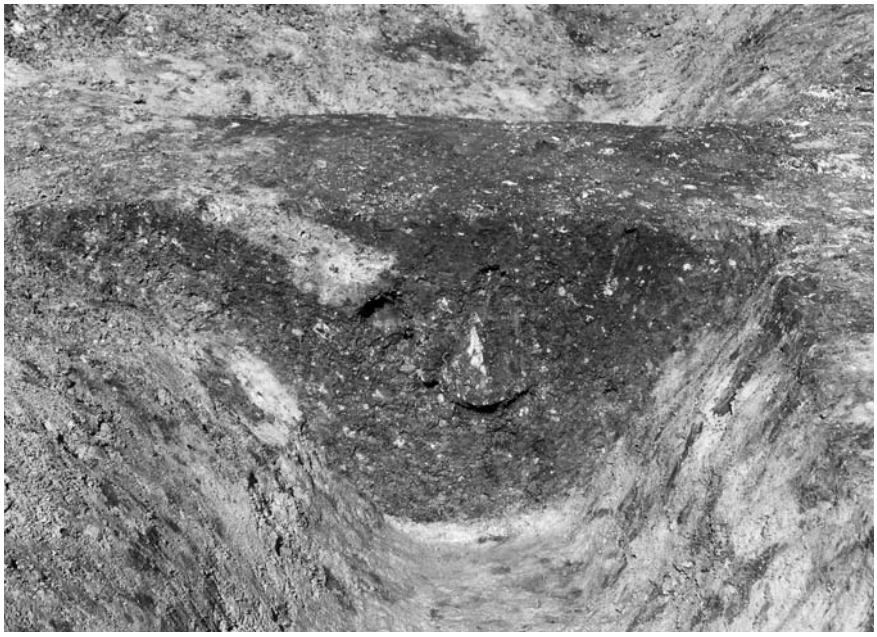

W3
W4
W5
W6
W7
W8
W9
W10
W2

A地区全景（北から）

A地区南部（北から）

SD1001 アゼ（南から）

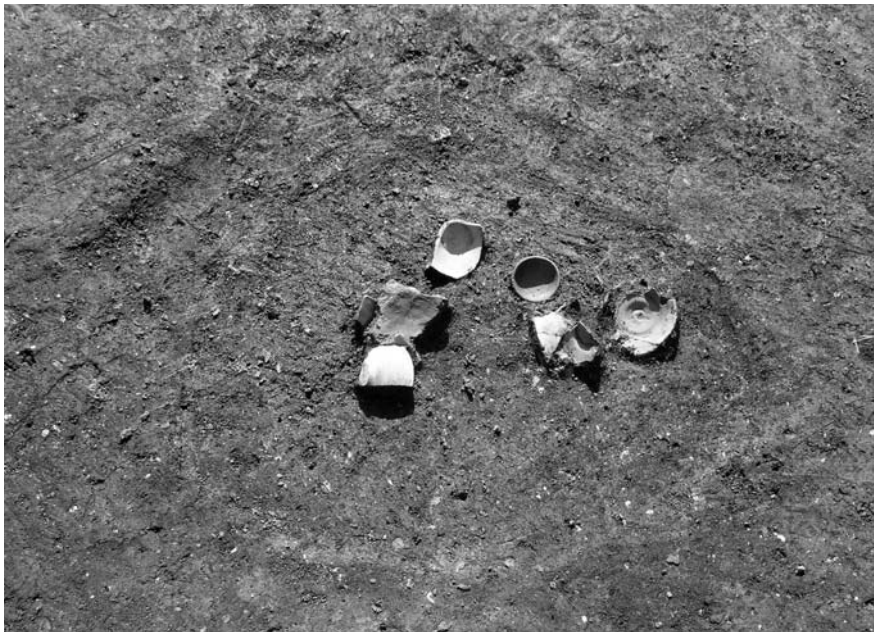
SD1002 アゼ（西から）



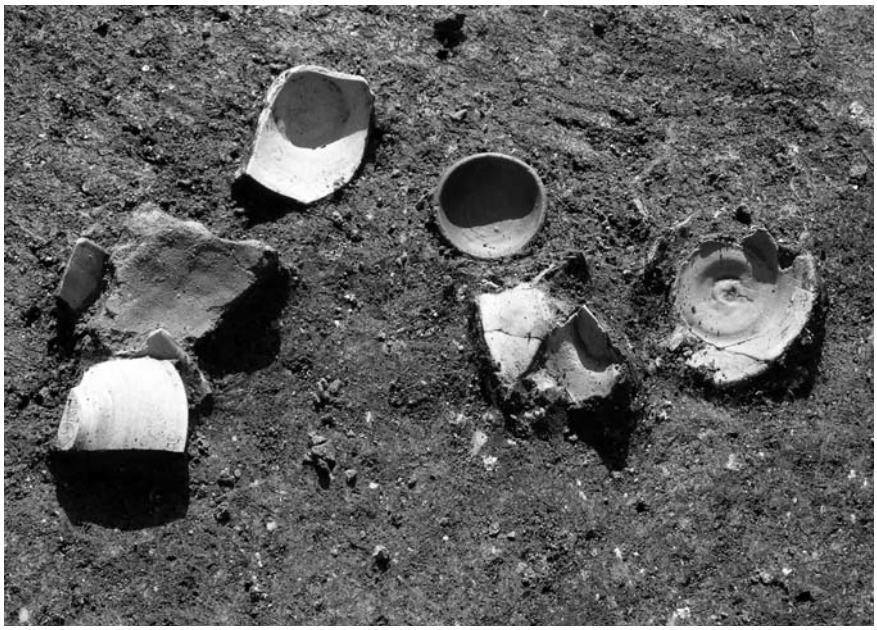
SD1004 アゼ（南東から）

SD1012 アゼ
（南西から）

SK1001（南から）



SK1002　上層部分
（北西から）



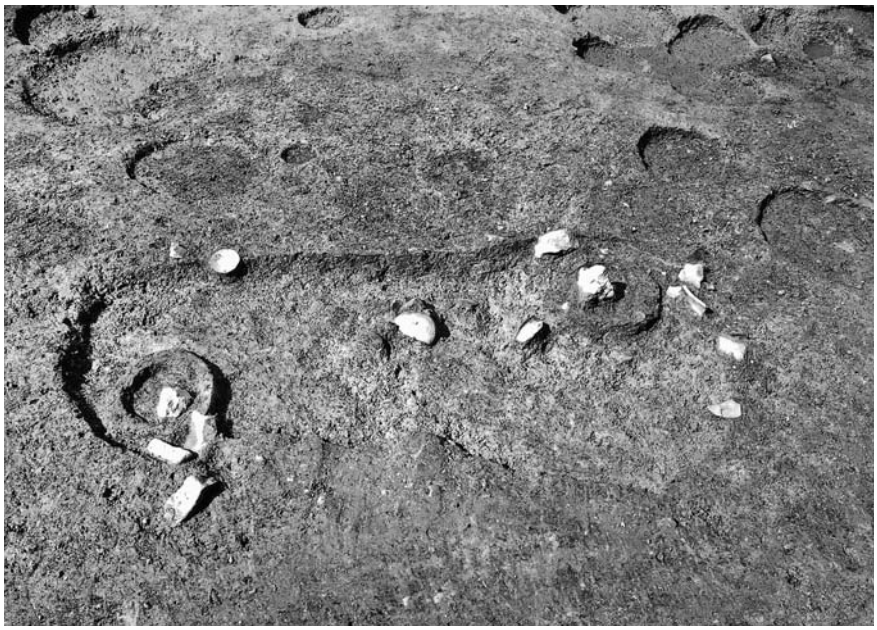
SK1002　土器出土状況
（北西から）

SK1002　下層部分
（北西から）

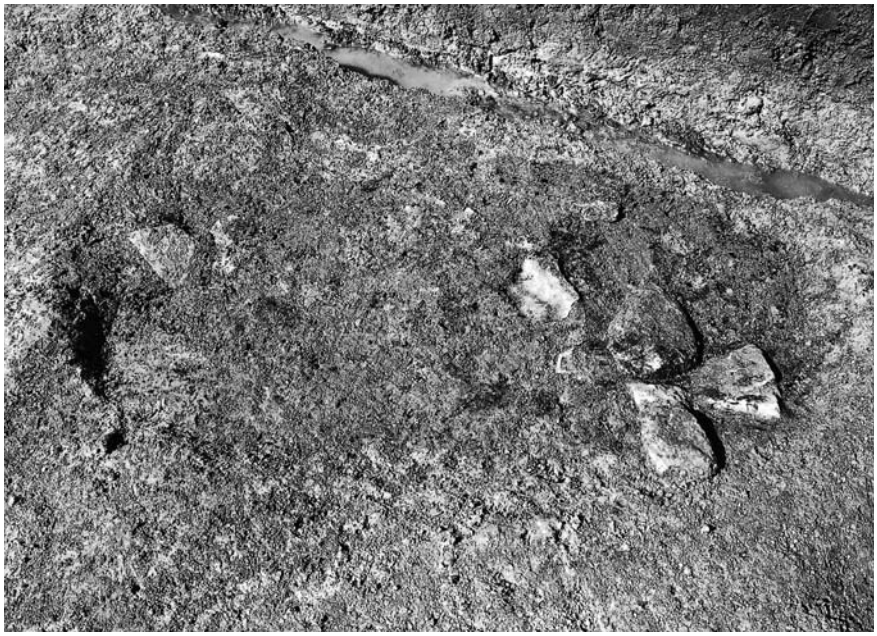
SK1002　下層
土器出土状況
（北西から）

B地区全景（南から）

B地区全景（北から）



SK02（東から）

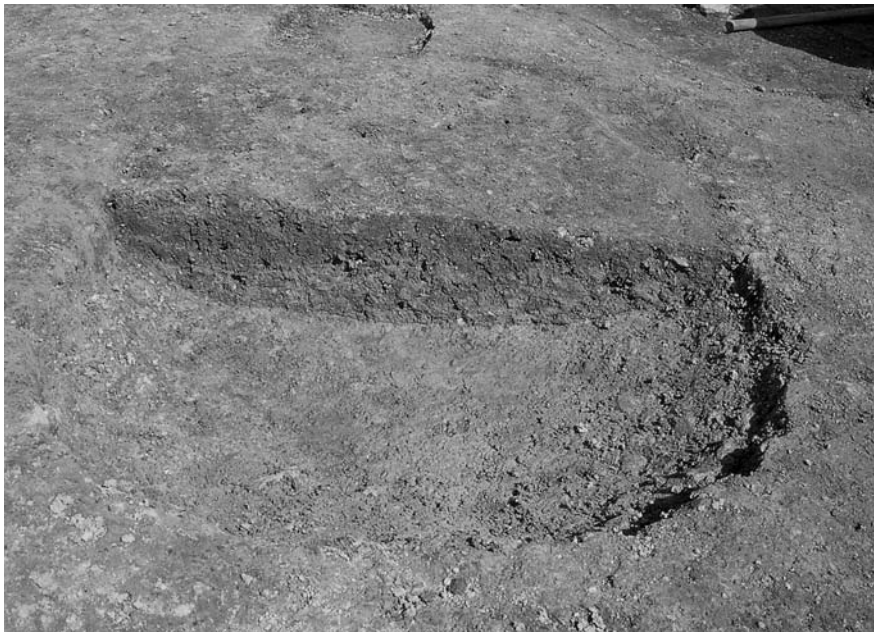


SK04（東から）

SK04（南から）

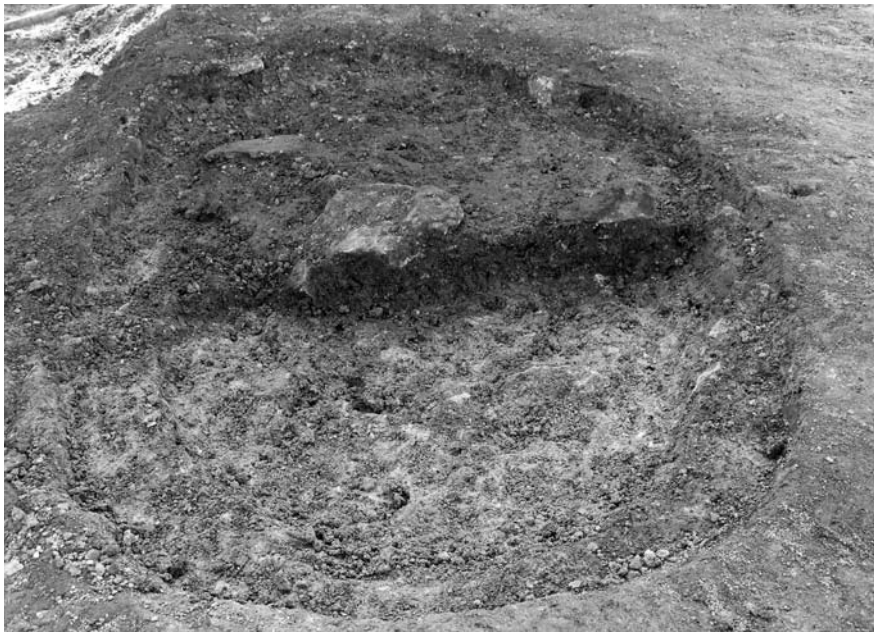
SK04　石検出状況
（南から）

SK05（南西から）



SK06（南西から）

SK07（東から）



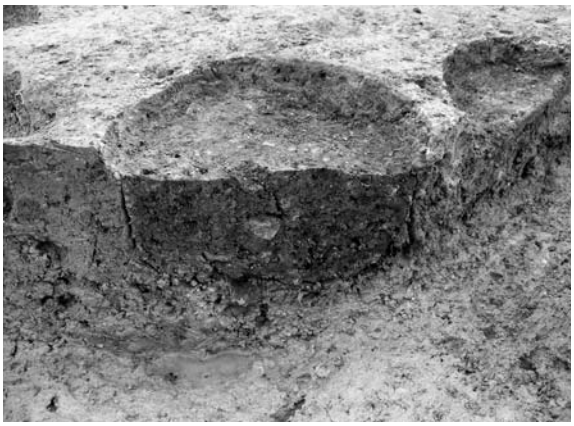
SK08（東から）

SD01（西から）

SD07（北東から）

SD11 アゼ（西から）

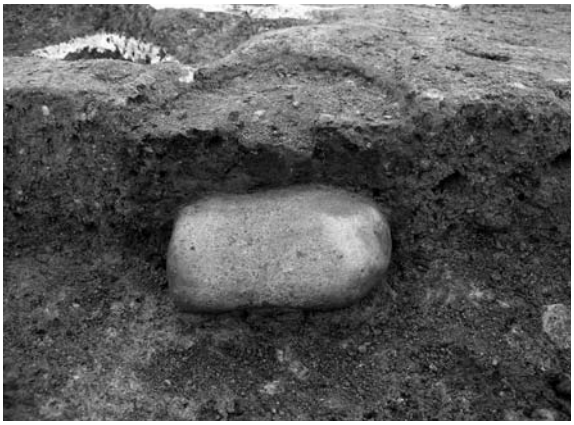
SD12 アゼ（南から）



P101（北から）

P88（東から）

P133（北から）



P253（東から）

P151（南から）

P299（南から）

P298（北から）

P142（北東から）

1

2

3

4

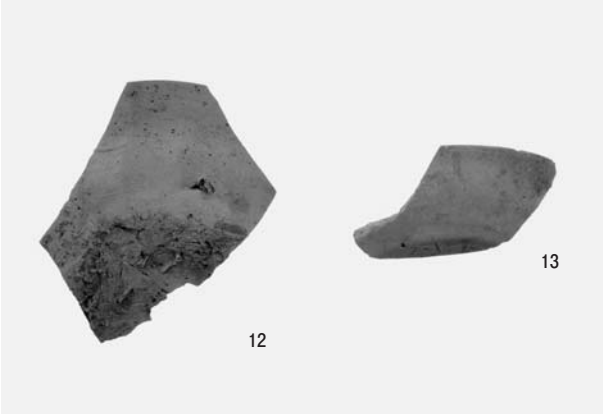
5

7

6
8
10

9

11


12 13

21

14

15

16

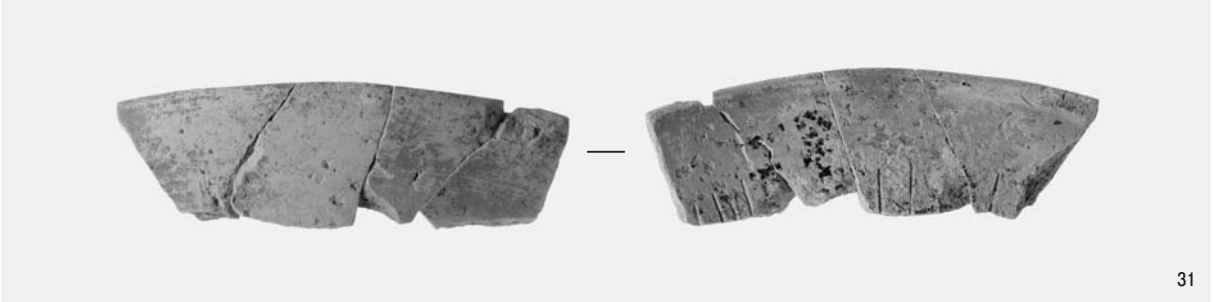
17

20

24

26

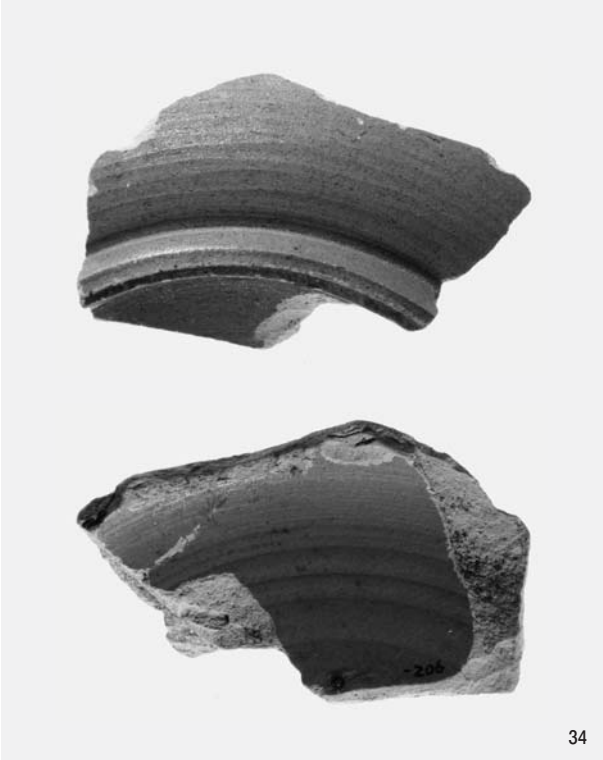
27

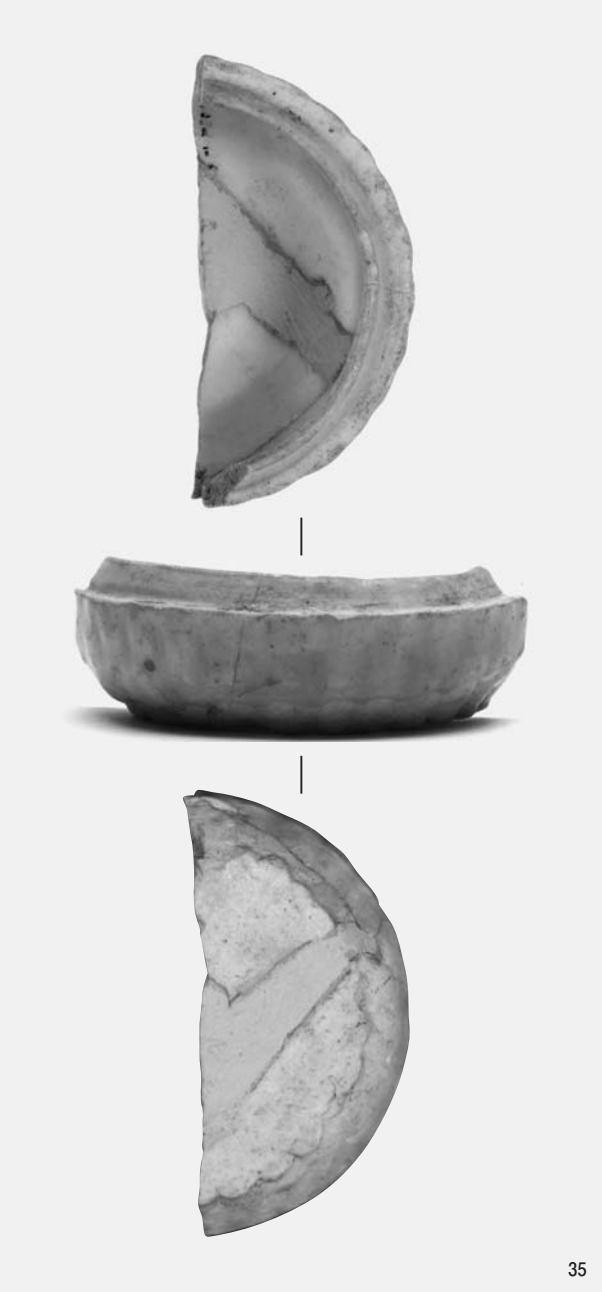

31

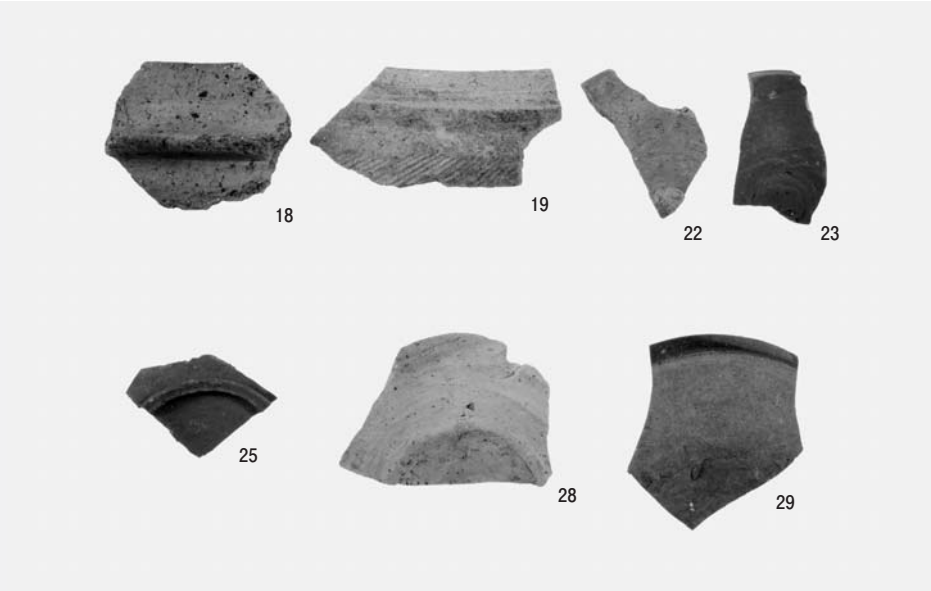
32

33

30


34


35


18
19
22
23
25
28
29

39

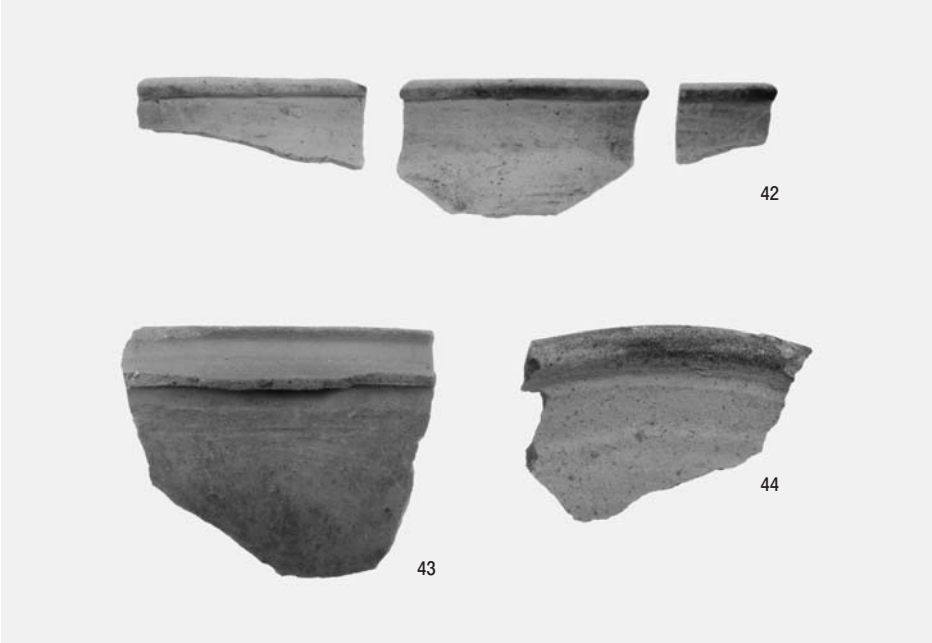
36

37

38

40

41

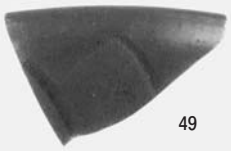

42
43
44

45

46

47

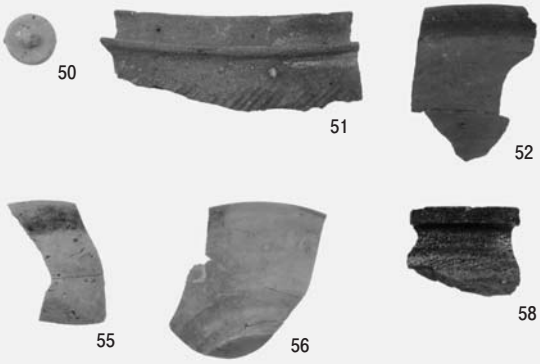
48

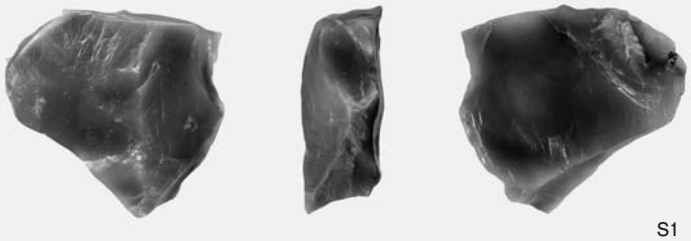

49

53

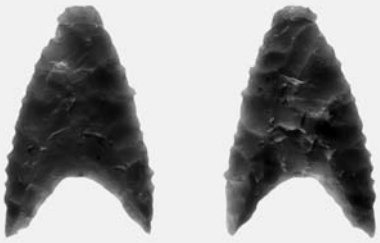
54

57





S1

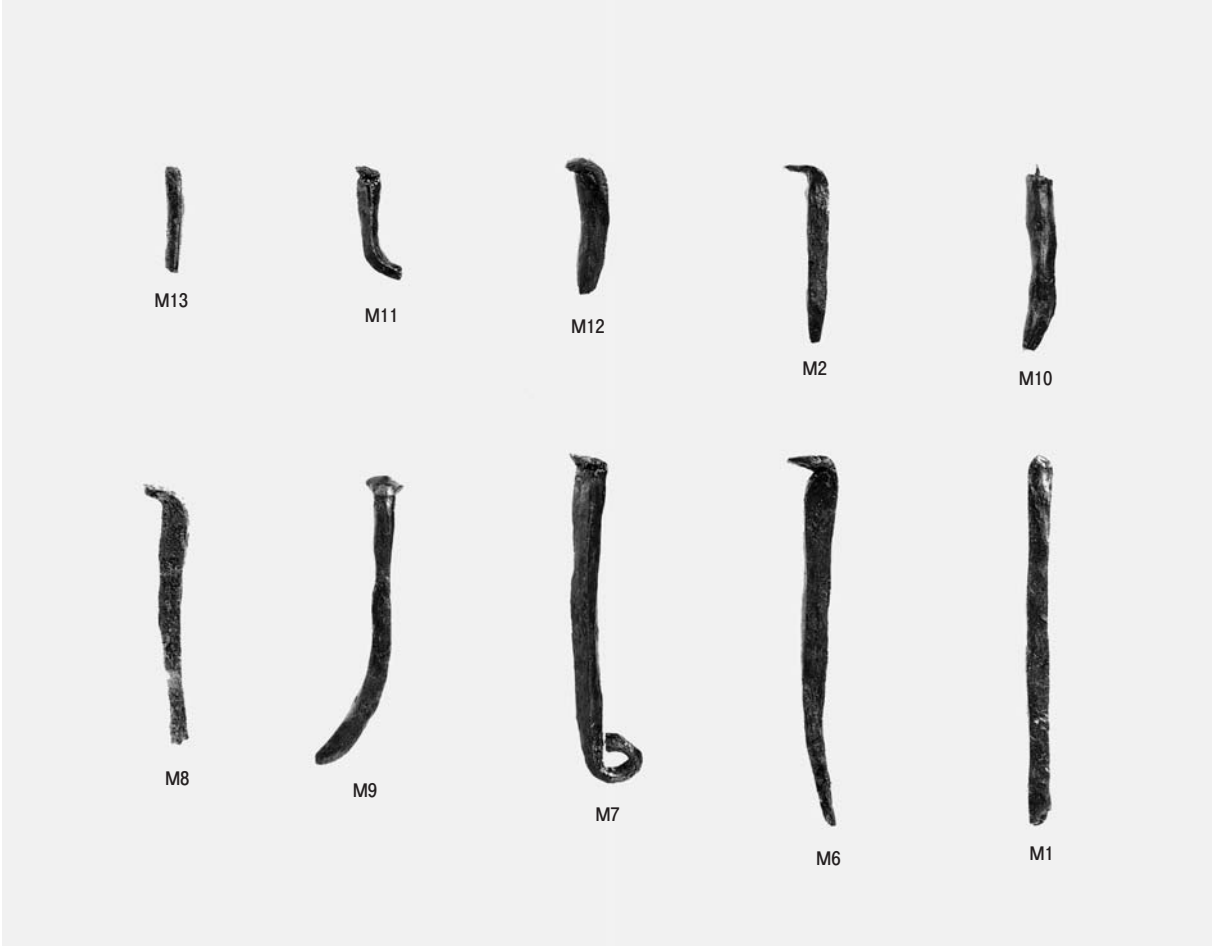


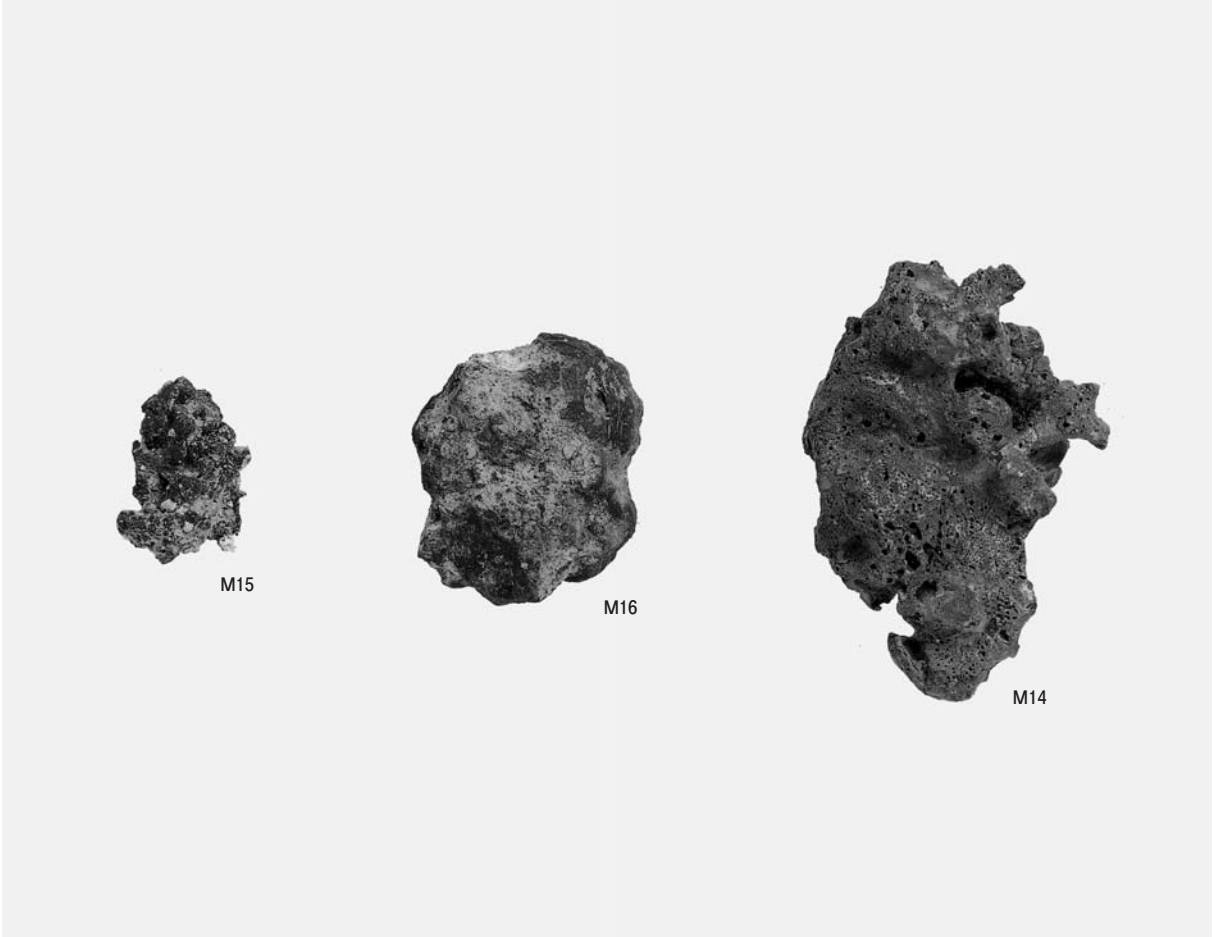
S2

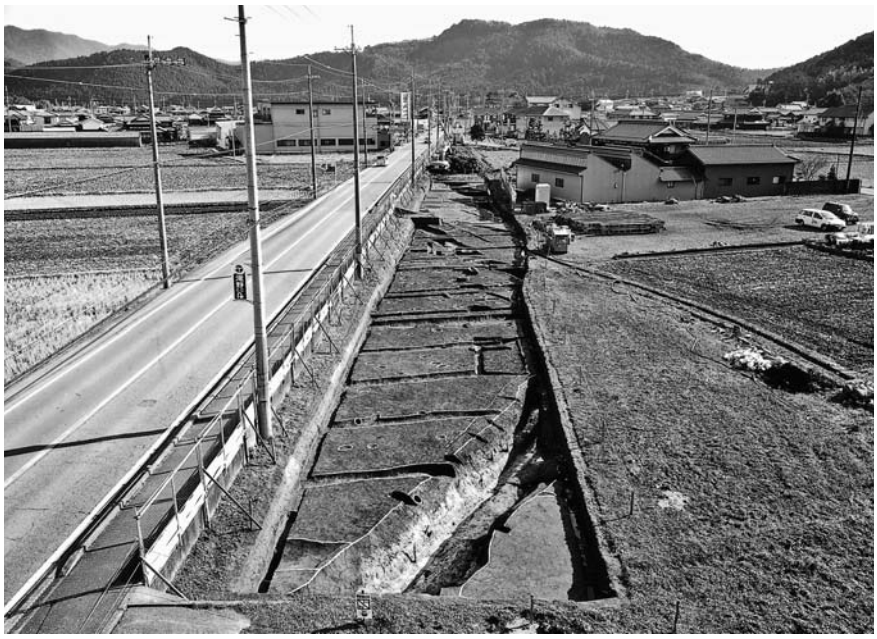
M3

M4

M5


M13
M11
M12
M2
M10
M8
M9
M7
M6
M1


M15
M16
M14



1区全景近接（西から）

1区全景（西から）

1区全景（東から）

1区西半部の状況
（東から）

1区西半部の状況近接
（東から）

SD1021周辺
（西から）

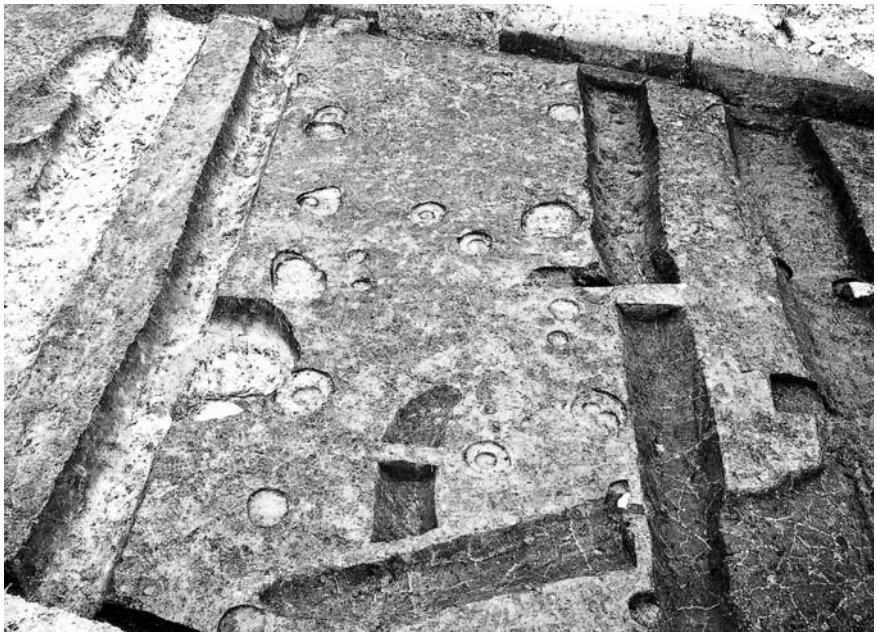
2区全景（西北西から）

2-a区全景（東から）

2-b区全景（西から）

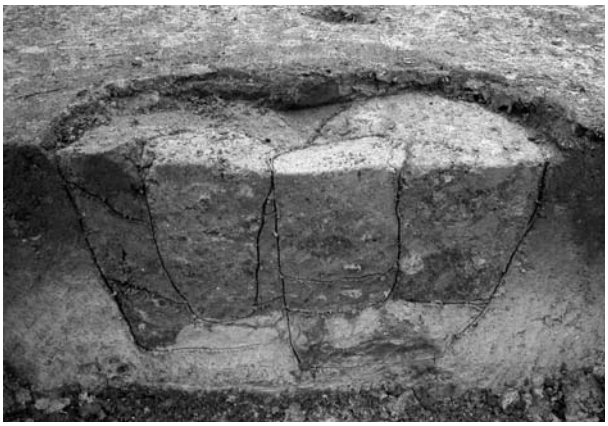
SB1001（西から）

SB1001 東部（西から）



SB1001 西部・SB1002・
SB1003（南から）

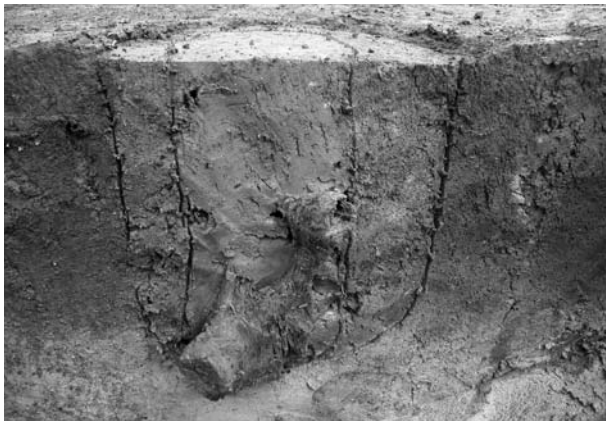
SB1001　P1-1（南西から）



SB1001　P2-1 A・B（南西から）

SB1001　P3-1（西から）

SB1001　P3-4 C（南西から）



SB1001　P4-1（西から）

SB1001　P5-2 根石（東から）

SB1004　P1-1（北から）

SB1005　P2-1（西から）

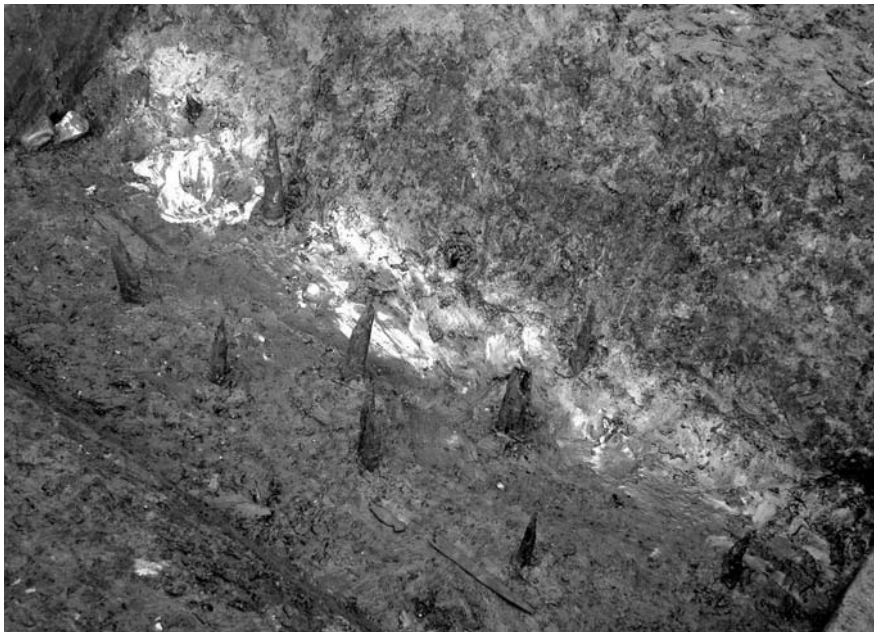
SX1001（南から）

SX1001 断面

SX1002 集石遺構
（北から）

SX1003（北から）

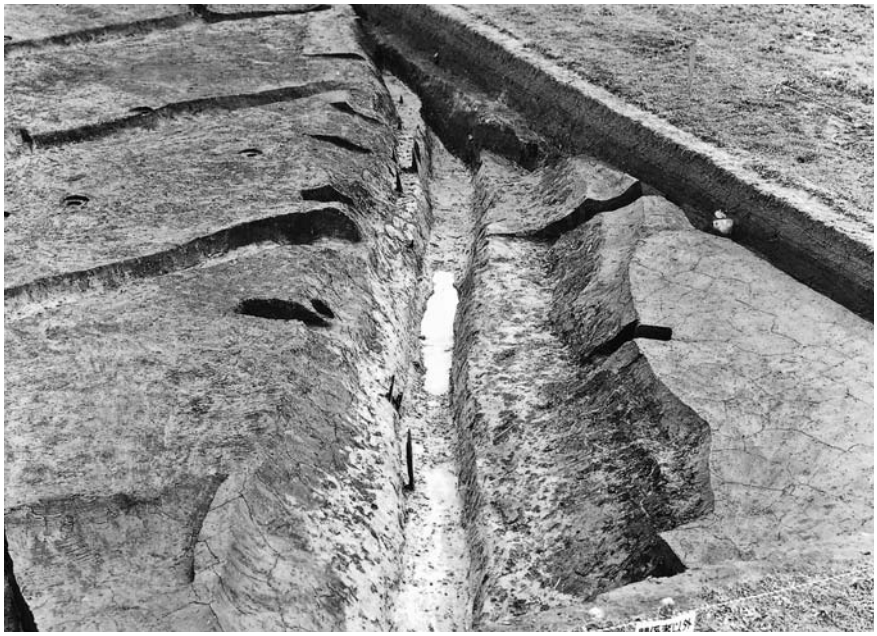
SD1001-a
（南東から）



SD1001-a
杭列と人形出土状況
（南から）

杭列の状況（南西から）

SD1001-c
（南東から）



SD1001-c
（北西から）

SD1001-c
人形出土状況（北から）

弥生土器出土状況
（東から）

SD1001 土層断面
（東から）

SD1001 土層断面
（南西から）

SR1001-a（2区）
（西から）

SR1001-a 土器・礫群
検出状況（西から）

SR1001-a 土器・礫群
検出状況（南東から）

SR1001-a 南肩部の状況
（南から）

曲物出土状況
（北東から）

SR1001-b（西から）

SR1001-b（東から）

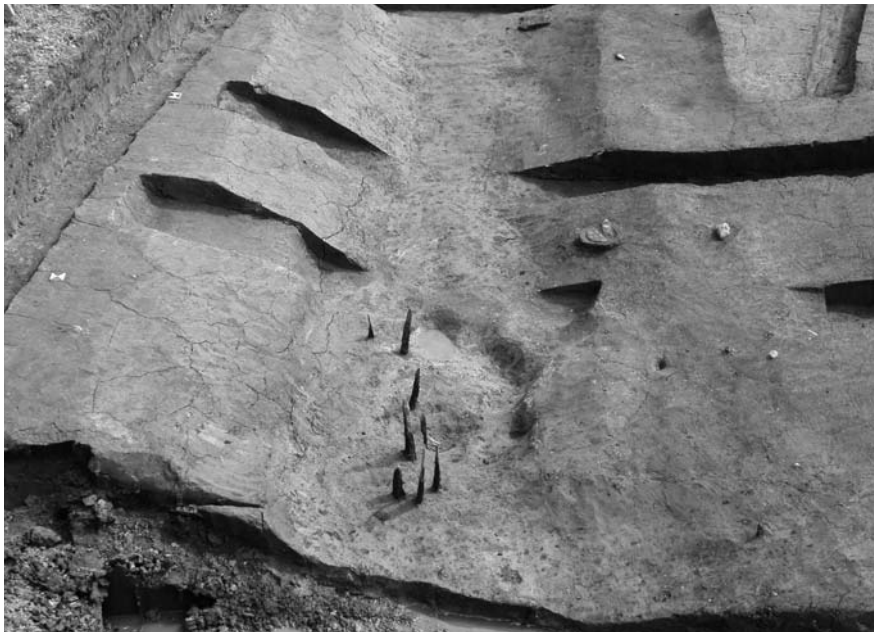
SR1001-b
人形出土状況（南から）

SR1001-b
斎串出土状況（南から）

SR1001-b
平瓶出土状況（西から）

SR1001-b
土器出土状況（南から）

2-a区側の状況（西から）



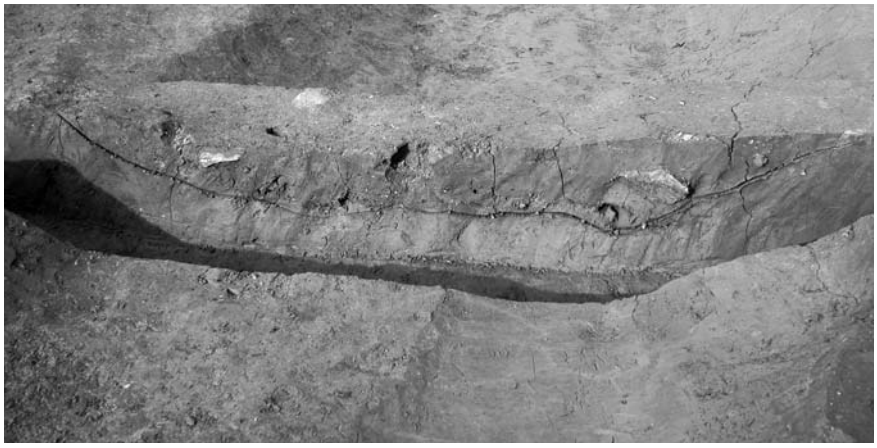
2-a区側の状況近接
（西から）

2-a区側の状況近接
（東から）

SR1001 土層断面図
（東南東から）

SR1001　1 区東壁
（西から）

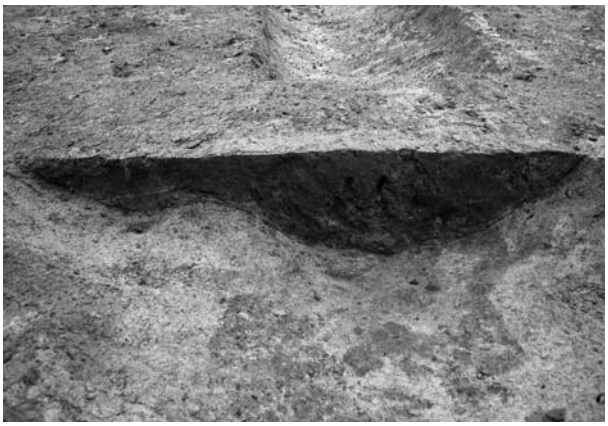
SR1001 土層断面アゼ②
（西から）



SR1001　2 区土層断面
（東から）

SD1001～1004（南から）

SD1002（南から）



SD1003（北から）

SD1004（北から）

SD1007（南から）

SD1008（南から）

SD1009（北から）

SD1010（南から）

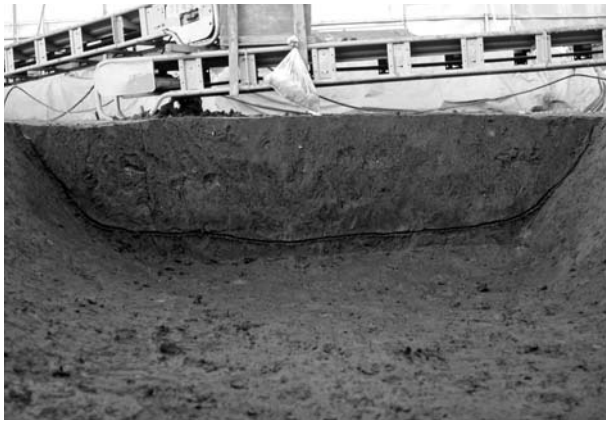
SD1011（西から）

SD1012（南から）

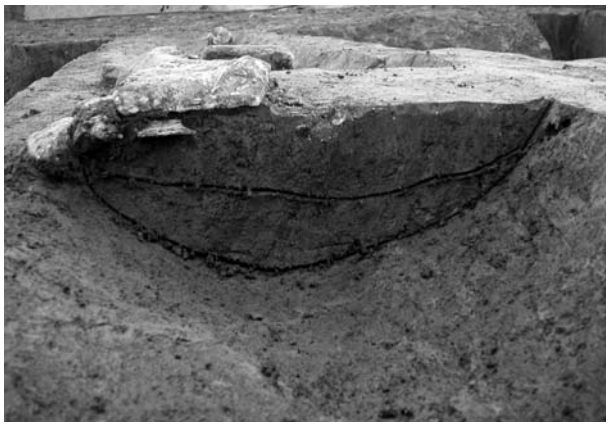
SD1013（南から）

SD1014（南から）

SD1015（南から）



SD1016（南から）



SD1017（北から）

SD1019（東から）

SD1021（東南東から）

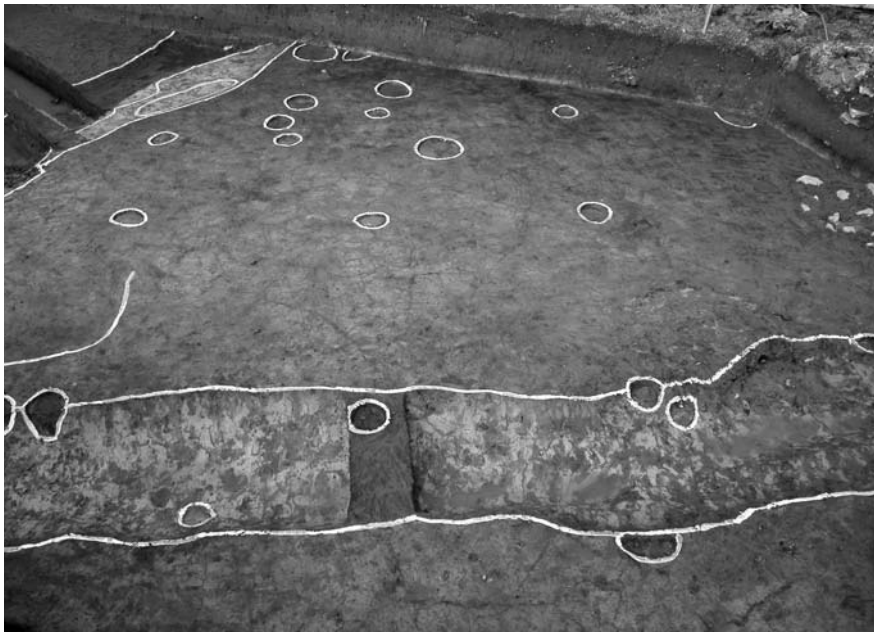
SD1024（南から）

SD2005（北から）

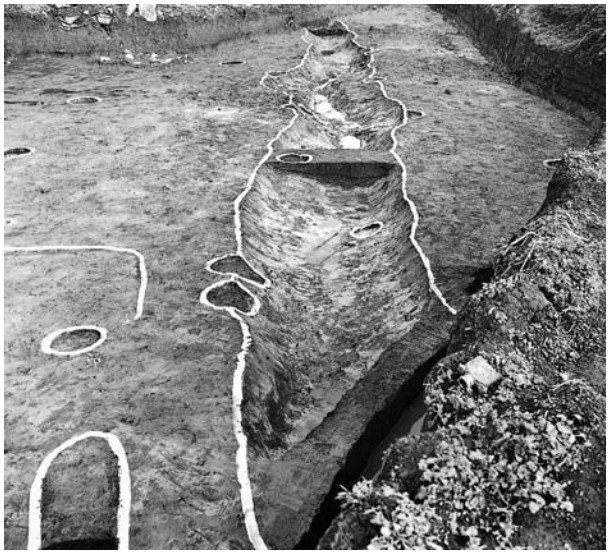
SD2005 遺物出土状況（北西から）

SD2005 土層断面（北から）

2-b区全景（南西から）



SB2001 全景（北から）



SD2001（西から）

SR2001（北東から）

3-a区全景（西から）

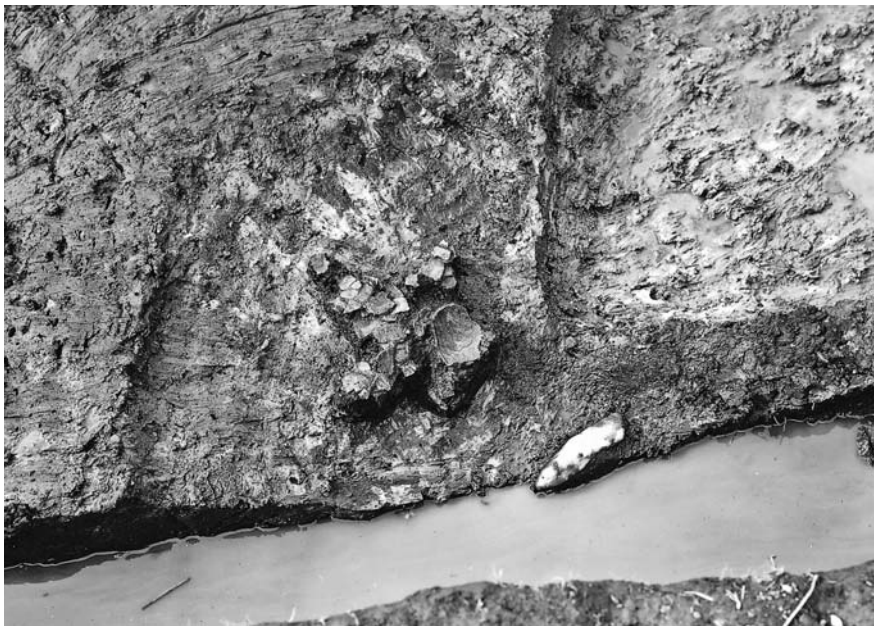
3-b区全景（南東から）

3-b区全景（西から）

SB3003（西から）

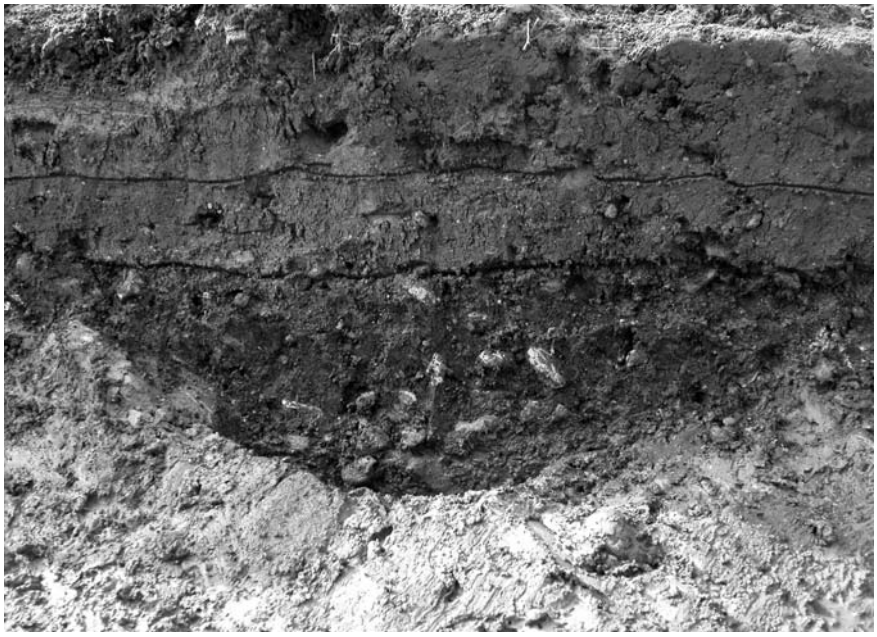
SB3003（西から）

SB3001　柱穴出土土器
（北から）



SK3001（東から）

SK3003（南から）



SK3002（3-b区北から）

1区西壁（東から）

1区南壁西半（北東から）

1区南壁東半（北西から）

2-a区南壁（北から）

2-a区南壁部分（北から）

2-b区南壁（北西から）

2-b区南壁部分（北から）

3-b区南壁土層断面（北から）

下層トレンチ全景
（南西から）

下層トレンチ東半部
（南から）

学識経験者
青木哲哉氏

人力掘削状況

遺構掘削状況

地元説明会風景

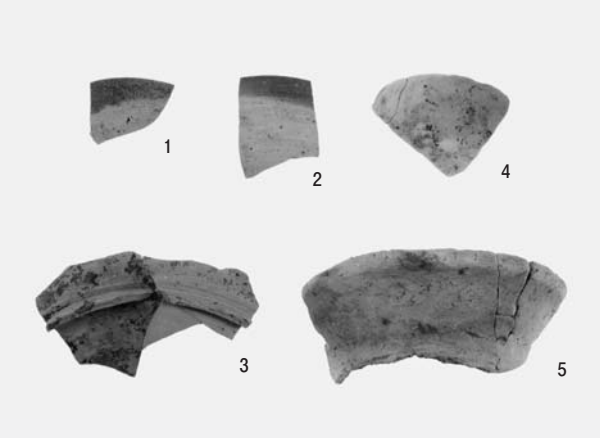
14

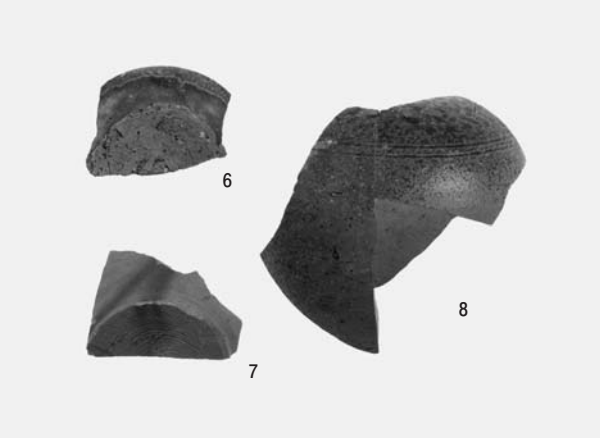
15

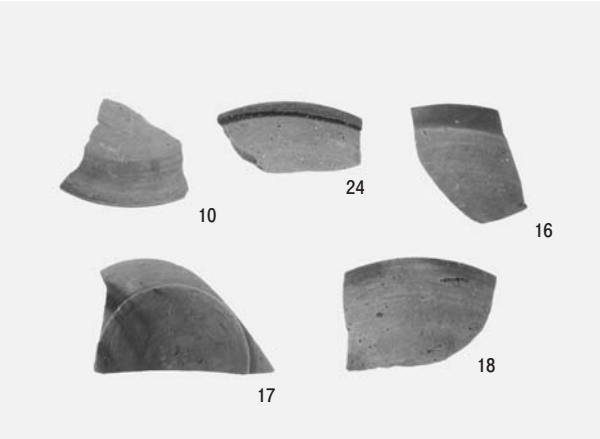
25

23

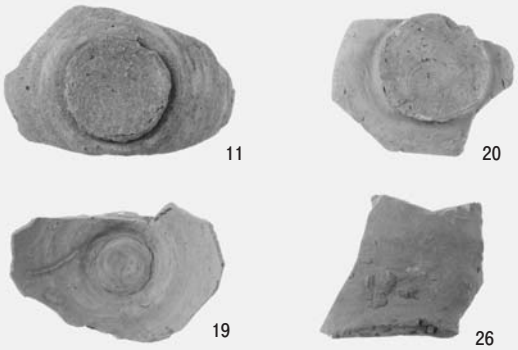
21



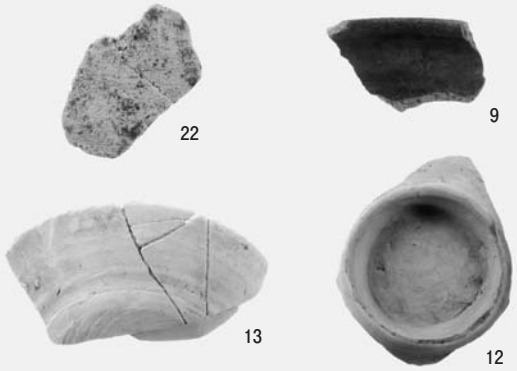




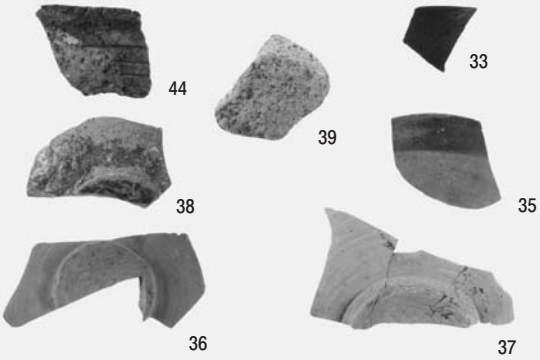
34



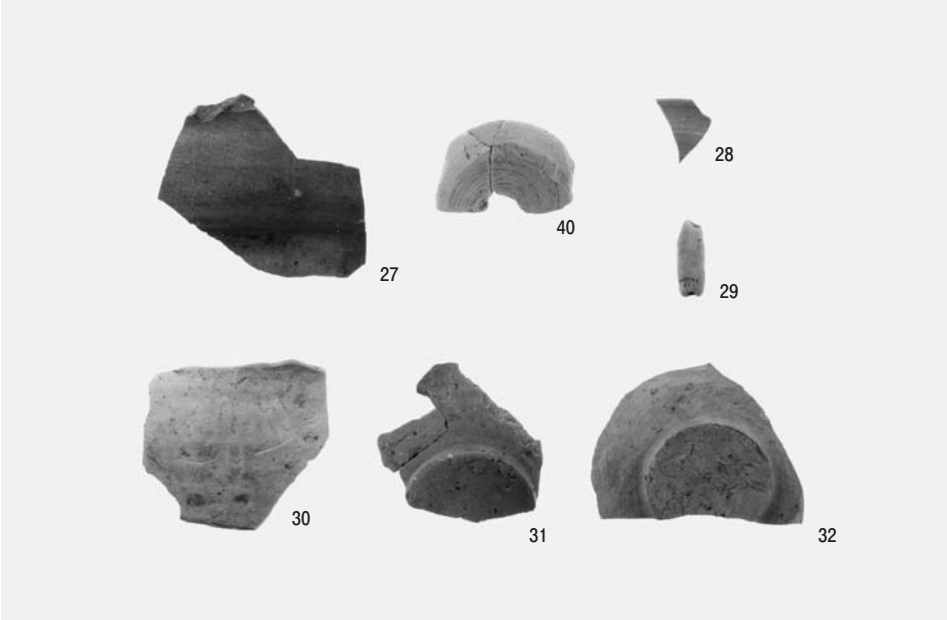
41

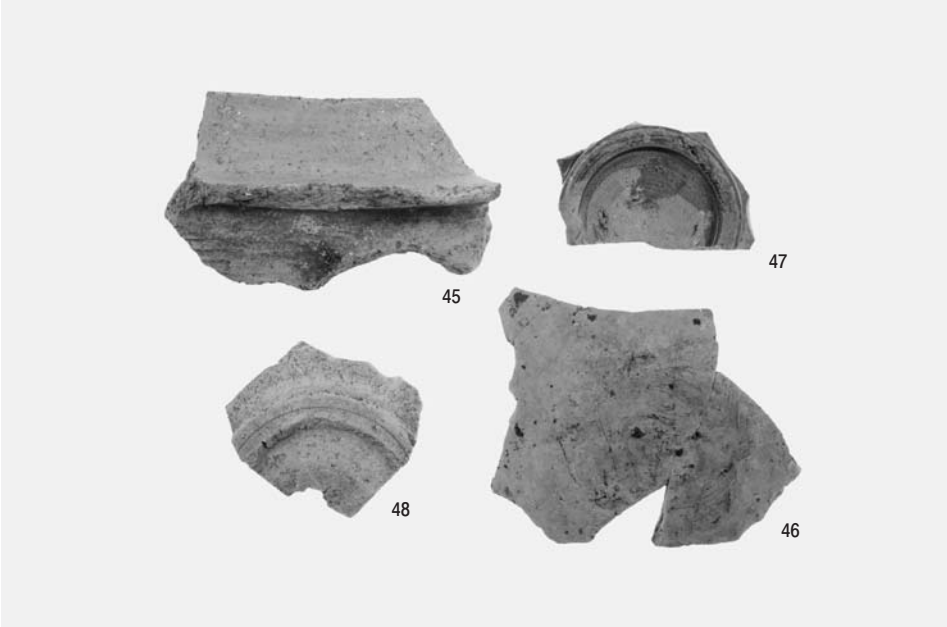


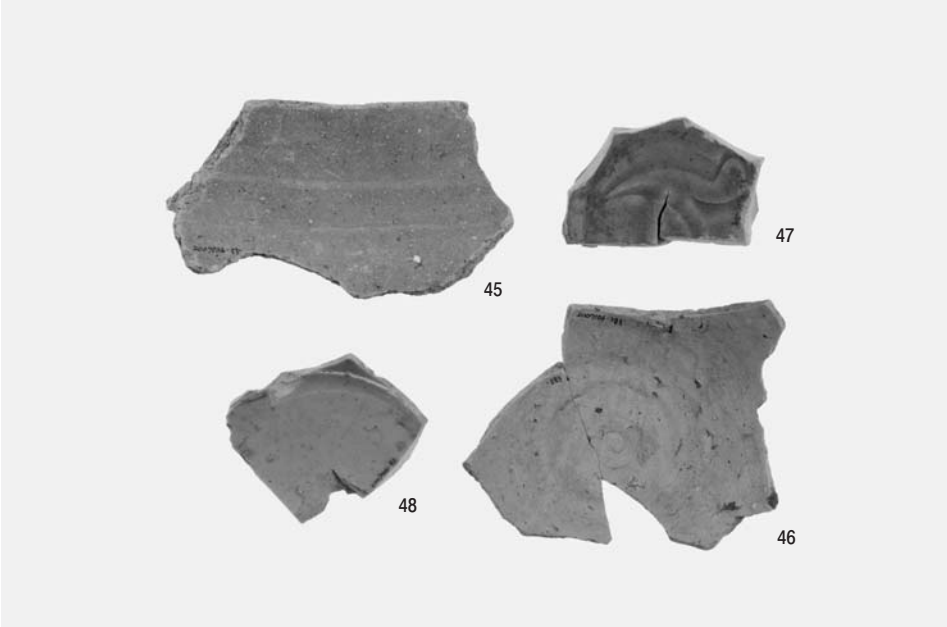
42



43


27
40
28
29
30
31
32


45
47
48
46


45
47
48
46

49

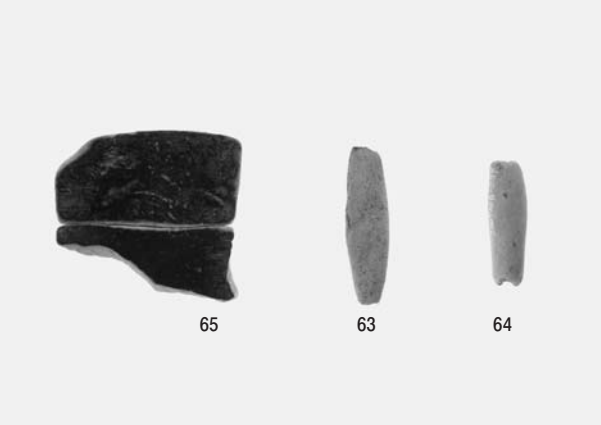
52

50

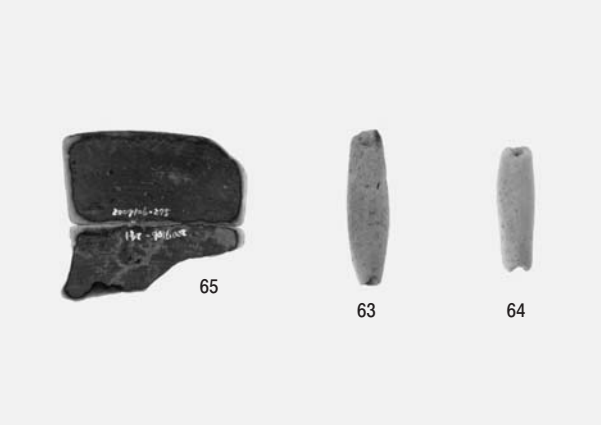
51

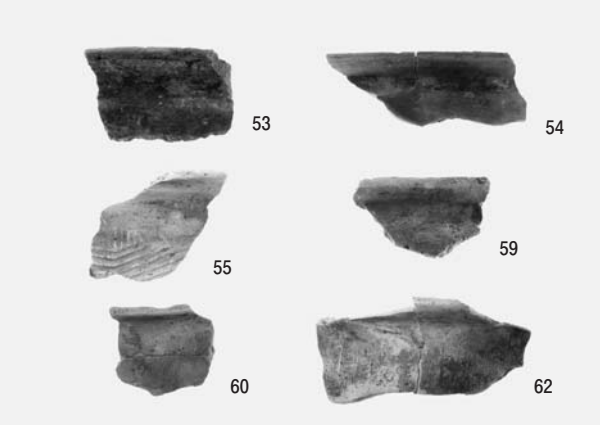
58

61


65 63 64

57 56


65 63 64


53 54 55 59 60 62

67

68

69

70

71

72

75

76

78

73

74

66

79

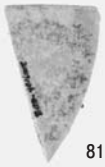
81

80

77

66

79


81

80

77

82

98

88

89

90

91

92

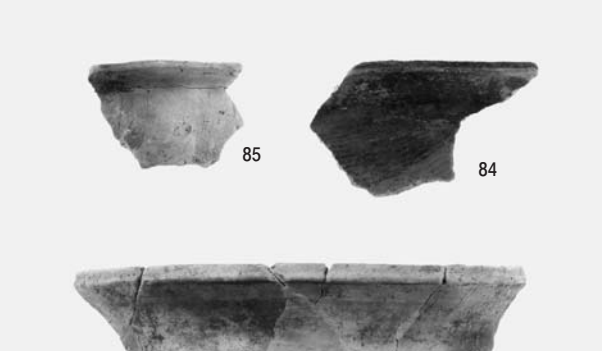
93

94

95

96

97


85 84 86

99

105

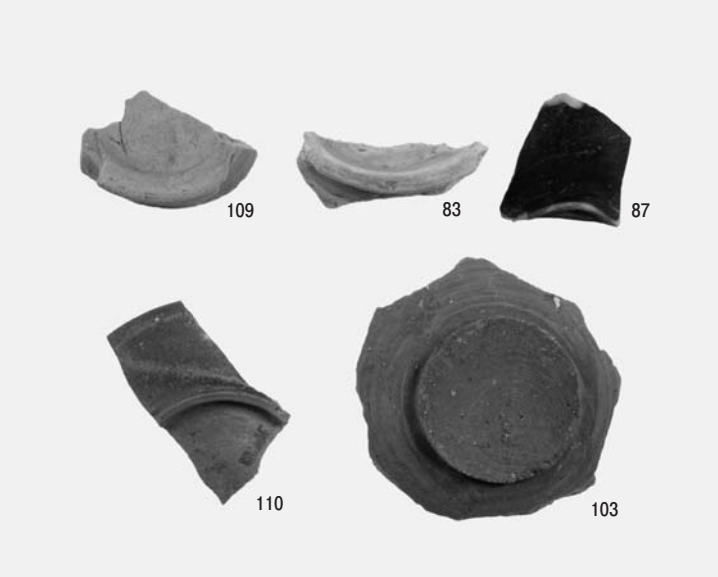
108

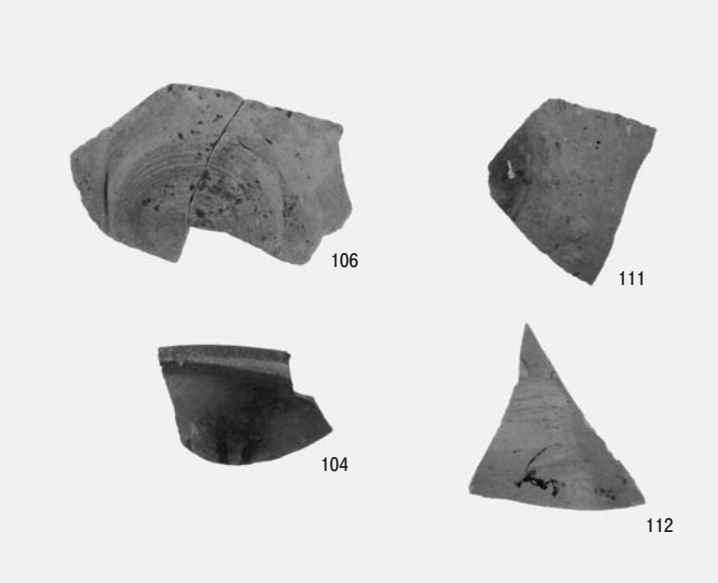
100

107

101

102





119

115

124

127

120

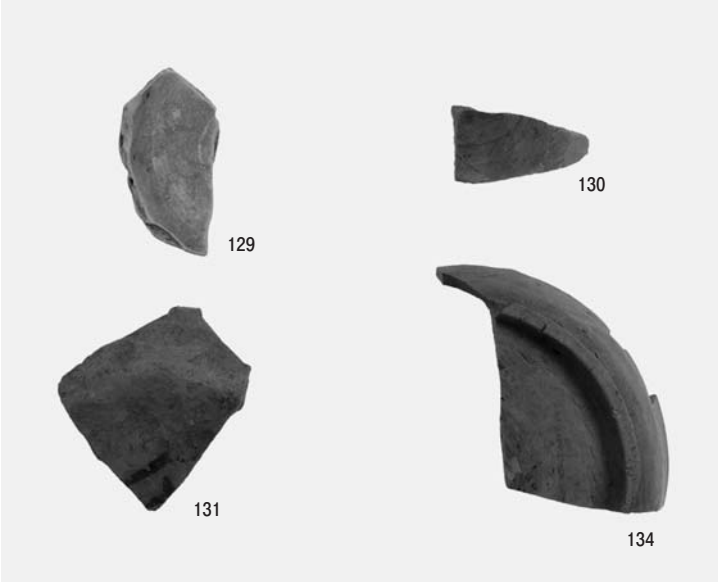
125

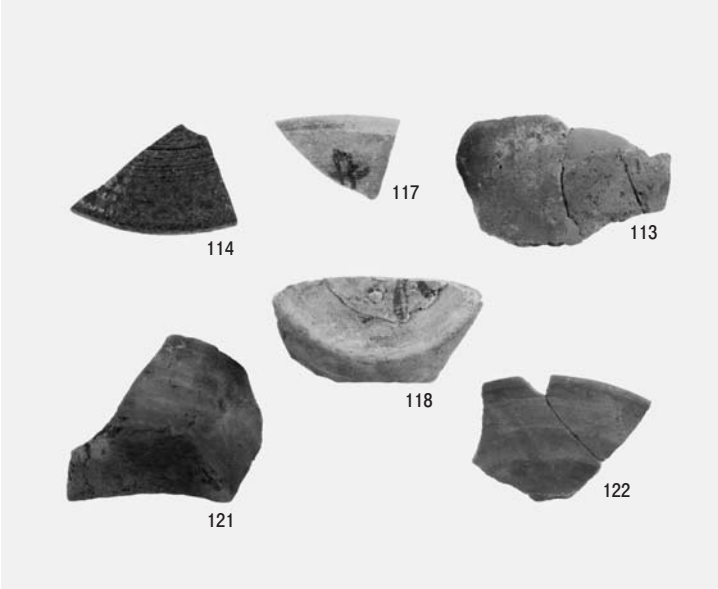
126

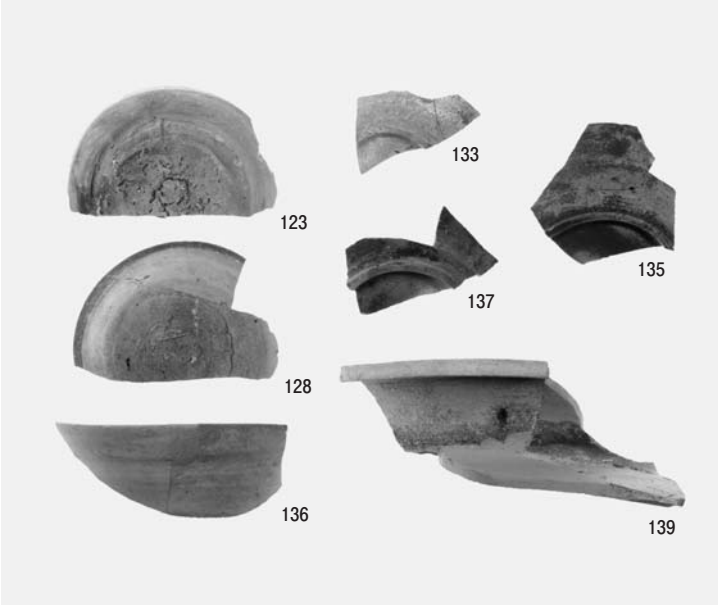
132

116

138


129
130
131
134


114
117
113
118
121
122


123
133
135
137
128
136
139

140

141

142

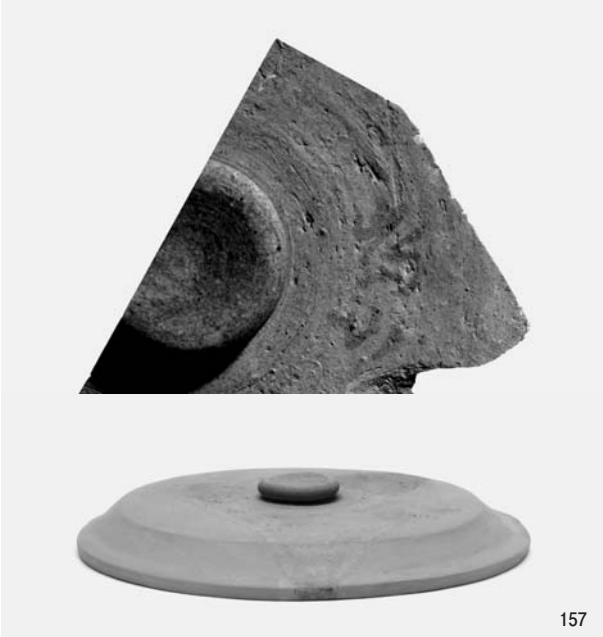
143

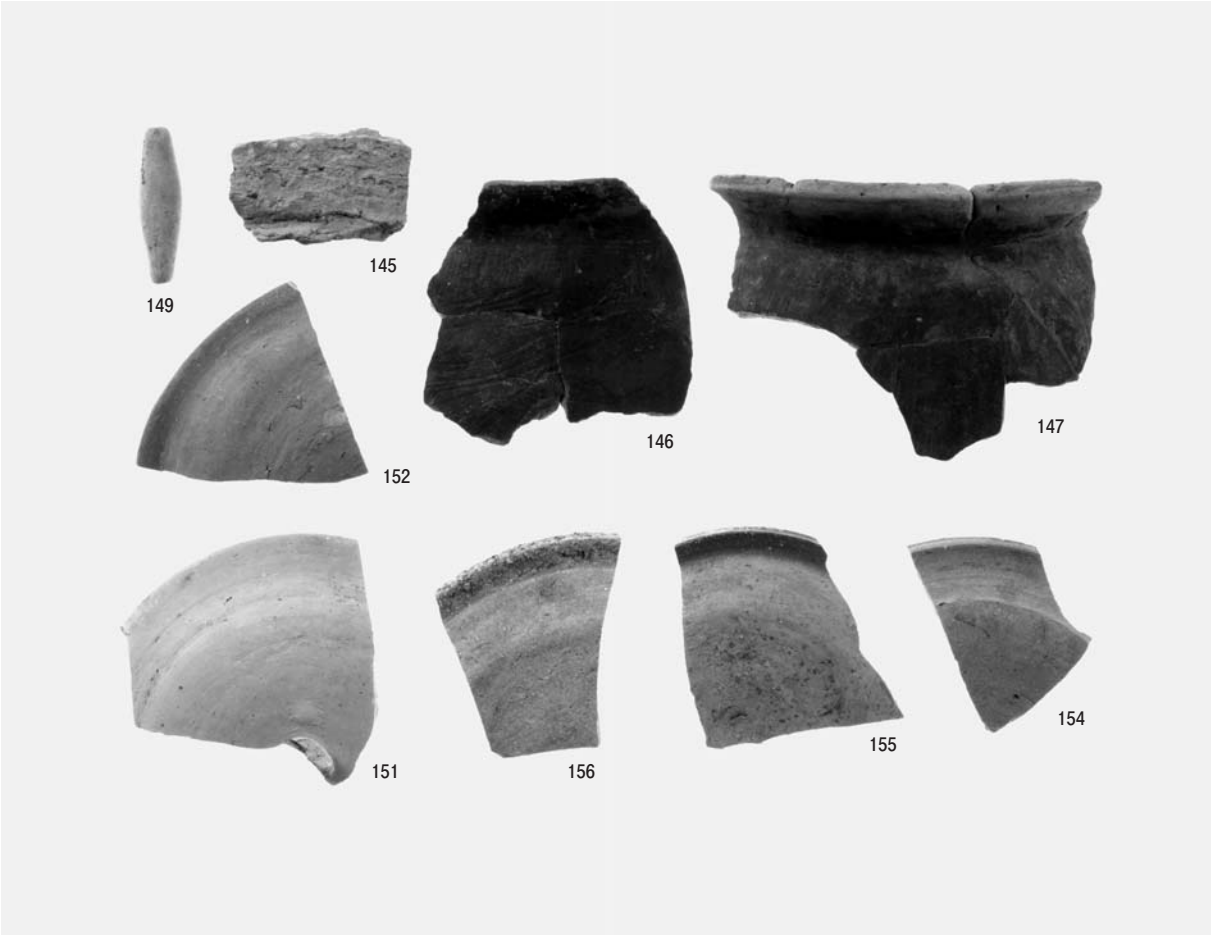
144

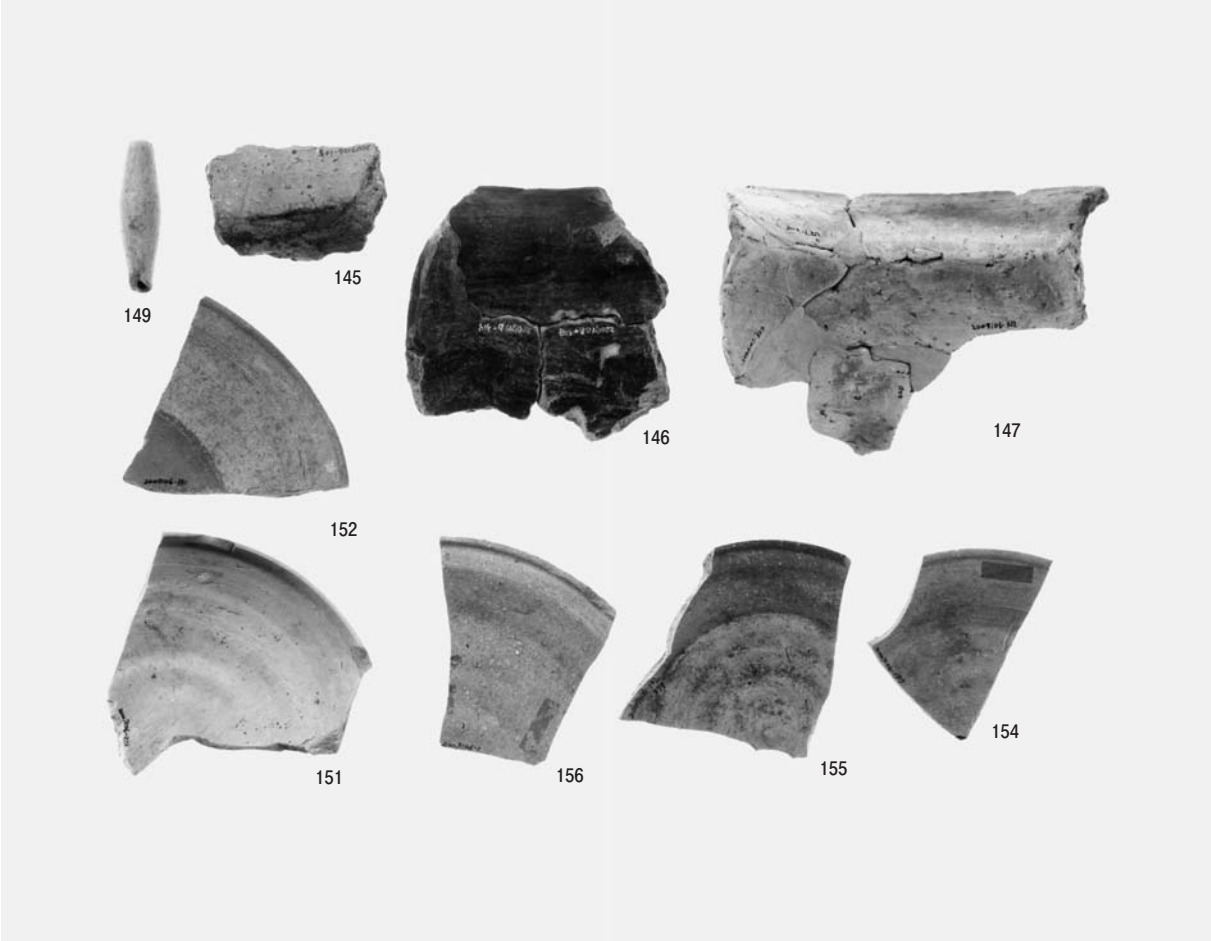
148

150

153


157


149
145
146
147
152
151
156
155
154


149
145
146
147
152
151
156
155
154

158

161

160

159

162

163

164

165

167

170

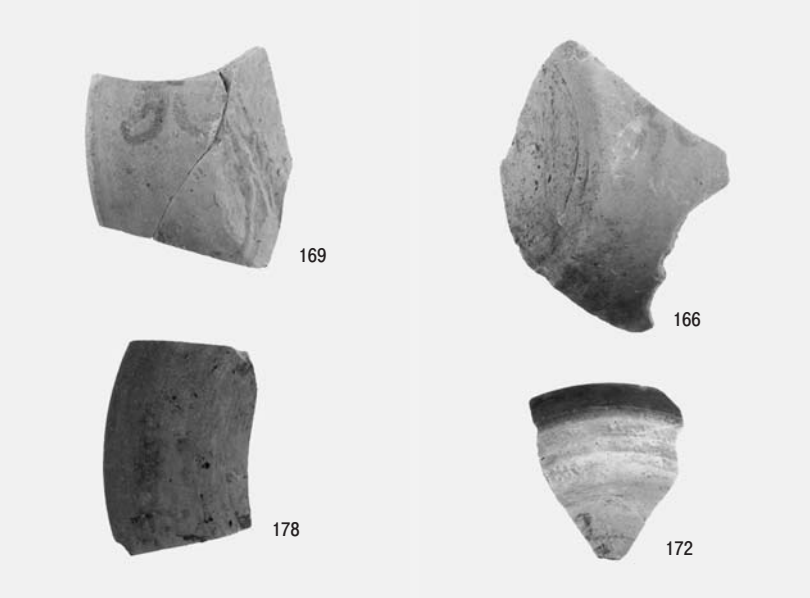
174

175

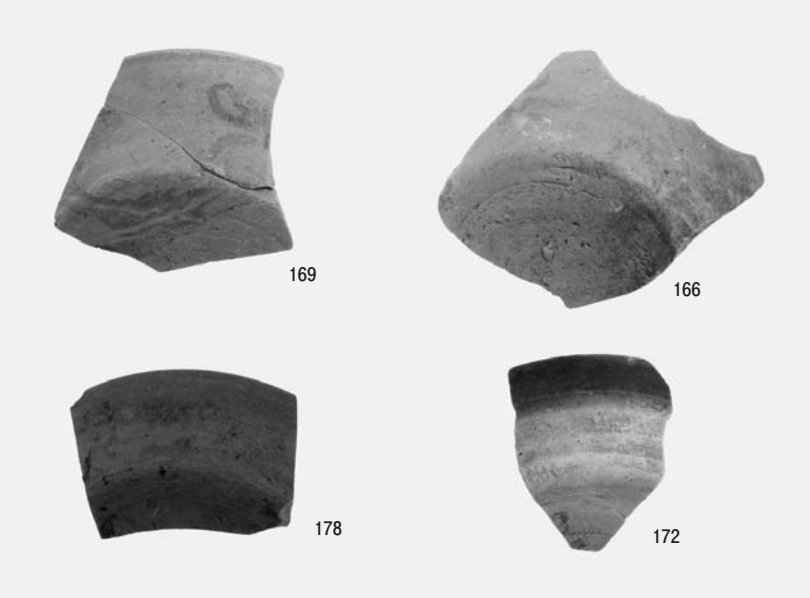
177

179

171


169
166
178
172

173


169
166
178
172

184

190

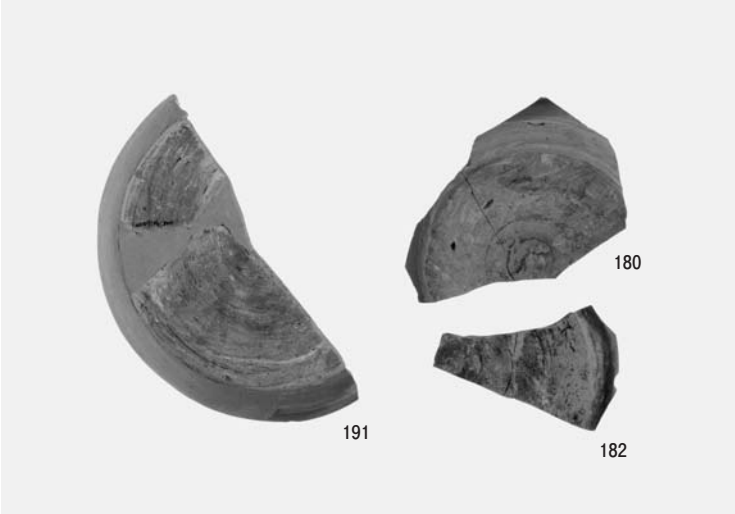
189

193

181

192

186



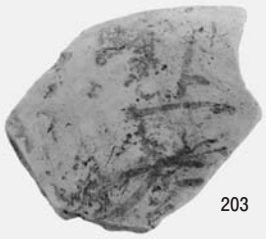
196

197

195

200

185

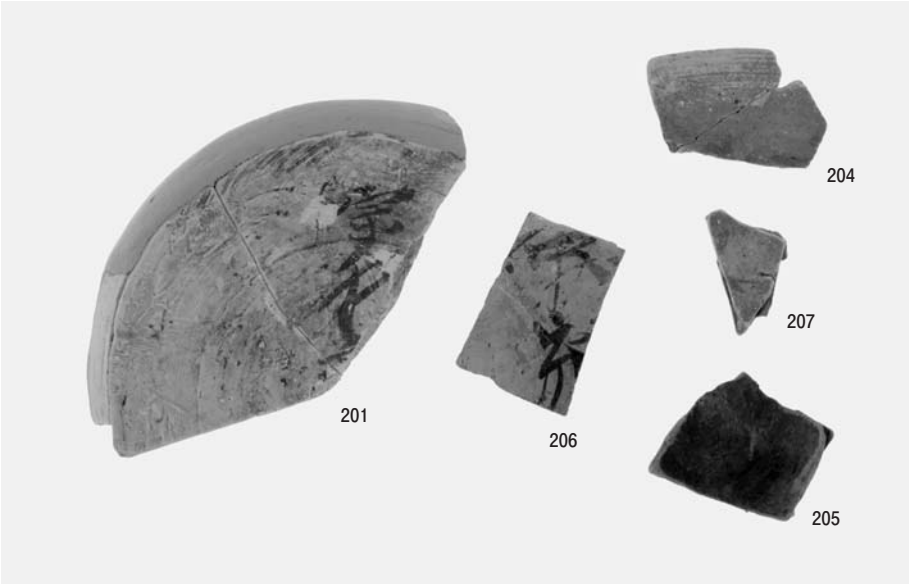

203

187

194

198

202



201

206

204

207

205

212

210

213

209

211

215

217

219

220

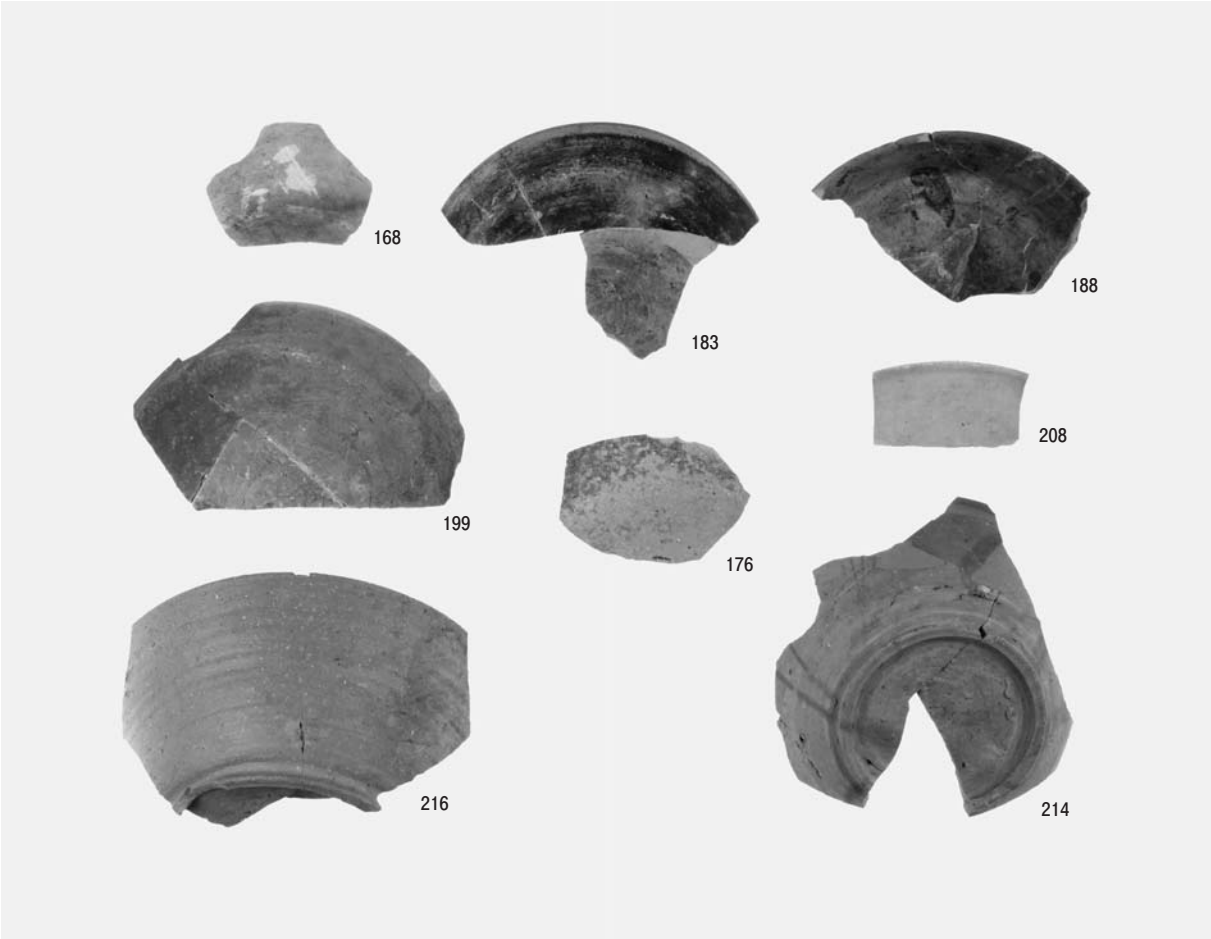
218

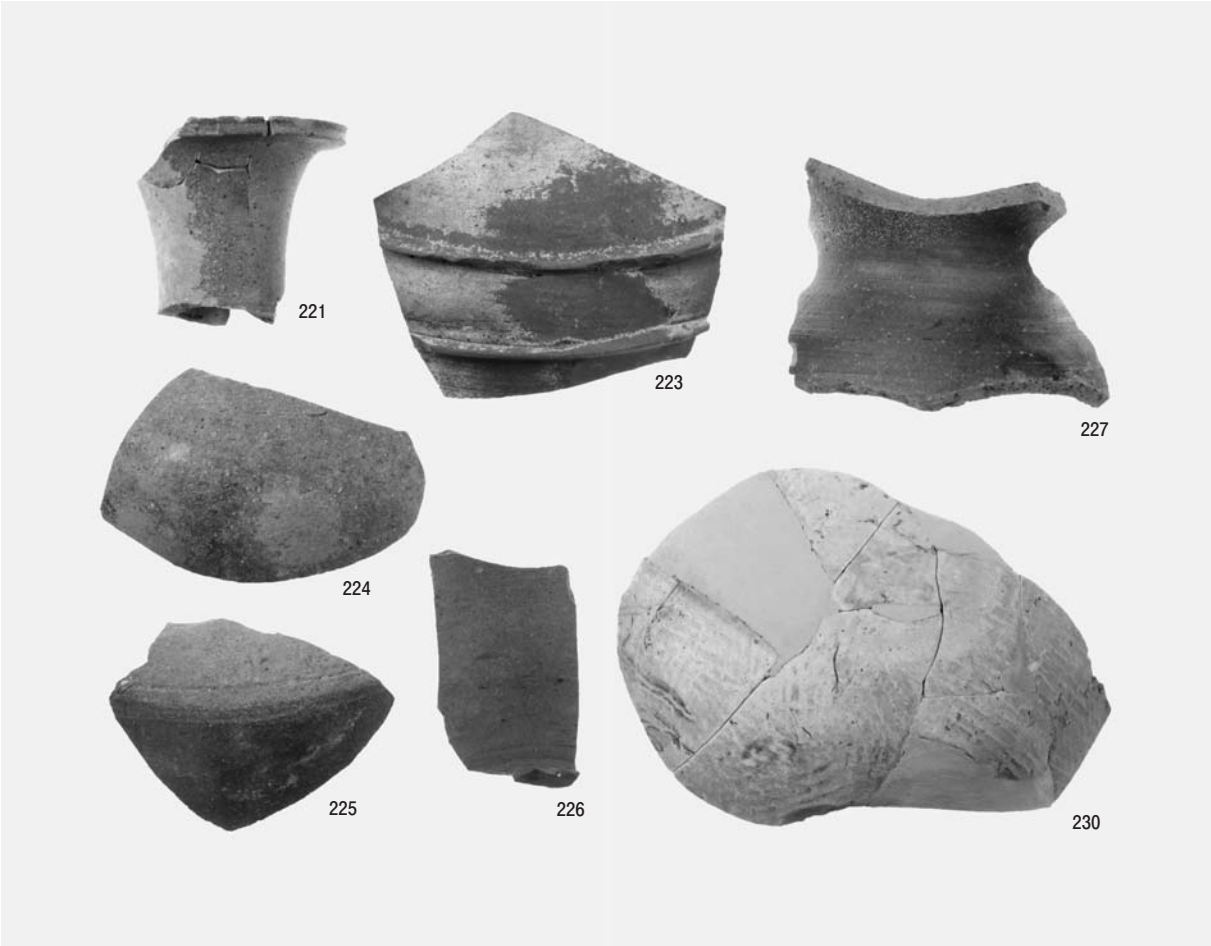
222

228

229

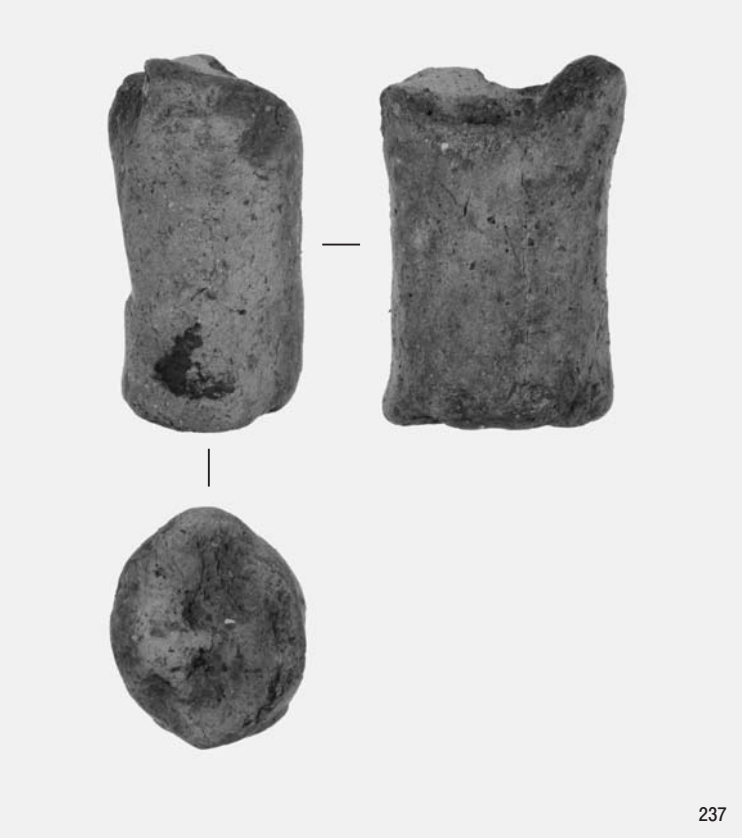
229 閉塞部内面

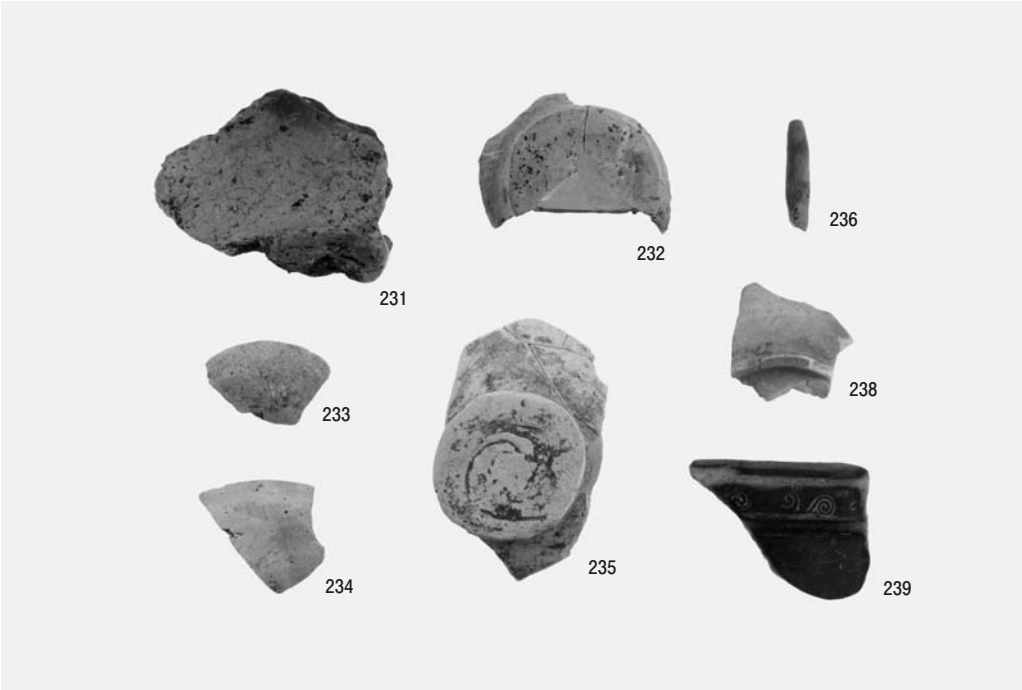

168
183
188
199
208
176
216
214

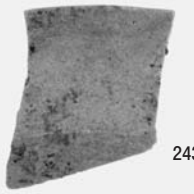

221
223
227
224
225
226
230

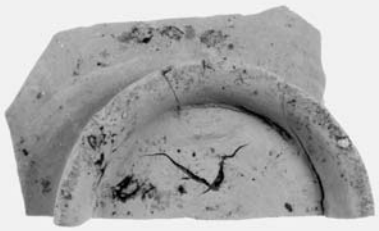
240

241

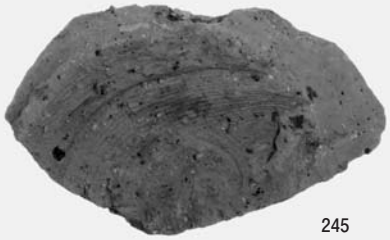

237



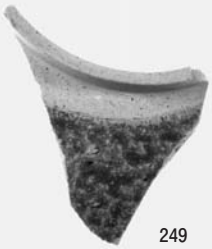

243

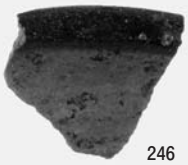

244

242


245

248

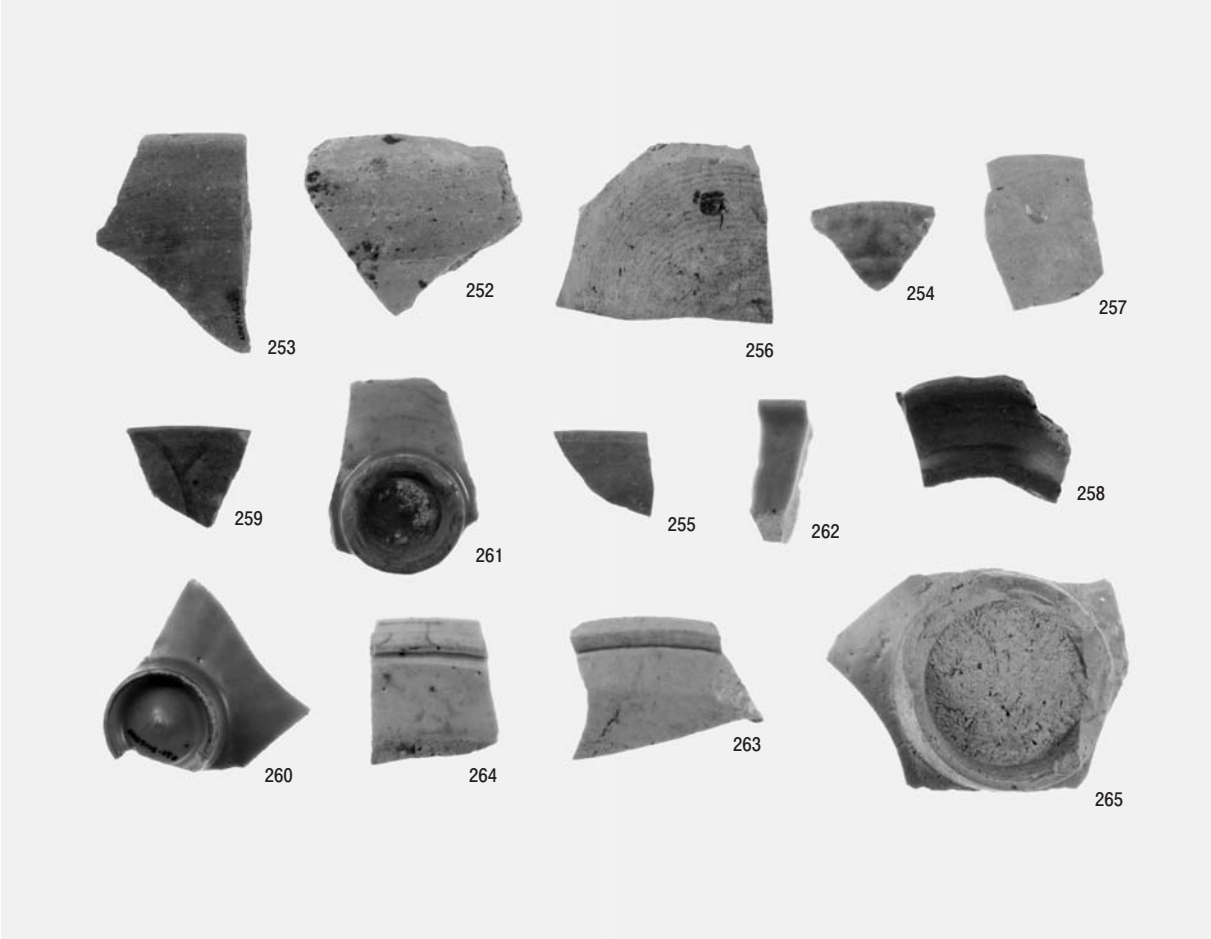

249

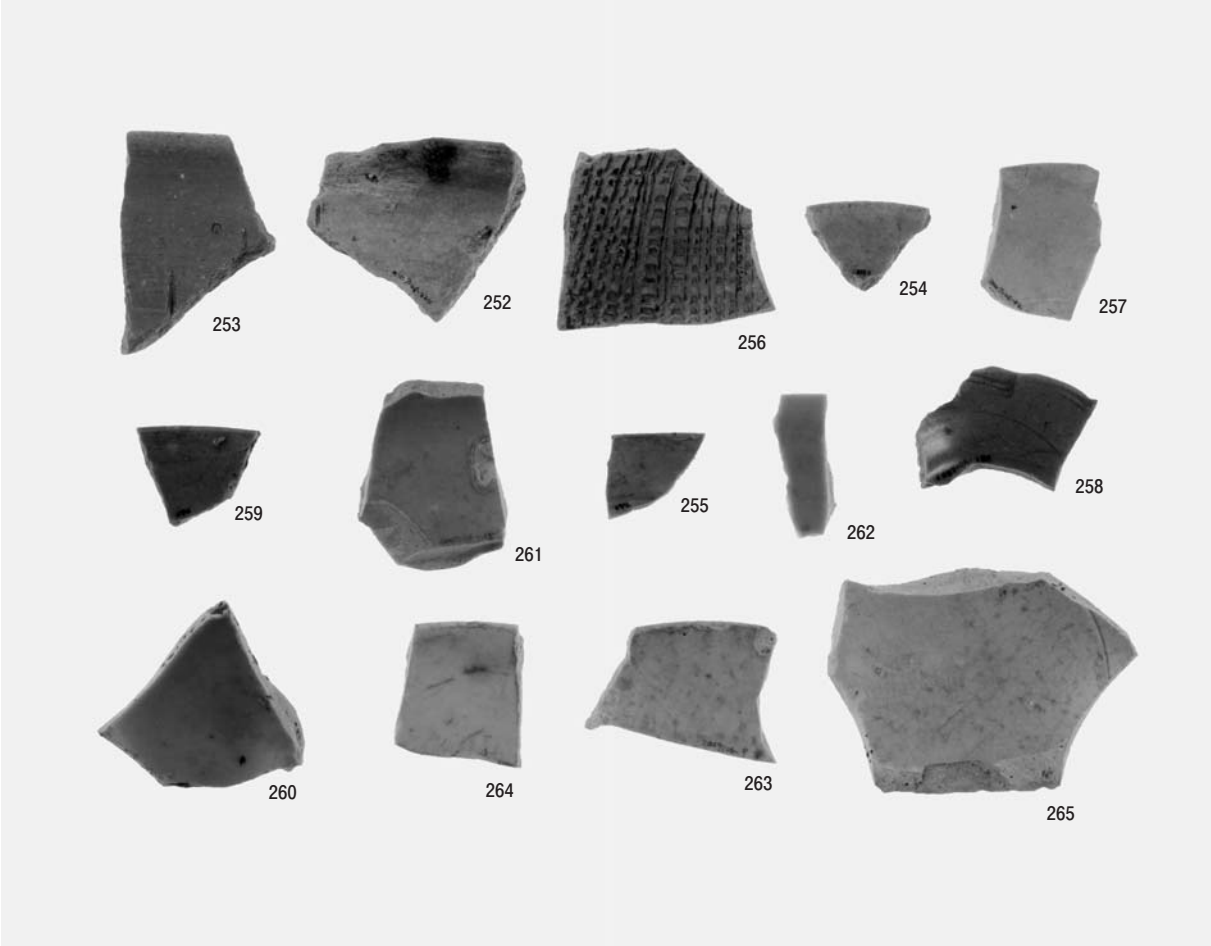

246

250

251

247


253
252
256
254
257
259
261
255
262
258
260
264
263
265


253
252
256
254
257
259
261
255
262
258
260
264
263
265

266

267

268

266

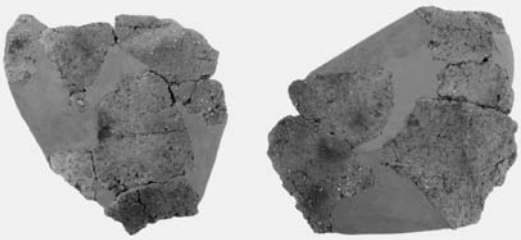
267

268

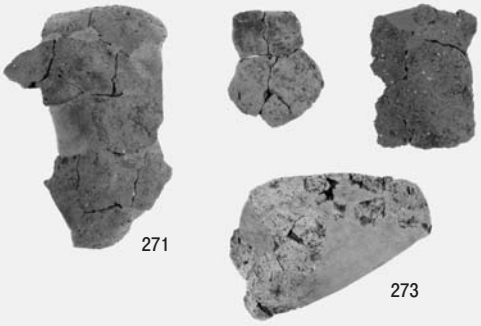
270

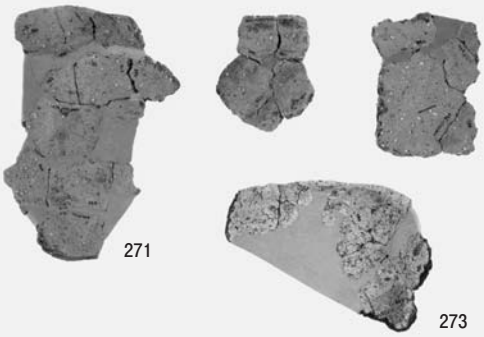
269

274


272

272


271
273

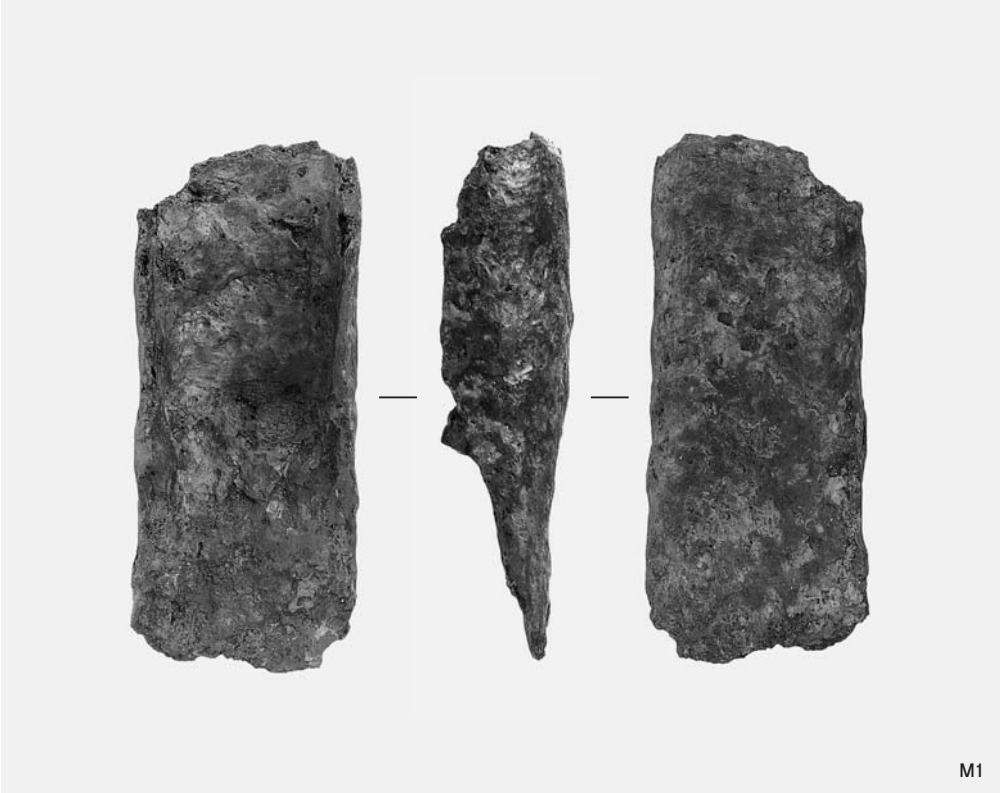

271
273

S1

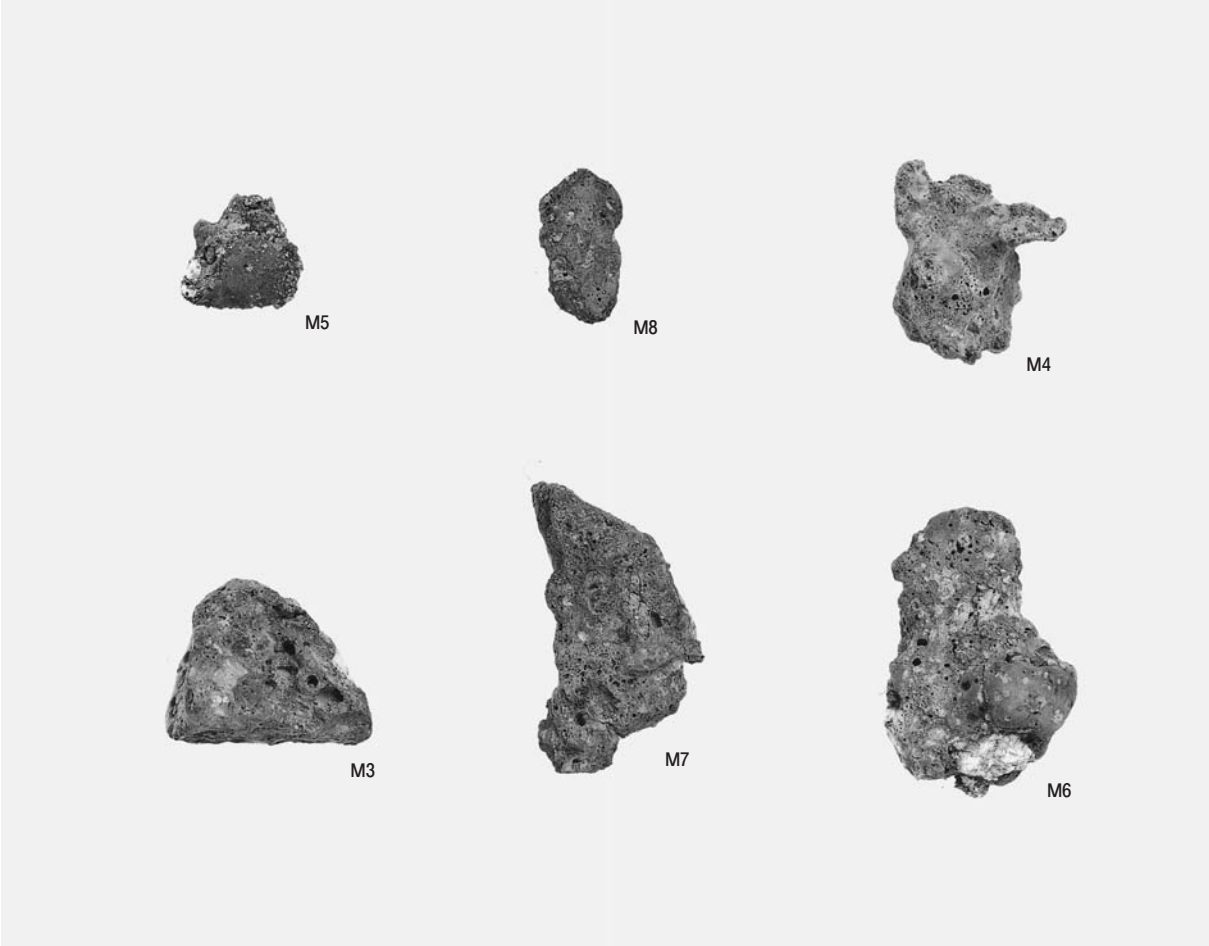
S2

S3

S4


M1

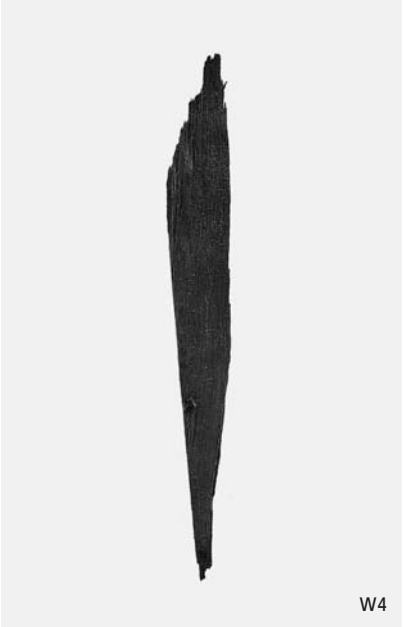
M2


M5
M8
M4
M3
M7
M6

W1

W2

W3


W4

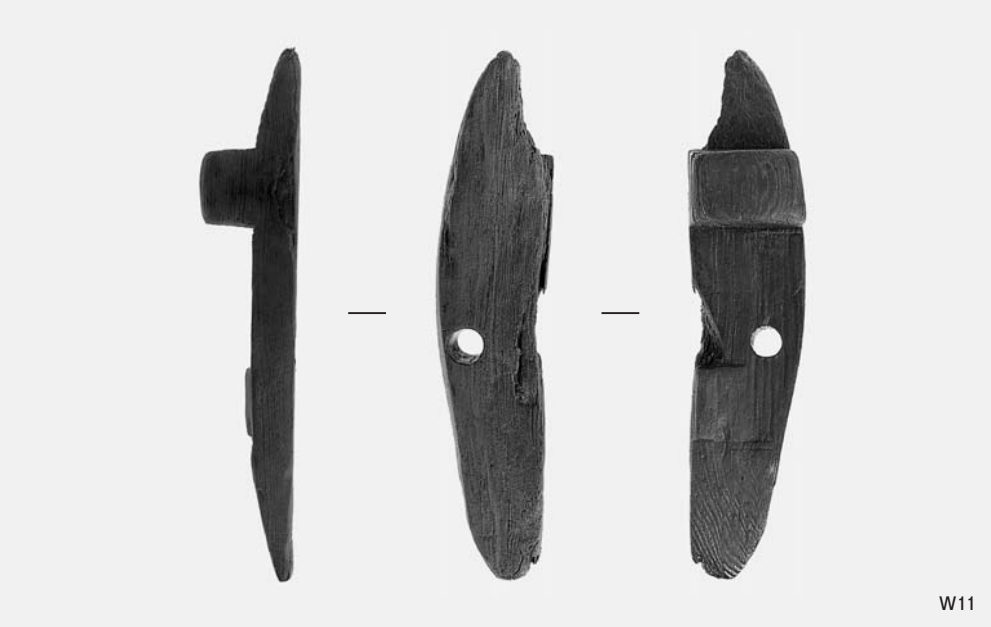
W6

W7

W8

W9

W10


W11

W12

W13

W14

W78

W79

W15

W16

W18

W21

W17

W19

W20

W22

W23

W24

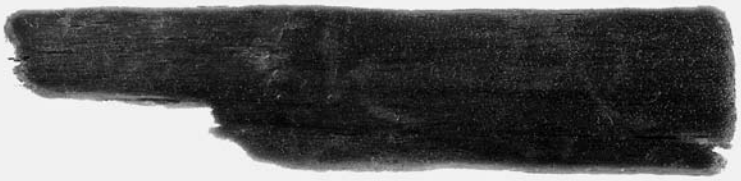
W25

W26

W27

W28

W29



W30

天罰印（符籙）急々如律令

□□□□□□□□

×

W31

W32

W33

W34

W35

W36

W37

W38

W39

W40

W41

W42

W43

W44

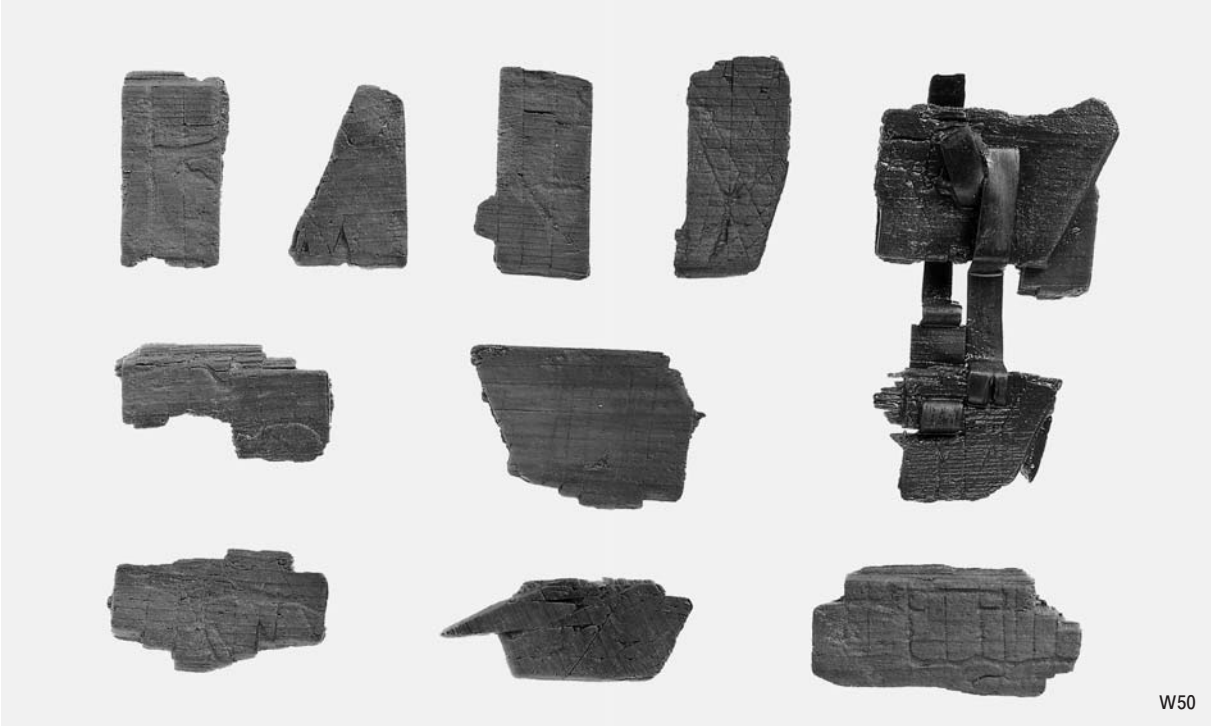
W45

W46

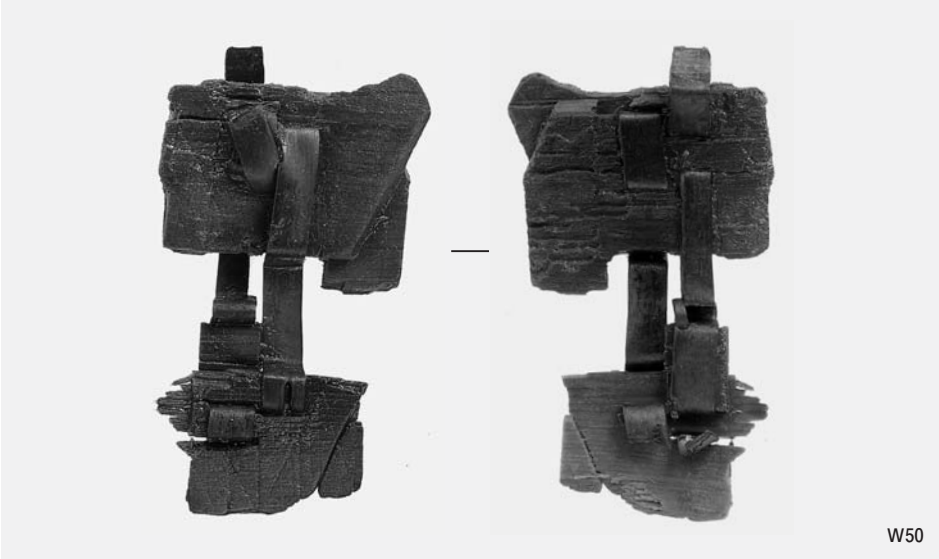
W47

W48

W49



W50



W50

W51

W52

W53

W54

W55

W56

W57

W58

W60

W80
W81
W82
W83
W84
W85

W61

W62

W63

W64

W65

W66

W67

W68

W70

W69

W71

W72

W73

W74

W75

W76

W77

報　告　書　抄　録

ふりがな	そがい・どうのもといせき　そがい・のいりいせき　そがい・さわだいせき
書名	曽我井・堂ノ元遺跡　曽我井・野入遺跡　曽我井・沢田遺跡
副書名	社会資本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第434冊
編著者名	村上泰樹　西口圭介　小川弦太
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675－0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
発行年月日	2012(平成24)年３月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
曽我井・堂ノ元遺跡	兵庫県多可郡多可町　中区曽我井	283657	2005134・2006056	35°2′1.4″	134°56′14.7″	20051019～20051226 20060627～20060825	2,323	道路建設
曽我井・野入遺跡			2006082	A地区：35°1′51.6″ B地区：35°1′48.9″	134°56′28.1″ 134°56′28.6″	20060828～20061019	859	
曽我井・沢田遺跡			2007106	35°2′3″	134°56′7.3″	20071113～20080319	1,881	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
曽我井・堂ノ元遺跡	集落	平安時代中～末期	掘立柱建物・溝(地割溝？)	土師器皿・椀、須恵器椀、国産・中国陶磁器、硯	墨書土器(「上」)、人名？が線描きされた硯出土
曽我井・野入遺跡		A地区 平安時代後期～中世	溝・柱穴・土坑	土師器椀・皿、須恵器椀・捏鉢、丹波焼擂鉢	土坑(SK1002)内より平安時代中期の土師器椀・皿、須恵器椀などの良好な一括資料が出土
		B地区 平安時代末～室町時代	掘立柱建物・溝・土坑	土師器皿・堝、須恵器椀・捏鉢・中国製磁器	
曽我井・沢田遺跡		奈良時代・平安時代後期～鎌倉時代	水路・掘立柱建物・溝	土師器皿･杯･堝､製塩土器黒色土器、墨書土器、須恵器杯・皿・椀・捏鉢、人形・斎串	水路内より人形・斎串・呪符木簡などの祭祀具や墨書土器(「西殿」・「宗我西」・「宗我□」・「西戸」・「中家」)が出土

要約

曽我井地区の堂ノ元遺跡・野入遺跡・沢田遺跡の調査によって、奈良時代～室町時代の当地域の様相の一端が明らかになった。とくに奈良時代～平安時代に中心をもつ沢田遺跡の調査では、流路内より人形などの祭祀具や「宗我」の地名ないしは姓名が書かれた墨書が出土するなど、曽我井地区の中心的な遺跡であることが判明した。堂ノ元遺跡においては、平安時代中～末期の屋敷地割溝の可能性をもつ溝が検出されるなど、沢田遺跡の平安時代中期～末期の集落の広がりが当遺跡まで及んでいることがわかった。また曽我井地区東部の扇状地上に立地する野入遺跡の調査では、平安時代末～室町時代の集落の存在が確認されるなど、当地域の歴史の解明に良好な資料が提示された。

兵庫県文化財調査報告　第434冊

曽我井・堂ノ元遺跡
曽我井・野 入 遺 跡
曽我井・沢 田 遺 跡

－社会資本整備総合交付金事業
に伴う埋蔵文化財調査報告書－

2012(平成24)年３月

編　集　　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
発　行　　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号
印　刷　　丸山印刷株式会社
〒676-8566　兵庫県高砂市神爪１丁目11番33号